

74-56二



1200501288583

74

5二



始



校訂

一

葉

全

集

博文館藏版



74-56c

樋口一葉女史著



一葉全集

東京博文館藏版

明治
45 3. 23
購求

一葉女史、樋口夏子君は東京の人なり。明治五年三月二十五日を以て生る。歌を善くし、文を善くし兼て書を善くす。其初めて筆を小説に下したるは、明治二十五年二月なり。こゝに小品こゝものに、集むるもの二十四篇、別に通俗書簡文の著あり。明治二十九年十一月二十三日病を得て歿す。歳二十五。

訂校 一葉全集目次

に	ご	り	江	一	
わ	れ	か	ら	三八	
ゆ	く	雲	八〇		
や	み	夜	九七		
大	つ	で	も	り	一三四
經	つ	く	ゑ	一五二	
曉	月	夜	一六五		
う	も	れ	木	一九一	
欄	櫻	二二五	
玉	禪	二三四	
五	月	雨	二五〇	
わ	か	れ	霜	二六九	

雪の日	……(明治二十六年三月作)……	三〇九
琴の音	……(明治廿六年十二月作)……	三一五
花ごもり	……(明治二十七年四月作)……	三二一
軒もる月	……(明治二十八年四月作)……	三四五
うつせみ	……(明治二十八年八月作)……	三五二
そゞろごこ	……(明治二十八年十月作)……	三六八
ほととぎす	……(明治二十八年六月作)……	三七四
この子	……(明治廿八年十二月作)……	三七七
十三夜	……(明治二十八年九月作)……	三八八
わかれ道	……(明治廿八年十二月作)……	四〇一
うらむらさき	……(明治二十九年一月作)……	四二四
たけくらべ	……(明治廿八年十二月作)……	四二九

一葉全集

にぎりえ

(一)

(一) え り こ に

おい木村さん信さん寄つてお出よ、お寄りといつたら寄つても宜いではないか、又素通りで二葉やへ行く氣だらう、押かけて行つて引ずつて来るからさう思ひな、ほんとにお湯なら歸りに屹度よつてお呉れよ、嘘つ吐きだから何を言ふか知れやしないと店先に立つて馴染らしき突かけ下駄の男をとらへて小言をいふやうな物の言ひぶり、腹も立たすか言譯しながら後刻に後刻にと行過るあとを、一寸舌打しながら見送つて後にも無いもんだ来る氣もない癖に、本當に女房もちに成つては仕方がないねと店に向つて鬨をまたぎながら一人言をいへば、高ちやん大分御連懐だね、何もそんなに案じるにも及ぶまい焼棒杭に何とやら、又よりの戻る事もあるよ、

心配しないで呪でもして待つが宜いさと慰めるやうな朋輩の口振、力ちやんと違つて私には技倆が無いからね、一人でも逃しては残念さ、私のやうな運の悪い者には呪も何も利きはしない、今夜も又木戸番か、何たら事だ面白くもないと肝臓まぎれに店前へ腰をかけて駒下駄のうしろでとん／＼と土間を蹴るは二十の上を七つか十か引眉毛に作り生際、白粉べつたりとつけて唇は人喰ふ犬の如く、かくては紅も厭らしきものなり、お力と呼ばれたるは中肉の背恰好すらりつとして洗ひ髪の大島田に新わらのさはやかさ、頸元ばかりの白粉も榮なく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳のあたりまで胸くつろげて、烟草すば／＼長烟管に立膝の無作法も咎める人のなきこそよけれ、思ひ切つたる大形の浴衣に引かけ帯は黒縹子と何やらのまがひ物、緋の平ぐけが背の處に見えて言はずと知れし此あたりの姉さま風なり、お高といへるは洋銀の簪で天神がへしの鬘の下を掻きながら思ひ出したやうに力ちやん先刻の手紙お出しかといふ、はあと氣のない返事をして、どうで来るのでは無いけれど、あれもお愛想さと笑つて居るに、大抵におしよ巻紙二尋も書いて二枚切手の大封じがお愛想で出来るものかな、そして彼の人は赤坂以來の馴染ではないか、少しやそつとの紛紜があらうとも縁切れになつてたまるものか、お前の出かた一つで何うでもなるに、ちつとは精を出して取止めるやうに心がけたら宜

から、あんまり冥利がよくあるまいと言へば御親切は有がたう、御異見は承り置まして私はどうも彼んな奴は虫が好かないから、無き縁とあきらめて下さいと人事のやうにいへば、あきれたものだと笑つてお前なぞは其我まゝが通るから豪勢さ、此身になつては仕方がないと團扇を取つて足元をあふぎながら、昔は花よの言ひなし可笑しく、表を通る男を見かけて寄つておいでと夕ぐれの店先にぎはひぬ。
店は二間間口の二階作り。軒には御神燈さげて盛り鹽最氣よく、空罐か何か知らず、銘酒あまた棚の上にならべて帳場めきたる處も見ゆ、勝手元には七輪を煽ぐ音折々に騒がしく、女主が手づから寄せ銅茶碗むし位はなるも道理、表にかゝげし看板を見れば仔細らしく御料理とぞしたゝめける、さりとて仕出し頼みに行たらば何とかいふらん、俄に今日品切れもをかしかるべく、女ならぬお客様は手前店へお出かけを願ひまするとも言ふにかたからん、世は御方便や商賣がらを心得て口取り焼肴とあつらへに來る田舎ものもあらざりき、お力といふは此家の一枚看板、年は随一若けれども客を呼ぶに妙ありて、さのみは愛想の嬉しからせを言ふやうにもなく我まゝ至極の身の振舞、少し容貌の自慢かと思へば小面が憎いと陰口いふ朋輩もありけれど、交際では存の外やさしい處があつて女ながらも離れともない心持がする、あゝ心とて仕方

のないもの面ざしが何處となく冴えて見えるは彼の子の本性が現はれるのであらう、誰しも新開へ這入るほどの者で菊の井のお力を知らぬはあるまじ、菊の井のお力か、お力の菊の井か、さても近來まれの拾ひもの、あの娘のお蔭で新開の光りが添はつた、抱へ主は神棚へさゝげて置いてまいとて軒並びの美み種となりぬ。

お高は往來の人のなきを見て、力ちやんお前の事だから何があつたからとて氣にしても居まいけれど、私は身につまされて源さんの事が思はれる、それは今の身分に落魄れては根つから良いお客ではないけれども思ひ合ふたからには仕方がない、年が違をが子があるがさ、ねえ左様ではないか、お内儀さんがあるといつて別れられるものかね、構ふ事はない呼出してお遣り、私のなぞといつたら野郎が根から心替りがして顔を見てさへ逃出すのだから仕方がない、どうで諦め物で別口へかゝるのだが、お前のは其れとは違ふ、料簡一つでは今のお内儀さんに三下り半をも遣られるのだけれど、お前は氣位が高いから源さんと一つにならうとは思ふまい、それだもの猶の事呼ぶ分に仔細があるものか、手紙をお書き今に三河やの御用聞きが来るだらうから彼の子僧に使ひやさんを爲せるがい、何の人お嬢様ではあるまいし御遠慮ばかり申してなるものかな、お前は思ひ切りが能すぎるからいけない兎も角手紙をやつて御覽、源さんも可愛

さうだわなと言ひながらお力を見れば烟管掃除に餘念のなき敷備向たるまゝ、物いはず。

やがて雁首を奇麗に拭いて一服すつてボンとはたき、又すひつてお高に渡しながら氣をつけお呉れ店先で言はれると人聞きが悪いではないか、菊の井のお力は土方の手傳ひを情夫に持つなど、勘違ひをされてもならない、それは昔の夢がたりさ、何の今は忘れて仕舞つて源とも七とも思ひ出されぬ、もう其話しは止め〜といひながら立あがる時表を通る兵兒帯の一群、これ石川さん村岡さんお力の店をお忘れなされたかと呼べば、いや相變らず豪傑の聲が、り、素通りもなるまいとてすつと這入るに、忽ち廊下にはた〜といふ足音、姉さんお銚子と聲をかければ、お着は何をと答ふ、三味の音景氣よく聞えて果は亂舞のおともまじりぬ。

(二)

さる雨の日のつれづれに表を通る山高帽子の三十男、あれなりと捉へずば此降りに客の足とまゐるまじとお力かけ出して袂にすがり、何うでも遣りませぬと駄々をこねれば、容貌よき身の一徳、例になき仔細らしきお客を呼入れて二階の六疊に三味線なしのしめやかなる物語、年を問はれて名を問はれて其次は親もとの調べ、士族かといへばそれは言はれませぬといふ、平民か

と問へば何うござんせうかと答ふ、そんなら華族と笑ひながら聞くに、まあ左様おもふて居て下され、お華族の姫様が手づからのお酌、かたじけなく御受けなされとて波々とつぐに、さりとは無作法な置つきといふが有るものか、それは小笠原か、何流ぞといふに、お力流とて菊の井一家の作法、疊に酒のまする流儀もあれば、大平の蓋であほらする流儀もあり、いやなお人にはお酌をせぬといふが大詰めの極りでござんすとて慥したるさまもなきに、客はいよ／＼面白がりて履歴をはなして聞かせよ定めて凄まじい物語があるに相違なし、たいの娘あがりとは思はれぬ何うだとあるに、御覽なさりませ未だ鬢の間に角も生へませず、其やうに甲羅は經ませぬとてころ／＼と笑ふを、左様ぬけてはいけぬ、眞實の處を話して聞かせよ、素性が言へば目的でもいへとて責める、むづかしうござんすね、いふたら貴君びつくりなさりませよ天下を望む大伴の黒主とは私が事とていよ／＼笑ふに、これは何うもならぬ其やうに茶利ばかり言はで少し眞實の處を聞かしてくれ、いかに朝夕を嘘の中に送るからとてちつとは誠も交る筈、良人はあつたか、それとも親故かと眞になつて聞かれるにお力かなしくなりて、私だつて人間でござんすほどに少しは心にしみる事もあります、親は早くになくなつて今はほんの手と足ばかり、此様な者なれど女房に持たうといふて下さるも無いでほなけれど未だ良人をば持ちま

せぬ、何うで下品に育ちました身なれば此様な事して終るのでござんしよと投出したやうな詞に無量の感溢れてあだなる姿の浮氣らしきに似す一節さむらふ様子の見ゆるに、何も下品に育つたからとて良人の持てぬ事はあるまい、殊にお前のやうな別品さんではあり、一足とびに玉の輿にも乗れさうなもの、それとも其やうな奥様あつかひ蟲が好かで矢張傳法肌の三尺帯が氣に入るかなと問へば、ごうで其處らが落でござりませよ、此方で思ふやうなは先様が嫌なり、來いといつて下さるお人の氣に入るもなし、浮氣のやうに思召しませやうが其日送りでござんすといふ、いや左様は言はさぬ相手のない事はあるまい、今店先で誰れやらがよろしく言ふたと他の女が言傳たでは無いか、いづれ面白い事があらう何とだといふに、あゝ貴方もいたり穿鑿なさります、馴染はざら一面、手紙のやりとりは反古の取かへつこ、書けど仰しやれば起障でも誓紙でもお好み次第さし上ましやう、女夫約束などと言つても此方で破るよりは先方様の性根なし、主人持なら主人が恐く親持なら親の言ひなり、振向いて見てくれねば此方も追ひかけて袖を捉へるに及ばず、それなら廢せとてそれ限りに成ります、相手はいくらもあれども一生を頼む人が無いのでござんすとて寄る邊なげなる風情、もう此様な話は廢しにして陽氣にお遊びなさりませ、私は何も沈んだ事は大嫌ひ、さわいでさわいで騒ぎぬかうと思ひますとて

手を叩いて朋輩を呼べば力ちやん太分おしめやかだねと三十女の厚化粧が来るに、おい此娘の可愛い人は何といふ名だと突然に問はれて、はあ私はまだお名前を承りませんでしたといふ、嘘をいふと盆が来るに閻魔様へお参りが出来まいぞと笑へば、それだとして貴君今日お目にかけつたばかりでは御座りませんか、今改めて伺ひに出やうとして居ましたといふ、それは何の事だ、貴君のお名をさと揚げられて、馬鹿々々お力が怒るぞと大景氣、無駄ばたしの取りやりに調子づいて旦那のお商買を當て、見ませうかとお高がいふ、何分願ひますと手のひらを差出せば、いえそれには及びません人相で見まするとして如何にも落つきたる顔つき、よせくじつと眺められて棚おろしでも始まつてはたまらぬ、斯う見えても僕は官員だといふ、嘘を仰しやれ日曜のほかに遊んであるく官員様がありますものか、力ちやんまあ何でいらつしやらうといふ、化物ではいらつしやらないよと鼻の先で言つて分つた人に御褒美だと懐中から紙入れを出せば、お力笑ひながら高ちやん失禮をいつてはならない此お方は御大身の御華族様おしのびあるきの御遊興さ、何の商買などがおありなさらう、そんなのでは無いと言ひながら蒲團の上に乗せて置きし紙入れを取あげて、お相手の高尾にこれをばお預けなさいまし、皆の者に祝儀でも遣はしませうとて答へも聞かすすん／＼と引出すを、客は柱に憑かゝつて眺めながら小言

もいはず、諸事おまかせ申すと寛大の人なり。

お高はあきれて力ちやん大抵におしよといへど、何宜いのか、これはお前にこれは姉さんに、大きいので帳場の拂ひを取つて残りは一同にやつてもい／＼と仰しやる、お禮を申して頂いてお出でと撒散らせば、これを此娘の十八番に馴れたる事としてさのみは遠慮もいふては居ず、旦那よろしいのでございますかと駄目を押して、難有うございませと掻きさらつて行くうしろ姿、十九にしては老けてるねと旦那どの笑ひ出すに、人の悪い事を仰しやるとお力は起つて障子を明け、手摺りに寄つて頭痛をたゞくに、お前はどうする金は欲しくないかと問はれて、私は別にほしい物がござんした、此品さへ頂けば何よりと帯の間から客の名刺を取出して頂くまねをすれば、何時の間に引出した、お取かへには寫真をくれとねだる、此次の土曜日に来て下されば御一處にうつしませうとて歸りかゝる客を左のみは止めもせず、うしろに廻りて羽織を着せながら、今日は失禮を致しました、又のお出を待ますといふ、おい程の善い事をいふまいぞ、空誓文は御免だと笑ひながらさつ／＼と立つて梯子を下りるに、お力帽子を手にして後から追ひすがり、嘘か誠か九十九夜の辛防をなさりませ、菊の井のお力は鑄型に入つた女でござんせぬ、又形のかはる事もありますといふ、旦那お歸りと聞いて朋輩の女、帳場の女主人も駈出

して只今は有がたうと同音の御禮、頼んで置いた車が來しとて此處からして乗り出せば、家中表へ送り出してお出を待まするの愛想、御祝儀の餘光と知られて、後には力ちやん大明神様これにも有がたうの御禮山々。

(三)

客は結城朝之助とて、自ら道樂ものとは名のれども實體なる處折々に見えて身は無職業妻子なし、遊ぶに屈竟なる年頃なればにや是れを初めに一週には二三度の通ひ路、お力も何處となく懐かしく思ふかして三日見えねば文をやるほどの様子を、朋輩の女子ども岡焼ながら弄かひては、力ちやんお楽しみであらうね、男振はよし氣前はよし、今にあの方は出世をなさるに相違ない、其時はお前の事を奥様とでもいふのであらうに今つから少し氣をつけて足を出したり湯呑であほるだけは廢めにおし人がらが悪いやねと言ふもあり、源さんが聞いたら何うだらう氣違ひになるかも知れないとて冷かすもあり、あゝ馬車に乗つて來る時都合が悪いから道普請からして貰ひたいね、こんな溝板のがたつくやうな店先へそれこそ人がらが悪くて横づけにもされないではないか、お前方も最う少しお行儀を直してお給仕に出られるやう心がけてお呉れとす

は、といふに、エ、憎らしい其ものいひを少し直さずば奥様らしく聞えまい、結城さんが來たら思ふさまいふて、小言をいはせて見せやうとて朝之助の顔を見るより此様な事を申して居まする、何うしても私共の手にのらぬやんちやなれば貴君から叱つて下され、第一湯呑で呑むは毒でござりましょと告口するに、結城は眞面目になりてお力酒だけは少しひかへろとの嚴命、あゝ貴君のやうにもないお力が無理にも商賣して居られるは此力と思召さぬか、私に酒氣が離れたら座敷は三昧堂のやうに成りませう、ちつと察して下されといふに成程々々として結城は二

言といはざりき。

或る夜の月に下座敷へは何處やらの工場の一群、井たゝいて甚九かつばれの大騒ぎに大方の女子は密集つて、例の二階の小座敷には結城とお力の二人限なり、朝之助は寝ころんで愉快らしく話し、かけるを、お力はうるさうに生返事して何やらん考へて居る様子、何うかしたか、又頭痛でもはじまつたかと聞かれて、ナニ頭痛も何もしませぬけれど頭に持病が起つたのですといふ、お前の持病は肝癪か、いゝえ、血の道か、いゝえ、それでは何だと聞かれて、何うも言ふ事は出來ませぬ、でも他の人ではなし僕ではないか何んな事でも言ふてよさうなもの、まあ何の病氣だといふに、病氣ではござんせぬ、唯こんな風になつて此様な事を思ふのですと

いふ、困つた人だな種々秘密があると見える、お父さんはと聞けば言はれませぬといふ、お母さんはと問へばそれも同じく、これまでの履歴はといふに貴君には言はれぬといふ、まあ嘘でも宜いさ、よしんば造り言にしる、斯ういふ身の薄命だとか大抵の女は言はねばならぬ、あかも一度や二度逢ふのではなし其位の事を告げたとして仔細はなからう、よし口に出して言はなからうともお前に思ふ事のあるはめくら按摩に探らせても知れた事、聞かずとも知れて居るが、それをば聞くのだ、どつち道同じ事だから持病といふのを先きに聞きたいといふ、およしなさいまし、お聞きになつても詰らぬ事でござんすとお力は更に取あはず。

折から下座敷より杯盤を運び來し女の何やらお力に耳打して兎も角も下までお出よといふ、いや行きたくないからよししてお呉れ、今夜はお客で大變に酔ひましたからお目にかゝつたとお話しても出來ませぬと斷つておくれ、あ、困つた人だねと眉を寄せるに、お前それでも宜いのかえ、はあ宜いのかと膝の上で撥を弄べば、女は不思議さうに立つてゆくを客は聞すまして笑ひながら、御遠慮には及ばない、逢つて來たら宜からう、何もそんなに體裁には及ばぬではないか、可愛い人を素戻しもひとからう、追ひかけて逢ふがよい、何なら此處へでも呼び給へ、片隅へ寄つて話の邪魔はすまいからといふに、冗談はぬきにして結城さん貴君に隠したとて仕

方がないから申しますが町内で少しは巾もあつた蒲團やの源七といふ人、久しく馴染でござんしたけれど今は見るかげもなく貧乏して八百屋の裏の小さな家にまい／＼つぶろの様になつて居ます、女房もあり子供もあり、私がやうな者に逢ひに來る歳ではなけれど、縁があるか未だに折ふし何の彼ののといつて、今も下座敷へ來たのでござんしやう、何も今さら突出すといふ即ではないけれど逢つては色々面倒な事もあり、寄らず障らず歸した方が好いのでござんす、恨まれるは覺悟の前、鬼だとも蛇だとも思ふがようござんすとして、撥を疊に少し延びあがりて表を見おろせば、何と姿が見えるかと驚る、あゝもう歸つたと見えますとて茫然として居るに、持病といふのはそれかと切込まれて、まあ其様な處でござんしやう、お醫者様でも草津の湯でもど薄淋しく笑つて居るに、御本尊を拜みたいは併優で行つたら誰の處だといへば、見たら喫驚でござりましやう色の黒い背の高い不動さまの名代といふ、では心意氣かと問はれて、此様な店で身上はたく程の人、人の好いばかり取得とては皆無でござんす、面白くも可笑しくも何ともない人といふに、それにお前は何うして逆上させた、これは聞き處と客は起かへる、六方逆上性なのでござんしやう、貴君の事も此頃は夢に見ない夜はござんせぬ、奥様のお出來なされた處を見たり、びつたりと御出のどまつた處を見たり、まだ／＼もつと悲い夢を見て枕

紙がびつしよりに成つた事もござんす、高ちやんなどは夜る寐るからとても枕を取るよりはやく軒の聲たかく、好い心持らしいが何んなに羨ましくござんしやう、私はどんな疲れた時でも床へ這入ると目が冴えてそれは色々な事を思ひます、貴君は私に思ふ事があるだらうと察して居て下さるから嬉しいけれど、よもや私がおもふかそれこそはお分りに成りますまい、考へたどて仕方がない故人前ばかりの大陽氣、菊の井のお力は行ぬけの締りなした、苦勞といふ事は知るまいと言ふお客様もござります、ほんに因果とでもいふものか私が身位かなしい者はあるまいと思ひますとて潜然とするに、珍らしい事陰氣のはなしを聞かせられる、慰めたいにも本末を走らぬから方がつかぬ、夢に見てくれるほど實があらば奥様にしてくれる位言ひさうなものだに根つからず聲がしりも無いは何ういふものだ、古風に出るが袖ふり合ふも、こんな商賣を厭だと思ふなら遠慮なく打明けばなしをするが宜い、僕は又お前のやうな氣では寧氣樂だとかいふ考へで浮いて渡る事かと思つたに、それでは何か理屈があつて止むを得ずといふ次第か、苦しからずは承りたいものだといふに、貴君には聞いて頂かうと此間から思ひました、だけれども今夜はいけませんね、何故々々、何故でもいけませんね、私が我まゆえ、申すまいと思ふ時は何うしても厭でござんすといついで立つて縁側へ出るに、雲なき空の月か

げ涼しく、見あるす町にからころと駒下駄の音さして行かふ人の影明かなり、結城さんと呼ぶに、何だどて傍へゆけば、まあ此處へお坐りなさいと手を取りて、あの水菓子屋で桃を買ふ子がござんしよ、可愛らしき四つ許の、彼子が先刻の人のでござんす、あの小さな子心にもよく憎いと思ふと見えて私の事をば鬼々といひます、まあ其様な悪者に見えまするかどて、空を見あげてハット息をつくさま、堪へかねたる様子は五音の調子にあらはれぬ。

(四)

同じ新開の町はづれに八百屋と髪結床が庇合のやうな細露路、雨が降る日は傘もさしれぬ窮屈さに、足もととしては處々に溝板の落し穴あやふげなるを中にして、兩側に立てたる棟割長屋、突當りの芥溜わきに九尺二間の上り框朽ちて、雨戸はいつも不用心のたてつけ、さすがに一方口にはあらで山の手の仕合は三尺許の縁の先に草ぼう／＼の空地、それが端を少し圍つて青紫蘇、えぞ菊、隠元豆の蔓などを竹のあら垣に擲ませたるが力が所縁の源七が家なり、女房はあ初といひて二十八か九にもなるべし、貧にやつれたれば七つも年の多く見えて、お尚黒はまだらに生次第の眉毛みるかげもなく、洗ひざらしの鳴海の浴衣を前と後を切りかへて膝の

あたりは目立ぬやうに小針のつき當、狹帯きりしと結めて蟬表の内職、盆前よりかけて暑さの時分をこれが時よと大汗になりての稼せけしなく、揃へたる簾を天井から釣下げて、まばしの手敷も省かんとて敷のあがるを樂しみに臨目もふらぬ様あはれなり。もう日が暮れたに太吉は何故かへつて來ぬ、源さんも又何處を歩いて居るかしらんとて仕事を片づけて一服吸つけ、苦勞らしく目をばちぐかせて、更に土瓶の下を穿くり、蚊いぶし火鉢に火を取分けて三尺の椽に持出し、指ひ集めの杉の葉を被せてふうふうと吹立れば、ふすふうと煙たちのぼりて軒端にのがれる蚊の聲まじし、太吉はがた／＼と溝板の音をさせて母さん今戻つた、お父さんも連れて來たよと門口から呼立るに、大層おそいではないかお寺の山へでも行はしないかと何の位案じたらう、早くお遣入といふに太吉を先に立て、源七は元氣なくぬつと上る、おやお前さんお歸りか、今日は何んなに暑かつたでしやう、定めて歸りが早からうと思ふて行水を沸かして置きました、さつと汗を流したら何うでござんす、太吉もお湯に遣入などいへば、あいと言つて帯を解く、お待お待、今加減を見てやるとで流しもどに盥を握えて釜の湯を汲出し、かき廻して手拭を入れて、さあお前さん此子をもいれて遣つて下され、何をぐたりとして出なされる、暑さにも歸りはしませぬか、さうでなければ一杯おびて、さつぱりに成つて御膳あがれ、太吉

が待つて居ますからといふに、おゝ左様だと思ひ出したやうに帯を解いて流しへ下りれば、いろいろに昔の我身が思はれて九尺二間の臺所で行水つかふとは夢にも思はぬもの、ましてや土方の手傳ひして車の跡押にと親は生つけても下さるまじ、あゝ詰らぬ夢を見たばかりにと、ちつと身にしみて湯もつかはねば、父ちやん脊中を洗つてお呉れと太吉は無心に催促する、お前さん蚊が喰ひますから早々とお上りなされと妻も氣をつくるに、おひ／＼と返事しながら太吉にも遣はせ我れも浴びて、上にあがれば洗ひ晒せしは／＼の浴衣を出して、お着かへなさいましと言ふ、帯まきつけて風の透く處へゆけば、妻は能代の膳のはげかゝりて足はよろめく古物に、お前の好きな冷奴にしましたとて小井に豆腐を浮かせて青紫蘇の香たかく持出せば、太吉は何時しか臺より飯櫃取おろして、よつちよいよつちよいと擔ぎ出す、坊主はおれが傍に來いとて頭を撫でつ、箸を取るに、心は何を思ふとなけれご舌に覺えの無くて咽の穴はれたる如く、もう止めにするとして茶碗を置けば、其様な事がありますものか、力業をする人が三膳の御飯のたべられぬと言ふ事はなし、氣合ひでも悪うござんすか、それとも酷く疲れてかと問ふ、いや何處も何とも無いやうなれご唯たべる氣にならぬといふに、妻は悲しさうな眼をしてお前さん又例のが起りましたらう、それは菊の井の鉢肴は甘くもありましたらうけれど、今の身分

で思ひ出した處が何となりまする、先は賣物買物お金さ、出來たら昔のやうに可愛がつても呉れましやう、表を通つて見ても知れる、白粉つけて美しい衣類きて迷ふて來る人を誰れかれなしに丸めるが彼の人達が商賣、あ、おれが貧乏になつたから構ひつけて呉れぬなと思へば何の事なく濟ましやう、恨みにでも思ふだけがお前さんが未練でござんす、裏町の酒屋の若い者知つてお出なさらう、二葉やのお角に心から落込んで、かけ先を殘らす使ひ込み、それを埋めやうとて雷神虎が盆筵の端についたが身の詰り、次第に悪い事が浸みて遂ひには土藏やぶりまでしたさうな、當時男は監獄入りしてもつそ飯たべて居やうけれど、相手のお角は平氣なもの、おもしろ可笑しく世を渡るに咎める人なく美事繁昌して居まする、あれを思ふに商賣人の一徳、だまされたは此方の罪、考へたとて始まる事ではござんせぬ、それよりは氣を取直して稼業に精を出して少しの元手も拵へるやうに心がけて下され、お前に弱られては私も此子も何うする事もならで、それこそ路頭に迷はねばなりませぬ、男らしく思ひ切る時あきらめて、金さへ出來やうならお力はおろか小紫でも揚卷でも別荘こしらへて圍ふたら宜うござりましやう、もう其んな考へ事は止めにして機嫌よく御膳あがつて下され、坊主までが陰氣らしう沈んで仕舞ましたといふに、みれば茶椀と箸を其處に置いて父と母との顔をば見くらべて何とは知らず氣に

なる様子、こんな可愛い者さへあるに、あのやうな狸の忘れられぬは何の因果かと胸の中かき廻されるやうなるに、我れながら未練ものめと叱りつけて、いやおれだとして其様に何時までも馬鹿では居ぬ、お力など、名ばかりも言つて呉れるな、いはれると以前の不出來しを考へ出していよ／＼顔があげられぬ、何の此身になつて今更何をおもふものか、飯がくへぬとてもそれは身體の加減であらう、何も格別案じてくれるには及ばぬゆる小僧も十分にやつて呉れとて、ころりと横になつて胸のあたりをはた／＼と打あふぐ、蚊遣の烟にむせばぬまでも思ひにもえて身の熱げなり。

(五)

誰れ白鬼とは名をつけし、無間地獄のそこはかとなく景色づくり、何處にからくりのあるとも見えねど、逆さ落しと血の池、借金の針の山に追ひのぼすも手の物ときくに、寄つてお出でよと甘へる聲も蛇くふ雉子と恐ろしくなりぬ、さりととも胎内十月の同じ事して、母の乳房にすがりし頃はちよち／＼あわ／＼の可愛げに、紙幣と菓子との二つ取りにはおこしをお呉れと手を出したる者なれば、今の稼業に誠はなくとも百人の中の一人に真からの涙をこぼして、聞いてお

くれ染物屋の辰さんが事を、昨日も川田やが店でおちやつびいのお六めど悪戯まはして、見たくもない往来へまで擔ぎ出して打ちつ打たれつ、あんな浮いた料簡で末が逃げられやうか、まあ幾歳だとおもふ三十は一昨年、宜い加減に家でも捲へる仕覺をして呉れど逢ふ度に異見をするが、其時限りい／＼と空返事して根つから氣にも止めては呉れぬ、父さんは年をとつて、母さんと言ふは眼の悪い人だから心配をさせないやうに早く締つてくれ、ば宜いが、私はこれでも彼の人の半纏をば洗濯して、股引のはころびでも纏つて見たいと思つて居るに、彼んな浮いた心では何時引取つて呉れるだらう、考へるとつく／＼奉公が厭になつてお客を呼ぶに張合もない、あゝくさ／＼するどて常は人をも欺す口で人のつらきを恨みの言葉、頭痛を押へて思案に暮れるもあり、あゝ今日は盆の十六日だ、お閻魔様へのお参りに連れ立つて通る子供達の奇麗な着物きて小遣ひもらつて嬉しさうな顔してゆくは、定めて定めて二人揃つて甲斐性のあつて何んな事して遊ぼうとも定めし人が羨ましかる、父さんは呑ぬけ、いまだに宿とても定まらまじく、母は此様な身になつて恥かしい紅白粉、よし居處が分つたとして彼の子は逢ひに来て呉れまじ、去年向島の花見の時女房づくりに丸盤に結つて明燈と共に遊ぶるさしに土手

の茶屋での子に逢つてくれ／＼と聲をかけしにさへ私の若くなりしに呆れて、阿婆さんでございますかと驚きし様子、ましてや此大島田に折ふしは時好の花替さしひらめかしてお客を捉へて申敷いふ處を聞かば子心には悲しくも思ふべし、去年あひたる時今は駒形の蠟燭やに奉公して居ます、私は何んなつらき事ありとも必らず辛防しどけて一人前の男になり、父さんをもお前をも今に樂をばおさせ申します、何うぞそれまで何なりと堅氣の事をして一人で世渡りをして居て下され、人の女房にだけはならず居て下されと異見を言はれしが、悲しきは女子の身の寸燭の箱はりして一人口過しがたく、さりどて人の臺所を遣ふも柔弱の身躰なれば勤めがたくて、同じ憂き中にも身の樂なれば、此様な事して日を送る、努さら浮いた心では無けれど言甲斐のないお袋と彼の子は定めし爪はじきするであらう、常は何とも思はぬ島田が今日ばかりは恥かしいと夕ぐれの鏡の前に涕ぐむもあるべし、菊の井のお力とても悪魔の生れ變りにはあるまじ、さる仔細あればこそ此處の流れに落こんで嘘のありたけ申敷に其日を送つて、情は吉野紙の薄物に、盆の光びつかりとするばかり、人の涙は百年も我まんして、我ゆる死ぬる人のありとも御愁傷さまと脇を向くつらき餘處目も養ひつらめ、さりとも折ふしは悲しき／＼恐ろしき事胸にたゝまつて、泣くにも人目を恥れば二階座敷の床の間に身を投ふして忍び音

の憂き涙、これをば友朋輩にも洩らさじと包むに、根性のまつかりした、氣のつよい子といふ者はあれど、障れば絶ゆる蜘蛛の絲のはかない所を知る人はなかりき、七月十六日の夜は何處の店にも客人入込みて都々一端歌の景氣よく、菊の井の下座敷にはお店者五六人寄集まりて團子の外れし紀伊の國、自まんも恐ろしき胴間聲に霞の衣衣紋坂と氣取るもあり、力ちやんは何うした心意氣を聞かせないか、やつたくと責められるに、お名はさ、ねど此坐の中に普通通の嬉しがらせを言つて、やんやくと悦ばれる中から、我戀は細谷川の丸木橋わたるにや怖し渡らねばと語ひかけしが、何をか思ひ出したやうにあ、私は一寸失禮をします、御免なさいよとて三味線を置いて立つに、何處へゆく何處へゆく、逃げてはならないと座中の騒ぐに照ちやん高ちやん少し頼むよ、直き歸るからとてずつと廊下へ急ぎ足に出でしが、何をも見かへらず店口から下駄を履いて筋向ふの横町の闇へ姿をかくしぬ。

お力は一散に家を出て、行かれるものなら此まゝに唐天竺の果までも行つて仕舞たい、あゝ厭だ厭だ、何うしたなら人の聲も聞えない物の音もしない、静かな、静かな、自分の心も何もぼうつとして物思ひのない處へ行かれるであらう、つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない、悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、

あゝ厭だくと道端の立木へ夢中に寄かゝつて暫時そこに立どまれば、渡るにや怖し渡らねばと自分の語ひし聲を其まゝ何處ともなく響いて來るに、仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らねばなるまい、父さんも踏かへして落ちてお仕舞なされ、お祖父さんも同じ事であつたといふ、何うで幾代もの恨みを背負て出た私なれば爲る丈の事はしなければ死んでも死なれぬのであらう、情ないとても誰れも憐れと思ふてくれる人はあるまじく、悲しいと言へば商賣がらを嫌ふと一口に言はれて仕舞う、えゝ何うなりとも勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたどて私の身の行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通して行かう、人情走らず義理走らずか其様な事も思ふまい、思ふたどて何うなるものぞ、此様な身で此様な業體で、此様な宿世で、何うしたからとて人並では無いに相違なければ、人並の事を考へて苦勞するだけ間違である、あゝ陰氣らしい何だどて此様な處に立つて居るのか、何しに此様な處へ出て來たのか、馬鹿らしい氣違じみた、我身ながら分らぬ、もうく歸りまじやうとて横町の闇をば出たなれて夜店の並ぶにぎやかなる小路を氣まぎらしにどぶらく歩けば、行かよふ人の顔小さくく摺れ違ふ人の顔さへも遙どほくに見るやう思はれて、我が陥む土のみ一丈も上にあがり居る如く、がやくといふ聲は聞ゆれど井の底に物を落したる如き響きに聞なされて、人の聲は、

人の聲、我が考へは考へど別々になりて、更に何事にも氣のまぎれるものなく、人立おびたいしき夫婦あらしみの軒先などを過ぐることも、唯我れのみは廣野の原の冬枯れを行くやうに、心に留まる物もなく、氣にかゝる景色にも覺えぬは、我れながら酷く逆上て人心のないのかと覺束なく、氣が狂ひはせぬかと立どまる途端、ふ力何處へ行くど肩を打つ人あり。

(一八)

十六日は必らず待まする來て下されと言ひしをも何も忘れて、今まで思ひ出しもせざりし結城の朝之助に不圖出合て、あれと驚きし顔つきの例に似合ぬ周章方がをかしきとて、から／＼と男の笑ふに少し恥かしく、考へ事して歩いて居たれば不意のやうに慌て、仕舞ました、よく今夜は來て下さりましたと言へば、あれほど約束して待てくれぬは不心中とせめられるに、何なりと仰しやれ、言辭は後にしまするとて手を取りて引けば彌次馬がうるさいと氣をつける、何うなり勝手に言はせましやう、此方は此方と人中を分けて伴ひぬ。
下座敷はいまだに客の騒ぎはげしく、ふ力の中坐したるに不興して喧しかりし折柄、店口にてれやれ歸りかの聲を聞くより、客を置ざりに中坐するといふ法があるか、歸つたらば此處へ來

い、顔を見ねば承知せぬぞと威張たてるを聞流しに二階座敷へ結城を連上げて今夜も頭痛がするので御酒の相手は出來ませぬ、大勢の中に居れば御酒の香に酔ふて夢中になるも知れませぬから、少し休んで其後は知らず、今は御免なさらませと斷りを言ふてやるに、それで宜いか、怒りはしないか、やかましくなれば面倒であらうと結城が心づけるを、何のお店もの、白瓜が何んな事を仕出しませう、怒るなら怒れでござんすとて小女に言ひつけてお銚子の支度、來るをば待かねて結城さん今夜は私に少し面白くない事があつて氣が變つて居まするほどに其氣で附合て居て下され、御酒を思ひ切つて呑みまするから止めて下さるな、酔ふたらば介抱して下されといふに、君が酔つたを未だに見た事がない、氣が晴れるほど呑むはいゝが、又頭痛がはじまりはせぬか、何が其様なに逆鱗にふれた事がある、僕らに言つてはわるい事かど問はれるに、いゝ貴君には聞いて頂きたいのでござんす、酔ふと申しますから驚いてはいけませんねと嬉然として、大湯呑を取よせて二三杯は息をもつかざりき。
常には左のみに心も留まらざりし結城の風采の今宵は何となく尋常ならず思はれて、肩巾のありて背のいかにも高き處より、落つて物をいふ重やかなる口振り、目つきの変くて人を射るやうなるも威嚴の備はれるかと嬉しく、濃き髪の毛を短く刈あげて袴足のくつきりとせしなど

今更のやうに眺められ、何をうつとりして居ると問はれて、貴君の顔を見て居ますのさと言へば、此奴めがと睨みつけられて、お、恐いお方と笑つて居るに、申儀はのけ、今夜は様子が尋常でない聞たら怒るか知らぬが何か事件があつたかと問ふ、何しに降つて湧いた事もなければ、人との紛紜などはよし有つたにしろそれは常の事、氣にもかゝらねば何しに物を思ひまじやう、私の時より氣まぐれを起すは人のするのでは無くて昔心がらの淺ましい譯がござんす、私は此様な賤しい身の上、貴君は立派な方様、思ふ事は反對にお聞きになつても酌んで下さるか下さらぬか其處ほどは知らねど、よし笑ひ物になつても私は貴君に笑ふて頂きたく、今夜は残らず言ひます、まゝ何から申さう胸がもめて口が利かれぬとて又もや大湯呑に呑むことさかんなり。

何より先に私が身の自墮落を承知して居て下され、もとより箱入りの生娘ならねば少しは察しても居て下さらうが、口奇麗な事はいひますとも此あたりの人に泥の中の蓮とやら、悪業に染まらぬ女子があらば、繁昌どころか見に来る人もあるまじ、貴君は別物、私が處へ来る人とても大抵はそれと思しめせ、これでも折ふしは世間さま並の事を思ふて恥かしい事つらい事情ない事とも思はれるに寧ろ九尺二間でも極まつた真人といふに添ふて身を固めやうと考へる事も

さんすけれど、それが私は出来ませぬ、それかと言つて来るほどのお人に無愛想もなりがたく、可愛い、いとしいの、見初ましたのど出たらめのお世辭をも言はねばならず、數の中には眞にうけて此様なやくざを女房にと言ふて下さる方もある、持たれたら嬉しいか、添ふたら本望か、それが私は分りませぬ、そもくの最初から私は貴君が好きで好きで、一日お目にかゝらねば戀しいほどなれど、奥様にと言ふて下されたら何うでござんしよか、持たれるは厭なり他處ながらは慕はし、一口に言はれたら浮氣者でござんしやう、あゝ此様な浮氣者には誰がしたと思召す、三代傳はつての出来そこね、親父が一生もかなしい事でござんしたとてほろりとするに、其親父さんほど問ひかけられて、親父は職人、祖父は四角な字をば讀んだ人でござんす、つまりは私のやうな氣違ひで、世に益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められたとやら、ゆるされぬどかにて斷食して死んださうに御座んす、十六の年から思ふ事があつて、生れも賤しい身であつたれど一念に修業して六十にあまるまで仕出來したる事なく、終は人の物笑ひに今では名を知る人もなしとて父が常住歎いたを子供頃より聞知つて居りました、私の父といふは三つの歳に椽から落て片足あやしき風になりたれば人中に立まじるも厭て居職に飾の金物をこしらへましたれど、氣位たかくて人愛のなければ最負にしてくれる人も

なく、あゝ私(わたくし)が覺(おぼ)えて七(なな)つの年(とし)の冬(ふゆ)でござんした、寒(かん)中(ちゆう)親(おや)子(こ)三(さん)人(にん)ながら古(ふる)浴(よく)衣(い)で、父(ちち)は寒(かん)いも
 知(し)らぬか柱(はしら)に寄(よ)つて細(こ)工(く)物(ぶつ)の工(く)夫(ふう)をこらすに、母(はは)は缺(か)けた一(いつ)つ電(でん)に破(やぶ)れ鍋(なべ)かけて私(わたくし)に左(ひだり)る物(ぶつ)
 を買(か)ひに行(い)けよといふ、味(あじ)噌(そう)こし下(くだ)げて端(は)たのお錢(せん)を手(て)に握(にぎ)つて米(こめ)屋(や)の門(かど)までは嬉(うれ)しく驅(か)つ
 たれど、歸(かへ)りには寒(かん)さの身(み)にしみて手(て)も足(あし)も龜(かめ)かみたれば五(ご)六(ろく)軒(けん)隔(へ)てし溝(ぞう)板(いた)の上(うへ)の氷(こほり)にすべり、
 足(あし)溜(たまり)りなく轉(ころ)ける機(はたら)會(あ)ひ手(て)の物(ぶつ)を取(と)り落(お)して、一(いつ)枚(まい)はづれし溝(ぞう)板(いた)のひまよりざら／＼と蹴(こ)れ入(い)れ
 ば、下(した)は行(ゆ)水(みづ)きたなき溝(ぞう)泥(どろ)なり、幾(いく)度(た)も覗(のぞ)いては見(み)たれど此(こ)れをば何(なん)として拾(ひろ)はれませう、其(その)
 時(とき)私(わたくし)は七(なな)つであつたれど家(うち)の内(うち)の様(よう)子(こ)子(こ)、父(ちち)母(はは)の心(こころ)をも知(し)れてあるに米(こめ)は途(ちゆう)中(ちゆう)で落(お)しましたと
 空(から)の味(あじ)噌(そう)こしさげて家(うち)には歸(かへ)られず、立(た)つてまばら泣(な)いて居(ゐ)たれど何(なん)うしたと問(と)ふて呉(く)れる人(ひと)
 もなく、聞(き)いたからとて買(か)つてやらうと言(い)ふ人(ひと)は猶(なほ)更(さら)なし、あの時(とき)近(きん)所(じよ)に川(がは)なり池(いけ)なりあらうな
 ら私(わたくし)は定(さだ)めし身(み)を投(な)げて仕(し)舞(ま)ひましたら、話(わ)は實(じつ)の百(ひゃく)分(ぶん)一(いち)、私(わたくし)は其(その)頃(ころ)から氣(き)が狂(くる)つたのでご
 ざんす、歸(かへ)りの遅(おそ)きを母(はは)の親(おや)案(あん)じて尋(たづ)ねに來(き)てくれたをば時(とき)機(はたら)に家(うち)へは戻(もど)つたれど、母(はは)も物(ぶつ)い
 はず父(ちち)親(おや)も無(む)言(ごん)に、離(わか)れ一(ひと)人(にん)私(わたくし)をば叱(し)る者(もの)もなく、家(うち)の内(うち)森(もり)として折(お)々(ざ)溜(たまり)息(いき)の聲(こゑ)もれるに私(わたくし)
 は身(み)を切(き)られるより情(なさけ)なく、今日(けふ)は一日(いちにち)斷(た)食(じき)にせうと父(ちち)の一(ひと)言(ごん)いひ出(で)すまでは忍(しの)んで息(いき)をつく
 やうで御(ご)座(ざ)んした。

何(なん)もな(な)し

えと流(なが)石(いし)に母(はは)の心(こころ)を測(はか)りかね、顔(かほ)をのぞいて猶(なほ)豫(よ)するに、あゝ年(とし)がゆかぬとて何(なん)たら譯(わけ)の分(わか)ら
 ぬ事(こと)小(こ)半(はん)時(とき)、坐(ま)には物(もの)の香(か)もなく酒(さけ)の香(か)したひて寄(よ)來(き)る蚊(か)のうなり聲(こゑ)のみ高(たか)く聞(き)えぬ。
 顔(かほ)をあげし時(とき)は頬(ほ)に涙(なみだ)の痕(あと)は見(み)ゆれども淋(しみ)げの笑(わら)みをさへ寄(よ)せて、私(わたくし)は其(その)様(よう)な貧(ひん)乏(ぱん)人(にん)の娘(むすめ)、
 氣(き)違(ちが)ひは親(おや)ゆづりて折(お)ふし起(た)るのでござります、今(こん)夜(や)も此(こ)の分(ぶん)な分(ぶん)らぬ事(こと)いひ出(で)して嘸(さ)貴(き)君(くん)御(ご)迷(ま)い
 惑(わ)で御(ご)坐(ざ)んしてしよ、もう話(わ)しはやめます、御(ご)機(き)嫌(けん)に障(さ)つたらばゆるして下(くだ)され、誰(た)れか呼(よ)べ
 んで陽(やう)氣(き)にしましやうかと問(と)へば、いや遠(とほ)慮(りよ)は無(む)沙(さ)汰(た)、その父(ちち)親(おや)は早(はや)くに死(し)くなつてか、はあ
 母(はは)さんが肺(はい)結(けつ)核(かく)といふを煩(わづ)つて死(し)なりましたから一(いっ)週(しゅう)忌(き)の來(き)ぬほどに跡(あと)を追(お)ひました、今(いま)居(ゐ)り
 ましても未(ま)だ五(ご)十(じゅう)、親(おや)なれば衰(おとろ)めるので無(な)けれと細(こ)工(く)け誠(まこと)に名(な)人(にん)と見(み)ふても宜(よろ)い人(ひと)でござんし
 た、なれども名(な)人(にん)だとして上(じやう)手(て)だとして私(わたくし)等(ら)が家(うち)のやうに生(う)れついたら何(なん)もなる事(こと)は出(で)きないので
 御(ご)坐(ざ)んしやう、我(わが)身(み)の上(うへ)にも知(し)れますると物(もの)思(おも)はしき風(かぜ)情(じやう)、お前(まへ)は出(い)世(せ)を望(のぞ)むと突(と)然(ぜん)に朝(あ)す
 の之(の)助(すけ)に言(い)はれて、えッと驚(おどろ)きし様(よう)子(こ)に見(み)えしが、私(わたくし)等(ら)が身(み)にて望(のぞ)んだ麻(あ)が味(あじ)噌(そう)こしが落(お)ち、何(なん)の
 玉(たま)の輿(こし)までは思(おも)ひがけませぬといふ、嘘(うそ)をいふは人(ひと)に依(よ)る始(はじめ)から何(なん)も見(み)知(し)つて居(ゐ)るに隠(かく)すは
 野(の)暮(ぼ)の沙(さ)汰(た)ではないか、思(おも)ひ切(き)つてやれ／＼とあるに、あれ其(その)やうなけしかけ詞(ことば)はよして下(くだ)さ
 れ、何(なん)うで此(こ)の分(ぶん)な身(み)でござんするにと打(うち)しをれて復(また)もの言(い)はず。

今宵もいたく更けぬ、下座敷の人はいつか歸りて表の雨戸をたてると言ふに、朝之助おどろき
て歸り支度をする、お力は何うでも泊らするといふ、いつしか下駄をも匿させたれば、足を取
られて幽霊ならぬ身の戸のすき間より出づる事もなるまじとて今宵は此處に泊る事となりぬ、
雨戸を鎖す音一しきり賑はしく、後には隙もる燈火のかけも消えて、唯軒下を行かよふ夜行の
巡査の靴音のみ高かりき。

(七)

思ひ出したとて今更に何うなるものぞ、忘れて仕舞へ諦めて仕舞へて思案は極めながら、去年
の盆には揃ひの浴衣をこしらへて二人一緒に藏前へ参詣したる事など思ふともなく胸へうか
びて、盆に入りては仕事に出る張もなく、お前さんそれではならぬぞえと諫め立てる女房の詞
も耳うるさく、エ、何も言ふな黙つて居ろとて横になるを、黙つて居ては此日が過ぎませぬ、
身體がわるくば薬も吞むがよし、御醫者にかゝるも仕方がなければ、お前の病ひはそれではな
しに氣さへ持直せば何處に悪い處があらう、少しは正氣になつて精出して下されといふ、いつ
でも同じ事は耳にたこが出来て氣の薬にはならぬ、酒でも買て来てくれ氣まぎれに吞んで見や

うと言ふ、お前さん其酒が買へるほどなら嫌とお言ひなされるを無理に仕事に出て下されとは
頼みませぬ、私が内職とて朝から夜にかけて十五錢が關の山、親子三人口も湯も満足には吞
まれぬ中で酒を買へとはよく、お前無茶助になりなさんした、お盆だといふに昨日も小僧
には白玉一つこしらへても喰べさせず、お精靈さまのお枷かざりも拵へられれば御燈明一つで
御先祖様へお詫びを申して居るも誰が仕業だと思ひなされる、お前が阿房を盡してお力づらめ
に釣られたから起つた事、いふては悪けれどお前は親不孝子不孝、少しは彼の子の行末をも思
ふて眞人間になつて下され、御酒を呑んで氣を晴らすは一時、眞から改心して下されば心元
なく思はれますとて女房打なげくに、返事はなくて吐息折々に太く身動きもせず仰向ふしたる
心根のつらさ、其身になつてもお力が事の忘れられぬか、十年つれそふて子供まで儲けし我れ
に心かぎりの苦勞をさせて、子には齋戒を下させ家とては六疊一間の此様な犬小屋、世間一
體から馬鹿にされて別物にされて、よしや春秋の彼岸が來ればとて、隣近所に牡丹もち團子と
配り歩く中を、源七が家へは遣らぬがよい、返禮が氣の毒なとて、親切かは知らねど十軒長屋
の一軒は除け物、男は外出がちなればいさゝか心に悪るまじけれど女心には遣る瀬のなきは
ど切なく悲しく、おのづと肩身せばまりて朝夕の挨拶も人の目色を見るやうなる情なき思ひる

するを、それをば思はで我が情婦の上ばかりを思ひつけ、無情き人の心の底がそれほどまでに戀しいか、晝も夢に見て獨言にいふ情なさ、女房の事も子の事も忘れはて、お力一人を命にも遣る心か、あさましい口惜しい辛い人と思ふに中々言葉は出でずして恨みの露を眼の中にくみぬ。

物いはねば狭き家の内も何となくうら淋しく、くれゆく空のたど〜しきに裏屋はまして薄暗く、燈火をつけて蚊遣りふすべて、お初は心細く戸の外をながむれば、いそ〜と歸り来る太吉の姿、何やら大袋を兩手に抱へて母さん母さんこれを貰つて来たかと莞爾として駆け込みに、見れば新開の日の出屋がかすていら、おや此様な良いお菓子誰れに貰つて来た、よくお禮を言つたかと問へば、あ、能くお辭儀をして貰つて来た、これは菊の井の鬼姉さんが呉れたのと言ふ、母は顔色をかへて圖太い奴めが是れほどの淵に投げ込んで未だいちめ方が足りぬと思ふか、現在の子を使ひに父さんの心を動かすによこし居る、何といふてよこしたと言へば、表通りの賑やかな處に遊んで居たらば何處のか伯父さんと一緒に来て、菓子を貰つてやるから此方へお出といつて、おいらは入らぬと言つたけれど抱いて行つて買つて呉れた、喰べては悪いか言ひさしてお力は溢れ出る涙の止め難ければ紅の半巾顔に押當て其端を喰ひしめつゝ物いは

ぬ子ぞ、あの姉さんは鬼ではないか、父さんを懶惰者にした鬼ではないか、お前の衣服のなくなつたも、お前の家のなくなつたも皆あの鬼めがした仕事、喰ひついても飽き足らぬ悪魔にお菓子を貰つた喰べてもいゝかど聞くだけが情ない、汚い穢い此様な菓子、家へ置くのも腹が立つ、捨て、仕舞な、捨てお仕舞、お前は惜しくて捨てられないか、馬鹿野郎めと罵りながら袋をつかんで裏の空地へ投出せば、紙は破れて轉び出る菓子の、竹のあら垣打こえて溝の中にも落ちむり、源七はむくりと起きてお初と一疊大きくいふに何か御用かと、尻目にかけて振むかうどもせぬ横顔を睨んで、いゝ加減に人を馬鹿にしろ、黙つて居ればいゝ事にして悪口雑言は何の事だ、知つた人なら菓子位子供にくれるに不思議もなく、貰ふたどて何が悪い、馬鹿野郎呼はり太吉をかこつけにおれへの當こすり、子に向つて父親の讒言をいふ女房氣質を誰れが教へた、お力が鬼なら手前は魔王、商賈人のだましは知れて居れど、妻たる身の不貞腐れをいふて濟むと思ふか、土方をせうが車を引かうが亭主は亭主の權がある、氣に入らぬ奴を家には置かぬ、何處へなりとも出てゆけ、出てゆけ、面白くない女郎めと叱りつけられて、それはお前無理だ、邪推が過る、何しにお前に當つけやう、この子があんまり分らぬと、お力の仕方が憎らしさに思ひあまつて言つた事を、どっこに取つて出てゆけどまでは酷う御座んす、

家の爲をともへばこそ氣に入らぬ事を言ひもする、家を出るほどなら此様な貧乏世帯の苦勞をば忍んでは居ませぬと泣くに貧乏世帯に飽きが來たなら勝手に何處なり行つて貰はう、手前が居ぬからとて乞食にもなるまじく太吉が手足の伸ばされぬ事はなし、明けても暮れてもあれが柵あるしかあかへの紅み、つくづく聞き飽きてもう厭になつた、貴様が出ずば何ら道同じ事情しくもない九尺二間、あれが小僧を連れて出やう、さうならば十分に我鳴り立る都合もよからう、さあ貴様が行くか、あれが出やうかと激しく言はれて、お前はそんなら眞實に私を離縁する心かえ、知れた事よと例の源七にはあらざりき。

お初は口惜しく悲しく情なく、口も利かれぬほどこみ上ぐる涙を吞込んで、これは私が悪う御坐んした、堪忍して下さい、お力が親切で志して呉れたものを捨て、仕舞つたは重々悪う御坐いました、成程お力を鬼といふたから私に魔王で御坐んせう、モウいひませぬ、モウいひませぬ、決してお力の事につきて此後とやかく言ひませぬ、陰の噂しますまい故離縁だけは堪忍して下さい、改めて言ふまでは無ければ私には親もなし兄弟もなし、差配の伯父さんを仲人なり里なりに立て、來た者なれば、離縁されての行き處とはありませぬ、何うぞ堪忍して置いて下され、私は憎からうと此子に死じて置いて下され、あやまりますと手を突いて泣けども、イ

や何うしても置かれぬとて其後は物言はじ壁に向ひてお初が言葉は耳に入らぬ體、これほど邪慳の人ではなかりしを女房あきれて、女に魂を奪はるれば是れほどまでも淺ましくなるものか、女房が歎きは更なり、途には可愛き子をも餓死させるかも知れぬ人、今詫びたからとて甲斐はなしと覺悟して、太吉、太吉と傍へ呼んで、お前は父さんの傍と母さんと何方が好い、言ふて見ろと言はれて、おいらは父さんは嫌ひ、何にも買つて呉れないものと眞正直をいふに、そんなら母さんの行く處へ何處へも一緒に行く氣かえ、あゝ行くともとて何とも思はぬ様子に、お前さんお聞きか、太吉は私につくといひます、男の子なればお前も欲しからうけれど此子はお前の手には置かれぬ、何處までも私が貰つて連れて行きます、よう御座んすか貰ひまするといふに、勝手にしろ、子も何も入らぬ、連れて行きたくば何處へでも連れて行け、家も道具も何も入らぬ、何うなりともしろとて察轉びしまゝ、振向かんとせぬに、何の家も道具も無い癖に勝手にしろもないもの、これから身一つになつて仕たいまゝの道樂なり何なりお盛しなされ、最ういくら此子を欲しいと言つても返す事では御座んせぬぞ、返しはしませぬぞと念を押して、押入れ探つて何やらの小風呂敷取出し、これは此子の寐聞着の袷、はらがけと三尺だけ貰つて行きます、御酒の上といふでもなければ、醒めての思案もありますまいけれど、

よく考へて見て下され、たどひ何のやうな貧苦の中でも二人揃つて育てる子は長者の暮しといひまする、別れれば片親、何につけてもふびんなは此子とお思ひなさらぬか、あゝ、鴈が腐つた人は子の可愛さも分りはすまい、もう別れ申しますと風呂敷さげて表へ出づれば、早くゆけくとして呼かへしては呉れざりし。

(八)

魂祭り過ぎて幾日、まだ盆控燈のかけ薄淋しき頃、新開の町を出でし棺二つあり、一つは駕にて一つはさし擔ぎにて、駕は菊の井の隠居所より志のびやかに出でぬ、大路に見る人のひそめくを聞けば、彼の子もどんだ運のあるい詰らぬ奴に見込まれて可愛さうな事をしたといへば、イヤあれは得心づくだと言ひまする、あの日の夕暮、お寺の山で二人立ばなしをして居たといふ確かな隠人もござります、女も逆上て居た男の事なれば義理にせまつて遣つたので御坐ろといふもあり、何のあの阿魔が義理はりを知らうぞ湯桶の隅に男に逢ふたれば、流石に振はなして逃る事もならず、一處に歩いて話しはしても居たらうなれど、切られたは後袈裟、燧先のかすり疵、頸筋の突疵など色々あれども、たしかに逃げる處を遣られたに相違ない、引かへて

男は見事な切腹、蒲團やの時代から左のみの男と思はなんだがあれこそは死花、えらさうに見えたといふ、何にしる菊の井は大損であらう、彼の子には結構な旦那がついた筈、取にがしては残念であらうと人の憂ひを串戯に思ふものもあり、諸説みだれて取止めたる事なけれど、恨は長し人魂か何かまらす筋を引く光り物のお寺の山といふ小高き處より、折ふし飛べるを見し者ありと傳へぬ。

われから

(一)

霜夜ふけたる枕もとに吹くと無き風つま戸の隙より入りて障子の紙のかさこそと音するもあはれに淋しき旦那様の御留守、寝間の時計の十二を打つまで奥様はいかにするとも睡る事の無くて幾そ度の寝がへり少しは肝の氣味にもなれば、入らぬ浮世のさま／＼より、旦那様が去歳の今頃は紅葉館にひたと通ひつめて、御自分ばかりし給へども、他所行着のお袂より縫とりべりの手巾を見つけた出したる時の憎さ、散々といぢめていぢめて、いぢめ抜いて、もう是れからは決して行かぬ、同藩の澤木が言葉のいとるを違へぬ世は來るとも、此約束は決して違へぬ、堪忍せよと謝罪してお出遊ばしたる時の氣味のよさとては、月頃の痞へが下りて、胸のすくほど嬉しう思ひしに、又かや此頃折ふしのお泊り、水曜會のお人達や、俱樂部のお仲間いたづらな御方の多ければそれに引れて自づと身持の悪う成り給ふ、朱に交はればといふ事を花のお師匠が辯にして言ひ出せども眞にあれば嘘ならぬ事、昔は彼のやうに口先の方ならで、今日は何處

其處で藝者をあげて、此様な不思議な踊を見て來たのと、お腹のよれるやうな可笑しき事をば眞面目になりて仰しやりしものなれども、今日此頃のお人の悪さ、憎いほどお利口な事はばかりお言ひ遊ばして、私のやうな世間見ずをば手の平で揉んで丸めて、それはそれは押へ處の無いお方、まあ今宵を何處へお泊りにて、明日はどのやうな嘘いふてお歸り遊ばすか、夕かた俱樂部部へ電話をかけたしに三時頃にお歸りとの事、又吉原の式部がもとへでは無きか、あれも縁切りと仰しやつてから最う五年、旦那様ばかり悪いのでは無うて、暑寒のお遣ひものなど、憎らしい處置をして見せるに、お心がつひ浮かれて、自づと足をも向け給ふ、ほんに商賣人として憎らしいものと次第におもふ事の多くなれば、いよ／＼寝かねて奥様は縮緬の掻卷打はふりて郡内の蒲團の上に取り給ひぬ。

八疊の座敷に六枚屏風たて、お枕もとには桐胴の火鉢にお煎茶の道具、烟草盆は紫檀にて朱羅字の烟管そのさま可笑しく、枕ぶとんの派手模様より枕の總の紅も常の好みの大方に現はれて、蘭奢にむせぶ部屋の内、籠行燈の光がすかなり。

奥様は火鉢を引寄せて、火の氣のありやと試みるに、宵に小間使ひが埋け參らせたる、櫻炭の半ば灰になりて、よくも起さで埋けけるは黒さま／＼にて冷えしもあり、烟管を取上げて一二服、

烟を吹いて耳を立つれば折から此室の軒端に移りて妻戀ひありく猫の聲、あれは玉では有るま
 いか、まあ此霜夜に屋根傳ひ、何日のやうな風ひきになりて苦しうな喉をするのであらう、
 あれも矢つ張いたづら者と烟管を置いて立あがる、牝猫よびにと雪灯に火を移し平常着の八丈
 の書物羽織しどけなく引かけて、腰引ゆへる縮緬の、淺黄はことに美しく見えぬ。
 踏むに冷めたき板の間を引裾ながく椽がはに出で、用心口より顔さし出し、玉よ、玉よ、と
 二聲ばかり呼んで、戀に狂ひてあくがる、身は主人が聲も聞き分けぬ、身にしむやうな媚めか
 しい聲に大屋根の方へと啼いて行く、え、言ふ事を聞かぬ我ま、者め、何うともおしと捨せり
 ふ言ひて心ともなく庭を見るに、ぬば玉の間たちおほふて、物の黑白も見え分かぬに、山茶花
 の咲く垣根をもれて、書生部屋の戸の隙よりわづかに光りのほのめくは、お、まだ千葉は寝ぬ
 さうな。
 用心口を鎖してお寝間へ戻り給ひしが再度立つてお菓子戸棚のびすけつとの瓶とり出し、お鼻
 紙の上へ明けて押しねり、雪灯を片手に椽へ出れば天井の鼠がたくと荒れて、黽にても入り
 しかき、といふ聲もの凄し、まるべの燈火かげゆれて、廊下の間に恐ろしきを馴れし我家の何
 とも思はず、侍女下婢が夢の最中に奥さま書生の部屋へとおはぬしぬ。

お前はまだ寝ないのかえ、と隙子の外から聲をかけて、奥様すつと入りたまへば、室内なる男
 は讀書の頭を驚かされて、思ひがけぬやうな惘れ顔をかしう、奥さま笑ふて立ち給へり。

(一)

机は有りふれの白木作り、白天竺をかけて、勸工場もの、筆立ては晋唐小楷の、栗鼠毛の、べ
 ンも洋刀も一つに入れて、首の缺けた龜の子の水入れに、赤墨汁の瓶がおし並び、齒みがきの
 箱我れもと威を張りて、割據の机の上に寄りかゝつて、今まで洋書を繕いて居たは年面二十あ
 まり三とは成るまじ、丸頭の五分判にて顔も長からず角ならず、眉毛は濃くて目は黒目がちに、
 一體の容貌好い方なれども、いかにもいかにもの田舎風、午夢稿の綿入に論なく白木綿の帯、
 青き毛布を膝の下に、前こごみになりて兩手に頭をしかと押へし。
 奥さまは無言にびすけつとを机の上へ載せて、お前夜ふかしをするなら爲るやうにして寒さの
 凌ぎをして置いたら宜からうに、湯わかしかは水になつて、お火と言つたら螢のやうな、よくこ
 れで寒くないのう、お節介なれど私がおこして遣りませう、炭取を此處へと仰しやるに、書生
 はおそれ入りて、何時も無精を致しまする、申譯の無い事と有難いを迷惑らしう、炭取をさ

し出して我れは中口へ桃を盛つた妻、これは私が道樂さんと奥さま成つぎにかゝられぬ。
 自慢も交じる親切に盛火大事さうに扱み上げて、積み立てし炭の上のせ、四邊の新聞三つ四
 つに折りて、隅の方よりそよ／＼と燃やに、いつしか此れより彼れに移りて、ばち／＼といふ
 音いさましく、青き火ひら／＼と燃えて火鉢の縁のやゝ熱うなれば、奥さまは何のやうな働き
 をでも遊ばしたかのやうに、千葉もおあたりと少し押やりて、今宵は分けて寒いものをと、指
 輪のかゞやく白き指先を、藤編みの火鉢の縁にぞ懸けたる。
 書生の千葉いとしう恐れ入りて、これは何うも、これはど頭を下げるばかり、故郷に在りし
 時、姉なる人が母に代りて可愛がりて呉れたりし、其折其頃の有さまを憶ひ起して、もとより
 奥様が派手作りにお合もの、姉者人がいさゝか似たるよしは無けれど、中学校の試験前に夜明
 しをつつけし頃、此やうな事を言ふて、此やうな所作をして、其上には醫藥師の御馳走、あ
 たゝまるやうにと言ふて呉れし時もありし、なつかしきは其昔、有難きは今の奥様が情と、平
 生お世話になりぬる事さへ取違へて、怒り肩もすぼまるばかり畏まりて有るさまを、奥さま悪
 そうなど御覽じて、お前羽織はまだ出来ぬかえ、仲に頼んで大急ぎに仕立て、貰ふやうにお爲、
 此寒い夜に綿入一つで辛防のなる筈は無い、風でも引いたら何うお爲だ、本當に身體を暖はれば

いけませぬぞえ、此前に居た原田といふ勉強ものが矢つ張お前の通り明けても暮れても紙魚の
 やうで、遊びにも行かなければ、寄席一つ聞かうでもなしに、それはそれは感心と言はうか恐
 ろしいほどで、特別認可の卒業と言ふ間際まで病なしに行つてのけたを、惜しい事に、腦
 病になつたでは無からうか、醫元から母さんと呼んで此處の家で二月も介抱させたのだけれど、
 遂には何が何やら無我夢中になつて、思ひ出しても情ない、謂はゞ狂死をしたのだね、私はそ
 れを見て居たゆゑ、勉強家は氣が引ける、懶惰られては困るけれど、煩はぬやうに心がけてお
 呉れ、別けてお前は一粒物、親なし、兄弟なしと言ふでは無いか、千葉家を負ふて立つ大黒柱
 に異狀が有つては立直しが出来ぬ、さうでは無いかと奥様身に比べて言へば、はッ、はッ、と
 答へて詞は無かりき。
 奥様は立上つて、私は大層邪魔をしました、それならば成るべく早く休むやうにお爲、私は行
 つて寝るばかりの身體、部屋へ行く間の事は寒いとても仔細はなきに、構ひませぬから此れ
 を着てお出、遠慮をされると憎くなるほどに何事も黙つて年上の言ふ事は聞くものと奥様すつ
 とお羽織をぬぎて、千葉の背後より打着せ給ふに、人肌のぬくみ背に氣味わるく、麝香のかをり
 満身を襲ひて、お禮も何といひかぬるを、よう似合ふのうと笑ひながら、雪灯手にして立出給

へば、蠟燭うつか三分の一ほどになりて、燈端に高し木がらしの風。

四二

落葉たくなる烟の末か、それかあらぬか冬がれの庭木立をかすめて、裏通りの町屋の方へ朝毎に靡くを、それ金村の奥様が目覺だと人わる口の一つに致へれども、習慣の恐ろしきは朝飯前の一風呂、これの積までは替も取られず、一日忘る事あれば終日氣持の唯ならず、物足らぬやうに氣になるといふも、聞く人の耳には洒落者の道楽と取られぬべき事、其身になりては誠に詮なき癖をつけて、今更難儀と思ふ時もあるれど、召使ひの人々心を待て御命令なきに具衆折くべ、お加減が宜しう御座りますと朝床のもとへ告げて來れば、もう磨しませうと幾度か思ひつゝ、猶相かはらぬ贅澤の一つ、さなご入れたる糖衣にみがき上げて出づれば更に儼い化粧の白ざく、是れも今更やめられぬやうな肌になりぬ。

年を言はは二十六、遅れ咲の花も梢にまぼむ頃なれど、扮装のよきと天然の美くしきと二つ合せて五つほどは若う見られぬ徳の性、お子様なき故と髪結の留は言ひしが、あらばいさゝか沈着くべし、いまだに娘の心が失せて、金齒入れたる口元に何う爲い、彼う爲い、仔細らしく

數多の奴婢をも使へども、旦那さま勤めて十軒店に人形を買ひに行くなど、一家の妻のやうには無く、お高祖頭巾に肩掛引まどひ、良人の君も共川崎の大師に参詣の道すがら停車場の群集に、あれは新橋か、何處のであらうと呷かれて、奥様とも言はれぬる身ながらこれを淺からず嬉しうて、いつしか好みも其様に、一つは容貌のさせし難なり。

目鼻だちより髪のかかり、齒ならびの宜い所まで似たとは愚か母様を其まゝの生れつき、奥様の父御といひしは赤鬼の與四郎とて、十年の前までは物すこい目を光らせて在したるものなれど、人の生血をまぼりたる報ひか、五十にも足らで急病の腦充血、一朝に此世の税を納めて、よしや葬儀の造花、派手に美事な造りはするとも、辻に立つて見る人に爪はじきをされて後生いかいと思はるゝ様なりし。

此人始めは大藏省に月俸八圓頂戴して、元ちよろけの洋服に毛織子の洋傘さしかざし、大雨の折にも車の贅はやられぬ身なりしを、一念發起して朝子も靴も取つて捨て、今川橋の際に夜明しの蕎麥掻きを賣り初し頃の勢ひは千鈞の重きを提げて大海をも跳り越えつべく、知る限りの人舌を巻いて驚くもあれば、猪武者の向ふ見ず、やがて元も子も摺つて情なき様子が思はるゝと後言も有けらし、須彌も出たつ足もどの、其當時の事少しはいや、笑につらぬく露の玉と

の興四郎にも想はありけり、幼馴染の妻に美尾といふ身がらに合せて高品に美しくしき其とし十七ばかりなりしを天にも地にも二つなき物と捧げ持ちて、役所がへりの竹の皮、人にはしたゝれるほど湿つばき姿と後指さしれながら、妻や待つらん夕鳥の聲に二人とり膳の菜の物を買ふて来るやら、朝の出がけに水瓶の底を掃除して、一日手桶を持たせぬほどの汲込み、貴郎お晝炊きで御座いますと言へば、おいと答へて米かし桶に量り出すほどの惚ろさ、斯くて終らば千歳も美しき夢の中に過ぎぬべうぞ見えし。

さるほどに相添ひてより五年目の春、梅咲く頃のそらろあるき、土曜日の午後より同僚二三人打つれ立ちて、葛飾わたりの梅屋敷廻り歸りは廣小路わたりの小料理やに、酒も深くは呑まぬ質なれば、淡泊と仕舞ふて殊更に土産の折を調へさせ、友には冷評の言葉を聞きながら、一人別れてとばくと本郷附木店の我家へ戻るに、格子戸には締りもなくして、上へあがるに燈火はもとよりの事、火鉢の火は黒くなりて灰の外に轉々と凄まじく、まだ如月の小夜嵐引まどの明放しより入りて身に浸む事も堪へがたし、いかなる故とも思はれぬに洋燈を取出してつくづくと思案に暮るれば、物音を聞つけて壁際の小學教員の妻、いそがはしく表より廻り来て、お歸りに成ましたか、御新造は先刻、三時過ぎでも御座りましたるか、お實家からのお迎ひとて

奇麗な車が見えましたに、留守は何分たのむと仰しやつて其まゝお出かけに成ました、お火が無くば取りにお出なされ、お湯も沸いて居ますからとまめくしう世話を焼かるゝにも、不審の雲は胸の内におさがりて、何ういふ様子何のやうな事をいふて行きましたかとも問ひたけれど格氣男と推斷らるゝも口惜しく、それは種々御厄介で御座りました、私が戻りましたからは御心配なくお就下されと洒然といひて隣の妻を歸しやり、一人淋しく洋燈の光りに烟草を吸ひて、忌々しき土産の折は鼠も喰べよとくゝ繩のまゝ、勝手に元に出出し、其夜は床に入りしかど、さりと肝癪のやる瀬なく、よしや如何なる用事ありとも、我なき留守に無断の外出、殊更家内開放しにして、これが人の妻の上業かと思ふにあまりの事と胸は沸くやうになりぬ。明くれば日曜、終日寝て居ても各々人は無し、枕を相手に芋虫を真似びて、表の格子には錠をおろしたまゝ、人訪へども音もせず、いたづらに午後四時といふ頃になりぬれば、車の門に止まりて優しき駒下駄の音の聞ゆるを、論なくそれとは知れども知らぬ顔に虚寝を作れば、美尾は格子を押して見て、これは如何な事、錠がおりてあると獨り言をいつて、隣家の松の垣根に添ひて水口の方へと間道を入りぬ。

昨日の午後より谷中の母さんが急病、瘧氣で御座んすさうな、つよく胸先へさし込みまして、

一時はとても此世の物では有るまいと言ふたれど、お醫者さまの皮下注射やら何やらにて、何事も無く治りのつき、今日は一人でお厠にも行かれるやうに成ました、右の譯故の仲間どり、昨日家を出まする時も、氣がわく／＼して何事も思はれず、後にて思へば締りも附けず、庭口も明け放して、嘸かし貴郎のお怒り遊ばした事と氣が氣では無かつたなれど、病人見捨て、歸る事もならず、今日も此やうに遅くまで居りまして、何處までも私が悪う御座んするほごに、此通り謝罪ますほごに、何うぞ御免し遊ばして、いつものやうに打解けた顔を見せて下され、御機嫌直して下されと詫ふるに、さては左様かと少し私の打れて、それならば其様に、何故はがきでも寄越しはせぬ、馬鹿の奴がと叱りつけて、母親は無病壯健の人とばかり思ふて居たが、癩というは始めてかと睦じう語り合ひて、與四郎は何事の秘密ありとも知らざりき。

(四)

浮世に鏡という物のなくば、我が妍きも醜きも知らで、分に安んじたる思ひ、九尺二間に楊貴妃小町を隠して、美色の前だれ掛奥床しうて過ぎぬべし、よろづに淡々しき女子心を來て揺するやうな人の賞め詞に、思はず赫と上氣して、昨日までは打すてし髪毛つやらしう結びあげ、

端折かゝみ取上げて見れば、いかう眉毛も生つゝきぬ、隣より剃刀をかりて顔をこしらへる心そも／＼見て呉れの浮氣になりて、繻絆の袖も欲しう、半天の襟の觀光が糸ばかりになりしを淋しがる念ひ、與四郎が妻の美尾とても一つは世間の持上げしなり、身分は高からずとも誠ある良人の情心うれしく、六疊、四疊二間の家を、金殿とも玉樓とも心得て、いつぞや四丁目の薬師様にて買ふて貰ひし洋銀の指輪を大事らしう白魚のやうな指にはめ、馬爪のさし櫛も世にある人の本甲ほどには嬉しがりしものなれども、見る人毎に賞めそやして、これほどの容貌を埋れ木とは可憐しいもの、出て居る人であらうなら恐らく島原切つての美人、ならぶ者はあるまいとて口に税が出ねば我おもしろに人の女房を評したてる痴漢もあり、豆腐かふとて岡持さげて表へ出れば、通りすがりの若い輩に振かへられて、惜しい女に服粧が悪いなど哄然と笑はれる、思へば綿銘仙の糸の寄りしに色の褪めたる紫めりんすの幅狭き帯、八圓どりの等外の妻としては此れより以上に粧はるべきならねども、若き心には情なく簞のゆるびし岡持に豆腐の露のまたゝるよりも不覺に袖をやまぼりけん、兎角に心のゆらくと襟袖口のみ見らるゝをかねて、加へて此前の年、春雨はれての後一日、今日ならではの花盛り、上野をはじめ隅田へかけて夫婦づれを楽しみ、随分とも有る限りの體裁をつくりて、取つて置きの一てう羅

も良人は黒袖の紋つき羽織、女房は唯一筋の博多の帯しめて、昨日甘へて買ふて貰ひし黒ぬりの駒下駄、よしや疊は擬ひ南部にもせよ、くらぶる者なき時は嬉しくて立出でぬ、さても東叡山の春四月、雲に見紛ふ木の間の花も今日明日ばかりの十七日なりければ、廣小路より眺むるに、石段を降り昇る人のさま、さながら蟻の塔を築き立つるが如く、木の間の花に衣服の綺羅をきそひて、心なく見る目には保養の上も無き景色なりき、二人は櫻が岡に登りて今の櫻雲臺が傍近く來し時、向ふより五六輛の車かけ聲いさましくして來るを、諸人立止まりてあれおれと言ふ、見れば何處の華族様なるべき、若き老ひたるこき交せに、派手なるは曙の振袖緋無垢を重ねて、老け形なるは花の木の間松の色、いつ見ても飽かぬは黒出たちに籠甲のさし物、今様ならば襟の間に金ぐさりのちらつくべきなりし、車は八百膳に止まりて人は奥深く入るを、憎さげな評いふて見送るもあり、唯大方にお立派なといひて行過ぐるもありしが、美尾はいかに感じてか、茫然と立ちて眺め入りし風情、うすら淋しきやうに物おもしろしげにて、何れ華族であらうお化粧が濃厚だと與四郎の振かへりて言ふを耳にも入れぬらしき様にて、我れと我が身を打ながめ唯悄然としてあるに與四郎心ならず、何うかしたかと氣遣ひて問へば、俄に氣分が勝れませぬ、私は向島へ行くのは廢めて、此處から直ぐに歸りたいと思ひます、貴郎

はゆるりと御覽なりませ、お先へ車で歸りますと力なさうに萎れて言へば、それはと與四郎案じ始めて、一人では何も面白くは無い、又來るとして今日は廢めにせうと美尾がいふまゝ、優しう同意して呉れる嬉しさも、此折何とも思はれず、せめて歸りは鳥でも喰べてと機嫌を取られるほど物かなしく、逃げ出すやうにして一散に家路を急げば、與ことく盛きて與四郎は唯お美尾が身の病氣に胸をいたためぬ。
はかなき夢にの狂ひてより、お美尾は有りし我れにもあらず、人目無ければ涙に袖をおし浸し、離れを戀ふると無けれども大空に物の思はれて、勿躰なき事とは知りながら與四郎への待遇きのふには似ず、うるさき時は生返事して、男の怒れば我れも腹だしく、お氣に入らぬものなら離縁して下され、無理にも置いてとは願ひませぬ、私にも生れた家が御座んするどて威丈高になるに男もこらへず籍を振廻して、さあ出て行けと時の拍子危くなれば、流石に女氣の悲しき事胸に迫りて、貴郎は私をいぢめ出さうとなさるので御座んすか、私が身はそもくから貴郎に上げたものなれば、憎くば打つて下され、殺して下され、此處を死に場に來た私なれば、殺されても此處は退きませぬ、さあ何となりして下されと泣いて、袖に取すがりて身を悶ゆるに、もとより憎くはあらぬ妻の事、離別などは時の威嚇のみなれば、逆りて泣くを好

い時機に、我儘者の言ひじらけ、心安きまゝに駄々と免して可愛さは猶日頃に倍るべし。

(五)

與四郎が方に變る心なければ、一日も百年も同じ口を送れども其頃より美尾の様子に角に怪しく、ぼんやりと空を眺めて物の手につかぬ不審しさ、與四郎心をつけて物事を見るに、まながら戀に心をうばはれて空虚に成し人の如く、お美尾お美尾と呼べは何えと答ふる詞の力なさ、何うでも日々を務めばかりに送られて身は此處に心は何處の空を彷徨ふらん、一々氣にかゝる事ども、我が女房を人に取られて知らぬは良人の鼻の下と指さ、れんも口惜しく、いよく眞に其事あらばと怒ろしき思案をさへ定めて美尾が影身とつき添ふ如く護りぬ、されども是れぞの痕もなく、唯うか／＼と物おもふらしく或時はまみ／＼と泣いて、お前様いつまでこれだけの月給取つてお出遊ばすお心ぞ、お向ふ邸の旦那さまは、其昔大部屋あるきのお人なりしを一念ばかりにてあの御出世、馬車に乗つてのお姿は何のやうの髭武者だとして立派らしう見えるでは御座んせぬか、お前様も男なりや、少しも早く此様な古洋服にお辨當さげる事をやめて、道を行くに人の振かへるほど立派のお人になつて下され、私に竹の皮づゝみ持つて来て下さる

眞實が有らば、お役所がへりに夜學なり何なりして、何うぞ世間の人に負けぬやうに、一ッばしの煮い方に成つて下され、後生で御座んす、私は其爲になら内職なりともして御菜の物のお手傳ひはしましよ、何うぞ勉強して下され、拜みますと心から泣いて、此ある甲斐なき活計を數へれば、與四郎は我が身を罵られし事と腹だ／＼しく、お爲ごかしの夜學沙汰は、我れを留守にして身の樂みを思ふ故ぞと一圖にくやくしく、何うぞ己は此様な意氣地なし、馬車は思ひも寄らぬ事、此後辻車ひくやら知れたもので無ければ、今のうち身の納りを考へて、利口で物の出来、學者で好男子で、年の若いに乗かへるが随一であらう、向ふの主人もお前の姿を褒めて居るさうに聞いたぞと、碌でもなき根すり言、懶惰者だ懶惰者だ、おれは懶惰者の意氣地なしだと大の字に寐そべつて、夜學はもとよりの事、明日は勤めに出来るさへ憂がりて、一寸もお美尾の傍を離れじとするに、あゝお前様は何故其様に聞分けて下さらぬぞと淺ましく、互ひの思ひそはそはに成りて、物言へば咽て争ひの糸口を引出し、泣いて恨んで摺れ／＼の中に、さりとも憎からぬ夫婦は折節の仕こなし忘れ難く、貴郎斯うなされ、あゝなされと言へば、お美尾お美尾と目の中へも入れたき思ひ、近處合壁つき合ひて物争ひに口を利く者は無かりし。ありし梅見の留守のほど、實家の迎ひとて金紋の車の來し頃よりの事、お美尾は兎角に物おも

ひ静まりて、深くは良人を諫めもせず、うつ／＼と日を送つて實家への足いとゞしう近く、歸れば襟に腮を埋めて去のびやかに吐息をつく、良人の不審を立つれば、何うも心悪う御座んすからとて食も能うは喰べられず、晝寝がちに氣無精に成りて、次第に顔の色の蒼きを、一向きに病氣とばかり思ひぬれば、與四郎限りもなく痛ましくて、醫者にかゝれの、藥を呑めのと格氣は忘れて此事に心を盡しぬ。

されどもお美尾が病氣はおめでたき方なりき、三四月の頃よりそれとは定かになりて、いつしか梅の實落る五月雨の頃にもなれば、隣近所の人々よりおめでたう御座りますと明らかに言はれて、折から少し暑くるしくとも半天のぬがれぬ恥かしさ、與四郎は珍らしく嬉しきを、夢かとはかり辿られて、此十月が當る月とあるを、人には言はれねども指をる思ひ、男にてもあれかしと果敢なき事を占ひて、表面はつれなく粧れども、子安のお守り何くれと、人より聞きて來た事を其まゝ、不案内の男の身なれば間違ひだらけ取添へて、美尾が母に萬端を頼めば、お前さんより私の方が少し功者さ、と參られて、成るほど成るほどと口を喋みぬ。

(六)

月給の八圓はまだ昇給の沙汰も無し、此上小兒が生れて物入りが嵩んで、人手が入るやうになつたら、お前がたは何とする、美尾は虚弱の身軀なり、良人を助けて手内職といふもむつかしかるべく、三人居縮んで乞食のやうな活計をするも、餘り褒めた事では無し、何なりと口を見つけて、今の内から心がけ最う少しお金になる職業に取かへずば、行々お前がたの身の振かたは無く、第一子を育つる事もなるまじ、美尾は私が一人娘、やるからには私が終りも見て貰ひたく、贅澤を言ふのでは無けれど、お寺参りの小遣ひ位出しても貰はう、上げましやうの約束でよこしたのなれども、もとより呉れられぬは横着ならで、何うでもする事のならぬ意氣地の無さゆるゑ、それは思ひ絶つて私は私の口を濡らすだけに、此年をして人様の口人れやら手傳ひやら、老恥ながらも詮の無き世を経まする、されども當て無しに苦勞は出来ぬもの、つく／＼お前夫婦の働きを見るに、私の手足が働かぬ時になりて何分のお世話をお頼み申さねばならぬ曉、月給八圓で何う成らう、それを思ふと今のうち覺悟を極めて、少しは互ひにつらき事なりとも當分夫婦別れして、美尾は子ぐるみ私の手に預かり、お前さんは獨身になりて、官員さまのみには限らず、草鞋を穿いてなりとも一廉の働きをして、人並の世の過ごされるやうに心がけたが宜からうでは無いか、美尾は私の娘なれば私の思ふやうに成らぬ事は有るまじ、何もお

前さんの思案一つと母親お美尾の産前よりかけて、萬づの世話にと此家へ入り込みつゝ、兎もすれば與四郎を責めるに、齒ざしりするほど腹立しく、此老婆はり作すに事は無けれど、唯ならぬ身の美尾が心痛、延いては子にまで及ばすべき大事と胸をさすりて、私とても男子の端で御座りますれば、女房子位過ぐされぬ事も御座りますまいし、一生は長う御座ります、墓へ這入るまで八圓の月給ではあるまいと思ひますに、其邊格別の御心配なくと見事に言へば、母親はまだらに残る黒き齒を出して、成るほど宜く立派に聞えました、左様いふて呉れねば嬉しうない、流石は男一疋、その位の考は持つて居て呉れるであらう、成るほど成るほど面白くもない點頭やうをする憎さ、美尾は母さん其やうな事は言ふて下さりますな、家の人の機嫌損ふても困りますととうろくするに、與四郎は心おこりて、馬鹿婆めが、どのやうに引割かうとすればとて、美尾は我が物、親の指圖なればとて別れるやうな薄情にてあるべきや、殊更今より可愛き物さへ出来んに二人が中は萬々歳、天の原ふみとやろかし鳴神かと高々と止まれば、母を眼下に視おろして、離れぬものに我れ一人さだめぬ。

十月中の五日、與四郎が退出間近に安らかに女の子生れぬ、男と願ひしそれには違へども、可愛さは何處に變りのあるべき、やれお歸りかと母親出むかふて、流石に初孫の嬉しきは、頬の

あたりの皺にもゑるく、これ見て下され、何と好い兒ではないか、此まあ赤い事と差つけられて、今更ながらまごくと嬉しく、手をさし出すもいさゝか恥かしければ、母親に抱かせたるまゝさし覗いて見るに、誰れに似たるか彼れに似しか、其差別も思ひ分ねども、何とは知らず怪しう可愛くて、其啼く聲は昨日まで隣の家に聞きたるのと同じ物には思はれず、さしも危く思ひし事のさりと事なしに了りしかと重荷の下りたるやうにも覺ゆれば、産婦の様子いかにやと覗いて見るに、高枕にかゝりて鉢巻にみだれ髪の姿、痛ましきまで寝たれど其美しくさは神々しきやうに成りぬ。

七夜の、枕直しの、宮参りの、唯あわたしうて過ぎぬ、子の名は紙へ書きつけて産十神の前に御圍のやうにして引けば、常盤のまつ、たけ、蓬萊の、つる、かめ、それらは探りも當てずして、與四郎が假の筆すさびに、此様な名も呼よいものと書いて入れたる町といふをば引出しぬ、女は容貌の好きにこそ諸人の愛を受けて果報この上も無きものなれ、小野のそれならねどお町は美しい名と家内いさみて、町や、町や、と手から手へ渡りぬ。

お町は高笑ひするやうになりて、時は新玉の春になりぬ、お美尾は日々安からぬ面色、折には涙にくるゝ事もあるを、血の道の故と自らいへば、奥四郎は左のみに物も疑はず、只この子の大うならんことをのみ聞りて、例の洋服すがた美事ならぬ勤めに、手辨當さげて昨日も今日も出でぬ。

お美尾の母は東京の住居も物うく、はしたなき朝夕を送るに飽きたれば、一つはお前様がたの世話をも省くべきため、つねに御懇命うけましたる従三位の軍人様の、西の京に御榮轉の事ありて、お邸彼方へ建歸られしを幸ひ、其處の女中頭として勤めは生涯のつもり、老らくも養ふて給はるべき約束だまりたれば、もう此地には居ませぬ、又來る事があらば一泊はさせて下され、その外の御厄介には成りませぬと言ふに、奥四郎は左りとも一人の母親なれば、美尾が心細さも思ひやりて、お前も御老年のこと、いかに勤めよきとて、他人場の奉公といふ事させましては、子たる我々が申譯の言葉なし、是非に止まり給へと言へども、いや／＼其様のはお前様出世の曉にいふて下され、今は聞ませぬとて單身の風呂敷づゝみ、谷中の家は貸家の札はられて、舟路ゆたかに彼の地へと向ひぬ。

越えて一十月、雲黒く月くらき夕、奥四郎は居残りの調べ物ありて、家に歸りしは日くれの八

時、例は薄くらしき洋燈のもとに風車大張子取ちらして、まだ母親の名も似合ぬ美尾が懐かしくつろげ、稚兒に添乳の美くしきさま見るべきを、格子の外より窺ふに燈火ぼんやりとして障子に映るかげも無し、お美尾お美尾と呼ながら入るに、答へは隣の方に聞えて、今参りますと言ふ句は似たれど言葉はあらぬ人なりき。

隣の妻の入來るを見るに、懐には町を抱きたり、奥四郎胸さわぎのして、美尾は何處へ参りました、此日暮に燈火をつけ放して、買物にでも行きましたかと問へば、隣の妻は眉を寄せて、さあ其事で御座んすとして、睡り覺めたる懐の町がくすりくすりどむづかるを、お、好い子好い子と、ゆすぶつて言葉絶えぬ。

燈火は私が唯今點けたので御座んす、誠は今までお留守居をして居ましたのなれど、家のやんちやがむづかしやを言ふに小言いふとて明けました、御新造は今日の晝前、通りまで買物に行つて來ます、歸りまで此子の世話をお頼みと仰しやつて、唯まばらくの事と思ひしに、二時になれども三時はうてども、音も無くて今まで影の見えられぬは、何處まで物買ひにお出なされしやら、留守たのまれました日暮れし程心づかひなもの無し、まあ何うなされたので御座んしよな、と問ひかけられて、それは我れより尋ねたき思ひ、平常着のまゝで御座りました

かと問へば、はあ羽織だけ着て行かれたやうで御座んす、何か持つて行きましたか、いえ其やうには覚えませぬとあるに、はてなと腕の組まれて、此運くまで何處にと覺束なし。無器用なお前様が此子いぢくる際にも、まじ、お歸りになるまで私が乳を上げましやうと、有さまを見かねて、隣の妻の子を抱いて行くと、何分お頼み申しますと言ひながら、美尾の行方へ心を取られてお町が事はうはの空になりぬ。

よもや、よもや、と思へども、晴れぬ不審は疑ひの雲になりて、唯一棹の節笥の抽斗より、紙行李の底はかどなく調べて、もし其跡の見ゆるかと捜るに、座一はしの置場も變らず、つねづね寶のやうに大事がりて、身につく物の随一好なりし手綱染の帯わけも其まゝにありけり、いづも小遣ひの入れ場處なる鏡臺の抽斗を明けて見るに、これは何とせし事ぞ手の切れるやうな新和幣をばかり、其數よそ二十も重ねて上に一通、與四郎は見るより仰天の思ひになりて、胸は大波の立つ如く、切こそ理由はありけれど狂ふて、其文披けば唯一言、美尾は死にたるものに御座候、行方をお求め下さるまじく、此金は町に乳の粉をどの願ひに御座候。

與四郎は愈も顔の色青く赤く、唇を震はせて邪笑、と叫びしが、怒氣心頭に起つて、身よりは黒煙りの立つ如く、紙幣も文も寸断々々に裂いて捨て、すつくと立ちしさま人見なば如何なりけん。

(八)

浮世の慾を金に集めて、十五年がほどの足掻きかたどては、人には赤鬼と仇名を負せられて、五十に足らぬ生涯のほどを死灰のやうに終りたる、それが名残の幾萬金、今の金村恭助は、其與四郎が聲なりけり、彼の人あれ程の身にて人の姓をば名告らずともと誹りしも有けれど、心安う志す道に走つて、内を顧みる疚しさの無きは、これ皆養父が賜物ぞかし、されば奥様の町子あつから寵愛の掌に乗つて、強ち真人を侮るとなけれども、舅姑おはしまして高づ窮屈に堅くるしき嫁御察の身と異り、見たしと思はし替り目毎の芝居行きも誰れかは苦情を申すべき、花見、月見に旦那さま催し立て、俱につらぬる袖を樂しみ、お歸りの遅き時は何處までも電話をかけて、夜は更くるとも寐給はず、餘りに戀しう懐かしき折は自ら少しは恥かしき思ひ、如何なる故とも知るに難けれど、旦那さま在しませぬ時は心細さ堪へがたう、兄とも親とも頼もしき方に思はれぬ。

さりながら折節地方遊説などして三月半年のお留守もあり、湯治場歩きのそれと異れば、此時

には甘ゆる事もならず、唯徒らの御文通、互ひの封の中人には見せられぬ事多かるべし。
此御中に何とお子の無き、相添ひて十年餘り、夢にも左様の氣色はなくて、清水堂のお木偶
さま幾度空しき願ひになりけん、旦那さま淋しき餘りに貰ひ子せばやと仰しやるなれども、奥
さまの好みむづかしければ、是れも御縁は無くて過ぎゆく、落葉の霜の朝な／＼深く、吹く
風いと身に寒く、時雨の宵は女子ども炬燵の間に集めて、浮世物がたりに小説の噂、ざれた
る婢女は輕口の落しはなしして、お氣に入る時は御褒美の何や彼や、人に物を遣りたまふ事は
幼少よりの道樂にて、これを父親二もなく愛がりし、一口に言はれ機嫌かひの質なりや、一言
心に染まる事のあれば跡先も無く其者可愛う、車夫の茂助が一人子の與太郎に、此新年旦那
さま召あろしの斜子の羽織を遣はされしも深くの理由は無き事なり、假初の愚痴に新年者の御座
りませぬよし大方に申ししを、頓てあはれみでの賜り物、茂助は天地に拜して、人は鷹の羽の
定紋いたづらに目をつけぬ、何事も無くて奥様、書生の千葉が寒がるべきを思しやり、物纏ひ
の仲といふに命令て、仰せなれば背くによし無く、少しは投やりの氣味にてありし、飛白の綿
入れ羽織どきの間に仕立させ、彼の明る夜は着せ給ふに、千葉は御恩のあたゝかく、口に數々
のお禮は言はねども、氣の弱き男なれば涙さへさしぐまれて、仲働きの福に願ひてお禮まかる

べくと言ひたるに、渡り者の口車よく廻りて、斯様々々しかぐで、千葉は貴女泣いて居りま
すと言上すれば、お、可愛い男と奥様御最負のまさりて、お心づけのほど今までよりはいと
しう成りぬ。
十一月の二十八日は旦那さまお誕生日なりければ、年毎お友達の方々招き参らせて、座の周旋
はそんなじよ夫れ者の美しきを選りぬき、珍味佳肴に打とけの大愉快を盡させ給へば、罷むしや
の鳥居さまが口から、逢ふた初手から可愛さがと恐れ入るやうな御詞をうかふのも、例の澤
木さまが落人の梅川を遣はして、お前の父さん孫いもんさんとお國元をあらはし給ふも皆この
折の隠し藝なり、されば派手者の奥さま此日を曠れにして、新調の三枚着に今歳の流行を知ら
しめ給ふ、世は冬なれど陽春三月のおもかげ、散り過ぎたる紅葉は庭に淋しけれど、垣の山茶
花折しり顔に匂ひて、松の緑のこまやかに、酔ひすまぬ人なき日なりける。
今歳は別きとお客様の數多く、午後三時よりの招待状一つも空しう成りしは無く、暮れ過
ぐるほどの賑ひは座敷に溢れて茶室の隅へ逃るゝもあり、二階の手摺りに洋服のお輕女郎、眼
鏡が中だと笑はるゝもありき、町子はいと方々の持はやし五月蠅く、奥さん奥さんと御盃の
雨の降るに、御免遊はせ、私は能う頂きませぬほどに盃洗の水に流して、さりとて一盃二盃

76

け逃れがたければ、いつしか耳の根あつち成りて、胸の動悸のくるしう成るに、外しては濟まねども人まらぬうちにと庭へ出で、池の石橋を渡つて築山の背後の、お稻荷さまが社前なるも賽銭箱へ假初に腰をかけぬ。

(九)

此家は町子が十二の歳、父の與四郎抵當なぐれに取りて、それより修繕は加へたれども、水の流れ、山のたしずまひ、松の木がらし小高き聲も唯その昔のまゝなりけり、町子は酔ごち夢のごとく頭をかへして背後を見るに、雲間の月のほの明るく、社前の鈴のふりたるさま、紅白の綱ながく垂れて古鏡の光り神さびたるもみゆ、夜あらしさつと喜連格子に音づるれば、人なきに鈴の音からんとして、幣束の紙ゆらぐも淋し。
町子は俄かに物のおそろしく、立あがつて二足三足、母屋の方へ歸らんとしたりしが、引止められるやうに立止まつて、此度は狛犬の臺石に寄り寄り、木の間もれ来る鹿敷の騒ぎを遙かに聞いて、あゝあの聲は旦那様、三味線は小梅さうな、いつの間に彼のやうな意氣な洒落ものに成り給ひし、油断のならぬと思ふと共に、心細き事堪へがたう成りて、締つけられるやうな苦

しきは、胸の中の何處とも無く湧き出でぬ。

良久しうありて奥さま大方酔も醒めぬれば、萬におのが亂るゝ怪しき心を我れと叱りて、歸れば盃盤狼籍の有さま、人々が迎ひの車門前に綺羅星とならびて、誰様お立ちの聲にぎはしく、散會の後は時雨になりぬ。

恭助は太く疲れて禮服ぬぎも敢へず横になるを、あれ貴郎お召物だけはお替へ遊ばせ、それではいけませぬと羽織をぬがせて、帯をも奥さま手づから解きて、糸織のなへたるにふらんねるを重ぬし寝間着の小袖めさせかへ、いざ御就席と手とりて扶ければ、何其様に酔ふては居ないと仰しやつて、踰躑ながら寝間へと入給ふ。奥さま火のものと用心をと言ひ渡し、誰れも彼れも寝よと仰しやつて、同じう寝間へは入給へと、何故となう安からぬ思ひのありて、言はねども面色のたいならぬを、旦那さま半睡の目に御覧じて、何故寝ぬか、何を考へて居るぞと尋ね給ふに、奥さま何とお返事の聞かせ参らする事もあらねど、唯々不思議の心地が致しまする、何う致したので御座りませう、私にも分りませぬと言へば、旦那さま笑つて、餘り心を遣ひ過ぎた結果であらう、氣さへ落つければ直ぐ癒る筈と仰しやるに、否それでも私は言ふに言はれぬ淋しい心地がするので御座ります、餘り先刻みな様のお強ひ遊ばすが五月蠅さに、一人庭

へと逃げまして、お稻荷さまのお社の處で酔ひを醒まして居りましたに、私は變な變な、をか
しい事を思ひよりまして、笑つて下さりますな、何うも何とも言はれぬ氣持に成りました、貴
郎には笑はれて、叱られるやうな事で御座りましよと下を向いて在するに、見れば涙の露の玉、
膝にこぼれて怪しう思はれぬ。

奥さまは例に似合す沈みに沈んで、私は貴郎に捨てられは爲ぬかと存じまして、それで此様に
淋しう思ひますると言ひ出れば、又かと旦那さま無造作に笑つて、誰れが何を言ふたか、一人
で考へたか、其様なつまらぬ事のある筈はない、お前のおもふて呉れるはと世間はわしを思ふ
て呉れぬから、まあ安心して居るが宜いと譯も無い事に言ひ捨つれば、それでも私は其やうな
格氣沙汰で申すのでは御座りませぬ、今日の會席の賑かに、種々の方々御出の中に誰れとて世
間に名の聞えぬも無く、此やうのお人達みな貴郎さまの御友達かと思ひますれば、嬉しさ胸の
中におさへがたく、蔭ながら拜んで居ても宜いほどの辱さなれど、つくづく我が身の上を思
ひまするに、貴郎はこれより彌ますくの御出世を遊ばして、世の中廣うなれば次第に御器量
よし給ふ、今宵小梅が三味に合せて勸進帳の一曲さうり、格氣ではなけれどあれほどの御修業
つみしも知らで、何時も昔の貴郎とおもひ、淺き心のそこはかとなく知られまする内、御厭は

しさの種も交るべし、限りも知れず廣き世に立ちては耳さへ目さへ肥え給ふ道理、有限りだけの
家の内に朝夕物おもひの苦も知らで、唯ばんやりと過しまする身の、遂には厭かれまするやう
になりて、悲しかるべき事今おもふてもつらし、私は貴郎のほかに頼母しき親兄弟も無し、有
りてから父の與四郎在世のさまは知り給ふ如く私をば母親似の面ざし見るに肝の種とて寄せ
つけも致されず、期夕さびしうて暮らしましたるを、嬉しき縁にて今斯く私が我まゝをも免
し給ひ、思ふ事なき今日此頃、それは勿體ないほどの有難さも、若し身にそぐなはぬ事ならば
と案じられまして、此事をおもふに今宵の淋しき事、居ても起ちてもあらぬほどの情なさよ
り、言ふてはならぬと存じましたれど、つひ此様に申上げて仕舞ました、それは何れも取止め
の無き取こし苦勞で御座りましやうけれど、何うでも此様な氣のするを何としたら宜う御座り
ますか、唯々心ほそ御座りますとて打泣くに、旦那さま愚痴の僻見の跡先なき事なると思召
し、格氣よりぞと可笑しくもありける。

(十)

我れと我が身に持て惱みて奥さま不覺に打まごひぬ、此明くれの空の色は、晴れたる時も曇れ

る如く、日の色身にしみて怪しき思ひあり、時雨ふる夜の風の音は人來て扉をたたくに似て、淋しきまゝに琴取出し獨り好みの曲を奏でるに、我れと我が調哀れになりて、いかにするとも弾くに得堪へず、涙ふりこぼして押やりぬ。ある時は婦女どもに凝る肩をたかかせて、心うかれるやうな戀のはなしなごさせて聞くに、人の願のはづるゝ可笑しさとて笑ひ轉けるやうな埒のなきさへ、身には一々憐れにて、我れも思ひの燃ゆるに似たり、一夜仲働きの福こゑを改めて、言はねば人の知らぬ事、いふて私の徳にもならぬを、無言にゐられませぬはお饒舌の癖、お聞になつても知らぬ顔に居て下さりませ、此處にをかき一條の物がたりと少し乗地に聲をはずますれば、それは何ぞや、お聞なされませ書生の千葉が初戀のあはれ、國もとに居りました時と見初めたが御座りましたさうな、田舎者のことなれば鎌を腰へさして藁草履で、手拭に草束ねを包んでと思召しましたやうが、中々左様では御座りませぬ美しくいにて、村長の妹といふやうな人ださうで御座ります、小學校へ通ふうちに淺からず思ひましてと言へば、それは何方からと小間使ひの米口を出すに、黙つてお聞、無論千葉さんの方からさであるに、おやあの無骨さんがとて笑ひ出すに、奥様苦笑ひして可哀さうに失敗の昔話しを探り出したのかと仰しやれば、いえ中々其やうに遠方の事ばかりでは御座りませぬ未だ追々にと衣紋を突いて咳拂

ひすれば、小間使ひ少し顔を赤くして似合頃の身の上、悪口の福が何を言ひ出すやらと尻目に睨めば、それにかまはず唇を嘗めて、まあお聞遊ばせ、千葉が其子を見初ましてからの事、朝學校に行ます時は必ず其家の窓下を過ぎて、聲がするか、もう行つたか、見たい、聞きたい、話したい、種々の事を思ふたと思召せ、學校にては物も言ひましたる、顔も見ましたる、それだけでは面白う無うて心いられのするに、日曜の時は其家の前の川へ必らず釣をしに行きましたさうな、鮒やたなごは宜い迷惑な、釣るほどに釣るほどに、夕日が西へ落ちても歸るが惜しく、其子出て來よ残り無くお魚を遣つて、喜ぶ顔を見たいとでも思ふたので御座りませぬ、あは見えますと彼れで中々の苦勞人といふに、それはまあ幾つの年其戀出來てかと奥にしゃれば、當て、御覽あそばせ先方は村長の妹、此方は水許めし上るお百姓、雲にかけ埒に千鳥など、奇麗事では間に合ひませぬほどに、手短かに申さうなら提燈に釣鐘、大分其處に隔てが御座りまするけれど、戀に上下の無いものなれば、まあ出來たと思召しますか、お米とん何と、題を出されて、何か言はせて笑ふつもりと悪推をすれば、私は知らぬと横を向く、奥様少し打笑ひ、成立たねばこそ今日の身であら、其様なが萬一あるなら、あの打かぶりの亂れ髪、洒落氣なしでは居られぬ筈、勉強家にしたは其自狂からかと仰しやるに、中々もちまして彼男

が貴女自狂など起すやうな男で御座りましよか、無常を悟つたので御座りますと言ふに、そんなら其子は亡くなつてか、可哀さうなと奥様あはれがり給ふ、福は得意に、此戀いふも言はぬも御座りませぬ、子供の事なれば心にはかり思ふて、表向きには何ともない月日を大凡どの位送つたもので御座んすか、今の千葉が様子を御覧しても、彼れの子供の時ならばと大抵にお合點が行ましよ、病氣して煩つて、お寺の物になりましたを、其後何と思へばとて答へるものは松の風で、何うも仕方がなからうでは御座んせぬか、さてそれからが本文で御座んすとして、に、福が能い加減なこしらへ言、似つこらしい嘘を言ふと奥さま爪はじき遊ばせば、あつたに嘘を申しませう、さりながらこれをお耳に入れたといふと少し私が困りの筋、これは當人の口から聞いたので御座りますと言へば、嘘をお言ひ、彼男が何うして其様な事を言はう、よし有つてからが、苦い顔でおし黙つて居るべき筈、いよゝゝの嘘と仰しやれば、さても情ない事其様に私の事を信仰して下さりませぬは、昨日の朝千葉が私を呼びまして、奥様が此四五日御すぐれ無いやうに見上げられる、何うぞ遊ばしてかど如何にも心配らしく申しますので、奥様はお血の故で折節鬱ぎ症にもおなり遊ばすし眞實の悪い時は暗い處で泣いて居らつしやるがおくすると取かへしの附かぬ事になると申しまして、それで其時申しました、私が郷里の幼友達

持前と言ふたらば、何んなにか貴女喫驚致しまして飛んでもない事、それは大層な神經質で、惡に是れゝ斯う言ふ娘があつて、肝もちの、はつきりとして、此邸の奥様に何うも能く似て居た人であつた、繼母であつたので平常の我慢が大抵ではなく、積つて病死した可愛さうな子と何れ彼の男の事で御座りますから、眞面目な顔でありゝを言ひましたを、私にはぎ合せて考へると今申したやうな事になるので御座ります、其子に奥様が似ていらつしやると申したのはそれは嘘では御座りませぬけれど、露顯しますと彼男に私が叱られます、御存じないおつもりでと舌を廻して、たゞき立る太鼓の音さりとはい賑しう聞え渡りぬ、

(十一)

今歳も今日十二月の十五日、世間おしつまりて人の往來大路いそがはしく、お出入の町人お歳暮持参するものお勝手に賑々しく、急ぎたる家には餅つきの音さへ聞ゆるに、此邸にては煤取の笹の葉座敷にこぼれて、冷めし草履こゝかしこの廊下に散みだれ、お雑巾かけます者、お疊たゞく者、家内の調度荷ひ廻るもあれば、お振舞の酒に酔ふて、これが荷物になるもあり、御懇命うけまするお出入の人々お手傳お手傳ひとて五月蠅きを半は断りて築まりし人だけに瓶

のぞきの手拭、それ、と切つて分け給へば、一同手に手に打冠り、姉さま唐茄子、頬かぶり、吉原かぶりをするもあり、旦那さま朝よりお留守にて、お指圖し給ふ奥さまの風を見れば、小襦かた手に友仙の長襦袢下に長く、赤き鼻緒の麻裏を召して、あれよ、これよと仰せらるし、しきり終りての午後、お茶菓子山と擔ぎ込めば大皿の鍼砲まき分捕次第と沙汰ありて、奥様は暫時のほど二階の小間に氣づかれを休め給ふ、血の道の強き人なれば胸ぐるしさ堪へがたうて、枕に小搔巻假初にふし給ひしを、小間使ひの米よりほか、絶へて知る者あらざりき。奥様とろくとしてお目覺むれば、枕もとの椽がはに男女の話し聲さのみ憚かる景色も無く、此宿の旦那の、奥州のと、車宿の二階で言ふやうなるは、奥さま此處にと夢にも人は思はぬなるべし。

一方は仲働の福のこゑ、噂町に噂町にと仰しやるけれど、一日業に何うして左様は行渡らりやう、隅々隈々やつて居ておたまりがあらうかえ、目に立つ處をざつと働いて、あとは何れも野となれさ、それで丁度能い加減に疲れて仕舞う、そんなにお前正直で勤まるものかと嘲笑ふやうに言へば、大きにさといふ、相手は茂助がもとの安五郎が聲なり、正直といへば此處の旦那的が一件物、飯田町のお波が事を知つてかと問ひかけるに、お福は百年も前から言はぬばか

りにして、それを御存じの無いは此處の奥様お一方、知らぬは亭主の反對だね、まだ私は見たり事は無いが、色の淺黒い面長で、品が好いといふではないか、お前は親方の代りにお供を申すこともある、拜んだ事があるかと問へば、見た段か格子戸に鈴の音がすると坊ちやんが先立ちで駆け出して来る、續いて現はれるが例物さ、髪は毛自慢の櫛巻で、薄化粧のあつさり物、半襟つきの前だれ掛とくだけて、おや貴郎と言ふだらうではないか、すると此處のがでれりど御座つて、久しう無沙汰をした、免せ、かなんかで、入口の敷居に腰をかける、例のが駆け下りて靴をぬがせる、見ともないほど睡ましいと言ふは彼れの事、旦那が奥へ通ると小戻りして、お供さん御苦勞、これで烟草でも買つてと言つて、それ鼻薬の出る次第さ、あれがお前素人だから感心だと賞めるに、素人も素人、生無垢の娘あがりだと言ふではないか、旦那とは十何年の中で、坊ちやんが歳もことは十か十一には成らう、都合の悪いは此處の家には一人も子寶が無うて、彼方に立派な男の子といふものだから、行々を考へるとお氣の毒なは此處の奥さま、何うも是れも授かり物だからと一人が言ふに、仕方が無い、十分先の大旦那がしほり取つた身上だから、人の物に成ると言つても理窟は有るまい、だけれどお前、不正直は此處の旦那であらうと言ふに、男は皆あんなもの、氣が多いからお福の笑ひ出すに、悪く當つ擦りなさる、

耳が痛いではないか、己れは斯う見えても不義理と土用干は仕た事の無い人間だ、女房をだま
 くらかして妾の處へ注ぎ込ひやうな不人情は仕たくても出来ない、あれだけ腹の太い豪いので
 はあろうが、考へると此處の旦那も鬼の性さ、二代つゞきて彌々根が張らうと、岡人なげに遠
 慮なき高聲、福も相模例の調子に、もう一働さやつてのけやう、安さんは下廻りを頼みます、
 私ほも一度此處を拭いて、今度はお藏だとして、雑巾がけしつゝと始めれば、奥さまは唯この
 隔てを命にして、明けずに去ねかし、顔みらるゝ事辛やと思しぬ。

(十二)

十六日の朝ばらけ昨日の掃除のあと清き、納戸めきたる六疊の間に、置炬燵して旦那さま奥さ
 ま差向ひ、今朝の新聞おし披きつゝ、政界の事、文界の事、語るに答へもつきなからず、他處
 目みらやましう見えて、面白げなりしが、旦那さま好き頃と見計らひの御つもりなるべく、年
 來足らぬ事なき家に子の無さをばかり口惜しく、其方にあらば重疊の喜びなれど若しいよ／＼
 出來ぬものならば、今より貰ふて心に任せし教育をしたらばと是れを明くれ心がくれども、未
 だに良さも見當らず、年たてば我れも初老の四十の坂、じみなる事を言ふやうなれども家の根

つぎの極まらざるは何かにつけて心細く、此ほど中の其方のやうに、淋しい淋しいの言ひづめ
 も爲ではあらぬやうな事あるべし、幸ひ海軍の鳥居が知人の子に素性も悪からで利發に生れ
 つきたる男の子あるよし、其方に異存なければ其れを貰ふて丹精したらばと思はるゝ、悉皆の
 引受けは鳥居がして、里かたにも彼の家にて成るよし、年は十一、容貌はよいさうなと言ふに、
 奥さま顔をあげて旦那の面影いかにと覗ひしが、成程それは宜い思召より、私にかれこれは御
 座りませぬ、宜いと思しめさばお取極め下さりませ、此家は貴郎のお家で御座りまするもの、
 何となり思召しのまゝにと安らかに言ひながら、萬一その子にて有りたらばとつれなき思ひ
 おのづから顔色に顯はるれば、何取いそぐ事でもない、よく思案して氣に叶ふたらば其時の事、
 あまり氣を鬱々として病氣でもしては成らんから、少しは慰めにもと思ふたのなれど、それも
 餘り輕卒の事、人形や雛では無し、人一人玩弄物にする譯には行くまじ、出來そこねたとて塵
 塚の隅へ捨てられぬ、家の礎に貰ふものなれば介一應聞定もめし、取調べても見た上の事、
 唯この頃のやうに鬱いで居たら身體の爲になるまいと思はれる、これは急がぬ事として、ちと
 寄席きゝにでも行つたら何うか、播摩が近い處へかゝつて居る、今夜は何うであらう行かんか
 なと機嫌を取り給ふに、貴郎は何故そんな優しらしい事を仰しやります、私は決して其やうな

事は伺ひたいと思ひませぬ、鬱ぐ時は鬱がせて置いて下され、笑ふ時は笑ひますから、心任せにして置いて下され、と言ひて流石打つけには恨みも言ひ敢へず、心に籠めて憂はしげの躰に
てあるを、良人は浅からず氣にかけて、何故そのやうな捨てばちは言ふぞ、此間から何かと奥
齒に物の挟まりて一々心にかゝる事多し、人には取違へもあるもの、何をか下心に含んで隠し
だてゝはないか、此間の小梅の事、あれでは無いか、それならば大間違ひの上なし、何の氣
も無い事だに心配は無用、小梅は八木田が年來の持物で、人には指をもさしはせぬ、ことは
は彼の瘦せがれ、花は疾くに散つて紫蘇葉につままれやうと言ふものだに、何れほどの物好き
なれば手出しを仕やうぞ、邪推も大抵にして置いて呉れ、あの事ならば清浄無垢、潔白なもの
だと微笑を含んで口髭を捻らせ給ふ。飯田町の格子戸は音にも知らじと思召し、これが備へは
立てもせず、防禦の策は執らざりぬ。

(十二)

さまざま物をおもひ給へば、奥様時々お癪の起る癖つきて、はげしき時は仰向に仆れて、今にも
も絶へ入るばかりの苦しみ、初めは皮下注射など醫者の手をも待ちけれど、日毎夜毎に度かさ

なれば、力ある手につよく押へて、一時を兎角まぎらはす事なり、男ならでは甲斐のなきに、
其事あれば夜といはず夜中と言はず、やがて千葉をば呼立て、反かへる背を押へさするに、
武骨一逼律義男の身を忘れての介抱人の目にあやしく、志のびやかの呷き頓て無沙汰になるぞ
かし、隠れの方の六疊をば人奥様の瘦部屋と名けて、亂行あさましきやうに取なせば、見る目
がらかや此間の事いぶかしう、更に霜夜の御憐れみ、羽織の事さへ取添へて、仰々しくもなり
ぬるかな、あどなき風も騒ぐ世に忍ぶが原の蟲の聲、露ほどの事あらはれて、奥様いとも憂き
身になりぬ。

中働きの福かねてあらしく心組みの、奥様お着下しの本結城、あれこそは我が物の頼み空しう、
いろ／＼千葉の厄介になりたればとて、これを新年着に仕立て、遣はされし、其恨み骨髄に徹
りてそれよりの見る目横にか逆にか、女髪結の留を捉へて珍事唯今出来の顔つきに、例の口車
くる／＼とやれば、此電信の何處までかゝりて、一町毎に風説は太りけん、いつしか恭助ぬし
が耳に入れば、安からぬ事に胸さわがれぬ、家つきならずは施すべき途もあれども、浮世の聞
え、これを別居と引放つこと、如何にも志のびぬ思ひあり、さりどて此まゝ措かんに、内政の
みだれ世の攻撃の種子になりて、漫からぬ難儀現在の身の上にかゝれば、いかさまに爲ばやと

持てなやみぬ、我ましも其まゝ、紅隨も其まゝ、何かはことごとくしく咎めだてなどなさんやは、金村が妻と立ちて、世に耻かしき事なからずはと思せども、さし置がたき沙汰どにかくに喧しく、親しき友など打つれての勸告に、今日は今日とは思ひ立ちながら、猶其事に及ばずして過行く、年立かへる朝より、松の内過ぎなばと思ひ、松どり捨つれば十五日ばかりの程にはともふ、二十日も過ぎて一月空しく、二月は梅にも心の急がれず、来る月は小學校の定期試験とて飯田町のかたに、笑みかたつけて急ぎ合へるを、身れども心は樂しからず、家のさま、町子の上、いかにまにせん、とばかりおもふ、谷中に知人の家を買ひて、調度高麗納めさせ、此處へと思ふに町子が生涯おはれる事いふばかりなく、暗涙にくれては我が身が不徳を思ししる筋なきにあらねど、今はと思ひ断ちて四月のはじめつ方、浮世は花に春の雨ふる夜、別居の旨をいひ渡しぬ。

かねてぞ千葉は放たれぬ。旧繼の屈原ならざれば、恨みは何ぞかこつべき、大川の水清からぬ名を負ひて、永代よりの汽船に乗込みの歸國姿、まさしう見たりと言ふ者ありし。

憂かりしはその夜のさまなり、車の用意何くれと調へさせて後、いふべき事あり此方へと良人のいふに、今さら恐ろしうて書齋の外にいたれば、今宵より其方は谷中へ移るべきぞ、此家をば家とよもふべからず、立歸らるゝものと思ふな、罪はあつから知りたるべし、はや立て、とあるに、それは餘りのお言葉、我に悪き事あらば何とて小言は言ひ給はぬ、出しぬけの仰せは聞きませぬとて泣くを、恭助振向いて見んどもせず、理由あればこそ、人並ならぬ事どもなせ、一々の罪状いひ立んは憂かるべし、車の用意もなしてあり、唯のり移るばかりと言ひて、つと立ちて部屋の外へ出給ふを、退ひすがりて袖をどれば、放さぬか不埒者と振切るを、お前様どうでも左様なさるので御座んするか、私を浮世の捨て物になさりまするお氣か、私はひとりもの、世には助くる人も無し、此小さき身すて給ふにわけはあるまじ、美事すて、此家を君の物にしたまふお氣か、取りて見給へ、我れをば捨て、御覽せよ、一念が御座りまするとて、はたと睨むを、突のけてあとも見ず、町、もう逢はぬぞ。

ゆ く 雲

(上)

酒折の宮、山梨の岡、鹽山、裂石、さし手の名も都人の耳に聞きなれぬは、小佛さゝ子の難處を越して猿橋のながれに眩めき、鶴瀬、駒飼見るほどの里もなきに、勝沼の町とても東京にての塙末ぞかし、甲府は流石に大層高樓、瀧岡が崎の城趾など見る處のありと言へど、汽車の便りよき頃にならば知らず、こと更の馬車腕車に一晝夜をゆられて、いと惠林寺の櫻見にといふ人は、いふまじ、故郷なればこそ年々の夏休みにも、人は箱根伊香保と催し立つる中を、我れのみ一人あし曳の山の甲斐に峯のまら雲あどを消すことさりとて是非もなければ、今歳この度みやこを離れて八王子に足をむける事これまで覺えなき辛さなり。

養父清左衛門、去歳より何處其處からだに申分ありて寐つ起きつどの由は聞きしが、常日頃すこやかの人なれば、さしての事はあるまじと醫者の指圖などを申し遣りて、此身は雲井の鳥の羽がひ自由なる書生の境界に今まばしは遊ばるゝ心なりしを、先の日故郷よりの便りに曰く、

大旦那さまこと其後の容体さしたる事は御座なく候へ共、次第に短氣のまさりて我意つよく、これ一つは年の故にも御座候はんけれど、随分あたりの者御機げんの取りにくく、大心配を致すよし、私など古理の身なれば兎角つくろひて一日二日と過し候へ共、筋のなきわからずやを仰せいだされ、足もとから鳥の立つやうにお急きたてなさるには大閉口に候、此中より頼に貴君様を御手もとへ呼び寄せなさり度、一日も早く家督相續あそばさせ、樂隠居なされ度おのぞみのよし、これ然るべき事と御親類一同の御決議、私に初手から貴君様を東京へお出し申すは氣に喰はぬほどにて、申しては失禮なれどいさゝかの學問など何うでも宜い事、赤尾の彦が息子のやうに氣ちがひに成つて歸つたも見て居り候へば、もどく利發の貴君様に其氣づかひはあるまじきなれど、放蕩ものにも成りなされては取返しがつき申さず、今の分にて嬢さまと御祝言、御家督引つぎ最はや早きお歳にはあるまじくと大賛成に候、さだめしきだめし其地には遊ばしかけの御用事も御座候はん夫れ等を然るべく御取まどめ、飛鳥もあどを濁すな候へば、大藤の大盡が息子と聞きしに野澤の桂次は料簡の清くない奴、何處やらの割前を人に背負せて逃げをつたなど、斯ういふ噂があどくに残らぬやう、郵便爲替にて證書面のとほりお送り申候へども、足りずは上杉さまにて御立かへを願ひ、諸事奇麗にして御歸りなさる

べく、金故に恥をおぼせなされては金庫の番をいたす我等が申わけなく候、前申せし通り短氣の大旦那さま頼に待ちこがれて大ぢれに御座候へば、其地の御片づけすみ次第一日もはやくと申納候、六蔵といふ通ひ番頭の筆にて此様の迎ひ状いやとは言ひがたし。
家に生抜き我れ實子にてもあらば、かゝる迎ひのよしや十度十五たび來らんとも、おもひ立ちての修業なれば一ト廉の學問を研かぬほどは不孝の罪ゆるし給へどもいひやりて、其我まの通らぬ事もあるまじきなれど、つらきは養子の身分と桂次はつくづく他人の自由を羨みて、これからの行く末をも鎖りにつながられたるやうに考へぬ。
七つのだしより實家の貧を救はれて、生れしまゝなれば素既足の尻きり半纏に田圃へ辨當の持はこびなど、松のひでを燈火にかへて草鞋うちながら馬士歌でもうたふべかりし身を、目鼻だちの何處やらが水子にて亡せたる總領によく似たりとて、今はなき人なる地主の内儀に可愛がられ、はじめはお大盡の旦那と尊びし人を、父上と呼ぶやうに成りしは其身の幸福なれども、幸福ならぬ事おのづから其中にもあり、お作といふ娘の桂次よりは六つの年下にて十七ばかりになる無地の田舎娘をば、何うでも妻にもたねば納まらず、國を出るまでは左まで不運の縁とも思はざりしが、今日この頃は送りこしたる寫眞をさへ見るに物憂く、これを妻に持ちて山梨

の東郡に蟄伏する身かと思へば人のうらやむ造酒家の大身上は物の數ならず、よしや家督をうけつぎてからが親類縁者の干渉きびしければ、我が思ふ事に一錢の融通も叶ふまじく、いは寶の藏の番人にて終るべき身の、氣に入らぬ妻までとは彌々の重荷なり、うき世に義理といふ柵のなくば、藏を持ぬしに返し長途の重荷を人にゆづりて、我れは此東京を十年も二十年も今すこしも離れがたき思ひ、そは何故と問ふ人のあらば切りぬけ立派に言ひわけの口上もあらんなれど、つくろひなき正の處こゝもとに唯一人すてゝかへる事のをしくをしく、別れては顔も見がたき後を思へば、今より胸の中もやくやとして自から氣もふさぐべき種なり。
桂次が今をる此許は養家の縁に引かれて伯父伯母といふ間からなり、はじめて此家へ來りしは十八の春、田舎編の着物に肩縫揚をかしと笑はれ、八つ口をふさぎて大人の姿にこしらへられしより二十二の今日までに、下宿に住居を半分と見つもりても出入り三年はたしかに世話をうけ、伯父の勝義が性質の氣むづかしい處から、無敵にわけのわからぬ強情の加減、唯々女房にばかり手やわらかなる可笑しさも吞込めば、伯母なる人が口先ばかりの利口にて誰れにつきても根からさつぱり親切氣のなき、我慾の目當てが明らかに見えねば笑ひかけた口もとも結んで見せる現金の様子まで、度々の經驗に大方は會得のつきて、此家にあらんとには金づかひ奇麗

に損をかけず、表むきは何處までも田舎書生の厄介者が舞こみて御世話に相成るといふこしらへでなくては第一に伯母御前が御機嫌むづかし、上杉といふ苗字をば宜いことにして大名の分家と利かせる見得ぼうの上なし、下女には奥様といはせ、着物の裾のながいを引いて、用をすれば肩がはるといふ、三十圓どりの會社員の妻が此形相にて繰廻しゆく家の中思へば此女が小利口の才覚ひとつにて、真人が箔の光つて見ゆるやら知らねども、失敬なは野澤桂次といふ見事立派の名前ある男を、かげに廻りては家の書生がと安々なされて、御立廻番同様にいはれる事馬鹿らしさの頂上なれば、これのみにても寄りつかれぬ價値はたしかなるに、しかも此家の立はなれにくく、心わるさま、下宿屋あるきと思案をさだめても二週間と訪問を絶がたきはあやし。

十年ばかり前にうせたる先妻の腹にぬひと呼ばれて、今の奥様にはまゝなる娘あり、桂次がはじめて見し時は十四か三か、唐人髷に赤き切れかけて、姿は稚びたれども母のちがふ子は何處やらおとなしく見ゆるものと氣の毒に思ひしは、我れも他人の手にて育ちし同情を持てばなり、何事も母親に氣をかね、父にまで遠慮がちなれば自づから詞かずも多からず、一目に見わたした處では柔和しい温順の娘といふばかり、格別利殺どもはげしいとも人は思ふまじ、父母そろひ

て家の内に籠り居にても濟むべき娘が、人目に立つほど才女など呼ばるゝは大方お俠の飛びあがりの、甘やかされの我まゝの、つゝしみなき高慢より立つ名なるべく、物にはゝかる心ありて萬ひかへ目にと氣をつくれれば、十が七に見えて三分の損はあるものと桂次に故郷のお作が上まで思ひくらべて、いよくおぬひが身のいたましく、伯母が高慢顔はつくづくと嫌なれども、あの高慢にあの温順なる身にて事なく仕へんとする氣苦勞を思ひやれば、せめては傍近く心ぞへをも爲し、慰めにも爲りてやりたしと人知らば可笑かるべきうぬぼれも手傳ひて、おぬひの事といへば我が事のやうに喜びもし怒りもして過ぎ來つるを、見すて、我れ今故郷にかへらば残れる身の心ほそさいかばかりなるべき、あはれなるはまゝ子の身分にして、臍甲斐なもの養子の我れと、今晝のやうに世の中のあぢきなきを思ひぬ。

(中)

まゝ母育ちとして誰れもいふ事なれど、あるが中にも女の子の大方すなほに生たつは稀なり、少し世間並除け物の緩い子は、底意地張つて馬鹿強情など人に嫌はるゝ事この上なし、小利口なるは狡き性根をやしなふて面かぶりの大變ものに成るもあり、しやんとせし氣性ありて人間の

質の正直なるは、すね者の部類にまぎれて其身に取れば生涯の損おもふべし、上杉のおぬひと
いふ娘、桂次がのぼせるだけ容貌も十人なみ少しあがりて、よみ書き十露盤それは小學校にて
學びし丈のことは出来て、我が名にちなめる針仕事は袴の仕立までわけなきよし、十歳ばかり
の頃までは相應に悪戯もつよく、女にしてはご亡き母親に眉根を寄せさして、ほころびの小言
も十分に聞きしものなり、今の母は父親が上役なりし人の隠し妻とやらお妾とやら、種々曰く
のつきし難物のよしなれども、持たねばならぬ義理ありて引うけしにや、それとも父が好みて
申受しか、その邊たしかならねど勢力おさく女房天下と申すやうな景色なれば、まゝ子たる
身のおぬひが此瀬に立ちて泣くは道理なり、もの言へば睨まれ、笑へば怒られ、氣を利かせれ
ば小ざかしと云ひ、ひかへ目にすれば鈍な子と叱られる、二葉の新芽に雪霜のふりかゝりて、
これでも伸びるかと思へるやうな、仕方に堪へて眞直ぐに伸びたつ事人間わざには叶ふまじ、
泣いて泣いて泣き盡くして、訴へたいにも父の心は鐵のやうに冷えて、ぬる湯一杯たまはらん
情もなきに、まして他人の誰れにか歎つべき、月の十日に母さまが御墓まいりを谷中の寺に樂
しみて、しきみ線香夫々の供へ物もまだ終らぬに、母さま母さま私を引取つて下されと石塔に
抱きつきて遠慮なき燃涙、苔の下にて聞かば石もゆるぐべし、井戸がはに手を掛けて水をのぞ

きし事三四度に及びしが、つくづく思へば無情とても父様は眞實のなるに、我れはかなく成
て宜からぬ名を人の耳に傳へれば、残れる耻は誰が上ならず、勿躰なき身の覺悟と心の中に詫
言して、どうでも死なれぬ世に生中目を明きて過ぎんとすれば、人並のうい事つらい事、さ
とは此身に堪へがたし、一生五十年めくらに成りて終らば事なからんと夫れよりは一筋に母様
の御機嫌、父が氣に入るやう一切この身を無いものにして勤むれば家の内なみ風おこらすして、
軒ばの松に鶴が来て巢をくひはせぬか、これを世間の眼に何と見るらん、母御は世辭上手にて
人を外らさぬ甘さあれば、身を無いものにして闇をたどる娘よりも、一枚あがりて、評判わる
からぬやら。
お縫とてもまだ年わかなる身の桂次が親切はうれしからぬにあらず、親にすら捨てられたらん
やうな我が如きものを、心にかけて可愛がりて下さるは辱けなき事と思へども、桂次が思ひや
りに比べては遙かに落つきて冷かなるものなり、おぬひさん我れがいよく歸國したと成つた
ならば、あなたは何と思ふて下さらう、朝夕の手がはぶけて、厄介が減つて、樂になつたとも
喜びなさらうか、それとも折ふしは彼の話し好きのお饒舌のさわがしい人が居なくなつたで、
少しは淋しい位に思ひ出して下さらうか、まあ何と思ふてお出なさると此様な事を問ひかける

に、仰しやるまでもなく、どんなに家中が淋しく成りまじやう、東京にお出あそばしてまへ、一月も下宿に出ていらつしやる頃は日曜が待どほで、朝の戸を明けるとやがて御足おとが聞えはせぬかと存じまするものを、お國へお歸りになつては容易に御出京も遊ばすまじければ、又どれほどの御別れになりまするやら、それでも鐵道が通ふやうになりましたら度々御出遊ばして下さりませうか、さうならば嬉しけれと言ふ、我れとても行きたくてゆく故郷でなければ、此處に居られるものなら歸るではなく、出て來られる都合ならば又今迄のやうにお世話になり來まする、成るべくは鳥渡たち歸りに直ぐにも出京したきものと輕くいへば、それでもあなたは一家の御主人様に成りて采配をおとりなさらずば叶ふまじ、今迄のやうなお樂の御身分ではいらつしやらぬ筈と押へられて、されば誠に大難に遇ひたる身と思召せ。

我が養家は太藤村の中萩原とて、見わたす限りは天目山、大菩薩峠の山々峯々垣をつくりて、西南にそびゆる白妙の富士の嶺は、をしてみて面かけを視さねども、冬の雪おろしは遠慮なく身をきる寒さ、魚といひては甲府まで五里の道を取りにやりて、やうく鮪の刺身が口に入る位、あなたは御存じなれとお父さんに聞て見給へ、それは随分不便利にて不潔にて、東京より歸りたる夏分などは我まんのなりがたき事もあり、そんな處に我れは縛られて、面白くもない仕

事に追はれて、逢ひたい人には逢はれず、見たい土地はふみ難く、兀々として月日を送らねばならぬかと思ふに、氣のふさぐも道理とせめては貴嬢でもあはれんでくれ給へ、可愛さうなものでは無きかと言ふに、あなたは左様仰しやれど母などはおうらやましき御身分と申して居りまする。

何が此様な身分羨ましい事か、こゝで我れが幸福といふを考へれば、歸國するに先だちてお作が頓死するといふやうな事にならば、一人娘のことゆる父親おどろいて暫時は家督沙汰やめになるべく、然るうちに少々なりともやかましき財産などの有れば、みすく他人なる我れに引わたす事をしくもなるべく、又は縁者の中なる慾ばりとも唯にはあらで運動することたしかなり、その曉に何かいさゝか仕損ひでもこしらへれば我は首尾よく離縁になりて、一本立の野中の杉ともならば、それよりは我が自由にて其時に幸福といふ詞を與へ給へと笑ふに、おぬひあきれて貴君は其様の事正氣で仰しやりますか、平常はやさしい方と存じましたに、お作様に頓死しろとは蔭ながらの嘘にしるあんまりでござります、お可愛想なことをと少し涙ぐんでお作をかばふに、それは貴嬢が當人を見ぬゆる可愛想とも思ふか知らねど、お作よりは我れの方を憐れんでくれていゝ筈、目に見えぬ繩につながれて引かれてゆくやうな我れをば、あなた

は眞の處何とも思ふてくれれば、勝手にしろといふ風で我れの事とは少しも察してくる様子が見えぬ、今も今居なくなつたら淋しからうとお言ひなされたはほんの口先の世辭で、あんな者は早く出てゆけと箒に鹽花が落ならんも知らず、いゝ氣になつて御邪魔になつて、長居をして御世話さまになつたは、申譯がありませぬ、いやでならぬ田舎へは歸らねばならず、情のあらうと思ふ貴嬢が其やうに、見すて、下されば、いよく世の中は面白くないの頂上、勝手にやつて見ましやうと態とすねて、むつと顔をして見せるに、野澤さんは本當にどうか遊ばしていらつしやる、何がお氣に障りましたのとお縫はうつくしい眉に皺を寄せて心の解しかねる體に、それは勿論正氣の人の目からは氣ちがいと見える筈、自分ながら少し狂つて居ると思ふ位なれど、氣ちがいたとて種なしに間違ふものでもなく、いろ／＼の事が疊まつて頭腦の中がもつれて仕舞ふから起る事、我れは氣違ひか熱病か知らねども正氣のあなたなどが到底おもひも寄らぬ事を考へて、人まれす泣きつ笑ひつ、何處やらの人が子供の時うつした寫眞だといふあどけないのを貰つて、それを明けくれに出して見て、面と向つては言はれぬ事を並べて見たり、机の抽斗へ叮嚀に仕舞つて見たり、うは言をいつたり夢を見たり、こんな事で一生を送れば人は定めし大白痴と思ふなるべく、其やうな馬鹿になつてまで思ふ心が通せず、なき縁なら

ば切めては優しい詞でもかけて、成佛するやうにしてくれたら宜さうの事を、しらの顔をして情ない事を言つて、お出がなくば淋しからう位のお言葉は酷いではなきか、正氣のあなたは何と思ふか知らぬが、狂氣の身にして見ると随分氣づよいものと恨まれる、女といふものは最う少しやさしくてもいゝ筈ではないかと立てつゝの息に、おぬひは返事もしかねて、私は何と申してよいやら、不器用なればお返事の仕やうも分らず、唯々こゝろぼそく成りますとて身をちやめて引退くに、桂次拍子ぬけのしていよく頭の重たくなりぬ。

上杉の隣は何宗かの御梵利さまにて寺内廣々と桃櫻いろ／＼植わたしたれば、此方の二階より見おろすに雲は棚曳く天上界に似て、腰ごろもの観音さま濡れ佛にておはします御肩のあたり膝のあたり、はら／＼と花散りこぼれて前に供へし櫛の枝につもれるもをかしく、下ゆく子守が鉢巻の上へ、まばしやどかせ春の行方と舞ひくもみゆ、かすむ夕べの朧月夜に人顔ほのぼのと暗くなりて、風少しそふ寺内の花をば去年も一昨年も其まへの年も、桂次此處に大方は宿を定めて、ぶら／＼あるきに立ならしたる處なれば、今歳この度とりわけて珍らしきさまにもあらぬを、今こん春はとも立還り踏むべき地にあらすと思ふに、こゝの濡れ佛さまにも中々の名残惜まれて、晩餐畢りての宵々家を出て、は御寺参り殊勝に、観音さまには合掌申して、

我が戀人のゆく末を守り玉へと、お志しの程いつまで 消えねば宜いが。

(下)

我れのみ一人のぼせて耳鳴りやすべき桂次が熱は激しけれども、おぬひといふもの木にて作られたるやうの人なれば、まづは上杉の家にやかましき沙汰もおこらず、大藤村にお作が夢ものどかなるべし、四月の十五日歸國に極まりて土産物など折柄日清の戦争書、大勝利の袋もの、ばちん羽織の紐、白粉かんざし櫻香の油、縁類廣ければとり／＼に香水、石鹼の氣取りたるも買ふめり、おぬひは桂次が未來の妻にと贈りもの、中へ薄藤色の縹緋の襟に白ぬきの牡丹花の形あるをやりけるに、これをながめし時の桂次が顔、氣の毒らしかりしと後にて下女の竹が申しき。

桂次がもとへ送りこしたる寫眞はあれども、秘しがくしに取納めて人には見せぬか、それとも人しらの火鉢の灰になりたりしか、桂次ならぬもの知るによしなけれど、さる頃はがきにて所用を申越したる文面は男の通りにて名書きも六藏の分なりしかど、手蹟大分あがりて見よげになりしと父親の自まんより、娘に書かせたる事論なしとこの内儀が人の悪き目にて睨みぬ、

手蹟によりて人の顔つきを想ひやるは、名を聞いて人の善悪を判断するやうなもの、當代の能書に業平さまならぬも在しますぞかし、されども心用ひ一つにて悪筆なりとも見よげのしたゝめ方はあるべきを、達者めかして筋もなき走り書きに人よみ難き文字あらば詮なし、お作の手はいかなりしか知らねど、此處の内儀が目の前に浮びたる貌は、横巾ひろく長つまりし顔に、目鼻だけはまづくもあるまじけれど、鬢うすくして頸筋くつきりとせず、胴よりは足の長い女とおぼゆると言ふ、すて筆ながく引いて見ともなかりし歎可笑し、桂次は東京に見てさへ醜い方ではないに、大藤村の光る君歸郷といふ事にならば、機場の女が白粉の塗方思はれると此處にての取沙汰。容貌のわるい妻を持つぐらゐ我慢もなる筈、水呑みの小作が子として一足飛のお大盡なればと、やがては實家をさへ洗はれて、人の口さがなし伯父伯母一つになつて嘲るやうな口調を、桂次が耳に入らぬこそよけれ、一人氣の毒と思ふはお縫なり。

荷物は通運便にて先へたゝせれば残るは身一つに軽々しき桂次、今日も明日もと友達のもとを馳せめぐりて何やらん用事はあるものなり、僅かなる人目の暇を求めてお縫が袂をひかへ、我れは君に厭はれて別るゝなれども夢いさゝか恨む事をばなすまじ、君はおのづから君の本地ありて其島田をは丸鬘にゆひかへる折のきたるべく、うつくしき乳房を可愛き人に嘯ます時

もあるべし、我れは唯君の身の幸福なれかし、すこやかなれかしと祈りて此長き世をば盡さん
 に随分とも親孝行にてあられよ、母御前の意地わるに逆らふやうの事は君として無きに相違な
 けれどもこれ第一に心がけ給へ、言ふことは多し、思ふことは多し、我れは世を終るまで君の
 もとへ文の便りをたゞざるべければ、君よりも十通に一度の返事を與へ給へ、睡りがたき秋の
 夜は胸に抱いてまぼろしの面影をも見んと、このやうの數々を並べて男泣きに涙のこぼれるに、
 ふり仰向てはんけちに顔を拭ふさま、心よわげなれと誰れもこんなものなるべし、今から歸る
 といふ故郷の事養家の事、我身の事お作の事みなから忘れて世はお縫ひとりのやうに思はるゝ
 も聞なり、此時こんな場合にはかなき女心の引入れられて、一生消えぬかなしき影を胸にさ
 ざむ人もあり、岩木のやうなるお縫なれば何と思ひしかは知らねども、涙はろくこぼれて一
 言もなし。

春の夜の夢のうき橋、途絶えする横ぐもの空に東京を思ひ立ちて、道よりもあれば新宿までは
 腕車がよしといふ、八王子までは流車の中、おりればやがて馬車にゆられて、小佛の峠もほと
 なく越ゆれば、上野原、つる川、野田尻、犬目、鳥澤も過ぎて猿はし近くに其の夜は宿るべし、
 巴峽のさけびは聞えぬまでも、笛吹川の響きに夢むすび憂く、これにも胸はたゞるべき聲あ

り、勝沼よりの端書一度とゞきて四日目にぞ七里の消印ある封狀二つ、一つはお縫へ向けてこ
 れは長かりし、桂次はかくて大藤村の人になりぬ。

世にたのまれぬを 男心といふ、それよ秋の空の夕日にはかに掻きくもりて、傘なき野道に横
 しぶきの難儀さ、出あひしものはみな其様に申せども是れみな時のはづみぞかし、波こえよと
 て末の松山ちぎれるもなく、男傾城ならぬ身の空涙こぼして何になるべきや、昨日あはれと見
 しは昨日のあはれ、今日の我身に爲す業しげければ、忘るゝとなしに忘れて一生は夢の如し、
 露の世といへばほろりとせしもの、はかないの上なしなり、思へば男は結號の妻ある身、いや
 ととも應とても浮世の義理をおもひ断つほどのこと此人此身にして叶ふべしや、事なく高砂を
 うたひ納むれば、即ち新らしき一對の夫婦出来あがりて、やがては父とも言はるべし身なり、
 諸縁これより引かれて断ちがたき絆次第にふゆれば、一人一箇の野澤桂次ならず、運よくは萬
 の身代十萬に延して山梨縣の多額納税と銘うたんも測りがたけれど、契りし詞はあとの湊に殘
 して、舟は流れに隨がひ人は世に牽かれて、遠ざかりゆくこと千里、二千里、一萬里、此處三
 十里の隔てなれども心かよはずば八重がすみ外山の嶺をかくすに似たり、花ちりて青葉の頃ま

でにお縫が手もとに文三通、事細かなりけりよし、五月雨檐端に晴れまなく人戀しき折よし、
彼方よりも數々思ひ出の詞うれしく見つる、それも過ぎては月に一二度の便り、はじめは三四
度も有りけるを後には一度の月あるを恨みしが、秋盃のはきたてとかいへるに懸りしより、二
月に一度、三月に一度、今の間半年目、一年目、年始の状と暑中見舞の交際になりて、文言
うるさしとならば端書にても事は足るべし、あはれ可笑しと軒ばの櫻くる年も笑ふて、隣りの寺
の觀音様御手を膝に柔和の御相これも笑めるが如く、若いさかりの熱といふものをあはれみ給
へば、此處なる冷やかのお縫も笑くぼを頬にうかべて世に立つ事はならぬか、相かはらず父様
の御機嫌、母の氣をはかりて、我身をない物にして上杉家の安穩をはかりぬれど、ほころびが
切れてはむづかし。

やみ夜

(二)

闇夜

取まはしたる邸の廣さは幾ばく坪とか聞えて、閉ぢたるまゝの大門はいつぞやの暴風雨をその
まゝ今にも覆へらん様あやふく、松は無けれど瓦に生ふる草の名の忍ぶ昔はそも誰れとか、男
鹿やなくべき宮城野の秋を、いざと移したる小萩原ひとり錦をほこらん頃も、觀月のむしろに
雲上のたれそれ様つらねられける袂は夢なれや、秋風さむし飛鳥川の淵瀬こゝに變りて、よか
らぬ風説は人の口に残れど名残いかにと訪ふ人もなく、哀れに淋しき主従三人は都ながらの山
住居にも似たるべし。

山師の末路はあれと指されて衆口一齊に非は鳴らせど私慾ならざりける證據は家に餘財のつめ
る物少なく、残る誹りのそれだけは施しける徳も陰なりけるが多かりしかば我れぞ其露にと濡
れ色みする人すらなくて、醜名ながく止まる奥庭の古池に、あとは言ふまじ恐ろしやと雨夜の
雑談に枝の添ひて松川さまのお邸といへは何となく怕き處のやうに人思ひね。

もとより廣き家の人氣すくなければ、いよ／＼空潤として荒れ寺などの如く、掃除もさのみは行といかぬがちに入用のなき間は雨戸を其まゝの日さへ多く、俗にくだきし河原院もかくやとばかり、夕がほの君ならねどれ闇さまとて冊かる、娘の鬼にも取られて淋しとも思はぬが、習はしあやしく無事なる朝夕が不思議なり。

晝さへあるに夜はまして孤燈かけ暗き一室の壁にうつれる我がかけを友にて、唯一人悄然と更けゆく鐘をかぞへたらんには、鬼神をしのぐ荒男たりとも越し方ゆく末の思ひに逼られて涙は襟に冷かなるべし、時は陰曆の五月廿八日、月なき頃は暮れてはどなけれども闇の色ふかく、こんもりと茂りて森の如くなる屋後の檜の大樹に音づる、風の音もの凄く聞えて、其うらてなる底しれずの池に寄る波の音さへ手に取るばかりなるを、聞くともなく聞かぬともなく、紫檀の机に臂を持たして、深く思ひいりたる眼は半ばぬふれる如く、折々にさ々波うつ柳眉の如何なる愁ひやふくむらん、黄金を鏤かす此頃の暑さに、こちたき髪のおうるさやと洗しけるは今朝、れのづからの縁したゝらんばかりなるが肩にかゝりて、こぼるゝ幾筋の雪はづかしき頬にかゝれるほど好色なる人に評させんは勿體なし、何とやら観音さまの面かけに似て、それよりは淋しく、それよりは、美しく。

忽ち玄關の方に何事を起りたりと暫しく人聲俄かに聞えて尋常ならぬに、睡れるやうなりし美人はふと耳かたふけぬ、出火か、闘争か、よもや老夫婦がと微笑はもらせど、いふかしき思ひに襟を正して猶聞とらんと耳をすませば、あはたゞしく足音の廊下に高くなりて、れ闇さま御書見で御座りまするか、濟みませぬがれ薬を少しと障子の外より言ふは老婆の聲なり。

何とせしぞ佐助が病氣でも起りしか様子によりて薬の品もあれば急かすに話して聞かせよと言へば、敷居際に両手をつきたる老婆は慇懃に、否老爺では御座りませぬ。

今夜も例の如く佐助、れ庭内の見廻りを済まして御門の締りを検めに参りし、潜りの工合のわるくして平生さはる所のあれば其を直さんとて開けつ閉めつするほどに、暗をてらして彼方の大路より飛び来る車の、提燈に澤瀉の紋ありしかば氣ばやくも浪崎さまの御入來と思ひて、閉づべき小門を其まゝに待ち参らせし、されどもそれは浪崎様にてはあらざりしならん。

其車の御門前を過ぐる時、老爺も知らざりし何時の間にか人のありて、馳せ過ぐる車の輪に何として觸れけん、あつと叫ぶ聲に驚きし老爺の我が額を滑りに打ちし痛さも忘れて轉び出てしに、情さはそれと知りつゝ宙を飛ばして車は過ぎぬ。

残りし男の負傷はさしたる事ならねど若きに似合ぬ意氣地なしにて、へた／＼と弱りて起つべ

き勢ひもなく、半分は死にたるやうなあはれの情態、これを見捨つる事のならぬ老爺が、お叱りを受くるかは知らねどお玄關まで擔ひ入れしに、まだ人心地のあるやなしなる覺束なさ、ともかく一目見ておやり下され、嘘ならぬ憐れさと語りける。

(二)

数日の飢と疲れに綿の如くなりし身を又もや車の齒にかけられて、痛みと驚きに魂ひいつか身を離れて氣息の絶えける暫時は夢のやうなりしに、藪都とせし香の何處ともなくして胸の中すいしくなると共に、物に覆はれたらんやうなりし頭の初めて我れに復りてわづかに目を開きて身邊を見廻らせば、氣の附きしと見ゆるに藥今少しといふ聲その枕に聞えて、まだ魂ひの極樂にや遊ぶいづれ人間の種ならぬ女菩薩こゝにおはしましけり。さりとは意地のなき奴、疵は小指の先を少しかすりて、蜻蛉おふ小溝にはまりても此位の負傷はありうちなるを、氣を失ふ馬鹿もなきものぞ、しつかりして藥でも呑めやと作助のやかましく小言いふを左様あらしくは言はぬもの、いづれ病後か何かにて酷く疲れて居るらしければ、靜かに介抱して遣るがよし。

心を置くべき宿ならねば氣を落つけてゆるくと睡り給へ、幾日在りとして此處にはさしつかへも無けれど我家へ知らせたしと思はし人を遣りて家内の人をも迎ふべし、不時の災難は誰しもあるならひなれば氣の毒などの念をさりて思ふまゝの我まゝを言ふがよし、打見し處が病氣あがりかとも見ゆるに斯く夜に入りても家に歸らずば、有らば兩親の心配さこそと思はるゝに今宵は此處に泊る事として人をば宿所に走らすべし、目前みての憂ひよりは想像にこそ苦はますなれ、異状なきよしを知らせて其さまゝに走る想像の苦を安めたし。

住處はいづれぞと問はれて、かるく起かへる男の頬はいたく肉落て、大きやかなる目の光りごんよりと、鼻はひくからねど鼻筋いたく窪みて、さらでもさし出たる額はいよゝいぢるしく、生際薄くして伸びたる髪は領をおほへり、物いはんとすれば涙のみこぼれて色もなき唇をふるゝと戦くは感の胸に迫りてにや、お蘭は靜かにさし寄りていざと藥をすゝむれば、手を掉りて最早氣分はたしかで御座りまする。

歸るべき家なく、案じ給ふ親なければ車に挽ころされぬとも、道に行倒れぬとも我れ一人天命を觀する外、世間に憐れと見る人もあるまじ、情ある方々に嬉しき詞をそゝがるゝは薄命の我れに中々の苦しみを増す道理なれば、氣のつかざりしほどは兎も角、今は御門外へ棄てさせ給

へ、命あるほどは憂きを見盡して魂さりての屍體は瘠犬の餌食にならば事たる身なり、恨めしかりし車の紋は澤瀉、闇なれども見とめたりし面かげの主に恨みは必らず返せど、情ある君達に御周報じの叶ふべき我れならず。
さらば免し給へと身を起すに足もと定まらずよろ／＼とするを、扱もあぶなし道理のわからぬ奴め、親がなしとても其身は誰れから貰ひしぞ、さる無造作に兪末にして濟むべきや、汝ごとき不料簡ものゝあればこそ世上の親に物おもひは絶えざるなれど、我れも一人もちたる子に苦勞したりし佐助が、人事ならず氣づかはしさに叱りつけて坐らすれば、男は又もや首うなだれて俯よく。

逆上してをかきし事を言ふらしければ今宵一夜こゝに置きて、ゆる／＼睡らせたしと老婆もいふに、男は老夫婦にまかせてお蘭は我が居間に戻りぬ。

(三)

離にからむ朝顔の花は一朝の榮えに一期の本懐を盡くすぞかし、我身に定まりたる分際を知らは爲らぬ浮世に思ふ事あるまじく、効なき悶に、鴈にゆべしやは、さても祖父の世までは一郷

の名醫と呼ばれて切棒の駕に呼ゆく村童まで 跪かせしものを、下りゆく運は誰が導きの薄命道、不幸天死の父につゞきて母は野中の草がくれ妻とは言はれぬ身なりしに、浮世はつれなし親族なりける誰れ彼れが作略に、争はんも甲斐なや亡き旦那さまこそ照覽まします、入幅いつはりなき御胤なれども言ひ張りてからが怨とや言はれん卑賤の身くやくしく、涙を包みて宿に下りしは此子胎内に宿りて漸く七月、主様うせての二七日なりける、さるほごに狭きは女子の心なり、恨みのつもる世の中あぢきなくなりて、死出の山踏けふや明日やと祈れば、さらでもの初産に血の騒ぎはげしく産み落せし子の顔も得しらで哀れ二十一の秋の暮一村しぐれ誘はれて逝きぬ、東西しらの昔より父なく母なく生ひたてば、胸毛に埋もれし祖父の懐中よりほかに世の暖かさを身に知らねば、春風氷をとく小田のくろに里の童が遊びにも洩れて、我れから木がくれのひねれ者に強情いよ／＼つれば、憐れをかくるは祖父一人、世間の人に憎まるゝほどふびんや親のなき子は添竹のなき野末の菊の曲るもくねるも無理ならず、不運は天にありて身から出たる罪にもあらぬを親なし子と蔑しめる奴原が心は鬼か蛇か、よし我等が頭に宿り給ふ神もなき佛もなき世なるべし、世間は我等が仇敵にして、我等は遂に世間と戦ふべき身なり、祖父なき後は何處に行きても人の心はつれなければ夢いさゝかも他人に心をゆるさず、人我れ

につらからば我れも人につらくなして、とても憎まるゝほどならば生中人に媚びて心にもなき
追従に破れ草鞋の踏みつけらるゝ所業はすなとて口惜し涙に明けくれの無念はれ間なく、我が
孫かはゆきほど世の人憎ければ此子が頭に拳一つ當てたる奴は縦令村長ごのが息子にせよ理非
は兎に角相手は我れと力味たつ、無法の振舞ひやうやく募れば、もとより水呑百姓の瘠田一
枚もつ身ならぬに憎き老ばれが根生骨、美事通して見よやとばかり田地持ちに睨まれたるぞ最
期、祖父孫二人が命は風になたゝく殘燈の言はんも愚や消ゆるは定なり。
娘が亡せての十三回忌より老爺は不起の病ひにかゝりぬ、觀念の眼かたく閉ぢては今更の醫藥
も何かはせん、あはれの孫と頑固の翁と唯二人、傾きたる運命を薬屋が軒の月にながめて、人
きかは魂や消ぬべき凄く無残の詞を遺して我れは流石に終焉みだれず、合掌すべき佛もなしと
や嘲る如き笑みを唇に止めて、行方は何處ぞ地獄天堂、三寸息たえて萬事休みぬ。
遣りし孫ぞ即ち今日の高木直次郎、とる年は十九、つもりし憂きは量るもあはれや、仰げば高き
鹿野山の麓をはなれ天羽郡と聞えし生れ故郷を振棄てけるより、おのれやれ世に捨てられ物の
我れ一身を犠牲に、こゝ東京に醫學の修業して聞傳へたる家の風いざやとばかり、母と祖父と
の恨みを負ひて誰れにか謀らん心一つを杖に、出でし都會に人鬼はなるとも何處の里にも用ひ

らるゝは才子、よしや輕薄のそしりはありとも口振利口に取り廻しの小器用なるを人喜ぶぞか
し、孟嘗君今の世にあらばいざ知らず、癖づきし心は組糸をときたる如く、はてもなくこぢれ
て微塵愛敬のなきに、仕業も拙なりや某博士誰れ院長の玄關先に熱心あふる、辯舌爽かなら
ず、自ら食客の糶賣したりとて誰れかは正氣に聞くべき何處にも狂氣あつかひ情なく、さる處
にて乞食とあやまたれし時御臺所に呼こまれて一飯の御馳走下しおかれしを、さりとは無禮失
禮奇怪至極と蹴返す膳部に一喝して出でぬ。
野猪に似たりし勇のみあふれて智慧は囊の底にや沈みし、誰が目に見ても看板うつて相違なき
愚人と知らるれば、流石に憐れむ人もありて心は低くせよ身を惜むな、其身に合ひたる勞働な
らばそれ相應に世話しても取らすべしとて、湯屋の木拾ひ、蕎麥やのかつき、權助庭男の數を
盡くして、一年がほどに見見えの數は三十軒、三日と保たず隨徳寺はまだよし、内儀様のじや
らくらの鬢たば胸わるやと撲仆して奔せ出けるもあり、旦那どのと口論のはては腕立の始末は
づかしく、警察のお世話にも幾度とかや、又ぞろ此處も敵の中と自ら定めぬ。
木賃宿として燈火暗き場末の旅店に帳つけといふ者して送りける昨日今日、主人が輕侮の一言に
持病むらゝとして發れば、何か堪へん筆へし折りて硯を投げつけつ、さして行く手は東西南

北、ふすや野山の當てもなき身に高言吐きちらして飛び出せば、それよりの一飯も如何はすべ
き、舌かみ切つて死なん際まで人の軒端に立つ男ならねば、今日も暮れぬる入相の鐘にさても
時をしらぬ身は旅鳥にも分りつべく、來るともなく往くともなく、よろめき來りし松川屋敷の
表門、驚破といふ間に曳過ぎし車ぞ佐助も見たりし澤海の紋なる。

(四)

此處に助けられたる夜より三日がほどを夢に過ぐせば記憶はたしかならねど最初の夜見たりし
女菩薩枕のもとにありて介抱し給ふと覺しく、臍氣ながら美しくしき御聲になぐさめられ、柔ら
かき御手に抱かるゝ我れは宛然天上界に産れたらん如く、覺めなば果敢なや花間の胡蝶、我れ
か人かの境に睡りぬ。

浮世の中の淋しき時、人の心のつらき時、我が手にすがれ、我が膝にのぼれ、共に携へて野山
に遊ば、や、悲しき涙を人には包むとも我れにはよしや瀧つ瀬も拭ふ袂は此處にあり、我れは
汝が心の愚なるも卑しからず、汝が心の邪なるも憎からず、過にし方に犯したる罪の身をく
るしめて今更の悔みに人知らぬ胸を抱かば、我れに語りて清しき風を心に呼ぶべし、恨めしき

時くやしき時はづかしき時、失望の時、落魄の時、世の中すて、山に入りたき時、人を殺して
財を得たき時、高位を得たき時、高官にのぼりたき時、花を見んと思ふ時、月を眺めんと思ふ
時、風をまつ時、雲をのぞむ時、棹さす小舟の波のうちにも、嵐にむせぶ山のかげにも、日か
げに疎き谷の底にも、我身は常に汝が身に添ひて、水無月の日影つち裂くる時は清水となりて
濁きも愈やさん、師走の空の雪みぞれ寒き夕べの皮衣どもなりぬべし、汝は我と離るべき物な
らず、我れは汝と離るべき中ならず、醜美善惡曲直邪正、あれもなし、これもなし、我れに
隠すことなく、我れに包むことなく、心安く長閑におちつきて、我が此腕に寄り此膝の上に睡
るべしと宣ふ御聲心耳にひやく度々、何處の誰れ様ぞ斯くは優しの御言葉の伏拜む手先ものに
觸れて魂、我れにかへれば苦熱その身に燃ゆるが如かりし。

斯くて眠りつ覺めつ覺めつ眠りつ、今日ぞ一週といふ其午後より我れと覺えて粥の湯のゆくや
うになりぬ、やかましけれども親切あふる、佐助爺の介抱、おそよが待遇、いづれもいづれも
心づきては涙こぼるゝ優しの人々に、聞けば病中の有様の亂暴狼藉、あばれ次第にあばれ、狂
ひ放題くるひて、今も額に残るおそよが向ふ疵は、我が投つけし湯呑の痕と説明れて、微塵立
腹氣もなき笑顔氣の毒に、今更の汗腋下を傳へば後悔の念かしらにのぼりて平常の心の現はれ

ける我れ恥かしく、さても如何なる事かを申したる、お前様お二人のほかに聞かれし人はなきかと裏問へば佐助大笑ひに笑ひて聞かせたしとても人氣のござらねば耳引たつるは天井の鼠か壁を傳ふ蟬、我々二人にお嬢様をおきては此大伽藍に犬の子のかけもなく、一年三百六十五日客の來る事なく客に行く事なく、無人屋敷の夫れに心配はなけれども氣の附かれなば淋しさに堪へがたく、今までの夢なりし代りに今宵よりは臉ふつに合はず、寐られぬ枕に軒の松風、ざりとは馴れぬ身に氣の毒やとあれば、其お嬢様と聞きますは何時も枕邊にお出たるお人か、いかにも其通りと言はれて、さらば夢にもあらずりけり。

現か、優しき御聲に朝夕を思め給ひしは、夢か、御膝に抱き給ひしは、正氣づきゆく日數にそへて、目前お蘭さまと物いふにつけて、分らぬ思ひは同じ處を行廻り行めぐり、夢に見たりし女菩薩をお蘭さまとすれば、今見るお蘭さまは御人かはりて、我れに無情とはあらねど、一重隔ての中垣に、きつとして馴れがたき素振は何として御手にすがらるべき、何として御膝にのぼらるべき、悲しき涙を拭へと仰せられしお袖の端の端の端にも我手の若しも觸れたらば恥かしく恐ろしく我身はふるへて我息はとまりぬべく、總じて夢中に見えし女は嬉しく床しくなつかしく、親しさは我れに覺えなければと母のやうにもありけるを、現在のお蘭様は懐かしく床

しきほかに恐ろしく怖きやうにて身に心も一つになご、懸けても仰せられん事か、見たりしには異なる島田監に、美相は斯くぞおぼえし夢中の面かけを留めて、御聲も斯くぞありたし朝夕の慰問うれしけれど、思へば此處も他人の宿なり、心はゆるすまじき他人の宿なり、いざさらば行かん、此やさしけなるお蘭さまの許をも辭して。

(五)

さらば行かんと思ひ立しより直次郎、しばしも待たぬ心は弦をはなれし矢のやうに一筋にはしりて此まゝのお暇乞を佐助に通じてお蘭さまにと申上ぐれば、てもさても驚かれて、鏡を見給へ未だ其顔色にて何處へ行かんとぞ、強情は平常の時、病ひに勝てぬは人の身なるに、其やうな氣短かはいはで心靜かに養生をせであらんやは、初よりいひしやうに此家には少しも心をおかず遠慮も入らず斟酌も無用にして見かへすやうな丈夫の人になりて給はらば嬉しかるべし、袖すり合ふも他生の縁と聞くを假初ながら十日ごしも見訓れては他處の人とは思はれぬに、歸るに家なしとかいひし一言の怪しきを思へば、いづれ普通ならぬ悲しき境にさまよふにこそ、我れも見給ふ通りの有様にあれゆく邸の末はいかならん、はかなき身にもよそへられて愈

よおもはるゝは浮世の浪にもまれぬきて漂ひつかれし人の上なり、何も女の力足らで談ふに甲斐なしとも、同じ心は榮華にあきし世の人よりも持つものぞや、我れに遠慮あらば佐助もありそよもあり、あの年浪のよるほどには稽古もつみて世渡りの道も知らぬではなく、それこそ相談の相手にもなるべし、家は化物屋敷のやうなれど人鬼の住家でもなければ、さのみは物怖を給ふなと少し笑ひてお蘭さまの仰せらるゝは我が意氣地なく、だらなき奴を見ぬき給ひてなぶり給ふにや、誠に我れは此處を離れて何處へ行かん目的もなく、途にて病まば誰れか助けん其まゝの行倒れと、我身の弱きに心さへ折れて、恥かしけれと直次郎はじめの勢ひには似ず強てもとは言はざりけり。

老夫婦は猶もお蘭様が詞の幾倍を加へて、今少し身體のたしかになるまでは我等が願ひても此家に止めたしと思ひしを、嬢さまよりのお言葉なれば、今は天下はれてのお食客ぞや、肩身を廣く思ふ事をも爲し此邸の用をも助けて大に働くがよかるべし、若き者の愚圖々々と日を送るは何よりの毒なればとて身にあふほどの用事を彼れ此れと宛がひて、家内の者のやうにあつかはるれば、それに引かれて氣の毒も薄く、一日二日三日四日、さらばお詞にあまへとも言はねど、やう／＼に根の生へて我れも分らぬ日を何とはなしに送りぬ。

さしも廣かる邸内を手入れの届かねば木はいや茂りに茂りて、折しもあれ夏草處得ばはにひろがれば、忘れ草志のぶ草それ等は論なし、刈るも物うき雜草のまげみをたどりて裏手にめくれれば幾抱への松が枝大蛇の水にのぞめる如くうねりて、下枝はゆるゝ古池の深さ幾ばくぞ、昔は四阿のたてりし處とて、小高き所の今も名残は見ゆれど、まやの餘りも淺ましくわれて、秋風ふかねど入日かけらふ夕ぐれなどは頼りたつまじき怪の心さへ呼おこすべく、見渡す限り物すさまじき宿に、さらでも沈みがちの直次郎、明けぬれど暮れぬれど淋しき思ひは滿身のふそひて彌々浮世に遠かるやうなり。

月にも闇にもをかしきは夏の夜といへど斯る宿の夕月夜、五條わたりの軒のつまならば夕がほの稻や花々しかるべき、お蘭さまの居間といへるは廊下いく曲りはるかに離れて、欄りや物思ふよべど答へも松風の音ものさわがしき奥の奥の奥座敷なり、直次郎は老夫婦と共に立關近き處にあれば一家のうちながら自からの隔てに病中とは異りて打どけて物いふ事も少なく、佐助あそよとても嬢様をば神様のやうにいづきまつりて、大事に大事に大事に、我が命はよしや芥の捨てません、此御爲ならばと忠義は然る事ながら、唯おそれてかしくみて、此處に盛りの名花一木ちらさむ折らさじと注連引はへて垣の外より讀るが如く馴れての睦みのあらざれば直次

郎もいつか引いれられて、我れは食客の上下相通の身ながら、さながら主様のやうにぞ覺えける、されば月の頃の夕納涼とて團扇かた手に浮世物がたり慶たからかど晝の曇さを若竹の葉風に拂ひて蚊遣の煙り空になびかする軽々しきさびもあらねば、何として分るべきお關さまの人となりも此家の素性も、唯雲をつかむやうの想像に虚實は知らず佐助おそよが物がたりを加へて、わづかに松川何某といひし財産家の浮世にはづれ易き投機にかゝりて、花を留みし暈の白雲おとなく消ゆれば、残るはお關様のお身一つと、痛はしや春負ひあまる借財もあり、おはれ此處なる郎も他人の所有と唯これだけを曉り得ぬ。

(十)

庭草におく露玉をつらねて吹風心地よきある朝ぼらけのこと、おらん様いつより早くお起きなされて、今日は父様の御命日なればお花は我れが剪りて奉らんとて花鋏手にして庭へ下りらるゝに、撫子ならば裏の方が美しくして直次郎も續いて跡を追ひぬ。いつぞは問はんと思ひし此處の様子をお關さまが口づから聞くよしもやと直次郎、例に似ず口輕に物いへばお關さまも機嫌よげにて、早百合撫子あれこれの花は剪りて後も我庭ながら物

めづらしげに見あるき給ふ嬉しさ、直次郎は何氣なき體にて今日のお志しは御父上様とか、お前様は幾歳にて別れ給ひしぞと問へば、汝も早くよりのひとり者とや我れによく似し事なかと微笑まる。

此坂を下りて彼處へ行て暫時やすまん、つかれては話も厭なればと仰せあるに、さらば歸り給ふか、否々、今しばし遊ばんとて苦なめらかなる小徑を下らるゝに、おあふなしと言へば氣の毒なれど其肩をかし給へとてつと寄りて此處を下りぬ。

下りて出づるは例の池の岸なり、木の切株の平らなるに塵を拂ひて此處にお休みなされよと言へば、嬉しき事よの今日は弟の介抱を受くるやうなり汝も此處へ休まばよきにと半分を譲らるれば、何として勿體もなき事と直次郎は前なる枯草の中へうづくまりぬ。

汝も夙くに両親とも世をさりしとか、我れも母なりし人の顔は知らで、育ちしは父上の手一つなれば、戀しさなつかしさは又一倍に覺ゆるぞかし、常はともあれ由縁ある日はこと更に憶ひ出られて、紛らさんとも氣の紛れぬは今日なり、汝にも其覺えは有るべしとあるに、誠に其通りとて直次郎も涙ぐまれぬ。さてもお父様は幾年の前にか失せ給ひし、お前様の親御様なれば御年もまだお若くありしならんと問へば、いや若しといふほどにはあらず、別れしは八年の

前、おもへば夢のやうな別れなりしとあるに、さらば御病氣は俄の病ひにてやありしと憂かけ
て問へば、何の病氣かは、我が父は是れ此池に身を沈め給ひしなり。
直次郎が驚愕に蒼ざめし面を斜に見下して、お關様は冷かなる眼中に笑みを浮かべて、水の底に
も都のありと眺みて帝を誘ひし尼君が心はしらず、我が父は此世の憂さにあきて何處にもせよ
静かに眠る處をと求め給ひしなり、涙は表に騒ぐと見ゆれと思へば此風は静なるべし、世の憂
き時のかくれ家は山邊も浅し海邊もせんし唯この池の底のみは住よかるべしとて静かに池の
面を見やられぬ。
吹く風松の梢に高く音づるれば、やがてさ々波池の面におこりて草のそよぎも後の見らるゝに
お關さまは猶たゝんともし給はず、直次は何故そのやうにかしこまりてのみ居るのぞや我れば
かりならて汝も何ぞ話して聞かせよと仰せらるゝに、いよく詞のふさがりてさし俯けば、困
りし人よ女のやうな男と笑はれて、今更消えぬ心の恐れも顔色に出て、笑はるゝにや、我が意
氣地なきに比べてお關さまは何れほど強き心を持てば彼のやうに平氣に落つきてすらくと物
語をつまげらるゝならん、我れは聞くのみにも胸の冷ゆるやうなるをと、物は言はて御顔を打
まもれば、思ひなしにや流石に色は蒼白くみゆ。

さりながら此はなしは他人に聞かすまじきぞや、物いひさがなきは世のならひながら親のこと
なれば口惜しきぞかし、汝とてもこれを知りては此處は厭とおもふやうに成るべきか、さらば
話すのではなかりしにと少し氣色のかはりて言へば、何として何として、其様なこと思ふてな
りましやうや、又口外などはもとよりの事、ゆめさら御心配なされますなといへば、誠に我が
弟同様におもふ心易だてより底の見えるやうな事聞かせし恥かしさ、何も聞ながしにし給へ、
さらば行かんと立あがるに、花は我が持ちて参らん、いやそれよりは手を助けて給はれとて、
例の脇路にかゝりし時しろく美しくしき手を直次郎が肩にかけつゝ、小作りに見ゆれど流石に男
は丈の高きものかな、汝は幾歳とや十九か二十か、我れに比べてよほどの弟とおほゆるに、我
れはまあ幾歳ほどに見ゆるぞや、されば一つ二つの姉君か、何として何として、すがれと云ふ
三十は頓てほどなき二十五といふ、それは實か、何たる御若さといへば、褒めるのかや譏るの
かやとて御顔あかみぬ。

(七)

女子は温順にやさしくば事たりぬべし、生中持ちたる一節のよきに随ひてよきは格別、浮世の

浪風さかしまに當りて、道のちまたの二筋にいざや何處と決心の當時、不運の一編りに炎あらぬ方へと燃えあがりては、お釋迦さま孔子さま兩の手をとらへて御異見あそばさるゝとも、無用のお談義お措きなされ、聞かぬ聞かぬと振のくる顔の、眼に涙は湛ふるども見せじこぼさじ是れを浮世の強情我慢といふぞかし、天のなせる麗質よきは顔のみか、姿どゝのひて育ちも美事に、斯くながら人の妻とも呼ばれたらば打つに點なき潔白無垢の身なりけるを、はかなきはお蘭の身の上なり、天地に一人の父を亡ひて、しかも病の床に看護の幾日、これも天壽と醫藥の後ならばさてはあるべし、世上に山師の譏を殘して、あるべき事か我れと我が手に水底の泡と消えたり起因の罪はと數ふれば、流石に天道是非無差別といひがたけれど、口に正義の髭つき立派なる方様のうちに恐ろしや實の罪はありけるものを。手先に使はれける父が身はあはれ露拂ひなる先供なりけり、毒味の膳に當てられて一人犠牲にのぼりたればこそ殘る人々の枕高く、春のよの夢花をも見るなれ、さては思ある忘れがたみに切めては露の情もあるべきを、あれゆく門に馬車あたとえて行かば恐ろし世上の口と、きたなきものは人心ならずや、巫峽の水の木の葉舟かゝる流れにのりたるお蘭が、悲しさ恐さ口惜しさの乙女心に染込みて、よしさらば我れも父の子やりてのくべし、悪ならば悪にてもよし、善とはもとより言はれまじき

素性の表面を温和につゝんでいざ一編り、斃れてやまばそれまでよ、父は黄泉に小手招きして九品蓮臺の上品ならずとも、よろしき住家は彼の世にもあるべし、さらば夢路に遊ばんの決心、これさらく好きに狂ひし浮かれ心かは、時にかられて涙は胸に片頬笑みしつ、見あぐる擔端日毎に荒るれど、しのぶの露をわはれ風流とうそぶく身は人しらぬわはれ此のうちにあり。
なすまじきは懸とや、色ある中に忍ぶ文字ずりいざ陸奥にありといふ關の目目に途絶えを詫るは優しかるべし懸けつ懸けられつ釣繩のくるしきは懸よりの間柄なり、一人は賊の心より慕ふともよりあはねば是れも片糸の思ひやすらん、其頃番町に波崎漂とて衆議院に美男の聞えある年少議員とのありき、遠からぬ縣より選出の當時、やかましかりし沙汰の世のならひとて疵にはならねど、秘密は松川との間にかくれて今日の財産も半は何より出しやら、世にある頃は水魚の交り知らぬ人なく、よき聲得つと漏らせし一言を耳に残せる人もあれど、浮雲おほふて乍ち昏し扶桑の影、なしといはれそれまでなる外國あるきに年月を経て、歸りしは其人すてに亡せけるの後、今日の羽風に昔の塵を拂ひて、又ぞろ釣り出すや其筋のゆかり、官臭とやら女子の知らぬ香のする堂には關馬の君とて用ひも輕からず、演説上手に人をも感動さするよし、

それもまかなり口車よく廻らてやば、もしやに引かれて二十五の秋まであはれも聞かぬが獨り寝の
枕に結ばぬ夢の行方はこれなり、誰が爲守る操の色ぞ松の常盤もかくては甲斐なき捨られ物に、
一身つくくんと感じては浮世いや／＼黒染の袖に縫綴野は遠し此都ながらの世すて人ともなら
んは常なれど、憎き男心にあめ／＼と秋の色ひとり見て、生悟りの經佛に爲事なしのあき
らめ、それも厭々、とても狂はゞ一世を關にして首尾よくは千載の後まで花紅葉ゆかしの女に
成りおほせ、出来ずば一時の榮花に未は野となれ山路の露と消ゆるもよし、我れながら如夜叉
の本性さても恐ろしけれど、かく成りゆくはこれまでの人なり、悔まじ恨まじ浮世は夢と、こ
れや戀をまをりに淺まししの觀念、おそろしきは涙の後の女子心なり。

(八)

此夏もくれば秋は萩の葉に風そよ／＼頃も過ぎぬ、松川屋敷の月日はいかに流るゝか、お聞さま
佐助夫婦、直次郎の上にも變りたる事なく、唯としごろ熱心なりし醫學の修業を思ひ絶えたる
のみぞ此男の變動なりける。
何うてもやりまする、骨が舍利になるともやりまする、精神一到何事か出来ぬといふ筈はなく、

我れも男なれば言ひたる事を後へは引がたし、これまでも散々村の奴輩にも侮られ、此都に出
ても輕蔑されて出来ぬものと言ふとされまじれば猶さらのこと、美事通して見せねば骨も
筋もなき男でござります、我れは其やうな骨なしに見えまするかとして、何時も此話しの始まり
し時に青筋出して疊をた／＼に、はて身知らずの男、醫者に成るは芋大根作りたるとは條理
が違ふぞとて、佐助は眞向より強面の異見に、とても出来ぬ事はよして仕舞へと言ひける、お
聞さまはつく／＼と聞きて、可愛さうに叱らずとも事なり、それほど思ひ込んだる事なれば
出来まじとは言はれねど、萩の友より殖えて瘦せるは世のならひなれば随分と人数も多し、年
毎にむつかしくはなる、まかも學費の出どころが無くば一段と難儀ではなきか、それが精神一
到と汝は言ふか知らねど、汝の實の潔白沙汰は今の世に石瓦、此やうの事は口にするは厭なれ
ど丸うならねば思ふ事は逃げられまじ、其會得がつかたらば随分おもふ事は貫くが宜けれど、
何うやら其邊がむづかしくはなきかと仰せられける。

國を出しより以來こゝろは一途にはしりて前後を顧みず、どうても貫くと言ひし舌の根我れと
引きたくはなけれど、打たれて擲かれて侮蔑されて、はては道ゆく車の輪にかけられて、今一
歩の違ひにては一生の不具にもなるべき負傷の擲句、あはれ可愛やと教ひあけられし大恩の主

機とても浮世は同じ秋風に、門増あれて美玉ちりに隠る、明けくれのたゞずまひ悲しく、天道はどうても善人に與みし給はぬか、我が祖父、我が母、我が代までも飛ぶ蟲一つむごとは殺さず、里の小犬が飢渴のあはれば、我が一飯を分ても心の、さりとて世上に敵をまうけて憎まれ者の居處なしにあらんとは知らざりし、今更世上に細をうりて初一念のつらぬかるゝともそれまでの道中いやなり、いやなり、とても辛防なりがたきは泥草履つかんで追従の犬つくばひ、それで成上りて醫は仁術と勿體ぶる事難し、今は此れもやめにせん、やめにすべし、思ひ絶えて仕舞ふべし、我れは浮世の能なし猿にはなるとも穢き男には得こそなるまじ、それよと断念の、曉きよく再び口にも出ださずなりぬ。

さして行く處はなし、世間は仇なり、望みの空に歸してより此一身を如何になすべき、詮方なき身のすて處いづこと尋ねれば、離は荒れて庭は野らなる秋草の茂みに嵐をいたむ女郎花にも似たるお蘭様が上がいとと思ひぬ、素より我れは悪人なり、お蘭様は女子なれども測り難き意志の、我れ鬮虫の類にはあるまじきなれど、強しといふとも頼むに人なき孤獨の身に大慶の一木何として支へん、佐助れそよとても一身この君にさげ物の忠ならんが我眼より見れば未だな事、かよわき御身の女子様を主に持ちて、吹かば散るべき花前の嵐に掩ふ袂の映さ映さ、彼

の人々は何れ重代の縁もあるべし、我れは昨日今日の恩なれども情の露の甘きにぬれては就れに年の長短を問ふべき、口廣けれども我れはお蘭様に命を申す、此一言を金打にして、心に浮世のさまじくと思ひ断ちたれば生死は御心のまゝに、言はねども其色あらはれぬ。

人の心は怪しきものなり、直次郎がお蘭様を思ふほどに佐助夫婦が直次郎に對する憐れみは薄くなりぬ、見ず知らずの最初抱き入れて介抱の親切はつくるひなき誠實なれば今とて更に衰へるよしはなけれど、一にもお蘭さま、二にもお蘭さまと我物のやうに差出たる振舞、さりとて物知らずの奴かな、御産湯の昔より抱き参らせたる老爺さへ、心におもふ事の半は残して御意に従ふは浮世の禮なるを、宿なし男の行倒を救はれし恩は知らで我がお嬢さまが弟顔する憎らしさ、あのやうの物知らずは眞向から浴せつけずは何事も分るまじとてつけくど憎まれ口傳りなく、ともすれば此間に年甲斐もなき争ひの火の手もえあがりて、何れに團扇のあげがたきお蘭さまが一人氣をもむ事もありし。

(九)

秋は夕ぐれ夕日花やかにさして、晴にいそぐ鳥の聲さびしき頃、めづらしき黒鴨の車夫に狀箱

もたせて波崎さまよりのお使ひと言ふが来りぬ、折しもお聞さま籬の菊に日映りのをかしきを御覽じけるはをなりしが、おそよが取次ぎて珍らしきお便りとさし出すに、をかしや白妙の袖にはあらでと受取りて座敷へ歸られける、文は長く長く一丈もあるべし、久しき途絶えを恨めしとも仰せられぬは辛からずや、俗用まげく心は君が宿に通へど浮世は蘆分小舟ぞかし、今日は暇を得て染井の閑居に獨りかき籠りし、理由はおのづから知り給へ人目の煩ひなく思ふ事も聞えたく、我れより其邸を訪はんは見目か鼻うるさし、此車にて今より、と能書の薄墨往年ならば魂も消えぬべし、これ見よおそよ、波崎さまは相變らずお利口なりとてさのみは喜びもせぬ聞か顔が訝しげに諦視りて、お前さまは其のやうに落つきてお出なされど偶さかの御暇に先方さまは飛び立つやうなるは知れた事、少しも早くお支度をなさりまし、お車も待て居りまするものぞ急がするに、あれ老嫗は我れに行けと言ふか、さりとは正直者と笑ひ返事を書く。

文の便りの度々に釣られて若しやと思ひしは昔、今日のお聞は其のやうな優しさお娘様氣を捨てたれば古手の嬉しからせを畏みて御別荘に御機嫌をうかふまでの恥はさらさじ、つれなしとて一向のかき絶は世にあるならいと諦めもあるものを、憎き男の地位にはごりて何時ま

で我れを弄ばんとや、父は山師の汚名を着たれと未だ野割間の名は取らざりし、戀に人目をしのぶとは表面、やみ夜もあるものを千里のちか蹴足に真意は其時こそ見ゆれ、此家よりは遠からぬ染井の別荘に月の幾日を暮すとは新聞をまたでも知るべき事なり、殊更の廻り道して我が門をよそに、止みがたき時は車を飛ばせて女子一人に逢はじの懸念、お笑止や我れ故天地を狭しと思すか、あまりの窮屈にいさ廣々とならんには我れを賺して君様いとと言はせ、何も時世とあきらめ給へ、正しき妻とは言ひ難けれと心は後の世かけてなど、我れを何處までも日蔭ものゝ人知らぬ身として代舞は、前後に心ざはりなくて胸安からんの所爲とは見え透きたり、流石に御心には懸りて何時ぞは仇する女ぞと思召したるか、お道理の御懸念唯にあるべく我れかは、裏屋の夫婦が厭かれしとは事かはれば、御身分から世の攻撃に居場處のなき其やうの恥はお互ひの事見せ申すまじ、おのづからの恨みはゆるくと、人こそ知らね心の底には冷やかに笑ひぬ。

返事はたゞ、折ふしの風邪に取りみだしたる姿はづかしく、中々の御目通りに厭かれ参らする事つらければ、免し給へ、又こそとて、何もうはべは美はしくして使ひを遣しぬ。波崎が車は門を過ぐる事あり、直次郎が引かれし其夜の車も提燈の紋は澤瀉なりしに、今日

の車夫も法被に澤海さわみの縫紋ぬいもんありけり、あれとこれとは同一どういか別物べつぶつか、直次郎ちくじろうは此使このつかひの来りし時ときより例れいになき事ことなれば不審ふしんしき思おもひに心こころを留とどめて、始終しじう眼まなこをそゞぎけるが、歸かへる後のち姿すがたを見送りし途端とたん、不圖ふと澤海さわみのぬい紋もん我われ知らず目に映うつりぬ。

あれは何處いづこよりの使つかひと佐助さすけに問とへば、さてもよく根掘ねほりり葉掘はほり聞きたがる男おとこではなきが、人の家いへなれば使つかひの來きる事こともありと無情むじやうのこたへに、左様さやういはれては返かへすに詞ことばも無なけれと何處いづこからの使つかひひだ位ぐあいは聞きかせて呉くれても仔細さいじゆなき筈はず、喧嘩けんかかひのとげくしき言葉ことばならでもと下手したてに出いれば、はて貴様あなたなどの聞きいて益えきはなき事こと、嬢様ぢやうやうへの文ぶんなれば理由りゆうは嬢様ぢやうやうならでは知りたし、波崎なみさき様さまとて新聞しんぶんにも見ゆる議員ぎんいんさまよりの使つかひといふに、それは御親類ごせんとくでもありや、此郎こらうへお出いはなきやうなるが我が参まゐらざりし以前いぜんはお出いになりし時ときもありしかと問とふに、それくそれがくとし、聞きいて何なににすると笑わらはれて、何なににもせねと法被ほつぺの紋もんが彼の夜よの紋もんに同じおなじなれば何か心こころにかゝりて聞ききたき心持こころもちと語るに、さらば彼の車夫くるまぶを捕とらへて小指こさゆびの一つも切きる心こころなりしか、恐おそろしき執念しやくねんの奴やつ、前世ぜんぜは蛇へびでもありしやら、しかし其夜そのよの恨うらみみを忘れぬとは感心かんしんにて頼母たのぼし、恩おんをば疾はやくの昔むかしに忘れたるやうなれば、よもや恨うらみみの性根しやうこんもあるまじと思おもひしに、流石りうせきなり感心かんしんの男おとこと折まふし何なんの疳かみに障さりしやら、後に思おもはゞ恥はづかしかるべき事ことを、舌したの動うごくまゝに言い

ひけり、いつもならば沫あはを飛ばして口論くちうんもすべき直次郎ちくじろうが無言むげんに了しまりし屈托くつたくのほどは其夜そのよお聞きさまがお膝ひざもとに、泣なきの涙なみだの白狀はくじやういつはりなく、立聞たてきかば共に布子ぬのこの袖そでやしばらん此男このおとこの影かげ法師ほうしうすくなりけるをば更さらに夢ゆめにも知らざりけり。

(十)

あはれ三十一文字さんじゅういちもんじに風雅ふうがの化粧けしやうはつくるとも、いつ失うせにけん幼心おんなこころの誠實まことは愚おろに似にしものなりけり、其夜そのよふけたる燈火とうかのかけにお蘭様らんさまを驚おどかして、涙なみだにぬれし眼めのうち唯事ただことならず、疊たたみに兩手りやうてをきつと畏おそまりし直次郎ちくじろうの體てい、これは何事なにこととお蘭様らんさま心こころもとながりて、遠慮えんりよなき我われに斟酌しんしやくは無用むじやうぞ、思おもふ事はありのまゝに告つげ給たまへと優やさしき問とひに保たもちかねてはらくと膝ひざ・玉たまをば散ちらしけるが、思おもひ切きりて、我われにお暇ひまを下くださりませと一言ひとこと、あと先まへもなければ何なんの事こととも思おもはず、又また争まをひの除波じよばではなきか、いつも言いふ年寄としよりの一徹いつてつに遠慮えんりよなき小言こごなどを心こころにかけては一日いちにちの辛棒しんぼうもなるまじく、彼男かれおとことても悪氣あくきは微塵みじんもなき人ひとなれば、其方そのたの爲ためよかれとの言草ことばならんを苦くるにはすまいもの、まあ何事なにことの起おこりて、其やうに腹はらは立てしと例れいの通りとおり感かめらるゝに、否いな、否いな、何なんも言いはれましたる事ことも何なんければ、喧嘩けんかはもとよりの事こと、昨我身たのりみに愛想あいせが盡つ

きましたれば、最早此世に居る事が厭になりました、とて疊にひれ伏して泣きける。
 直次其方は死なうと思ふや、誠か、誠か、と膝を直して問ひ給ふに、嘘には死なれ申すまじ、
 いつぞや奥庭に遊びし時、お池に新旦那が後最期を承はりしが、此底のみは浮世の外の静けさ
 ならんと仰せられし、あれをば今に忘れませぬ、掻き廻さるゝやうの胸の中は、明けても暮れ
 ても暮れても明けても、寸の間のたゆみなしに静かなる時もなく、生れ落しより以來不幸不運
 の身なれば、一生を不運の中に畢りたれば我が本分は盡きまするやら、お世話になりしは今で
 幾月、嘘では御座りませぬお前様は我が爲の大恩人、お袖のかけに隠れてより面白しと思ふ事
 もをかしと思ふ事もありませんたなれど、これが世に出初めの終り、我れは明らかに覺つた事
 のあれば、もはや此いやな世には止まりませぬ。さりながら。未練のやうなれど。情深きお前
 様に無言で此世を去りまする事のつらく、お禮は澤山申したきなれど口が廻らぬは是れも口惜
 しう御座ります、お前様はいつくまでも無事に御出世をなさりませ、我れは此世には愚人に
 生れましたれば御爲にと思ふ事も叶はねど、魂は必ず御上を守りまするとて、涙に咽んで語
 り出づる言の葉かなし。
 我れは何故に君の墓はしきかを知らず、何故に君の戀しきかを知らねど、一日は一日より多く、

一時は一時より増りて、我心は君が胸のあたりへ引つけらるゝやうにて、明け暮れ御姿を見、
 れん聲を聞き、それに満足せば事なかるべけれ唯々心は火の燃ゆるやうにて我れながら分ら
 ぬ思ひに責めらるゝ果々、静かにかへりみれば、勿體なや恥かしき思ひの何處やらに潜みて、
 それゆゑの苦と曉りたる今、此身を入つ裂にして木の空にもかけたきは今日の夕ぐれの御使ひ
 を君が御縁の方よりと知りてなり、申すまじき事なれど我れは實に妬しと思ひぬ、口惜しき事
 に見てけり、しかも見ねばよかりし車夫の法被に澤瀉の紋ありしかば、我れは殆んど神經病の
 やうなれど彼の夜の車上にちらと認めし薄髭のありける男を、その、波崎とかいへる奴、
 國會議員なりとか聞けば定めし世には尊ばるゝ人ならんが其奴のやうに思はれて、これは妄念
 と幾度れもへども腦をさらねば其甲斐もなし、大恩ある君が戀人を恨めしと思ふ我れは即ち君
 が仇になりしなり、斯くて此念ひの増りゆかばいかにせん、恐ろしと思ひしよ、我身は誠に棄
 てたくなりぬ、我身の死するは君に害を加へじとてなり、よしや我が想像のあやまりにて今日
 の文には謂くあらずとも、すでに我が心の腐りはしるく、清からぬ思ひの下に忍べる上は我れ
 は最早大罪を犯せる身、表面はいかに粧ひて人目をつゝむとも明暮れ君につきままとふ心の、お
 もへば恥かし我れは俄鬼道のくるしみ微妙の御聲も身をやく炎となりぬべし、さては人心の

頼みなさ、我れながら今日までの経歴をおもふにも時に随ひて移りゆく後は我れにもあらぬ我れになりて、いかに恐ろしき所爲をなすべきか、今亡する身の御恩は萬分が一を送らねど、切めては害を加へ参らせじとのすさび、憎き奴とは思し給ふとも亡せたる後は吊はせ給へとて、真心よりの涙に詞はふるへて、疊につきたる手をあげも得せず、恐れ入つたる體、あはれとはこれをや。

(十一)

戀をうきたるものとは誰れか言ひし、戀に誠なしとは誰れか言ひし、昨日迄の述懐我れながら恥かし、直次は我れをさほごに思ひしか、我れは汝を思ふ事のそれほごにはあらざりしぞかし、我れは汝をあはれとは思ひつれど命をかけても可愛しとは思はざりし、今日の今こそ汝は眞に可愛き人になりぬ、誠ぞや、今日の今までお蘭に口づから戀しといひし人もなければ心に染みて一生の戀はせざりしなり、浮世を知らざりし小女の昔誘はれしは春風歎才智、容貌それ等の外形に心を亂して、今日の晝間の文の主、波崎といふ人にも逢ひき、斯くいはいれを不貞と思わくもつられけれど、守らぬは操ならで斑女が闇の扇の色に我れ秋風のたれし身なり、

捨てられし人に怨みは愚痴なれど、つらき浮世に我れは弄ばれて、恐ろしとおぼすな、いつしか心に魔神の入りかはりしなるべく、君の前には肩身も狭き我れは悪人の一人なるべし、それをも更に厭ひ給ふまじきか、恐ろしとおぼさぬか、悪人にも厭ひ給はずば、悪魔にても恐ろしとおぼさずば、今日より蘭が心の良人となりて、蘭をば君が妻と呼ばせ給へ。さりながら此の世の縁はなきものと諦め給へ、我れも諦めぬべし、たましく嬉しき人の心を知りながら、これは我が口より言ひ出がたき事、心ぐるしさの限りなれど浮世に不運の寄合とおぼせかし、我れを眞に可愛しとならば其命を今此場にて賜はるまじきや、不仁の詞、不慈の心、世の常の中にも然る事は言はれまじきに、まして勿體なき心の底を知り抜たる今、此様の情なき願ひに血を吐く思ひの我が心中を酌み給へ、今日の文の主は我が昔の戀人、今よりは仇になりて我が心のほだしは彼れのみ、斷たずば止むまじき執着を是れをも戀といふかや、我れは知らねど憎きは彼の人なり、如何にもしての恨みは日夜に絶えねど我が手を下していざとあらんは、察し給へ、また後に入用のある身の上つらく、慾とおぼすな父が遺志の繼ぎたさになり、今二十五年の我が命に代りて御身を棄て物に暗夜の足場よき處をもとめていかやうにも爲して給はらずや、此様に恐ろしき女子に我れは何時より成けるやら、死なる、身ならば我

れも死にたけれど、常に涙は見せし事なきお蘭さまの襦袢の袖にぬぐふ露あり。
君が恨みの澤海は正しく其人と我れはたしかに思ふぞかし、染井の宿に飛ばす車の折から悪き
我が門前にての出来事なれば、知られてなるまじの千里一飛びに負傷は正しく其人の所爲なれ
と、原因は我れを恐るゝよりの事、れもへば何も我が罪なりし、君をば我手に救ひしにはあら
で、言はゞ死地に導くやうの成行、何もこれまでの契りと御命を賜はれや、さりながら斯くの
ふ君の運つよくは逃るゝ丈のがれて美事其場をさへ外れらるれば夜にまぎれて此邸までの途中
に難をさけ、門より内に入れば世は安泰なり、今知る通りの人氣のなきに、出這入るものとして
は犬くゞりに犬の子のかけもなく、女子あるじなれば警察の眼にもかゝるまじ、ともかくもし
て逃れんと思召せと呷さぬ。

詞はなくて閑居たりし直次郎、もはや何も仰せられませぬ、會得がつきました、僞りにても此
世に思ひがけざりし言葉聞きて遣る懐みも今はなき身、さらでも今宵は過ぐさじの決心で
ありしを、御所望にて斃れんは願ふてなき事、美事にやつて御目にかくべし、今日までは思立
ちしことの何事も通らで浮世に意氣地なしの鑑なりける身なれど、一心たもひ籠たるれ前様が
ね聲がゝりにて、身をすて物に此度の仕事は天晴れ直次も男なりけりとれ心だけに賞めて頂か

ば本望、其場に仆れても捕へられての絞木の上にも思ひ残す事は御座りませぬ、唯恨めしきは
逃れらるゝ丈のがれて来よとの御言葉、さりとはれ情とも申すまじ、逃れんと思ふ卑怯にて人
一人やられんものか、我れは愚人なれば世の利口ものが所爲は知らず、相手が仆れるか我れが
死ぬか、二つに一つの瀬戸際に我れ助からんの汚き心にて、後髪を牽かるゝものありては潔き
本望を遂げらるまじ、先の手に殺されなばそれまで、仕遂げて後に捕へられぬとも御名は決し
て出すまじければ、案じ給ふな、罪は我れ一人なり、首尾よき曉に我れ命冥加ありて其場を
のがるゝは萬一なれど然りとも再びれ顔をば見申さじ、いかなる事より罪の願はれて最惜しき
君に連累の咎口惜し、何も直次は今日限りの暇この世に無きものと思しすてられて事の成否
は世の取沙汰に聞き給へ、御縁もこれまで我れはいさぎよく死にまする、と思ひ定めては涙も
こぼさねど、悄然とせしかけ障子に映りて、長く、長く、長く、れ蘭が身のあらん限り此夜の
事忘れがたかるべし。

(十一)

直次郎はその夜の暗にまぎれて松川屋敷を出でぬ、明けて驚きし佐助夫婦が、常は兎角に小言

もいひけれど如何に定めて斯る仕義と流石に胸安からねば評議とりくに、おそよは朝なく手合する神々にも心得ちがひのなからんやうにと祈りぬ。

ほどを隔て、冬のはじめつ方、事は那町の波崎が本宅前に起りぬ、なにがしの大曾に幹事の任を帯びて席上演説に喝采わくやうなる中を終れば、酔のまぎれの車上ゆるくと半に夢をのせて歸り來りし表門の前、忽ち物かけより跳り出たる男の母衣に手をかけて後さまにと引けば、たまらず覆へる處を取つて押へて首筋かゝんとひらめかす白刃のさりと鈍かりしか頬先少しかすりて、薄手の疵に狼藉の呼聲あたり高く、今はこれまでとや迷足何方に向ひしか、たちまち霞とかげを消して誰れともわからずなりける、明日は新聞に標題の文字ことごとくしく、ある黨派の壯士なるべし、何々俱樂部の誰れとやら嫌疑のかゝりて其筋に引かれぬといふもあれば、遂には何者の業とも知れで一月のむには風説のあともなくなりぬ、疵は猶さら半月の療治に可憐男の直も下がらず、よし痕は遺るとも向ひ疵とてはこれんか可笑し、才子の君、利口の君萬々歳の世に又もや遣りそねて身は日蔭者の此世にありとも天地ひろからぬ直次郎はいかにしたる、川に沈みしか山に隠れしか、もしくは心機一轉まことの人間になりしか、それより怪しきは松川屋敷の末なり、此事ありて三月ばかりの後、門は立派に敷石の壞れも直りて、

時

日毎に植木や大工の出入りしげきは主の替りしなるべし、されば佐助夫婦お蘭も何處に行きける、世間は廣し、汽車は國中に通ずる頃なれば。

大つともり

(上)

井戸は車にて綱の長さ十二尋、勝手は北向きにて師走の空のから風ひゆうくと吹ぬきの寒さ、お、垢へがたと電の前に火なぶりの一分は一時にのびて、割木ほどの事も大盛にして叱りとはさる、婢女の身つらや、はじめ受宿の老嬢さまが言葉には御子様方は男女六人、なれども常住家にお出あそばすは御總領と末お二人、少し御新造は機嫌かひなれど、目色顔色を呑みこんで仕舞へば大した事もなく、結句おだてに乗る質なれば、御前の出様一つて半襟半がけ前垂の紐にも事は缺くまじ、御身代は町内第一にて、その代り吝事も二とは下らねど、よき事には大旦那が甘い方ゆゑ、少しのほまちは無き事もあるべし、厭になつたら私の所まで端書一枚、こまかき事は入らず、他所の口を捜せとならば足は惜しまじ、何れ奉公の秘傳は裏表と言ふて聞かされて、さても恐ろしき事を言ふ人と思へど、何も我心一つて又この人のお世話には成るまじ、勤め大事に骨さへ折らば御氣に入らぬ事も無き筈と定めて、かゝる鬼の主をも持つぞかし。

目見まの濟みて三日の後、七歳になる娘さま踊りのさらひに午後よりとある、其支度は朝湯にみがき上げてと霜氷る晩、あたゝかき寢床の中より御新造灰吹をたゝきて、これこれと、此詞が目覺しの時計より胸にひびきて、三言とは呼ばれもせず帯より先に濡かけの甲斐々々しく、井戸端に出れば月かけ流しに残りて、肌を刺すやうな風の寒さに夢を忘れぬ、風呂は据風呂にて大きからねど、二つの手桶に溢るゝほど汲みて、十三は入れねばならず、大汗になりて運びけるうち、輪寶のすがりし曲み齒の水ばき下駄、前鼻緒のゆる／＼になりて、指を浮かさねばたわいの無きやうなりし、其の下駄にて重き物を持ちたれば足もと覺束なくて流し元の水にすべり、あれと言ふ間もなく横にころべは井戸側にて向ふ脇したゝかに打ちて、可愛や雪はづかしき膚は紫の生々しくなりぬ。手桶をも其處に投出して一つは満足なりしが一つは底ぬけに成りけり、此桶の價何ほど知らねど、身代これが爲に潰れるかのやうに御新造の額際に青筋あそろしく、朝飯のお給仕より睨まれて、其日一日物も仰せられず、一日おいてよりは箸の上げ下しに、此家の品は無代では出来ぬ、主の物として粗末に思ふたら罰が當るぞえと明け暮れの談、來る人毎に告げられて若さ心には耻かしく、其後は物ごとに念を入れて、遂に粗忽をせぬやうになりぬ、世間に下女つかふ人も多けれど、山村ほど下女の替る家はあるまじ、月に二

人は平常の事、三日四日に歸りしもあれば一夜居て逃出てしもあらん、開闢以來を尋ねたらば折る指に彼の内儀さまが神口おもはるゝ、思へばお峯は辛防もの、あれに酷く當つたらば天罰たちどころに、此後は東京廣しといへども、山村の下女になる者はあるまじ、威心なもの、美事の心がけと賞めるもあれば、第一容貌が申分なしたと、男は直きにこれを言ひけり。秋より唯一人の伯父が煩ひて、商賣の八百や店もいつとなく閉ちて、同じ町ながら裏屋住居になりしよしは聞けど、むづかしき主を持つ身の給金を先きに貰へば此身は賣りたるも同じ事、見舞にと云ふ事もならねば心ならねど、お使ひ先の一寸の間とても時計を目當にして幾足幾町と其しらの苦しさ、馳せ抜けても、とは思へど悪事千里といへば折角の辛防を水泡にして、お暇ともならば愈々病人の伯父に心配をかけ、瘦世帯に一日の厄介も氣の毒なり、其内にはと手紙ばかりを遣りて、身は此處に心ならずも口を送りける。師走の月は世間一轉物せわしき中を、こと更にえらみて綺羅をかざり、一昨日出そろひしと聞く某の芝居、狂言も折から面白き新物の、これを見のがしてはと娘共の騒ぐに、見物は十五日、珍らしく家内中との觸れになりけり、此お供を嬉しがるは平常のこと、父母なき後は唯一人の大切な人が、病ひの床に見舞ふ事もせて、物見遊山に歩くべき身ならず、御機嫌に違つたらばそれまでとして遊びの代りの

暇を願ひしに流石は日頃の勤めぶりもあり、一日すぎでの次の日、早く行きて早く歸れど、さりとどは氣まゝの仰せに有難うぞんじますと言ひしは覺えて、やがては草の上に小石川はまだかまだかと遅緩かしがりぬ。初音町といへば床しけれど、世をうぐひすの貧乏町ぞかし、正直安兵衛とて神は此頭に宿り給ふべき大藥罐の額きはびかゝとして、これを目印に田町より菊坂あたりへかけて、茄子大根の御用をもつとめける、薄元手を折かへすなれば、折から直の安うて嵩のある物より外は棹なき舟に乗合の胡瓜、苞に松茸の初物などは持たで、八百安が物は何時も帳面につけたやうなど笑はるれど、最負は有がたきもの、曲りなりにも親子三人の口をぬらして、三之助とて八歳になるを五厘學校に通はするほどの義務もしけれど、世の秋つらし九月の末、俄かに風が身にしむといふ朝、神田に買出しの荷を我が家までかつぎ入れると其まゝ、發熱についで骨痛みの出しやら、三月ごしの今日まで商ひは更なる事、段々に喰べ減らして天秤まで賣る仕儀になれば、表店の活計たちがたく、月五十錢の裏屋に人目の耻を厭ふべき身ならず、又時節があらばどて引越しもむざんや草に乗するは病人ばかり、片手に足らぬ荷をからけて、同じ町の隅へと潜みぬ。お峯は車より下りて其處此處と尋ねるうち、風紙風船などを軒につるして、子供を集

めたる駄菓子やの門に、もし三之助の交じりてかど覗けど、影も見えぬに落膽して思はず往來を見れば、我が居るよりは向ひの側を瘦さすの子供が藥瓶もちて行く後姿、三之助よりは丈も高く餘り瘦せたる子と思へど、標子の似たるにつか／＼と驅け寄りて顔をのぞけば、やあ姉さん、あれ三ちゃんであつたか、さても好い處でと伴はれて行くに、酒やと芋やの奥深く、滑板がた／＼と滑くらき裏に入れば、三之助は先へ驅けて、父さん、母さん、姉さんを連れて歸つたと門口より呼び立てぬ。

何と峰が来たかど安兵衛が起上れば、女房は内職の仕立物に餘念なかりし手をやめて、まわまわこれに珍らしいと手を取らぬばかりに喜ばれ、見れば六疊一間に一間の戸棚唯一つ、箆箆長持はもとより有るべき家ならねど、見し長火鉢のかけも無く、今戸焼の四角なるを同じ形の箱に入れて、これがそも／＼此家の道具らしきもの、聞けば米櫃も無きよし、さりどは悲しき成行、師走の空に芝居みる人もあるをとお峯はまづ涙ぐまれて、まづ／＼風の寒きに寝てお出なされませ、と壁焼に似し薄蒲團を伯父の肩に着せて、さぞ／＼澤山の御苦勞なさりましたろ、伯母様も何處やら瘦せが見えまする、心配のあまり頰ふて下さりますな、それでも日増しに快い方で御座んす、手紙で標子は聞けど見れば氣にかゝりて、今日のお暇を待ちに待つて新と

の事、何家などは何うでも宜ござります、伯父様御全快にならば表店に出るも譯なき事なれば一日も早く早く成つて下され、伯父様に何ぞぞ存じたれど、道は遠し心は急く、車夫の足が例より遅いやうに思はれて、御好物の館屋が軒も見はぐりました、此金は少々なれど私が小遣の残り、麴町の御親類よりお客のありし時、その御隠居さます白のお起りなされてお苦しみのありしに、夜を徹してお腰を揉みたれば、前垂でも買へどて下された、それや、これや、お家は堅けれど他處よりの方が最良になされて、伯父さま喜んで下され、勤めに／＼も御座んせぬ、此巾着も半襟もみな頂き物、襟は質素なれば伯母さま掛けて下され、巾着は少し形を替へて三之助がお辨當の袋に丁度宜いやら、それでも學校へは行きますか、お清書があらは姉にも見せてとそれからそれへ言ふ事長し。七つの年に父親得意場の蔵普請に、足場を昇りて中ぬりの泥鰯を持ちながら、下なる奴に物いひつけんと振向く途端、曆に黒ぼしの佛滅とでも言ふ日でありしか、年来馴れたる足場をあやまりて、落たるも落たるも下は敷石に模様への處ありて、掘ちこして積みたてたる切角に頭腦をた／＼か打ちつけたれば甲斐なし、哀れ四十二の前厄と人々後に恐ろしがりぬ、母は安兵衛が同胞なれば此處に引取られて、これも二年の後はやり風俄かに重くなりて亡せられたれば、後は安兵衛夫婦を親として、十八の今日まで思はいふに及ばず、

姉さんと呼ぶれば三之助は弟のやうに可愛く、此處へ此處へと呼んで背を撫で顔を覗いて、さぞ父さんが病氣で淋しく辛かる、お正月も直きに來れば姉が何ぞ買つて上げますぞえ、母さんに無理をいふて困らせして成りませぬと教ふれば、困らせる處か、お峯聞いて呉れ、歳は八つなれど身軀も大きき力もある、私が寐てからは稼ぎ人なしの費用は重なる、四苦八苦見かねたやら、表の障物やが野郎と一處に、親を買ひ出しては足の及ぶだけ擔ぎ廻り、野郎が八錢うれば十錢の商ひは必らずある、一つは天道さまが奴の孝行を見通してか、現なり角なり藥代は三が働き、お峯はめて遣つて呉れとて、父は蒲團をかぶりて涙に聲をまぼりぬ。學校は好きにも好きにもつひに世話をやかしたることなく、朝めし喰べると駈出して三時の退出に路草のいたづらした事なく、自慢ではなけれど先生さまにも褒め物の子を、貧乏なればこそ親を擔がせて、此寒空に小さな足に草鞋をはかせる親心、察して下されとて伯母も涙なり。お峯は三之助を抱きまめて、さてもさても世間に無類の孝行、大がらとて八歳は八歳、天秤肩にして痛みはせぬか、足に草鞋くひは出來ぬかや、堪忍して下され、今日よりは私も家に歸りて伯父様の介抱活計の助けもします、知らぬ事とて今朝までも釣瓶の繩の水をつらがつたは勿体ない、學校さかりの年に親を擔がせて姉が長い着物きて居らりやうか、伯父さま暇を取つて下され、

私は最早奉公はよしますとて取亂して泣きぬ。三之助はとどなく、ほろりほろりと涙のこぼれるを、見せじどうつ向きたる肩のあたり、針目あらはに衣破れて、此肩に擔ぐか見る目も辛し、安兵衛はお峯が暇を取らんと言ふにそれは以ての外、志しは嬉しけれど歸りてからが女の働き、そののみか御主人へは給金の前借もあり、それ、と言ふて歸られるものでは無し、初奉公が肝心、辛防がならで戻つたと思はれてもならねば、お主大事に勤めて呉れ、我が病も長くはあるまじ、少しよくば氣の張弓、引ついで商ひもなる道理、あ、今半月の今歳が過れば新年は好き事も來るべし、何事も辛防々々、三之助も辛防して呉れ、お峯も辛防して呉れとて涙を歛めぬ。珍らしき客に馳走は出來ねど好物の今川焼、里芋の煮ころがしなど、澤山たべろよといふ言葉が嬉し、苦勞はかけまじと思へどみすく大晦日に迫りたる家の難儀、胸につかへの病は癪にあらねどそも床に就きたる時、田町の高利かしより三月まばりどて拾圓借りし、一圓五拾錢は利とて手に入りしは八圓半、九月の末よりなれば此月は何うでも約束の期限なれど、此中にて何となるべきぞ、額を合せて談合の妻は人仕事に指先より血を出して日に拾錢の稼ぎも成らず、三之助に聞かすとも甲斐なし、お峯が主は白金の湯町に貸長屋の百軒も持ちて、あがり物ばかりに常綺羅美々しく、我れ一度お峯への用事ありて門まで行きしが、

千兩にては出来まじき土藏の普請、羨ましき富貴と見たりし、その主人に一年の馴染、氣に入りの奉公人が少々の無心を肯かぬとは申されまじ、此月末に書かへを泣きつけて、をどりの一兩二分を此處に拂へば又三月の延期にはなる、斯くいはい慾に似たれど、大道餅買ふてなり三夕日の難煮に箸を持たずば出世前の三之助に親のある甲斐もなし、晦日までに金二兩、言ひにくいともこの才覺たのみ度よしを言ひ出しけるに、お峰志ばらく思案して、よろしう御座んす體に受合ひました、むづかしくばお給金の前借にしてなり願ひまじしよ、見る目と家内とは違ひて何處にも金銭の埒は明きにくけれど、多くでは無しそれだけで此處の始末がつくなれば、理由を聞いて厭は仰せらるまじ、それにつけても首尾損ふては成らねば、今日は私は歸ります、又の宿下りは春永、その頃には皆々うち寄つて笑ひたきもの、とて其金を受合ける。金は何として送附す、三之助を貰ひにやるかどあれば、ほんにそれで御座んす、平日さへあるに大晦日といふては私の身に隙はあるまじ、道の遠きに可憐さうなれど、三ちやんを頼みます、晝前のうちに必らず必らず支度はして置ますとて、首尾よく受合ひてお峰は歸りぬ。

(下)

石之助とて山村の總領息子、母の異ふに父親の愛も薄く、これを養子に出して家督は妹娘の中にどの相談、十年の昔より耳に挟みて面白からず、今の世に勘當のならぬこそをかしかれ、思ひのまゝに遊びて母が泣きをと父親の事は忘れて、十五の春より不料簡をはじめぬ、男振にがみありて利發らしき眼ざし、色は黒けれど好き風采とて四隣の娘どもが風説を聞えけれど、唯亂暴一途に品川へも足は向くれど騒ぎは其座限り、夜中に車を飛ばして車町の破落戸がもどをたき起し、それ酒買へ着と、紙入れの底をはたきて無理を通すが道樂なりけり、到底これに相續は石油蔵へ火を入れるやうなもの、身代烟となりて消え残る我等何とせん、あどの兄弟もふびんと母親、父に讒言の絶間なく、さりとてこれを養子にと申受くる人此世にはあるまじ、どかくは有金の何ほどを分けて、若隠居の別戸籍にど内々の相談は極まりたれど、本人うはの空に聞流して手に乗らず、分配金は一萬、隠居扶持月々おこして、遊興に關を据えず、父上なくならば親代りの我れ、兄上と捧げて電の神の松一本も我が託宣を聞く心ならば、いかにもいかにも別戸の御主人になりて、此家の爲には働かぬが勝手、それ宜しくば仰せの通りになりましたよど、何うでも服がらせを言ひて困らせける。去歲にくらべて長屋もふえたり、所得は倍にと世間の口より我家の積子を知りて、をかしやをかしや、其やうに延ばして誰が物にする氣

ぞ、火事は燈明皿よりも出るものぞかし、總領と名のる火の玉がころがるとは知らぬか、やがて巻きあげて貴様たちに好き正月をさせるぞと、伊皿子あたりの貧乏人を喜ばして、大晦日を當てに大飲みの場所もさだめぬ。

それ兄様のお歸りと云へば、妹ども恐がりて贈れ物のやうに障るものなく、何事も言ふなりの通るに一段と我儘をつのらして、炬燵に兩足、酔ざめの水を水をと狼藉はこれに止めをさしぬ、憎しと思へど流石に義理はつらきものかや、母親かけの毒舌をかくして風引かぬやうに小振巻何くれと枕まで宛がひて、明日の支度のむしり田作、人手にかけては粗末になるものと聞えよがしの經濟を枕もとに見えらせぬ。正午も近づけばお峯は伯父への約束ころもどなく、御新造が御機嫌を見はからふに暇も無ければ、僅かの手すきに頭りの手拭ひを丸めて、此ほどより願ひましたる事、折からお忙がしき時心なきやうなれど、今日の晝過ぎにと先方へ約束のきびしき金どやら、お助けの願はれますれば伯父の仕合せ私の喜び、いついつまでも御恩に着まするとて手をすりて願みける、最初のひ出でし時にやふやながら結局は宜しとありし言葉を頼みに、又の機嫌むつかしければ五月蠅く言ひては却りて如何と今日迄も我慢しけれど、約束は今日といふ大晦日のひる前、忘れてか何とも仰せの無き心もとなさ、我には身に迫りし大事と言

ひにくきを我慢して斯くと申しける、御新造は驚きたるやうの呆れ顔して、それはまあ何の事やら、成ほどお前が伯父さんの病氣、ついでに借金の話も聞きましたが、今が今私の宅から立換へやうとは言はなかつた筈、それはお前が何その間違へ、私は毛頭も覺えの無き事、とこれが此人の十八番とはてもさても情なし。

花紅葉うるはしく仕立し娘たちが春着の小袖、襟をそろへて袴を重ねて、眺めつ眺めさせて喜ばんものを、邪魔ものゝ兄か見る目うるさし、早く出てゆけ疾く去ねとおもふ念ひは口にこそ出さね、もち前の瘡癩肚裡に堪へがたく、智識の坊さまが目には御覽じたらば、炎につままれて身は黒煙りに心は狂亂の折ふし、言ふ事もいふ事、金は敵藥ぞかし、現在うけ合ひしは我れに覺えあれど何のそれを厭ふことかは、大方お前が聞ちがへと建きりて、煙草輪にふき私は知らぬと澄ましけり。

えい大金でもあることか、金なら二圓、しかも口もから承知して置きながら十日とたぬに毫ろくはなざるまじ、あれ彼の懸け硯の抽斗にも、これは手つかずの分と一束、十か二十か悉皆とは言はず唯二枚にて伯父が喜び伯母が笑顔、三之助に雑煮の箸も把らざる、と言はれしを思ふにも、何うでも欲しきは彼の金予、うらめしきは御新造とお峰は口惜しさに物も言はれず、

常々となしき身は理屈づめにやり込める術もなく、すどくと勝手へ立てば正午の鐘の音たかく、かゝる折ふし殊更胸にひびくものなり。
お母さまに直様お出下さるやう、今朝よりのお苦しみに、潮時は午後、初産なれば旦那取止めなくお願なされて、お老人なき家なれば混雑お話しにならず、今が今お出でをとて、生死の分目といふ初産に、西應寺の娘がもとより迎ひの車、これは大晦日とて遠慮のならぬものなり、家のうちには金もあり、放蕩どのが寝ては居る、心は二つ、分けられぬ身なれば恩愛の重きに引かれて、車には乗りけれど、かゝる時氣樂の良人が心根にく、今日あたり沖釣りでなまきものと、太公望がはり合ひなき人をつくくと恨みて御新造いてられぬ。
行きちがへに三之助、此處と聞きたる白金臺町、相違なく尋ねあて、我が身のみすばらしきに姉の肩身を思ひやりて、勝手口より恐々のぞけば、誰れぞ来しかと竈の前に泣き伏したるお峰が、涙をかくして見出せば此子、あゝ宜く来たとは言はれぬ仕儀を何とせん、姉さま這入つても叱られはしませぬか、約束の物は貰つて行かれますか、旦那や御新造に宜くお禮を申して来いと父さんが言ひましたと、仔細を知らぬれば喜び顔つらや、まづ待つて下され、少し用もあればと馳せ行きて内外を見廻せば、顔さまがたは庭に出て追羽子に餘念なく、小僧どのは

まだお使ひより歸らず、お針は二階にてしかも聾なれば仔細なし若旦那はと見ればお居間の炬燵に今ぞ夢の眞最中、拜みまする神さま佛さま、私は悪人になります、成りたうは無ければ成らねばなりませぬ、罰をお當てなさらば私一人、遣ふても伯父や伯母は知らぬ事なればお免しなさりませ、勿躰なけれど此金のすまして下されと、かねて見置きし硯の抽出より、東のうちを唯二枚、つかみし後は夢とも現とも知らず、三之助に渡して歸したる始終を見し人なしと思へるは愚かや。

その日も暮れ近く旦那つりより恵比須顔して歸らるれば、御新造も續いて、安産の喜びに送りの車夫にまで愛想よく、今宵を仕舞へば又見舞ひまする、明日は早くに妹共の誰れなりとも、一人は必らず手傳はすると言ふて下され、さて御苦勞と蠟燭代などを遣りて、やれ忙がしや誰れぞ暇な身軀を片身かりたきもの、お峰小松菜はゆで、置いたか、數の子は洗つたか、大旦那はお歸りになつたか、若旦那は、とこれは小聲に、まだと聞いて額に皺を寄せぬ。
石之助其夜はおとなしく、新年は明日よりの三ヶ日なりとも、我が家にて祝ふべき筈ながら御存じの締りなし、堅くるしき袴づれに挨拶も面倒、意見も實に聞あきたり、親類の顔に美しく

きもなければ見たしと思ふ念もなく、裏屋の友達がもとに今宵約束も御座れば、一先暇として何れ春永に頂戴の數々は願ひまする、折かられ目出度失先、お歳暮には何ほど下さりますかと朝より寝込みて、父の歸りを待ちしは此伴なり、子は三界の首枷といへど、まこと放蕩を手に持つ親ばかり不幸なるは無し、切れぬ縁の血筋といへば有るほどの悪戯を盡して瓦解の曉に落ちてむは此淵、知らぬと言ひても世間のゆるさねば、家の名をしく我が顔はづかしきに惜しき倉庫をも開くぞかし、それを見込みて石之助、今宵を期限の借金が御座る、人の受けに立ちて判を爲たるもあれば、花見のむしろに狂風一陣、破落戸仲間に遣る物を遣らねば此納まりむづかし、我れは詮方なけれど名前に申わけなしなど、つまりは此金の欲しと聞ぬ。母は大方かゝる事と今朝よりの懸念うたがひなく、幾干とねだるか、ぬるき旦那どの、處置はがゆしと思へど、我れも口にては勝がたき石之助の辯に、れ峰を泣かせし今朝とは變りて父が顔色いかにとばかり、折々見やる尻目ねそろし、父は靜かに金庫の間へ立ちしが聽て五十圓束一つ持ち来て、これは貴様に遣るではなし、まだ縁づかぬ妹どもがふびん、姉が良人の顔にもかかる、此山村は代々堅氣一方に正直律義を眞向にして、悪い風説を立てられた事もなき筈を、天魔の生れ變りか貴様といふ悪者の出来て、無き餘りの無分別に人の懐でも覗ふやうになら

ば、恥は我が一代にとゞまらず、重しといふとも身代は二の次、親兄弟に恥を見するな、貴様にいふとも甲斐は無けれど尋常ならば山村の若旦那とて、入らぬ世間に悪評もつけず、我が代りの年禮に少しの勞をも助くる筈を、六十に近き親に泣きを見するは罰あたりでなきか、子供の時には本の少しものぞいた奴、何故これが分りをらぬ、さあ行け、歸れ、何處へでも歸れ、此家に恥は見するなとて父は奥深く遣入りて、金は石之助が懐中に入りぬ。

お母様御機嫌よう好い新年をお迎へなされませ、左様ならば参りますと、暇乞わざと恭しく、お峯下駄を直せ、お玄關からお歸りではないお出かけたぞとづぶしく大手を振りて、行先は何處、父が涙は一夜の騒ぎに夢とやらならん、持つまじきは放蕩息子、持つまじきは放蕩を仕立る繼母ぞかし。鹽花こそふらね跡は一先掃き出して、若旦那退散のよろこび、金は惜しけれど見る目も憎ければ家に居らぬは上々なり、何うすれば彼のやうに圖太くなられるか、あの子を生んだ母さんの顔が見たい、と御新造例に依つて毒舌をみがきぬ。お峯は此出来事も何とて耳に入るべき、犯したる罪の恐ろしさに、我れか、人か、先刻の仕業はと今更夢路を辿りて、おもへば此事あらはれずして済むべきや、萬が中なる一枚とても數ふれば目の前なるを、願ひ

の額に相應の員數手近の處になくなりしとあらば、我れにしても疑ひは何處に向くべき、調べられなば何ん、ん、何といはん、言ひ抜けんは罪深し、白状せば伯父が上にもかゝる、我罪は覺悟の上なれど物堅き伯父様にまで濡れ衣を着せて、干されぬは貧乏のならひ、かゝる事もするものと人の言ひはせぬか、悲しや何としたらよかる、伯母様に疵のつかぬやう、我身が頓死する法はなきかと目は御新造が起居にまたがひて、心はかけ硯のもとにさまよひぬ。

大勘定として此夜あるほどの金をまとめて封印の事あり、御新造それ／＼と思ひ出して、懸け硯に先程、屋根やの太郎に貸附のもどり彼金が二十御座りました、お峯、お峯、かけ硯を此處へと奥の間より呼ばれて、最早此時わが命は無きもの、大旦那が御目通りにて始めよりの事を申し、御新造が無情そのまゝに言ふてのけ、術もなし法もなし正直は我身の守り、逃げもせず隠れもせず、怨かまらねど盗みましたと白状はしましよ、伯父様同腹で無きだけは何處までも陳べて、聽かれずば甲斐なし其場で舌かみ切つて死んだなら、命にかへて嘘とは思しめすまじ、それほど度胸すわれど奥の間へ行く心は屠所の羊なり。

お峯が引出したるは唯二枚、残りは十八あるべき筈を、いかにしけん束のまゝ見えすとて底を

かへして振へとも甲斐なし、怪しきは落散りし紙切れにいつ認めしか受取一通。

ひき出しの分も拜借致候

石之助

さては放蕩かと人々顔を見合せてお峰が詮議は無かりき、孝の餘徳は我れ知らず石之助の罪になりしか、いや／＼知りて序に被りし罪かも知れず、さらば石之助はお峰が守り本尊なるべし、後の事しりたや。

經つくるゑ

(一)

衰れ手向の花一枝に千年のちぎり萬年の情をつくして、誰れに操の身はひとり住、あたら美形を月花にそむけて、世は何時ぞとも知らず顔に、繰るや珠數の緒の引かれては御佛輪廻にまよひぬべし、ありしは何時の七夕の夜、なにと盟ひて比翼の鳥の片羽をうらみ、無常の風を連理の枝に憤りつ、此處閑窓のうち机上の香爐に絶えぬ烟の主はと問へば答へは、ぼろり繻袴の袖に露を置きて、言はぬ素性の聞きたきは無理か、かくすに顯はるゝが世の常ぞかし。

さむれば夢のあともなければ、悟らぬ先の誰れも誰れも思ひを寄せしは名か其人か、醫科大學の評判男に松島忠雄と呼ばれて其頃二十七か八か、名を聞けば束髮の薔薇の花やがて笑みをつくり、頸巻のはんけち俄かに影を消して、途上の默禮をも千歳の名譽とうれしがられ、娘もつ親幾人に仇敵の思ひをさせて我が賀がねにとそれも道理なり、故郷は静岡の流石に士族出だけ人品高尚にて男振申分なく、才あり學あり天晴れの人物、今こそ内科の助手といへども行末

の望みは十指のさす所なるを、これほどの人他人に取られて成るまじとの意氣ごみにて、賀さま拂底の世の中なればにや華族の姫君、高等官の令嬢、大商人の持參金つきなど彼れよ此れよと申込みの口々より、小町が色を銜ふ島田鬚の寫眞鏡、式部が才にはこる英文和譯、つんで机上に堆けれども此男何の望みありてかあらずか、仲人が百さへづり聞ながしにしてそれなりけりとは訝しからずやうたがひは懸かる柳暗花明の里の夕、うかるゝ先きの有りやと見れど品行方正の受合人多ければ事はいよく闇黒になりぬ、さりながら怪しきは退院がけに何時も立寄る其れの家、雨はふれど雪は降れど其處に轅棒おろさぬ事なしと口がさなき車夫の誰れに申せしやら、それからそれと傳はりて想像のかたまりは影となり形となり種々の噂となり、人知れず氣をもみ給ふ御方もありし、其中に別けて苦勞性の或るお人ゑのびやかに跡をやつけ給ひし、探りに探れば扱も燈臺のもと暗さよ、本郷の森川町とかや神社のうしろ新坂通りに幾構への生垣ゆひ廻せし中、押せば開く片折戸に香月そのと女名まへの表札かけて折々もるゝ琴のゑのび音、軒端の梅に鶯はづかしき美音をば春の月夜のおぼろげに聞くばかり、ちらり姿は夏の簾ごし憎や誰れゆゑ惜みてか薬師さまの御縁日にそゝろあるきをするでもなく、人まち顔の立姿門に拜みし事もなければと美人と言ふ名この界限にかくれなしと聞くは、扱こそ彌々學士の

外妾が、よしや令嬢ふればとてお里はいづれ知れたもの、其様なものに鼻毛よまれて果は跡あ
 しの砂の御用心さりとてはお笑止やなど、憎まれ口言ちらせと眞の處は妬し妬しの積りか、
 る人々の瞋恚のはむらが火柱など、立騰つて罪もない世上を驚かすなるべし。

(二)

黒ぬり塚の表がまへとお勝手むきの經濟は別ものぞかし、推はかりに人の上は羨まぬものよ、
 香月左門といひし舊幕臣、彼の學士の父親とは社祢の肩をならべし間なるが、維新の變に彼れ
 は静岡のお供、これは東臺の五月雨にながす血汐の赤き心を首尾よく顯はして露とや消えし、
 水さかづきして別れし限りの妻へ紀念が此美人なり、人の不幸は生れながらに後家さまの親を
 持ちて、すがる乳房の甘へながらも父といふ味夢にも知らず、物ごころ知るにつけて親といへ
 ば二人ある他人のさまの羨ましさに、いとしき事問ひかけては幾度母の袖しぼらせしが、その
 母にも又十四といふとし果敢なく別れて今は身一つのいたはしさ、かの學士ごの其病床に不
 圖まねがれて盡力したるが原因となり、くり返す昔のゆかりも捨てがたく、引ついで行通し
 けるが、見るにも聞くにも可愛想なり氣のどくなり、これが若しもおきやん娘の飛びかへりな

とならば知らぬ事、世といは門の戸の外をも見ず、母さまとならではね湯にも行かじ、観音
 さまのお参りもいやよ、芝居も花見も母さま御一處ならではと此一もこのかけに隠れて、姿こ
 そ島田の大人づくらせたれど正の處は人形だいて遊びたきほどの嬰兒さまが俄かに落し木の下
 の猿同様、涙のほかは何の考へもなくお民と呼ぶ老婢の袖にすがつて、私も一處に棺に入れよ
 とて聞きわけもなく泣き入りし姿のあくまでとけなきが不慙にて、素より誰れたのまねば義
 務といふ筋もなく、恩をきせての野心もなければそれより以來の百事萬端、身に引うけて世話
 をすること眞の兄弟も出来ぬ業なり、これを色眼鏡の世の人にはほろ酔の膝まくらに耳の垢で
 も返らせる處が見ゆるやら、さりとては學士さま冤罪の訴へどころもなし。
 今の世の女子教育を賛成といひがたき心よりお園にも學校がよひ爲せたくなく、死に路でもな
 き歸宅がけの一時を此家に寄りては讀書算術、思ふやうに教へて見れば肥體もよく理解も早
 く、學士はいよゝ可愛がりしが、お園すこしの感じもなく、有がたし嬉しなど口の先に出す
 どころか顔を見るさへ嫌がりて、日々の誓古にも書物の事より外に同ふことの無きは勿論、返
 事をさへ打どけて言ひし事はなく、強て問へば泣き出しさうな景色を見るお民氣の毒さ限りな
 く、何歳までも嬰兒さまで致し方が御座りませぬ、流石に氣のおけるお他人には少し大人らし

くお成り遊ばせど、お心安だての我まゝか、甘へ氣味であの通りの御達慮なき、ちと御呵り遊ばして下さりませと極り文句に花を持たされど學士は更に氣にも止めず、その幼きが尊きなり、反對に跳かへられなばお民どのにも療治がむつかしからん、圖さま我れに遠慮は入らず、厭な時は厭といふがよし、我れを他人の男と思はず母様同様甘へ給へと優しく慰めて日毎に通へば、なほさら五月蠅く厭はしく車のおとの門に止るを何よりも氣にして、それお出と聞くがいなや、勝手もとの箒に手拭をかぶせぬ。

(二)

お民は此家に十年あまり奉公して主人といへど今は我子に異ならず、何ぞぞ此人を立派に仕上げて我れも世間に誇りたき願ひよりやきもきと氣を揉むほど何心なきお圖の躰のもどかしく、どうしたものかと考へ、困つたものと歎き、はては異見に小言を交せて或日種々言聞かせぬ。何時かは言はうと存じたれど、お前さまといふ御人には呆れまする、これが五つや十の子供ではなし、十六といへばお子様もつ人もありますぞや、まあ考へて御覽なされお母様がお病没から以來、足かけ三年の長の間に松島さまが何れほど盡して下されたと思しめす、私でさへ涙が

こぼれるほど嬉しさに前さまは木か石か、さりとて不人情と申す者なり、れ覺はがある筈なれど一々申さねばれ分りになるまじ、れ見寄り便りのなきお前さまの身を案じて、人は教が肝心のものなるに言はゞ聞さまなどは今が白絲、何の色にも染まり易ければ、學校がよひに良からぬ友でも出来てはならず、一切我れに任せてまゐ見て居てくれと親切に仰しやつては師匠さまから毎日のれ出稽古、月謝を出して附け届けして御馳走して車を出して、あがめ奉る先生でも雪や雨には勿論の事、三度に一度はれ断りが常のものなり、それを何ぞや駄々つ子様の御機嫌とり、此本一冊よみ終らば御褒美には何を参らせん、手ならひが能く出来たれば此次には文を書きて見せ給へと勿躰ない奉書の繪半切れを手遊に下された事忘れはなさるまい、斯う申さばれ前さまのれ心には何のあんな物たゝきつけて返したしと思しめすか知らねど、紙一枚にも眞實のこもるお志しを頂くものぞかし、其御恩を何とも思はず、一年といふ三百六十五日打通して、好い顔どころか普通の暑い寒いも満足には仰しやらず、畢竟わの方なればこそお腹もたてず氣にも懸けず可愛がつて下さるもの、第一天道様の罰が當らずには居りませぬ、昨日も此邊りの噂を聞けば松島さまは世間で評判の方、奥さま持たうなら還り取り見どりに山ほごなれど何方もれ断りで此方へのお出は嬢様の上にはかり日の照りが違ふか、何といふれ幸

福と焼もちやいて羨みますぞや、其れ人に捨てられたら前さまま何と遊ばす、れ泣きなさるはれ腹がたつか、れ怒りになつてもよし、民は申すだけは申します、悪く聞き遊ばせばそれまで、さりと方圓のなされ我儘と思ひ切つて叱りつけしが是れも主思ひの一分なり、もとよりれ圓に悪氣のあるではなく唯幼兒の人ざらひして、抱かれるを嫌がり、あやされば泣くと同じく、何故か其人に氣が合はずさりと格別な仇をして困らせんなど、念の入りし憎さでもなく、まこと世間見すの我儘から起りし所為なれば、言はれるにつけて何と言譯の理由もなく、口惜しきか悲しきか恥しきか無茶苦茶に泣いて顔もあげぬを、れ民猶も何事をか言はんとする折門にとまる例の車の音、それれ出なり今日こそは優しく遊ばせよ。

(四)

圓さまはどうなされた今日はまだ顔が見ぬと問はれてまさか、今までこれ／＼で次の間に泣いて居られますとも言ひがたければ、少々御不加減で、併しもう宜しう御座りましやうほどに、まあ茶を一つなど、民は其場をつくろひぬ。

注意せねば悪し、お民どの不養生をさせ給ふな、さても我れも急に白羽の矢が立ちて、遠方へ左遷と事が極まり今日は御吹聴ながらの御告別なりと譯もなくいへばお民あきれて、御申戯を仰しやりますな、いや申戯ではなし札幌の病院長に任せられて都合次第明日にも出立せねばならず、尤も突然といふではなく斯うとは大抵知れて居りしが、何が驚かせるが苦しさに結局いはねばならぬ事を今日迄も黙つて居りしなり、三年か五年で歸るつもりなれども其ほどは如何か分らねばまづ當分お別れの覺悟、それにつけても案じられるは圓様のこと、何の餘計の世話ながら何故か初めから可愛くて眞實の處一日見ぬも氣になる位なれど、さりとて何時來ても喜ばれるでもなく、結句あれほど厭がるものを氣の毒なと氣のつかぬでもなければ、何うかして天晴の淑女に育て、見たく、自惚れの言ひ分と笑ひ給はんが兎に角今日まで厭がられに來しなり、まづ學問といふた處が女は大抵あんなもの、理化學政法など、延びられては、お嫁さまの口にいよ／＼遠ざかるべし、第一皮相の學問は枯木に造り花したも同じにて眞心の人は悦ばぬもの、よしや深山がくれでも天眞の花の色は都人をゆかしがらする道理なれば、此上は優美の性を養つて徳をみがくやうに教へ給へ、我れ此地に居たりとて根からさつぱり談合の膝にもなるまじきが、これからはいよ／＼お民どの大役なり、門前の虎、後門の狼、右にも左にも恐

らしき奴の多き世の中、あたらし美玉に疵をつけ給ふな、國さまにも言ひきかせたきこと多くあれど我口よりいはい又耳に両手なるべし、不思議に縁のない人に縁があるか馬鹿らしきほど置いてゆくがいやな氣持と、笑つてのけながら調子がいつもほど冴えては聞えず。散々のお民が意見に少し我が非を知り初めし揚句、その人は俄かに別れといふ、幼き心には我失禮のわがまゝを憎みてそれ故に遠國へでも行かれるやうに悲しく、詫がまたけれど隣子一重を出る機会がなく、お民が最初と呼んで呉れし時すこしひねくれてより拍子ぬけがして今更には駆け出しもされず、其うちにお歸りにならば何とせん、もう逢つては下さらぬかなど、敷居の際にすり寄つてお團の泣けるも知らず、學士はその時つと起つて、今日はお名残なるに切めては笑ひ顔でも見せて給はれとさらり障子を明ければ、おゝ此處にか。

(五)

左様泣いてくれば困る、お民どのも同じやうに何の事ぞ、もう逢はれぬと言ふでもなきに心細き事いひ給ふな、國さま何も詫びらるゝ事はなし、お前さまの事は宜しくお民が承知して居れば少しも心配の事はあらず、唯これまでと違ひて段々と大人になり世間の交際も知らねばな

らず、第一にむづかりきは人の機嫌なり、さりとて暗ひの草履とりも餘りほめた話ではなけれど其處が工合ものにて、清浄なり無垢なり潔白なりのお前様などが、右をむくとも左を向くとも憎む人は無さ筈なれどそれでは世が渡られず、我れも矢張り其仲間の一枚板にて使ひ道が不向きなれども流石に年の功といふものか少しは前さまより人がわるし、さりとて悪くなり過ぎては困れど過不及の取かちは心一つよく考へて應用なされ、實の處出立は明後日、支度も大方出来たれば最早お目にかゝるまじく随分身軀をいとひて煩ひ給ふな、此上にお頼みは萬々見送などして下さるな、さらしてだに神男の我れ朋友の手前もあるに何かを加しく頼られても互に詰らず、さりながらお真あらば一枚紀念に頂きたし此大出京する頃には最はや立派の奥様かも知れず、それでも又逢つて給はるか顔そのまれば、膝に置き伏して正躰もなし、それほど別れるがよいやかと背を撫でられて黙頭く可愛さ、三年目の今日今さらにならぬもの辛さがましなり。

柔かき人ほど氣はつよく學士人々の涙の雨に路どめもされず、今宵は切めてと捉へる袂の優しく振切つて我家へ歸れば、お民手の物を取られしほど力を落して、よしや千里が萬里離れるとも眞實の親子兄弟ならば何時歸つて何うといふ樂しみもあれど、ほんの親切といふ一筋の結に

かゝつて居し身なれば、遠ざかるが最期もう紙の切れしも同じこと取りつく島の頼みもなしと、我れ振りすてられしやうな歎きにお園いよ／＼心細く、母親の別れに悲しき事を知り盡して腸もみ切るほど泣きに泣きしが今日の思ひはそれとも變りて、親切勿昧なし、残念などいふ感じの右往左往に胸の中を掻き廻して何が何やら夢の心地、さりとて其夜は寐らるゝところならず、強ひて床へは入りしもの、寐間着も着かへず横にもならず、さてつく／＼と考へれば目の前に香間の様々が浮かびて、我れは知らねど胸にや刺されし學士が言ひし詞一言半句も忘れず、歸り際に此袖をかく捉へて待つとし聞かば今かへり來んと笑ひながらに仰せられし彼の聲も鼻う聞くことは出來ず、明日からは車のおとも止まるまじ、思へば何故に彼の人のあのやうに願なりしかと長き袂を打かへし打かへし見る途端、紅絹の八つ口ころ／＼と洩れて燈下に輝く寶金の指輪、學士が左の薬指に先のほどまで光りしものなり。

(十)

蒼と思ひし梢の花も春雨一夜だしぬけにこれはこれとは驚かるゝものなり、時節といふものも可笑しさにはお園の小さき胸に何を感ぜしか、學士が出立後の一日二日よりする所業どことな

く大人びて今までのやうに我まゝも言はず、纏はり仕事よみ書の外、以前に増して身をつししみ勝ふ人ありとも人寄せ芝居の浮きし事に足も向けねば、折ふしはつひに今まで見し事もなき日本全国などいふ物とお民がお使ひの留守の間に練りひろげて居る事もあり、新聞紙の上にも札幌とか北海道とかいふ文字には逸はやく目のつく様子、或日お民氣が附いて見れば右の輩にあり／＼と輝くものあり。

さても秋風の桐の葉は人の身か、知らねばこそあれ雪佛の堂塔いかめしく造らんとか立派にせんとか、あはれ草臥儲けになるが多し、文化とか開明とかの餘光に何事も根から葉から殖かへして百年千年ひかしの人の心の中まで解剖する世に、これを職掌の醫道の妙にも我が天授の命ひは可うもならず、學士札幌へ赴きし歳の秋、診察せし室扶斯患者に感染して、惜しや三十路にたらぬ若ざかりを北海道の土に成しぬ、風の便りにこれを聞きしお園の心

空蟬の世の中すて思へば曇染に袖の色かへるまでもなく、花もなし紅葉もなし、丈にあまる黒髪薙拂へばとてそれは見る目の菩提心、人前づくりの後家さまが所物ぞかし、うき世の飾りの紅白粉こそ入らぬ物と洗ひ髪を投げ島田に元結一筋きつて放せし姿、色このむ者の目には又一段の美とたゝへて聲にゆかん嫁にとらん、家名相續は何ともすべしと言寄る人一人二人なら

す。ある時學士が親友なりし某、當時醫學部に有名の教授の人の人を以て法の如く言ひ込みしを、お民上もなき縁と喜びてお前さまが今の花のさかり散りがたに成つては呼んで歩くとも賣れる事てなし、大抵にお心を定め給へ、松島さまに恩はありとも何のお約束がありしでもなく、よし有りたりとも再縁する人さへ世には多し、何處へ憚りのある事ならねばとて説諭せしに、お園にこやかに笑ひて口先の約束は解くにとかれもせん、眞の愛なき契りは捨て、再縁する人もあるべし、素より彼の人に約束の覚えなく況して操の立てやうもなければ、何處とも知らず染みたる思ひは此身ある限り忘れ難ければ、若しかの教授さま違て妻にと仰せのあらば、形だけは盡りもせん心は容易くたてまつり難しと傳へ給へと、事もなく言ひて肯れる氣色のなきに、お民言甲斐なしと断念してそれよりは復勤めすとぞ、經機の由縁かくの如し。

或る口の悪きお人これを聞きて、扱もひねくれし女かな、今もし學士が世にありて札幌にもゆかず以前の通り生やさしく出入りをなさば、虫づのはしるほど嫌がる事うたがひなしと苦笑ひして仰せられしが「ある時はありのすさびに憎かりき、無くてぞ人は戀しかりける」兎にも角にも意地わるの世や意地悪の世や。

曉月夜

第一回

櫻の花に梅が香とめて柳の枝にさく姿と、聞くばかりも床しさを心にくき獨りすみの晴、たつ名みやび男の心を動かして、山の井のみづにあくがる、戀もありけり、花櫻香山家ときこねは門前の従三位よひまでもなく、同族中に其人ありと知られて、行く水のながれ清き江月川の西べりに、和洋の家づくり美は極めねど、行く人の足を止むる庭木のさまよく、翠色したる松にまじりて紅葉のあるお邸と聞へば、中の橋のはし板とくろくばかり、扱も人の知るはそれのみならず、一重と呼はるゝ令嬢の美色、姉に妹に數多き同胞をこして肩ぬひ揚げの幼たちより、いて若紫ゆく末はと寄する心の人々も多かりしが、空しく二八の春も過ぎて今歳二十のいたづら臥、何ごとぞ飽くまで優しき孝行のこゝろに似ず、父君母君が苦勞の種の縁いりの相談かけ給ふごとに、我まゝながら私一生ひとり住みの願ひなり、仰せに背くは罪ふかけれど、是ればかりはと仔細もなく、千篇一律いや／＼を通して、はては世上に思口しき名を認はれなが

ら、狭き乙女の氣にもかけず、老けゆく歳を惜みもせず、静かに月夜をたのしんで、態とあらねど浮世の風に近づかねば、慈善會に袖ひかれたる願ひも叶はず、園遊會に物いひなれん願みもなく、いとど高嶺の花ごころに苦しむ人多しと聞かすが、牛込ちかくに下宿住居する森野紋とよぶ文學書生、いかなる風や誘ひけん、果敢なき便りに令嬢のうはさ耳にして、可笑しき奴と笑つて聞かすが、その獨棲の理由、我れ人ともに解らぬ處何ゆゑか探りたく、何ともして其女一目見たし、否見たしては無く見てくれん、世は被せ物の減金をも、秘佛と唱へて御戸帳の奥ぶかに信を増さするならひ、朝日かげ玉だれの小簾の外には恥かぢやかしく、娘とも言はれぬ愚物などにて、慈悲ぶかき親の勿体をつけたる拵へ言かも知れず、それに乗りて床しがるは、雪の後朝の未つむ花に見參まへの心なるべし、扱も笑止とけなしながら心にかゝれば、何日も門前を通る時はそれとなく見かへりて、見ることもあれかすと待ちしが、時はあるもの飯田町の學校より歸りがけ、日暮れ前の川岸づたひを淋しく來れば、うしろより、掛聲いさましく駆け抜けし車のぬしは令嬢なりけり、何處の歸りか高嶺となしやかに、白粉にはあるまじき色の白さ、衣類は何か見とむる間もなけれど、黒ちりめんの羽織にさらさらとせし氣向き姿、もしやと敏われ知らず馳せ出せば、扱こそ引てむ彼の門内、車の輪の何にふれてか、がた

りと音して一ゆり揺れ、ば、するり落かゝる後ざしの金簪を、令嬢は纖手に受けとめ給ふ途端、夕風さつと其袂を吹きあぐれば、翻へる八つ口ひらりと洩れて散る物ありけり、それと知らねば車は其のまゝ玄關にいそぐを、敏何とも知らず速しく拾ひて、懷中におし入れしまゝ跡をも見ずに歸りぬ。
乗り入れし車は確かに香山家のもなりとは、車夫が法被の縫にも知れたり、十七八と見えしは美しさの故ならんが、彼の年頃の娘ほかに有りとも聞かず、噂の令嬢は彼れならん彼れなるべし、さらば噂も嘘にはあらず、嘘ごころか聞かきしよりは十倍も二十倍も美し、さても、其色の尋常を越えなば、土に根生ひのばらの花さへ、絹帽に挿まれたしと願ふならひを、あの美色にて何故ならん、怪しさよとばかり敏は燈下に腕を組みしが、拾ひきしは白絹の手巾にて、西行が富士の烟の歌をつくろはねども筆のあと美事に書きたり、いよ／＼悟めかしき女、不思議と思へば不思議さ限りなく、あの愛らしき眼に世の中を何と見てか、人じらしの振舞理由はあるべし、我れゆめさら戀など、厭らしき心みちも無けれど、此理由こそ知りたけれ、若き女の定まらぬ心に何物か觸るゝ事ありて、それより起りし生道心などならば、かへすがへす淺ましき事なり、第一はふびんの事なり、中々に高尚き心を持そこねて、魔道に陥るは我々書生の

上にもあるを、何ごとにも一筋なる乙女氣には無理ならねど、さりとて是れは歎かはしき迷ひなり、鬼も角も親しく遊んで親しく語りて、誅むべきは誅め、慰むべきは慰めてやりたし、さは言へど知りかたき世の中なれば分儀にも悪き虫などありて、其身も行きたく親も遣りたけれど嫁入りの席に落花の硬粉を萬一と氣づかへば、娘の恥も我が恥も流石に子爵どの能く隠して、一生を箱入りらしく暮らさせんとにや、さすれば此歌は無心に書きたるものにて半文の價値もあらず、否この優美の筆のあとは何としても破廉耻の人にはあらじ、必らず深き仔細あまて尋常ならぬ思ひを振袖に包む人なるべし、扱もゆかしや其ねば玉の夜半の露。

はじめは好奇の心に誘はれて、空しく想像をいろくに描きしが、又折もが今一度みたと願へど、それよりは如何に行違ひてか後影だに見ることあらねば、水も求めてぬ時の偶きに同じく、一念此處に集まりては今更に紛らはすべき手段もなく、朝も晝も燭もとりても、はては學校へ行きても書を扱きても、西行の歌と令嬢の姿と入り亂れて眼の前を離れぬに教われながら呆れるばかり、天晴未來の文學者が此様のことにて何うなる者ぞと、叱りつけるあとより我心ふらふらとなるに、是非もなし此上はと下宿の世帯一切たみみて、此家にも學校にも腐爛の瘰癧に歸國と言立て、立出てしまへ一月ばかりを何處に留みしか、戀の奴のさても可笑しや、

香山家の庭男に住み込みしとは。

第二一回

敏幼きより植木のあつかひを好きて、小器用に鉄も使へば、竹箒握つて庭男ぐらゐ何でもなさこと、但し身の素性を知られじとばかり、誠に只今の山出しにて、土をなめても是れを立身の手始めにしたき願ひと、我れながら能くも言へたる處にかためて、名前をも其通り、當座にこしらへて吾助とか言ひけり、さても氣の利かぬとてこれほどの役廻りあるべきや、浮世の勤めを一顧取りて、猶かゝるべき子の懶惰にてもあらば、如來様お出迎ひまで此口つるしても置かれず、草むしりに庭掃除ぐらゐはとて、六十男のする仕事ぞかし、勿轉なや古事記書事記を朝夕にひらきて、万葉集に不審紙したる手を、泥鉢のあつかひに汚すことゝは人知らねど、増もなく万年青の葉あらひ、さては芝生を這つて木の葉を拾ふ姿、我ながら見られた轉てなく、これを若しも學友などに見つけられなばと、心証原をはしりて、門外の用事を兎角に厭へば、勝手ばたらきの女子ども可笑しがりて、東京は鬼の住む處でもなきを、土地なればぬのやうに恐きものかと、眞事田舎者にしてのけぬ、

君ゆゑこそ可惜青年一人、此處にかく淺ましき赫たらくと、窓の小笹を吹く風そよとも告げぬば、知らぬ令嬢は大方部屋に籠りて、琴の音などにいよく心を憫ませけるが、拆節の庭あるきに微塵さすなき美しくしさを認め、我れならぬ召使ひに優しき詞をかけ給ふにても情ふかき程は知られぬ、初めの想像には仔細らしく珠数などを振袖の中に引きかくし、經文の讀誦に抹香臭くなりて、娘らしき匂ひは遠かるべしと思ひしに、其様の氣振もなく、柳髪いつも高島田に結び上げて、おくれ毛一筋袷に亂さぬたしなみのよさ、さても好みの斯く迄に上手なるか、但しは此人の身に添ひし果報か、銀の平打一つに鶉色ぶさの根掛むすびしを、優にうつくしく似合ひ給へりと見れば、東髪さしの花一輪も中々に愛らしく、此處一つに美人の價値定まるといふ天然の衣紋つき、襦袢の襟の紫なる時は顔色殊更に白くみえ、態と質素なる黒縮緬に赤糸のこぼれ梅など品一層も二層もよし、あるが中にも薄色繪子の被布姿を小波の池にうつして、緋鯉に餌をやる弟君と共に、餘念もなく歎をむしりて、自然の笑みに睦まじき叫きの羨ましき、敏もどより築山ごしに拜むばかりの願ひならず、あはれ此君が肺腑に入りて秘密の鍵を我手にしたく、機會あれかしと待つま待遠や、一月ばかりを仇に暮して近づく便りの無きこそは道理なれ、令嬢は高嶺の花これは麓の塵、なれども嵐は平等に吹くものぞかし。

甚之助さて香山家の次男、するなりに咲く花いとど大輪にて、九つなれども權勢一家を凌ぎ、わんぱくさ限りなく、分別顔の家扶にさへ手に合はず、佛國に留學の兄上御歸朝までは、此君にあたる人あるまじと見えけるが、令嬢とは隨一の仲よしにて何ごとにも中姉様と慕ひ寄れば、もどより物やさしき質の、これは又一段に可愛がりて、物さびしき雨の夜など、燈火の下に書物をひらき、膝に抱きて書を見せ、これは何時々々の昔何處の國に、甚様のやうな剛き人ありて、其時代の帝に叛きし賊を討ち、大功をなして此書を引上の處、此馬に乗りしが大將と説かせば、雀躍して喜び、僕も生長ならばすばらしき大將になり、賊などは何でもなく討ち、そして此様に本に書かれる人になりて、父様や母様に御褒美を頂くべしと威張るに、令嬢は微笑みながら勇ましきを賞めて、其様な大將になり給ひても、私とは今に替らず中よくして下さばかりがたよりなれど、誰れよりも私はお前様が好きにて、どうぞいつまでも今の通り御一處に居りたければ、成長くなりてお邸の出來し時、かならず伴ひてお茶の間の御用にてませ給へ、お分りになりしかと頬すりして言へば、しだらもなく抱かれながら口ばかりは大人らしく、それは僕が大將になりて、そしてお邸が出來さへすれば、其處に姉様を連れて行きて、いろ

いろの御馳走をし、いろくの面白きことをして遊ぶべし、大姉様や小姉様は僕を少しも可愛がりて呉れねば、あんな奴には御馳走もせず、門をしめて内へ入れずに泣かしてやらん、と言ふを止めて、其様な意地わるは仰しやるな、母様が聞にならばわるし、それでも姉様たちは自分ばかり演藝會や花見に行きて、中姉様は何時にも留守居のみし給へは、僕が成長ならば中姉様ばかり方々に連れて行きて、ばのらまや何か見せたきなり、それは色々の書が活たるやうに描きてありて、鏡砲や何かもほんとうのやうにて、火事の處もあり軍の處もあり、僕は大變に好きなれば、姉様も御覽にならば乾度も好きならん、大姉様は上野のも浅草のも方々のを幾度も見しに、中姉様を一度も連れて行かぬは意地悪ではなきか、僕はそれが憎らしければと思ふまゝを遠慮もなく言ふ可愛さ、左様もつて下さるは嬉しいけれど、其様のこと他人に言ふて給はるなよ、芝居も花見も行かぬのは私の好きにて、姉様たちの御存じはなき事なり、もう此話しは廢しまするほどに、何ぞも前様が今日あそびて、面白く思ひし話があれば聞かして下され、今日は吾助がどのやうなお話を致しました。

この大將の若様難なく敏が滴になりけり、令嬢との中の陸まじきを見るより、奇貨多くべしと竹馬の製造を手はじめに、植木の講釋、いくさ物語、田舎の節藝は如何にかかしき事を言ひて、

何處の野山は如何にひろく、某の海には名のつけやうもなき大魚ありて、鱈を動かせば波のあがること幾千丈、それが又鳥に化してと、珍らしきこと怪しきこと取とめなく詰らなきことを、可笑しらしく話して機嫌を取れば、幼心に十倍も百倍も面白く、吾助々々と附纏ひて離れず、我が心に面白しと聞けばそれを其まゝ令嬢に語りて、吾助が話は何ごともしも嘘ならぬ顔つき、真面目らしく取りつぐを聞けば、杜鵬と鵬の前世は同郷人にて、杳さしと鹽賣なりし、其時に杳を買ひて代をやらざりしかば、それが借金になりて鵬は頭が上がりず、杜鵬の來の時分に餌をさがして蛙などを道の草にさし、それを食はせてお詫をするとか、是れはほんとうのほんとうの話にて和歌にさへ詠めば、姉様に聞かしても分ること、吾助が言ひたり、吾助は大層な學者にて何ごともし知らぬ事なく、西洋だの支那だの天竺や何かのこともよく知りて、其話が面白ければ姉様にも是非お聞かせ申したし、従前の爺と違ひ僕を可愛がりて姉様を賞めて、ほんとうに好い奴なれば、今度僕の杳したを編みてたまはる時彼れにも何か製へて給はれ、宜しき姉様、乾度ぞかし姉様と、熱心にたのみて、覺束なき承諾の詞を其通り敏に傳ふれば、此消息は人目の關の憚りもなく、玉簾やすく越えて、見るは偶なる令嬢の便りを敏は日毎に手を取るばかり、由ありげなる心の底も、此處にはじめて臚々わかれば、可憐の念むらむらと堪へがたく、君ゆ

第三回

るにこそ斯くまでに身を盡くす我、木石ならぬ令嬢に憎かるべき筈なし、此荆棘の中すくひ出して、影も未だなる戀に竹の柱の詫住居を思ひぬ。

間を常なる人の親ごゝろ、子故の道に迷はぬはなきものをと敏此處に眼を止むれば、香山家三人の女子の中、上は氣むづかしく末は活潑にて、容貌大抵なれども何として彼の君に及ぶ者なく、これにても同胞かと思ふばかりの相違なるに、怪しきは母君の仕向けにて、流石輕々しき下々の目に立ちし分け隔てば無けれども、同じ物言ひの何處やら苦く、つらかるべしと思ふこと折々に見えけり。

子爵の君最愛のおもひ者なご、桐壺の更衣めかしき優形なるが、此奥形の妬みつよさに、可惜花ざかり肺病にでもなりて、形見の留めし令嬢ならんには、父君の愛いかばかり深かるべきを、いよ／＼胸わるく憎らしく思ひ、然るべき縁にもつけず生殺しにして、他處目ばかりは何處までも我儘らしき氣隨ものに言立て、其長き舌に父君をも巻き込みしか、この一家に令嬢ありと見て心を盡くす者なく、有るは甚之助殿と我ればかりなるいちらしさよ、いざや此心筆に言は

して、あはよくば何處へなりとも暫時伴ひ、其上にての策は又如何様にもあるべく、よし一時は陸奥の名取川、清からぬ名を流しても宜し、憚りの世の中打割りて見れば、天縁我れに有つて此處に運びしかも知れず、今こそ一寒書生の名もなければ、やがては令嬢をも幸福の位置に据えて、不名譽の取り返しは譯もなきことなり、扱も濱千鳥ふみ通ふ道など夜もすがら筆を握りしか、もとより蓮葉ならぬ令嬢の、殊に我れ庭男などに目の着く筈なければ、初より艶書と知りては、手に觸れ給ふか否か其處まことに危し、如何にせんと思案に苦みしが、それよ、人目にふるゝは何の道おなじこと、何も度胸と半紙四五枚二つ折にして、墨つき濃く淡く文かあらぬか書き紛らはし、態と綴ちて表紙にも字も書き、此趣向うまくゆけかしと明くるを待ちけるが、人しらぬこそ是非なけれ、此處は隣りさかびの藪際にて、用心の爲にと茅葺の設けに住まはする庭男、扱も扱も此曲者とは。

日影うらうらと霞みて朝つゆ花びらに重く、風もがな胡蝶の睡り覺ましたきほど、静かなる朝の景色、甚之助子供ごゝろに、浮立ちて何日より早く庭にかけ下りれば、若様、と隙かさす呼びて、笑顔をまづ見する庭男に、其まゝ縄りて箒木の手を動かせず、吾助お前が書がかけるかと突然に問ふ可笑しさ、書もかきままする隊も詠みままする騎射でも打毬でもお好み次第と笑へば、

それならば書を描きて呉れよ、昨夜姉様と賭をして、これが負ければ僕の小刀を取られる約束、それは吾助のことからにて、僕は吾助に書が描けると言ひしを、姉様はかけまじと言ひたり、負けては口惜しければ姉様が驚くほど上手に、後と言はずに今直に描きて呉れよ、掃除などは爲すともよしとて箒木を奪へば、吾助すこし困りて、描きてはあげますが今は少し、後に吾助の部屋へお出なされ騎馬武者をかきて参らせん、それとも山水の景色にせんかと紛らせば、厭、厭、厭、今でなくては何でも厭なり、後になぞと言はば其うちに僕は負けて、小刀を取られるから厭、どうぞ是非今直に描て呉れよ、紙や筆は姉様のを借りて來べし、と箒木を捨て、駈出すに、先づお待なされと遽たゞしく止め、直ぐと仰しやれば是非なけれど、下手に出来なば却りて姉様に笑はれ、若様の負と言ふものなり、斯うなされ、書はゆるく、後日の事になり、吾助は書よりも歌の名人にて、田舎に居りし時は先生なりし故、其和歌を姉様にお目にかけて驚かし給へ、それこそ必らず若様の勝になるべしと言へば、早く其歌を詠めとせがむに懐中より彼の緩ち文を出し、是れは極大切の歌にて人に見すべきではなけれど、若様をお勝たせ申したく、他の人に内證にて姉様ばかりに御覽に入れ給へ、早く、内證で、姉様にお上げなされ、と三つ四つに折りて甚之助の懐中に押し入れしが、無心の處何とも氣づかはしく、落さぬや

うに人に見せぬやうにと呉々をしへ、早くお出でなされと言へば、兩手に胸を抱きて一心に駈け出す甚之助、お落しなされるな、と呼びもならず、俄かに心附きて四邊を見れば、花に吹く風我れを笑ふか、人目はなけれど何處までも恐ろしく、庭掃除をこゝくに唯人に逢はじとばかり、敏これほどの小膽とも思はざりしを。
我が思ふ人ほど恥かしく恐ろしきものはなし、女同志の親しきにて此人こそと敬ふ友に、さし向ひては何ごととも言はれず、其人の一言二言に、耻かしきは飽くまで耻かしく、恐ろしきは飽くまで恐ろしく、塵ほどの事身にしみぬべし、男女の中もかゝるものによ、甚之助の吾助を慕ふはそれとも異りて淡きものなれど、我が好む人の一言重く、文を懐にして令嬢の部屋に來し時は、末の姉君此處にありて、お細工物の最中なるに、今見せては悪かるべしと、譯は素より知る筈なけれど、吾助とも言はで遊び居けるが、甚様私の部屋へもお出なされ、玉突して遊びますほどにと、面白げに誘ひて座を立つ姉君、早く去ねがしにはたゞと障子を閉て、姉様これ、と懐中より半ば見せ、吾助は書も上手なれど歌の方が猶名人ゆゑ、これを御覽に入れさへすれば、僕が勝つと吾助が言ひたり、勝てば僕の少刀は僕のにて、姉様のごむ人形はお約束ゆる頂くのなり、さあ賜はれと手を重ねれば、令嬢は微笑みながら、厭、厭、お約束は書な

るに歌にては厭よ、ごむ人形は上げまじと頭をふるに、それでも姉様この歌は極大切のにて、人にも見せず落さぬやうに御覽に入れると吾助の言ひしは、書よりも良きに相違はなし、是非人形を賜はれとて手渡しするに、何心なく披きて一二行よむとせしが、物言はず疊みて手文庫に納むれば、其顔を不審げに仰ぎて、姉様人形は下さるか、進ませずるとわづかに點頭く令嬢、其之助は嬉しく立あがつた、勝つた勝つた。

第四回

此思ひ通じさへせば此心安かるべしと願ふは淺し、入立つまゝに慾はまさりて、はてなきものは戀なりとかや、敏はじめての艶書に心をいためて、若し落ち散りもせば罪は我れのみならず、知らじとて令嬢も赦されまじ、さらでもの繼母御前如何にたけりて、どのやうな事にまで立いたるべきか、思へば我が思慮あさはかにて、甚之助殿に頼みしは萬々の不覺なりし、とも思ひ又自ら勵ましては、何の譯もなきこと、大英断の庭男とさへなりし我、此上の出来ごと覺悟の前なり、只あやふきは令嬢が心にて、首尾よく文は届きたりとも、つれなく返されなば甲斐もなきこと、兎角に甚之助殿の便り聞きたしと待けるが、其日の夕方彼の人形を持ちて何

日よりも嬉しげに、お前の歌ゆる首尾よく我が勝になり、此様な人形を取りしと誇り顔に来て見すれば、姉様は彼の歌を御覽なされしや、して何と仰しやりしと問へば、何とも言はずに文庫に入れてお仕舞なされしが、今度も又あのやうな歌を詠みて、姉様の御覽に入れよかし、お前が褒められなば我れとても嬉しきものと可愛く云ふに、思ひある身一層たのもしく様々に機嫌を取りて、姉様も定めし歌はお上手ならん、是非吾助も拜見が仕たければ、此頃姉様にお願いなされ、お書き捨てを頂きて給はれ、必らず、乾度と返事の通路を此處にをしへ、一日を待ち二日を待ち、三日になりても音沙汰の無きに敏こゝろ悶へ、甚之助を見ることにそれとなく促せば、僕も貰つて遣りたけれど姉様が下さらねばと、あはれ板ばさみになりて困り入りし躰、子心にも義理に引かれてか中に立ちてうろ／＼するを、敏いろ／＼に頼みて此度は封じ文に、あらん限りの言葉を如何に書きけん、文章の艶麗は評判の男なりしが、見る目に見なば美男とも言ふべきにや、鼻筋とはり眼もと鈍からず、豊頬の柔和顔なる敏、流石に學問のつけたる品位は、庭男になりても身を離れず、吾助々々と勝手元に姦しき評判は、お茶の間を越して大奥にも高く、お約束の賀君洋行中にて、寢覺を寫真に物がたる總領の令嬢さへ、垣根の櫻折れかし吾助、いさゝかの用事にて大層らしく、御褒美に賜はる菓子の花紅葉、

お手づからなる名譽はあれど、愚に本尊あれば脇だちに觸れる眼なく、一心おもひ込みては有し昔の敏ならて、可惜廿四の勉強ざかりを此膝たらく残念とも思はねばこそ、甚之助に追従しあるきて、本心には成るまじき文の趣向、案外のことにて拍子よく行き、文庫に納め給ひしとはもう我がものと、一度は勇みけるが、それより後の幾度幾通かき送りし文に一度の返事もなく、さりとてつれなくは投かへしもせねど、ひらきて讀みしや否や甚之助が答へぶりの果敢なさに、此度こそと書たるは、長き尋にあまり思ひ筆にあふれて、我れながら斯くまでも迷ふものかと、文を投出して嘆息しけるが、甚之助に向ひては猶さら悲しげに、姉様はあくまで吾助を憎みて、あれほど御覽に入れし歌に一度のお返歌もなく、あまつさへ貴君にまで、この様の取次するなとさへ仰しやりし無情さ、これ程の耻を見て我れ男の身の、おめくお邸に居られねば眼を賜はりて歸國すべけれど、聞き給へ我れ田舎には両親もなく、只一人ありし妹の我れと非常に中よかりしが、今は亡せて何もなき身、その妹が姉様にそつくりにて、今も在らばと戀しさ堪へがたく、お前様に姉様なれば我れには妹のやうに思はれて、其お書き捨ての反古にても身に添へて持たば本望なるべく、切めて一筆の拜見が願ひたきなり、されども斯く下賤の我れ、いかやうに思うとも及びなき事にて、無禮ものとなれ叱りを受ければそれまで、なれども

お厭ならばお厭にて、寧、断判、目通りも厭なれば疾く此處を去ねかし、とてもありて、いよ成るまじき事と知らば其上に覺悟もあり、斯くまでの思ひ何としても消ゆる筈なけれど、覺悟次第に断念もつくべし、今一度此文を進げて、明らかなのお答へ聞いて給はれ、それ次第にて若様にもお別れになるべければと虚實をませて、子心にあはれと聞くやう頼みければ、甚之助もとより吾助最負にて、此男のこと一も十も成就させたく、喜ぶ顔見たさの一心に、これまでの文の幾通も人目に觸れぬやう滞りなく届け、令嬢の心も知らず返事をと責めしが、此迫りたる詞に我れまづ悲しく、今日こそは必らず返事を取り、其方の喜ぶやうにすれば、田舎へ行くことは廢めになし、何時までも此處に居て呉れよと突然に田舎へ行きては厭そと泣き、其涙を敏に拭はれて猶かなしく、手にすがりて何時までも泣きしが、三歳兒の魂いつはりにはあらで、此こと心魂にしみて悲しければこそ、其夜閑燈のもとに令嬢を拜みて。吾助は斯く思ひて斯く言ふを、御生、姉様返事を賜はれ、決して此後我まも言はず悪戯もなすまじければ、吾助の田舎へ歸らぬやう、今まで通り一處に遊ばれるやう返事を賜はれ、只一寸で宜し吾助は一筆にてもと言ひたれば、此巻紙へ何か書て僕に賜はれ、吾助は田舎へ歸りても行く處の無き身なれば、大方は乞食に成るべきにや、それでは僕どふしても厭なり、是非此文を御覽なされ

て、一寸何とか言ふて下され、よう姉様、よう姉様、お願ひ、此れとて、紅葉の手を合はすい
 ぢらしさ、情ふかき女性の身の、此事のみにても涙の價値はたしかなるに、よし山賤にせよ庭
 男にせよ。我れを戀ふ人世に憎かるべきか、令嬢の情緒いかに続けけん、甚之助母君のもとに
 呼ばれ、此返事を聞く間なく、残り惜しげに出行たるあとにて、玉の腕に此文を抱き、胸に常
 て、夜もすがら泣きけり。

第五回

二十の春を夢と暮らして、落花の夕に何ごとを思ひつきてか、令嬢は別荘住居したき願ひ、鎌
 倉の何處とやらに、眺望を選んで去年買はれしが、話しのみにて未だ見ぬもゆかしく、離亭の
 洒落たるがありて、名物の松がありてと父君の自慢にすぎり、私年來我儘に暮して、此上のお
 願ひは申がたけれど、とても世を其處に送らしては給はらぬか、甚之助様成長ならば、遣は
 さるべおき約束とや、それまでのお留守居、又は父様折ふしのお出遊に、人任せならずば御不
 自由も少かるべく、何卒其處に住まはせて、世を白波に浦風おもしろく、梅の花貝でも拾はせ
 て給はれとの願ひ、ふびんや如何様な仔細あればとて、月花をかしき盛りの歳に、千人萬人す

ぐれし美色を、鏡は無きか知らぬかのやうな身の上、他人ごとにして嬉しとは聞かれぬを、親
 とい、名のまして如何ならん、さりとて隠居様じみし願ひも、令嬢が心には無理ならぬこと、
 なまなか都に置いて同胞ごもが、浮世めかすを見するもつらし、何ごと望みに任せて、住み
 たしとならば彼地に住ませ、好きな琴でも松風に弾き合はし、氣儘に暮させるが切めてもと、
 父君此處にお許しの出でければ、あまりとても可愛想のこと、よし其身の願ひとてあのやうな
 遠くに、路はそれほどでなければと行き、りにては我れも心配なり子供たちも淋しかるべく、甚
 之助は其うちにも暮ひて、中姉様ならでは夜の明けぬに、朝夕の駄々いかにまさりて、姉たも
 の難儀が見ゆるやうなれば、今しばらく止まりてと、母君は物やわらかに宣ひたれど、お許し
 の出でしに甲斐なく、夫々に支度して老實の侍女を選み、出立は何日々と内々に取きめける
 を、甚之助かぎりなく口惜しがり、先づ父君に歎き母君を責め、長幼の令嬢に當りあるき、
 中姉様を窘め出すこと、恨み、僕をも俱にやれと迫り、令嬢に向へば譯もなく甘へて、取りつ
 きしまゝ泣きて離れず、姉様何ごとを腹だちて鎌倉なぞへお出なさるぞ、それも一月や半月な
 らばよけれど、お歸郷は何時とも知れずと皆が言ひたり、この様に仰しやるともそれは嘘にて、
 鎌倉へ行かばお歸りのなきに極まりたれば、残りて淋しがらんより我れも俱にゆき、我れも此

邸に歸るまじ、父様もいや母様もいや、誰を捨てゝも、諸共に行かんとはかり、令嬢は静かに諭して、其身もほろりとし、可愛き事いふて泣かし給ふな、鎌倉へ行きて歸らぬとは誰れが言ひしか、それこそは嘘にて、つひ一寸あそびに行き、其うちに歸つて來まする程に、おとなしう待ちて給はれ、よし歸らすとて彼地はお前様のお邸ゆゑ、成長なり給ふまでのお留守居、今もお連れ申たけれどそれこそ淋しく、直ぐ厭になりて母様こひしかるべし、何も柔順しう成長なり給へと、詫るやうに慰められて、それでもとわんばくも言へず、しく／＼泣きに常の元氣なくなりて、悄然とせし姿いちらし。

令嬢が鎌倉ごもりの噂、聞く胸とゞろきて敏きはしは呆れしが、猶甚之助に委しく問へば、相違なき物語半は泣きながらにて、何卒お廢めになるやうな工風は無きかと頼まれて、扱も何とせん、組む腕の思案にも能はず、萎れかへる甚之助が人目に遠慮なきを羨みて、心空になれど土を掃く身に箒木の面倒さ、此身になりしも誰れ故かは、つれなき令嬢が振舞其理由も探れず、此處に捨てられて取残されん我、いでや出立前の一目をと心に願ひしが、空しく影も見ず、明日の早朝と恨めしき便り、今は何も捨て、一日病氣と臥しけるが、戀に亂るゝ心あはれ悲しくも。令嬢が部屋戸一枚を隔てに、今宵かざりの名残を惜まんとて、心も空も宵闇の春の夜、

落花は庭に踏む足の音なきこそよけれ、切めては夢に入れかしと忍びぬ。

更けて軒ばに風鈴のれと淋しや、明日は此音いかに戀しく、此軒ばのこと部屋のこと、取分けでは甚様のこと、父君のこと母君のこと、平常は左までならぬ姉妹のこと、戀しかるべきものをと今も戀しく、寐ぬ夜の床に物れもふ令嬢、甚之助の暫時も傍はなれず、今宵も此處に寐んと言ひしを、明日の朝の邪魔なればと母君遠慮して、連れ行かれしあとの猶さら淋しく、思へば明日よりの閑居いかならん、甚様はしばしこそ我れを慕ひて泣きもし給はめ、程經なば自づと忘れて、姉様たちに馴れ給はんは必定、我れは紛るゝこと無き身の戀しさ日毎に増さりて、あの笑顔みたとて及ぶ事にあらず、父君とても然なりかし、遠く離れて面影をしのば、近きには十倍まして、深かりし慈愛の聲この耳を離れざるべし、これによりてこそ此處をも捨て、いとゞしき思ひに身を苦しむれと、吾助のことも忘れがたし、ゆるせよ吾助、ゆめさらさ憎からねばこそ、戀すまじとて退く身ぞかし、うつせみの世に斯かる身の例し又ありや、知らぬ心に恨みもせん憎みもせん、其憎まるゝを本望にての行爲、貴ひし文は何處までも惜しきに、封こそ切れね手文庫に秘めて、一生の際までは友とせん心、さりとは我れ老先のある身、憂きに月日の長からん事つらや、何事もさら／＼と捨て、憂からず面白からず暮したき願ひ

なるに、春風ふけば花めかしき、枯木ならぬ心のくるしきよ、あはれ月は無きか此胸はるけた
 きにと、押す手にいよく動悸たかく、喘みしめる袖に涙こぼれて、令嬢は暫時うち伏して泣
 きけるが、吹入る夜風たが魂か、あくがる心此處に堪がたく、静かに立つて妻戸を押せば、
 今ぞ廿日の月面かけ霞んで、さし昇る庭に木立のおぼろおぼろと暗く、似たりや弘徽殿の細殿
 口、敏が爲には若くものもなき時ぞかし。

第六回

言はぬ浮世の様々には如何なることや潜むらん、今は昔の涙の種、我が戀ならぬ懺悔物語、聞
 くも悲しき身の上あり、春の夜ふけて身にしむ風に、聞の燈火またしく影もあはれ淋しや丁子
 頭の、花と呼ばれし香山家の姫、今の子爵と同じ腹に、雙玉の稱へは美色に勝を占めしが、さ
 りとて兄君に席を越えず、物静かにつましく諸藝名譽のあるが中に、琴のまれば、久方の空
 にも響いて、月の前に柱を直す時雲はれて影をでに落ち、花に向つて玉音を弄べば、鶯ねを
 止めて節をや學びけん、子爵の寵愛子よりも深く、兩親なき妹の大切さ限りなければ、良さが
 上にも良きをえらみて、何某家の奥方とも未だ名をつけぬ十六の春風、無死や玉簾ふき通して

此初櫻ちりかゝりし袖、馬廻りに美男の聞えはあれど、月の雲井に塵の身の六三、何として此
 戀なり立けん、夢ばかりなる契り兄君の眼にかゝりて、或る日遠乗の歸路、野末の茶店に女を
 拂ひて。因果を含めし情の詞さても六三露顯の曉は、頸さし伸べて合掌の覺悟なりしを、物
 やわらかにしかも御主君が、手を下げるぞ六三邸を立退いて呉れ、我れも飽まで可愛き其方に
 遣はさるべくは遣はしたけれど、七萬石の先祖が勳功に對し、皇室の藩屏といふ名に對し、此
 事ばかりは爲し難きに表立ちては姫も邸に置がたけれど、我れには一人の妹、ことに兩親老後
 の子にて、紀念と思へばふびんさ限りのなきに、其方が心一つにて我れも安堵姫に疵もつかず、
 此處をよく料簡なしさつぱりと退て呉れかし、さりながら此後の身の有つきにと包物を賜はり
 て、言はねど手切れの、端金にはあらざりけんを、六三此金に眼も止めず、重々の大罪頸と仰
 せらるゝとも恨みは無きを、情のお詞身に徹しぬとて男一匹美事なきしが、さても下賤に根を
 持てば、戀を金ゆゑするとやおぼす、これより以後の一生五十年姫様には指もさすまじく、況
 て口外ゆめさら致すまじけれど、金ゆゑ閉ぢる口にはあらず、此金ばかりはと恐れげもなく、
 突もどして扱つくゝと詫びけるが、歸邸その儘の暇乞、惜しき名残を姫とも言はず、生れか
 はらば華族にとばかり、此處を出で、何處へ行きけん、忘れぬ姫のこと忘れねばこそ、義理と

いふ字に涙を呑んで、心は邸を離れざりしが、帳臺ふかくに物おもふ姫、六三暇を傳へ聞くより、心むすばれて解くること無く、扱も慈愛ふかき兄君が罪とも言はでさし留給ふ勿體なさ、身は七萬石の末に生れて親は玉とも愛で給ひしに、死に劣る淫奔耻かしく、猶其人の戀しきも辛く。涙に沈んで送る月日に、知らざりしこそ幼けれ、憂き身の上にて憂きを重ねて、宿りし嵐の五月とは、扱もさばかり身を投ふして泣けるが、今は人にも逢はじ物も思はじ、唯死ねかしと身を捨ものにして、部屋より外に足も出さず、一心悔み初めては何方に訴ふべき、先祖の耻辱家系の汚れ、兄君に面目なく人目はづかしく、我心我れを責めて夜も寝ず晝も寝ず、一身つかれて瘦せに瘦せし姿、見る兄君の心やみになりて、醫藥の手當に手づからの奔走いよく悲しく、果は物言はず涙のみなりしが、八月の壽命此子にあれば、月足らすの、聲いさましく揚げて、玉の姫様御出生と聞きも敢へず、散るや櫻の我が名空しくなりぬるを、何處に知りてか六三天地に哭きて、姫が命は我れ故とばかり、短き契りに淺ましき宿世を思へば、一人残りて我れ何とせん、待給へ諸共にの心なりけん、見し忍び寝に賜はりし姫がまごきの緋縮緬を、最期の胸に幾重まきて、大川の波かへらすぞなりし。

ひ堅くなり、包むに洩れぬ身の素性、人まらねばこそ様々の仁手を求めて、香山の令嬢と立つ名くるしく、一切衆生すて物に、我まいらしき境界こゝろには涙を呑みて、憂しや廿歳のいたづら臥、一念かたまりて動かざりけるが、岩をも徹す情の矢の根に敏がこと身にしみ初て、其人床しからねど其心にくからず、文を抱きて幾夜わびしが、我れながら弱き心の淺ましさに呆れ、見ればこそは聞けばこそは思ひも増すなれ、いざ鎌倉に身を連れて此人のことも忘れ、世に牽かるゝ心も断ちたきものと、決心此處に成りし今宵、切めては妻戸ごしのお聲さうたぐ、見とがめられん罪も忘れて此處に斯く忍ぶ身と袖にすがりて敏なげれば、これを拂ふ勇氣今は無く、よし人目には戀とも見よ我が心狂はねばと燈下に對坐て、成るまじき戀に思ひを聞く苦しさ、敏はじめよりの一念を離り、切めてはあはれと宣へと恨むに、勿躰なきこととて令嬢も泣き、お志しの文封は切らねど御覽せよ此通りと、手文庫に敵を見せしが、扱も我故と聞けば疎しきか悲しきか、行末いかに御立身なされて如何様なる人になり給ふお身にや、思へば貴き御勉勵ざかりを我れなどの爲めとは何事ぞや、いよく戀は淺ましきもの果敢なきもの憎きもの、我が生涯の此様に悲しく、人に言はれぬ物と思ふも、淺ましき戀ゆゑぞかし、我れにはあらぬ親の昔、隔るまじき事と我れも秘め、父君は更なり母君にも家の耻とて世に包むを、聞か

せ参らするてはなけれど、一生に一度の打明け物がたり、聞て給はれ憂き身の素性と、此處に涙を盡くして暗り明せば、夢とや言はん春の夜あけ方ちかく、鳥がね空に聞えて扱も忙しなし、君は都に我は鎌倉に、引はなれて復何時かは逢ふべき、定難の例しを此處に見れば、懸は一人ぞ安かりける、何事も言はじ思はじ、仰せられても給はるなとて、曉の月に影を別ちしが、これより令嬢は如何に成りけん、扱も教は如何に成りけん、つれなく見えし有明の月の形見を窓に眺めて、「暇ばかり」と呻きけんか知らず。

うもれ木

第一回

描き出だすや一穂の筆さきに、五百羅漢十六善神、空に樓閣をかまへ、思ひを階廊にめらし、三寸の香爐五寸の花瓶に、大和人物漢人物、元祿風の雅なるもあれば、神代様うづたかく、武者に鎧のおどしを工夫し、殿上人に装束の模様を撰み、或は帯書きに華麗をつくす花鳥風月、さては清楚を極むる高山流水、意の趣く處景色とのひて、濃淡よそほひなす彩色の妙、砂子打ちを樂と見る素人目に、あつと驚歎さるゝほど、我れ自身あもしろからず、筆さしあきて層々なげく斯道の衰頹、あはれ薩摩といへば隠節さへ輻のさく世に、さりと地に落ちたり我が金欄陶器、おもひ起す天保の昔、苗代川の陶工朴正官、其地に錦様の工みなさを歎じ、歳十六の少年の身に、習ひ起す勇氣千萬丈、奉行を説き藩廳に請ひ、監野に二人の教授をむかへて、相傳法受の苦を盡くしつ、猶心膽をねる幾春秋、安政のはじめ田の浦の陶場、焼着書照の瓦結果を奏するまで、刻苦艱難いくばくぞや、それが流れに浴する身の、美術奨励の今日うまれ

合はせながら、此處東京の地にばかり二百に餘る書工のうち、天晴道の奥を極めて、萬里海外の碧眼玉に、日本固有の技藝の妙、見せつけくれんの胸もつものなく、手に筆は取り習へど、心は小利小慾のかたまり、美とは何ぞ儲け口か、乃至吉原洲崎のちりからたつぼう、品川にも又捨てられぬ代物ありと、口三味線の筆拍子に、なぐり書きしての自慢顔、兎角は金の世の中に、優て御座るの妙で、候のと言ふ處が、畢竟は仕切り直段の上にあること、間屋うけのよき物いつち難有しとは、そも何處より出る調で、さればこそ賣國の奸商どもに左右されて、又も直下げ又も直下げと、さらでもの瘦せ腹ねぢられながら、無明の夢まだ覚めもせず、これでは合はぬの割仕事に、時間を厭ひ費用を減じて、十を以て一に代ふる粗書畫筆、まだ昨日今日繪具臺に据りて、替古は居ねぶりの白雲頭を、撰りこかして手傳はする縁がき腰がきの模様、霞砂子みだれ砂子の亂れ書きに、美といふ字は拭ひさる繪具雜巾の汚れ同様、さりとて雪がれぬ恥ならずや、此儘ならば今年と指をらぬ間に、今戸焼の隣りに坐をしめて、荒もの屋の店先に、砂まみれにならんも知れたものでなし、是れほどのこと氣のつかぬ、痴漢ばかりある筈なけれど、時の勢ひは出水の堤、切れかけたも同じこと、我等ふせぎはとんと不得手、先づは高見て見物が當世ごと、烟杖つきて宙腰の、ふら／＼とせし料簡には自己々々が不熱心を、地獄

雷鳴もなと並みに心得て、天だ天だと途方途轍もなき八つ當り、的になる天道さま氣の毒なり、然りながらそれも道理、身は朝鮮洲幾十萬の頭かすに加はりて、雷の煙の立居にまで、かしてき大御心なやませ奉る、辱なま心得もせず、大日本帝國の名譽といふ事、揉みくちやにして掃だめの隅に、投げ出すやうな罰走らずが、其處等あたり珍らしからぬ世の中、憤るほど管なるべし、さりとて我れは我が觀念あり、握り初めたる筆の因果、よし狂といは言へ愚と笑は々笑へ、千萬の黄金つんで來るども換へぬ心を腕にみぎきて、輕佻浮薄を才子と呼ぶ明治の代に、愚直の何ぞれほどのもの、熱心の結果はいかに、斯道の眞は那邊にあるか、よし人目には何とも見よ、我が心満足するほどの物づくり出して、我れ入江頼三變物の名を、陶器歴史に残さんずもの、口惜しや赤貧の身の、空しく志しを抱いて幾年間、此まゝならば胸中の奇計、何に向つて何時描くべき、恨みは是れぞ是れ骨までの恨みぞと、取しむる右の腕手首ふるくと顔へて、煮きよ腸、熱涙のみ込みつゝ悲憤の聲は現はさぬと、誰れいふとなく慷慨先生と仇名して、酒席へははづれ代り、柴のぞ叩くもの種々なれば、友なく弟子なく女房なく、あ蝶とよぶ妹相手にして、此處高輪の如來寺前に、夕顔垣にからみ蚊やり火煎にけぶる詫住居、磁團扇に縁のある事をなしけり。

第二回

散る木の葉にすら、笑みぞあまじと聞く十六七を、貧にくるしめば月も花も皆なみだの種、同じほどの小娘が、流行の帯に新形染の浴衣きて、姿どこやら媚やかに、能く見ればよくもなき顔だちも、三割とくの白粉ぬりくり、態度じれたる癖直しの、お蔭にふくらむ髪つき髪つき、天晴美人と招牌うつて、摺れ違ひに薫る香水の追風まで、べつとせし扮粧の夕詣で、何を願ひぞ、神さま嗚やお困りの連中に、願ひられて我が形はづるとなけれど、快からねば洗ひさらしの浴衣の肩、我れ知らずすほめて小走りするお蝶、並ぶ縁日の小間もの店に目もくれず、そそぐは一心兄の上ばかり、願ひは富貴でなく榮華でなし、我形この上の濫褻に、よしや細の帯しめよとまよ、我れ生涯に來べき運、あらば兄様の身にゆづりて、腕の光りの世に現はるゝやう、みがく心の満足されるやう、二つには同じ番工の侮り顔する奴を、兄さまの前に兩手つかせたく、佛壇のお二方に、お位牌の箱つけて欲しきがそも／＼の願ひ、手内職の手巾問屋に納むる足を其まゝ、靈驗もたらかなりと人もいふ、白金の清正公に日參の、こむる心を兄には告げねど、聞かぬ御筆なげ出して、臨に親切の志、我れまだ其方に及ばずとや言はん、下向は

ことに家のこと氣になりて、心も足もいそぎ道の、とある小路に夥しき人立、喧嘩か物ごりか何にもせよ、側杖うたれぬやうと避けて通る、多くの人の袖のまたを、洩れて聞こゆる涙こそ、ふつと耳に止まりて我しらす差のぞけば、憐れや五十あまりの老女、貧にも限りのなきものかな、我れに比べて今一倍あさましき有様、むかしは由緒ある人か皺める眉目ごこか品もあるを、ふびんやこれが商賣の、何焼とかいふ銅の板、うち渡せし小屋臺のかけに頭すりつけて繰りかへす詫こと、相手は三十許の髭むしやくしやと、見るからが憎氣な奴、大形の浴衣胸あらはに着て、力足ふみ立てつ耳も雙よと喚き立るは、何れ金が敵の世の中、元來は懸意づくの、生れながらに顔赤め合ひし中でもあるまじきに、はじめは伏し拜みて受たる恩、返すことのならぬは心からならず、此社會に陥りし身の右左不如意にて、約束せしこと約束のやうにもならねば、我れと恥ぢて心ならぬ留守も遣ひ、果ては言ひたくなき嘘に、一月を延ばし十五日を過ぐせど、其揚句さて何とも成らず、つまりつまりて、烏羽玉のやみの夜、家ぬしの垣の外に兩手合はせて拜みながら、不義理不名譽の驅落もすめり、さても此老女その類ひと覺しく、四邊はづかしくや小聲の言譯、且つは涙ながらの詞とて、首尾全くは聞えぬものゝ、取り集めて察すれば、娘にやあらん杖はしらの子、煩ひて居るかの様子、それ本復さへなさは又つくべ

き方もあり、今暫時の間まらして給はれど、あはれ腸をばり盡くす悲しげな聲、聞くお蝶は涙もろの女の身、ましてや同じ情くみて知らぬ事もなければ、何の人事と聞き過ぎられず、さりとほあの男の聞分なさ、百兩のかたに編笠をれど此屋臺おこせといふ、それ取られては私と娘、今日から喰べることが成りませぬお慈悲と合す手を、あれ打ちをつた、憎い奴にくい奴、自分は手前はさして困る様子も無く、大々しい身躰つきの病ひ氣も無さうなに、あの老人のしかも病人抱へて、困苦さこそ察しも無きは鬼か夜叉か、有らば彼の横つら金で換つて、美事老女救つてやりたきもの、それ處ではなき身、此財布の底はたげばとて、何になるものでなし、口惜しや可哀やと、お蝶身悶へする程残念がり、黒山と立つ人じろり眺めて、切て一人は此中に憐れと見る人ありさうなものと、歎息する折しも、お蝶の肩さき摺るほどにして、痛痒もなくずつと出し男、何者と思ふまもなく、狂りたつ鬼男の前、振あぐる手の肘を止めて、軽くふくむ微笑の色、まづ氣を吞まれて衆目のそと身姿は如何に、黒貂の羽織に白地の浴衣、鶴とならぬ金ぐさり角帯の端かすかに見せて、温和の風姿か優美の相か、言はれぬ處に愛敬もある廿八九の若紳士、老女の方顧みさま詞つき叮嚀に、私通りすがりの身、來歴は何か知らねど、高が女なり老人に失禮はあり勝ち、あれ御覽せよあの通り詫ても居ること、往來は其う

ちにも人の目口うるさきに、洋刀の厄介も御身分が如何や、何と私に此處の花、もたせては下さらぬかと、青柳のいと優しく出れば、はて扱他人の入りぬ口出し、詫や詞ですむはせなら、我等今頃は手を引く筈なり、済まぬ次第き、たしとならば聞かせもせん、我等二月三ヶ月、雨露しのがせれた事もある大恩人、その上に彼奴めが口車に乗せられて、五圓といふ大金貸したは此方も商賣づく、五一の利足はよしや天地が倒まにもなれ、一人子の病人死にもせよ、待つてやる約束もなければ、負けてやる覺はもなし、それに何ぞや泣ごとの數々、地蔵の顔も方圖のあるもの、利足の形にも不足なれど、何一つでも取るが取り徳、この代物引取つて行かんといふは、餘り無理でも無きつもりと、鼻で笑ふ髭づら憎し、若き男はからりと高笑ひして、何ぞと思ひしに金ですむ事なりしか、さりとては譯もなし、入らぬ他人と言はるれど、何れ四海の内輪同志、金は我れ立て換へんと、紙入れ探つて五圓札一枚一圓一顆、これではまだ御不足ならんが、内實持ち合はせ是れ限りなり、何と雨露しのがせるほどの大恩人さま、料簡しでは遣はされぬかと、飽まで柔和は粧ひながら、否と言は、あの純白の拳何處に揮つて、あの髯男微塵になるも知れがたしと、芝居氣のある見物が嗚き可笑し、彼の男は掻きさるやうに、金懐中にねぢ込んで、取り出す證書幾通、幾多の人の涙の種を印刷にせし文言名宛て、あれか

これかと捜し出して、よしか儘に渡しましたぞ不足を言はゞまだくなれど、取らぬには優し
これで算用済みとすれば、老婆めは大した儲けもの、好い親分見附け出して是れから利の出ぬ
金借りらるゝやら、人事ながら慈善家の末が案じられると、冷笑つて拂ふ袋の塵、禮も返さず
耻ぢもせず人かき分けてのさりのさり、行くての大地裂けもせず、躓く石の無きも不審し、若
き男は老女が陳ぶる禮よりも聞かず、何のくこれしきのこと、有つたればこそ役にも立つた
れ、無くば我れと其方様といづれ替らぬ難儀の淵、浮き沈みは浮世の常よ、お禮は其方様大分
限になられし時、此方よの御催促に出るまでは、お預けのことお預けのこと、はて名告をする
程聞こえても居らぬ名、先づそれも御免なされと、取すがる袖引はなして、悠然と去る後影、
光明赫灼として輝くごぞ拜まれぬ。

第三回

歳十三の晩より、繪筆とり初めて十六年、一心斯の道に入江頼三、富貴を浮雲の空しと見れ
ど、猶風前の塵一つ、名譽を願ふ心拂ひがたく、三寸の胸中慾火つねに燃えて、高く掛るべき
心鏡くもりといふは是れのみなり、さればとて世に媚び人に媚ぶること、生をかへぬ限りなら

ぬ質、我れより頭下ぐるごと、金輪禁落いやといふ一點ばかりに頑物の名高くなるほど、我慢
と意地は満身に行わたりて、容れられぬ世と彌々うしろ向きになる心、見をれ此腕なにか住む
か、一飛得意の曉にはと、人も聞かぬ大言はきて、穢かに熱腸を冷やすものゝ、扱も諸道の
さまたげと言ふ、貧より外に伴侶のなき身、其得意の曉いつとか待たん、彌勒の出世と並べ
立て、甲乙の無きものよと思ふに、口惜しの念胸をさして、臉の合はぬ夜半も多かり、寝ぬ
に明けたる或る朝、おく庭草の露を見て亡師のことふツと思ひ出し、俄かに寺参りしたくなり、
垣根の夏菊無造作に折り取つて、お蝶が暫時と止むるも聞かず、朝飯まへに家を出けり、寺は
伊皿子の臺町なれば左までには遠くもあらず、泉岳寺わきの生垣青々とせし中を過ぎて、打水
すいしく帚木目のたつ細道を、がらりざらりと首足下駄に力を入れて、纏はる片裾うるさしと、
捲くり上ぐるや空臈あらはに、何の見得もなく、身は小男の面ざし醜からねど、色黒々と骨だ
ちて、高き鼻しまりし口、眼ざしざろりと蒼く凄く、沈鬱の症何處か淋しく、紺薩の古手に白
兵兒の姿、懐中に建白書相應なれど、右手に持つ夏菊の花の色、流石にやさしき處も見えけり、
心こつて見る目には、映るものも映る物も皆その色、細づくりの格子戸まへに、米澤數奇屋の
肌つき美しくしき人、黒縹子の帯腰つきすつきりとして、芙蓉の面に淡彩の工合、楊柳の髪に根

がけの好み、扱も美かな扱も美かな、此美にすさむ心がけを我が陶畫の上に移して、共に協力の友を得たしと、茫然自失ながめ入れればわれ薄氣味の悪き人と、逃こまれて我れながら、取りとめ無き考へ馬鹿らしく、振ひきもせず又五六歩、三歳ばかりの男の子のちよるゝと馳せ出しが、袖なし浴衣の模様は何、錦に菊の崩し形、それよ今度の香爐にわの書き廻しも面白かるべし、注文は龍田川とか、何の我が腕で我が書くに、入らぬ遠慮窮屈さし、先師の言附より外は他人の意見容れたこと無き頼三、身貧に迫つて意を枉ぐるなど嫌な事なり、さりながら我れ頑物の兄故に、世の人並のこともせず、米味噌醬油に追ひ使はるゝお蝶、思へば兄風も吹かされねど、成行と誦らめて居て呉れる様子、それもそれなり、時運めぐらば何時かは花も咲くものよ、衛門に黒ぬり車出入させて、奥様と崇めらるゝやうに成るも不思議はなし、嗚呼その衛門よりは、天晴の人物えらびて添はせたまものと、何がなしに案じて不圖仰げば、今も想像の衛門に、篠原辰雄といかめしき表札、扱も立派の住居かな、主人公はどんな人、身分はいかに、愛國の志しある人あらば、日本固有の美術の不振、我が書工疲弊の情、説かば談合の味にもと、ゆめ知らぬ人に望みを屬す、狂氣の沙汰に心もつかず、彼れを思ひ此を思ひ、何時とは無しに坂も登りぬ、寺門くゞり入れとお僧どの寐坊にや、まだ看經の聲もなく、自から

の寂寞境に、あさ風さつと松に吹いて、身にしみる心地何とも言へず、本堂をめぐりて裏手の墓處へと、手桶の並ぶ關伽井のもとを過ぎる時、入江様しげしと呼止める聲、少し覺はのど願みれば、つかくと馳せ寄つて、物言はず大地に兩手を突く男、怪しや何者と呆れて立つ、足もとに身を縮めて、お見忘れか但し人外の私、お詞も下されまじとか、正路潔白の君に對して、合はすべき面もなく、言ふ詞出處もなき失策、後悔しぬきし改心の今日、我が田へ水の辨解てはなし、懺悔に滅ぼしたき罪のあらまし、聞いて給はる人他になき身、相弟子のよしみ昔なじみ、君を見かけてのお頼みと、頭も上げずあやまり入る時、袴足美事に耳うらに二つならぶ黒子、それなり姿こそ變りたれ彼奴新次め、先師が殊に寵愛にて、行々は猶子にもと骨折られしを、生地注文にと多分の金引出して、其まゝの行方しれず、師の臨終にもあり合さぬ人非人、今頃此處らを彷彿くこと憎し、何の相弟子失禮至極と、生來の疇癖目尻に現はれて、言ふこと宜くは耳にも入れず、聞きたくなしお黙りなされ、相弟子ならば兄弟分、言ふ事あり答ひる事あり責むる事あり、さりながらお前様と我れ何でもなし、他人も他人見ず知らず、入江頼三潔白を責ぶ身の、友とも仰せらるゝな、中々の耳ざはりなり、其處退きて給はれ、露をよながら志しの手向けの花、曇るゝも口惜しければと、詞少なに行き過ぎる袂、あわたくしく

先づと控へて、御尤ながら恨めしきお詞、責め給へ答め給へ、罪と知つて苦しき身の上、御折檻の苦にも逢は、却つて身の本懐なるを、捨て、願みぬ他人向きの仰せ、昔の入江様、今日の入江様、お人替りしか、お心二つか、我今までの目違か、君を先師の紀念とみて、改心の實も謝罪の情も、君によつて願はしたき願ひ、さりとて書餅のお詞かなと、半いはさず振返る願三、だまれと一聲鬱憂の氣の凝りたる餘り、物あらば當らん破裂の勢ひ、唇ふるくくと願へて性來の訥辯いよく訥に、汝新次人非人、恩しらす義理知らず道しらす、汝が罪の身を責むるを知らず、我を批難するか、我を批難するか、我額三吾も今も、正義を立て公道を踏んで、一步の過ち覺へなき身、ごこの何處に何の缺點、言へ聞かん言へ聞かんと、詰寄る眼尻きりくると釣つて、汝不忠不義の奴も、先師寵愛の餘りには、世に其罪を包まれて、知る者は師と我ばかり、我れ一度言じと定めて十年近く、此口開かねばこそ汝れ安穩に、月日の光り拜むは誰が庇護、頼まれずとも折檻の苦此處にあり、墓前へ手向けん志しの、此花で打つに不思議もなし、打手は額三精神は先師、口惜しくば身にしみよ骨にしみよと續け打ち、手に持つ菊花投附けて、睨みつむる眼の裡に感じ來れる新次が躰、昔ながらの美顔今一層の品を備へて、あはれ好男子身じろきもせず、臉にあふるゝ後悔の涙、眉宇に滿つ慚愧の狀、此人先師の愛せし人、我

れに謝罪と思ひ込みし人、憎むが本義か、捨つるが道か、とばかり迷つて判断の胸うやむやになる時、靜かに頭を上げて言ひ出づる一通り、聞けば過りたり我れ短慮輕忽の所爲、此人の罪罪ならず、偶々岐路に落ちし不幸の身と、先づ憐みの情より聞けば、私元來私慾にわらず、小を捨て、大に就く國利國益の策、立てしといふが抑々の破滅にて、思へば料簡が若かりしなり、腕を組みての考へと手を下しての實驗とは、冠履の相違雲泥の差別、人は我より利口にて、世は思ふまゝ、ならぬものと、つくづく歎息するにつけて、正義は人間の至實といふこと漸々に發明し、才はしりたる考へ身を離れしは、彌々無一物の曉がた、爾來幾年志しを磨きて、遠國他國に流浪の結果、不思議に人らしく世に言はれて、少しは名をも知らるゝ境界、今歳めづらしく歸京の錦、心に飾つて拜顔を楽しみし、師君は此處草蔭苔下の人、松風に袂をしぼつて幾朝くも閑伽井の水、影見ぬ人に殘念は増りて、一層君のこと懐かしく、慕はしかりし昨日、今日、打たるゝも嬉しく罵らるゝも嬉しく、眞の兄弟に逢ふ心地と、保ちかねてこぼす涙一滴、見るゝ額三感歎して、大地につく手まづ上げ給へと扶け起して、知らざりし今までの失禮、知りての後悔、打ち割りし意中に物のなきは見え給ふべし、いざ御墓前に中直りせん、心おこ事かと光風霽月、引いて立つ手に恨みも残らず、取なせばこれも先師の導き、ありし朋友なく

第四回

相弟子なり、君も訪ひ給へ、お前様も来てお覽せよ、お住居は此處ぞ、此處よりは遠からぬ如
來寺前に引結ぶ、庵の草深き處が夫れ、借は目鼻の我が宿も此坂下、篠原と呼ぶが當時の姓な
り、さりとは奇遇に辰雄殿とは君の事か。

月に恨み風に憤り、天下を悪魔の巢窟と見て、黑暗々の中に彷徨ひし頼三、何處ともなく一
點の光り微かに見えて、前途の希望漸々に大きくなりぬ、以前の新次、今の篠原辰雄と呼ぶ男、
有し職人時代には、負けぬ氣象の人受けよからず、師匠の愛の夥しきはと、憎む人さまなく
の説を構へ、傲慢と罵り狡猾と嘲りて、交際する者稀なるを、頼三例の弱きもの助けたく、弟
のやうに最負せしが、恩に二代の親も同じ、師匠の金持逃するほどの奴、師匠も我れも目遠ひ
と諦めて、愁ひ恥ぢを世に露はさしと、匿み通せし七八年目、何處ぞで悪人の仲間入、今頃は
何になりてと、折ふしの思ひ出種、流石に忘れぬ所もありしに、思ひきや今日の身分、變りも
變りし立派の紳士になりて、然かも執る主義の高潔さ、話し合ふほど頼母しさ優りて、暮參歸
りの半日を篠原のもとに説きつ説かれつ、辰雄今日までの経歴につきても、善事と悪事を洩さ

ず隠さず、篠原と呼ぶ今の家、何某地方の金満家なりし事、其處に住み込の初より、次第に氣
に入られて一人娘に舞養子と成りたる事、其身戸主となりて二年とたぬ間に、親女房とも引
つゝきて病死せし不幸さ、扱その幾萬の財産指のさしてなく、我が自由になすもつらく、家に
つきての縁類にゆづりて、身退きたき願ひも、世の人さらに聞き入れてくれず、其まゝ安座逸
居の身、我が位置高まるにつけて湧き來る希望のさま、及ばぬと知つて捨られぬが是れも
癖にや、社會の爲の東奔西走、此處東京に計畫ありて、出京の昨日今日、生中此方彼方に名
を呼ばれて、稱へらるゝ身汗あゆる心地、昔をおもへば大恩の師に、よしや譯は何にもせよ、
重々の不始末もあるを、素知らぬ顔に青天を歩くさへ、日月の手前恐ろしく、世を欺くに似て
心安からず、手を置かぬ胸夢おどろきて、人知らぬ罪中々にくるしかりきと、腹ある限り告白
して、肩よしとする様子、表面をつくろひて底にこる、輕薄者流を厭ふ目には、よくも返りし
本善の善、稀なる人よと感じられて、過ぎし過失は美玉のくもり、志かも拭ひ去つて見るに、
却つて光りは勝る心地、頼三志きりに憎からずなりぬ、中々物語り盡きもせぬに、交際ひろき
人のならひ、訪問者陸續どうるさく、何と入江様、人氣なき閑靜な處にて、一日ゆるりと御高
説承りたし、君はいつもお暇かと問はれて、はて扱貧者に餘裕はなし、氣樂な事いひ給ふ

な、人氣なき處と言は、我れ詫住居の閑静さ、裏の車井に釣瓶くる音か、表に子守歌きこえる位のもの、此處よりはつひ其處なり、いつぞは来て御覽せよ、妾めし炊かせて碧精汁位の御馳走はすべしと無造作の言、さりとて羨まじきかな、世の事聞かず人に交はらず、何事の憂きも宿らねば、胸中いづも清しかるべく、凡界俗境遠く離れて、探る筆一つに樂みを知る御身分、我れ雲泥の相違と歎息する辰雄、箱三引きとりて、何の羨まじき身分か、筆心にまかせず業世と合はず、我れと埋もる、身のはては、首陽か汨羅か底走らずの境涯、さりとて世の中あても無しと笑つて、遠慮なき昔語り、胸も開く障子の外に出れば、廊下いく曲りか廣々とせし住居、實に人の身は水の流れど、物言はず願みれば莞爾と送る辰雄の姿、あゝ人物と心にはめて、下婢が直す百足下駄、是れ特色の愧づる時なく、喜色雍々門を出でしが、歸宅の後もあはれど、誰何と振かへる稗姿を、扱も美形と見る辰雄、お蝶はッ心附きて、俄にさすや雙頬の紅、色は何の色我れまらず、見しは清正公の彼の時の彼のふ人、何として我家へはど、思はねど、喜ぶ兄に我れ嬉しく、一日ありて二日目の夕がた、軒ばの椶に茅鯛の鳴き出づる頃、手仕事叮嚀に取片づり、家の廻り奇麗に掃除して、打水いそがしき門口に、入江様はど言なはれて、誰何と振かへる稗姿を、扱も美形と見る辰雄、お蝶はッ心附きて、俄にさすや雙頬の紅、色は何の色我れまらず、見しは清正公の彼の時の彼のふ人、何として我家へはど、

騒だつ胸に是れよりや知る戀。

第五回

床のものと竈馬かたさせと鳴いて、都大路に秋見ゆる八月の末、宮城の南三田のほとりに、人家二三十戸買ひつぷとして、新に工事をいそぐは何、押立てし杭の面に、博愛醫院建築地と墨ぐるに書して、積み立つる煉瓦の土臺に、きやりの聲の賑はしきと共、四方に聞えわたる篠原辰雄、浮世のうきを憂きと捨てずして、吉野紙の人情あさましと、孤身奮ひ起す愛世済民の法、我れ微力不肖の身の、斃れて已まば已まんのみ、今日細民困窮のあり様、見るに鷹たえずやある、知らずや錦衣九重の人、埋火のもとに花を咲かせて、面白しと見る雪の日は、節婦こいて涙こほるべく、大厦高樓に岐阜提燈ともしつらねて、風をまつ納涼の夜は、蚊遣火のもとに孝子泣くめり、中に憐れは疾病の災ひ、名醫門にあり、良薬ちかきに有つて、しかも求め難く得がたき身、天命ならず定業ならず、救はるべき命見すの残念さ、妻の身子の身いくばくぞや、人生れながらに悪意なければ、迫りては徳不徳取捨の猶豫なく、天を恨み地を恨み、世範これより亂れて國家の末いと危し、これを救ふこと仁にありと、我れ先づ資産を擲つ

て、一着手を救生の急なるに起し、一方は富國利民の策を講じ、一方は買顯紳商の門に、協力賛助を求むること切なるに、徳孤ならず何某の殿某の長官、意氣投じ所論合つて、甲より乙に美譽を傳へれば、徳義を一の名譽と心得る輩、何となしに雷同して、世上の評判赫と高く、見ぬ人聞かぬ人名を慕ひ、天晴仁者と知らぬ者なくなりぬ、其行ひ其言見るにつけ聞くにつけ、交るにつけ睦むにつけ、箱三次第に慕はしく尊く、口腐れ他人に扶助は仰がじと定めし、我慢の角は此人の前に折れて、鬱悶の心志のびがたく、我業疲弊不振の物語りより、斯道挽回の志し一日の休む間なけれど、實をいはし勢力なき身の聞き入れて呉れてもなく、生中説くこと咄笑ひに成りて、はては後指さるること口惜し、さりながらそれも道理、我れ此道に入ちて十六年、まだ一度の共進會に名を掲げたることもなく、我れ自由の筆貧ゆゑには縛られねど、中々の直行悪まれて、問屋うけ宜からねば、註文は廉價粗物の外もなく、事心と合せ筆何として揮はるべき、不満々々の塊まりは、何の世の中あき盲目ごも、これ相應も投げ出しものにして、意匠もちひず鍛練馬鹿らしく、品物の面よごしてやれば、我が血涙を呑みし粗物も、彼れ衣食の爲にする粗物も、見る目に何の變りなく、口ほごもなき駄物師と嘲られ、我名いよく地に落ちたり、季鍊月鍛の筆、經營慘澹の意匠、心に有つて物に描かず、

我れ男子の身の精神一到、猶事成らぬ腑甲斐なき、世人明なきか我れもし惑へるか、誰れに縁つて語り合さん術なく、冥々の裡に重ねし年幾年、君一度は斯道の流れに立ちし人、汲み知り給ふ事もあるべし、我が爲の名案下し給へと、打明かす意中、辰雄しきりに嘆じて止まず、げによくも合へるものかな、我が國家を見る心その外に出づる事なし、徳義の廢八情の腐敗、此れを憂ひ彼れを嘆けど、道に立つ人大方は、濁流汚溝に身を投じて、しかもこれ知らぬ輩、味方少く仇は多し、さりながら捨てぬ處に物は成立ちて、二人三人の正義の士に、知られ初めし昨日今日の事業、憚り多けれど是れ手本とも御覽じて、容れられぬ世を捨て給はず、腕かぎりの品物こしらへて見給はずや、其資金は我れ受けもたん、此事廉直の君が心に屑しと思さぬか知らず、これは君一身の小事のみ、幾多の畫工の睡を覺まして、國益の一助たゆたふ所か、吾邦特有の石陶器、價廉といへど品は英佛伊に及ばず、獨り薩州陶器のみは、土質釉料他邦に類なく、天晴名譽の品なるを、惜しや畫工に氣概なく、問屋に一の精神なく、今日の成行くちをしの思ひ、我れも多年の胸中でありし、不思議に心の合するも自からの時機なるべし、逸し給ふなと熱心に力を添ふれば、箱三感涙に匪ぬれて、何分にもと生れて初めてのこと、辰雄その後は聞かず言はず、事一切此處に此處にと胸を打ちけり。

日數隔つること幾日、三田の工事の喧しきと共、斯道畫工の耳時つること沸き來りぬ、如來寺門前草ふかき處、埋もれもの、慷慨先生、三年飛ばす鳴かすの技倆、現はさんとする風説、立つや我れより高き人、挫きたきが此輩の常、陰に陽に批評たくましくすれど、後ろだて確かなる身の、却りては心可笑しく兩かに素がきの筆を下しぬ、生地は素より沈壽官が精製の細陶、撰みは額三かねての好み、三尺の細口にして、臺附龍耳の花瓶一對、百花これより亂れ咲いて、燦たる金色みるは幾月の後、心未來に先づ馳すれば人物景色眼前に浮かんで、私しらす莞爾と笑む額三、王侯貴人何のものは、世塵遠く身を離れて、凌風駕雲の仙に入る心地、經つ日覺えず明けぬ暮れぬ。

第六回

恩に感じ行ひに服して、我れは神とも尊ぶ人の、彼れより心に垣を結はず、睡れらるゝ事勿躰なく嬉しく篠原といふ名知らず聞かすのそもく、身にしみし一事漸々に形づくりにて、馴れゆく月日の深きほど、可憐の胸やみに成りぬ、お蝶あくまで優しき姿、萩の下露もろげに見えて、立てし心は現はさねど、思ひ込まば火水の中もよしや、命は假の世と定めて、二つの道は踏ま

ぬ氣象、我身卑賤の教へもなきに、君様世上に敬はるゝお身、成るまじき願ひと我れを叱りて、さていよく捨てがたく、染みし思ひの是れを友に、我身一生獨りすみと、あはれの觀念さすがに動くは、折ふし耳にする世の評判、宜しと言はれて悦ぶは格別、何某子爵最愛の娘、是非彼の人にと申込みの噂、聞く胸なにか轟いて、臆々兄に問へば、大丈夫と笑つて追けられぬ、されど流石に氣になりてや、其つぎの夜に訪はれし時、額三其事いひ出して、實かと問へば、虚言ではなし、舊大名の幾萬石とか、聞くばかりも耳うるさく斷り言ひしも五度か六度、未だに仲人殿むだ足に參らるゝ事可笑しとばかり、辰雄心に留めぬ様子、それは何故のお斷り君もまだ年若の、これより獨身にも居られまじ、望み好みの有るは知らず、大方ならば極められたが宜からんにと、額三心あつて言へば、我れ獨身にて終らんとお思はねど、華族の聲になる願ひなく、姫君様女房にしたくなし、香花茶の湯に規則どほりの容儀と、のひて、お役目の學問少少ばかり、何になるものでなし、世路の困難ふんでも見ず、一人立ちの交際もならぬやうな、木偶的の神さま持込まれて、親の光りに頭さぐるなど、厭な事なり、我れ望みは身分でなく親でなし、其人自身の精神一つ、行ひ正しく志し美事ならば、今でもお世話ねがひたきものと、鮮かな詞、額三片頬をみしてお蝶をかへり見ぬ、此處に來て遊ぶ時の辰雄、世に高名の人

ともなく、さながら家人の打とけ物語、只なつかしく睦ましく、友か親戚か猶一段、簾三たしかの望み出来て、或る時お蝶にはのめかせば、袂くはへて勝手元に逃げしが、其頃よりお蝶いよ／＼身の行ひつゝしみて、徳を修むる事専一と心がけ、婆木綿着のいやしきは恥ぢねど、詞づかひ立ふる舞、家の内の經濟より始めて、世の交際人づかひと、細かに省みれば未だ身に整はぬ事ばかり、繁きが中に戀といふ怪しものが折々の波むねに起して、飽かれまじ厭はれまじ喜ばれたし愛されたし、何とせば永世不滅の愛を得て、我れも君様も幸福の世の過ぐるべきかと、慾は次第に高まりて、さまざまの想像わき来れば、逢ふに嬉しき物がたりの、裏は如何にと枝葉を疑ひ、我れと我れを嘆き身を責めて、一身の半は辰雄のもの、辰雄ありての喜怒哀楽、善も悪も黒白も辰雄が指のさし次第、戀の山口くらくなりぬ、簾三局外に立つ身の、迷ひを捨て、見る目には、辰雄の愛の度妹に下らず、彼れも眞情此れも眞情、取ならぶる好一對とこゝろ嬉しく、二人長閑に物がたるを聞けば、百花の園に雙蝶の舞ふ心地、春風其座に吹渡つて我れも陶然の樂み限りなく、右も左も喜びの中に、心障らす意氣軒昂、取る筆いさんで書圖うごき、唐草模様割模様、縁書き腰がき地つぶしの工夫、瀑彩淡彩畢生の巧、下焼成つて又一窠、二窠三窠よはいつしか、殘菊落葉ときの間の霜と消えて、煤拂ひの音もち掲ぎの聲、

北風の空に松や飾り松。

第七回

送る歳くる歳珍らしからねど、心改まれば一段の光り、のぼる初日の影にそひて、汲あぐる若水の車井に、めぐる世の中おもしろく、屠蘇の盃まづ年下よりと、さすも可笑しや一家二人の生活に、内裏儀式のむかしを學びて、三つ組の重ふるきを捨てず、新らしきは二間四枚の縁がはの障子、切り張りの斑なららず、是れ例年に異りたる處、篠原が庇護なりとて、元旦早々噂は出でぬ、簾三片意地の質、人に受くる恵み快からねど、搦る、藝に我れと負けて、二十金の生地二十夕の金箔、此處四五月の費用幾度の窠代、積もりし恩の深きが上、猶心づけの數々もうるさく、其都度に斷るを、新年着の料にとて、贈られし去年の反物、迷惑さ限りなく、遣りつ返しつのとゞの果、さらば妹に頂戴させん、我れは男のよき衣服きて嬉しからずと、兄妹ぶりの一反を返して、残す一反に人の情無にせじと、お蝶の晴衣に仕立させて、今日の姿つくろひしを見れば、今歳十八の出花の色、玉露の香り馥郁として、一段の見榮え流石に嬉しく、此服装平生着にさせたくおもへり、人は廻禮に忙しき日も、世捨て人の其苦なく、今日一

日はと仕事休みして、横に轉ぶ脇枕、御慶の聲に夢やぶれて、珍らしや誰れと問へば、常は疎き問屋の何某、末廣に祝詞を籠めて、長々と去年の無沙汰の詫、これよりの懇親、一向たのみで行きしこと、お蝶その通り取次げば、はて扱利慾にくらみし眼は、何處まで暗さか方圖のなきもの、其詞我れへではなし、御本尊は彼方にとて、指すは座敷の花瓶、これ高くなりし評判に、出来上らぬ内より我れ買ひ取らん、いや是非とも私にとせり合ひの申込、一々に跳ねつけて、今歳コロンブス博覽會に出品の計畫、諸事は辰雄の周旋に、悠然構へる小氣味よさ、額三いよ／＼大言を吐きけり、暮れて其日も點燈ごろ、辰雄廻禮の車を其ま、交際ひろき身の勞れも厭はず、門に轆轤おろさすれば、春色いとい長閑になりて、いふ事さく事一々におもしろく、額三紙齋の昔を言へば、辰雄廻し獨樂の面白さ忘れずと語り、彼れに移り此れに移り、次第々々に密になりて、幾變遷の今の身、中々にそのかみの無心戀しきばかり、世のこゝと人のこと目に映りて、彼れも助けたく此れも救ひたく、不相應の事業に身を委ねて、及ばぬ力の我ながら口惜しく、暗涙を呑むこと誰が業ならねど、訴ふるに處もあらず、凝りにこりし憂鬱の氣の晴るゝは此處に斯く遊ぶ時ばかりと、何故か例に似ぬ詞、額三聞き答めて、怪しき事かな君が博愛の徳、上に聞え下に渡つて、推尊せぬ人なき筈を、何故の御不満ぞと問へば、

何事も言はぬが花なり、お互に聞きつ聞かせつ、樂しき事ならば宜けれど、我胸にさへ持切れぬ苦を、君達に分けて成ることか、元來正は邪に押され、直は曲に勝ちがたきが常、何事も問ひ給ふな、腦よい／＼亂るゝやうなりと、振あふぐ面氣の故にや、血の氣も見えず蒼く白く、唇を噛んで沈思の躰、お蝶たまらず兄の袂そと曳けば、額三少し前に進みて、善き事のみを聞き聞かせの友いくらもあり、喜憂ともにと言ふ處眞實の價値ならずや、これを隠されて悦ぶ者、世の中にはあるか知らねど、我等同胞おもしろくなし、とは不遜の詞なれど、兄弟と思ふ君の事、水火の中にも手を携へたきが願ひ、何と打明かしては下さらぬか、承はらねば氣、落附かず、我よりはお蝶何の位心ぼそきか、女は氣の狭きもの、役にも立たずくし／＼と氣にして、我れも洋惑、可哀さうにもあり、五歩十歩の同じくは、諸ともに苦を分けたしと肚からの詞、お蝶もの言はず打萎れて、組み合はす手を解きつ返しつ、あはれや胸の動悸高かり、辰雄俄かに心づきてや、扱も馬鹿な事言出して、折角の面白さ臺なしになりぬ、苦あれば樂あり、樂あればこそ苦もあるなれ、循環して行くが奇なものなるを、一々に憂れはしと見る日には、五十年の壽命たまることか、お蝶さま案じ給ふな、今いひしは皆醉の上の謔言、泣上戸の言分何でもなし何でもなし、笑ひ顔みせて我れにも落つかせ給へど、から／＼と笑つて一物

の残らぬ様子、再びもとの話に復つて、更くる夜遅く歸宅せしが、お蝶いよく心悶へて、寝られぬ枕うくばかり、涙の床につくくんと案ずれば、最惜しや君様、あれほど熱心の計畫に、何ごとの望いりたるか、談合する友は少く、打こはす仇は多き世の中、口惜しさいかばかりぞや、今宵の詞今宵の顔色、必らず仔細なくては叶はじ、我れに隔ての匿み隠しか、我れに歎きを懸けまじとてか、兎にもせよ角にもせよ、我れは君の妻、君を措きて我が夫なし、見すべき心は斯る時よ、萬人一樣表面は同じ、其皮一重下の下の骨に刻んで忘れぬは何、知らせて知りて喜憂は借にしたきものと、思ひを曉の鏡にかぞへて、新玉のとしての始め長閑けからず、暇なき戀に身は使はれもの、三ケ日も過ぎて七種の日に、辰雄誕生日の祝ひながら、新年の宴開きたく、お蝶さま是非借りたしとの文言、我れ悦ばせん爲かあらぬか、當日一式の身の廻り、何處貴顯の席にも取かからず、心をこめし贈り物の品々、箱三喜んで許せば、我れも其人の意に背かじと、こらす粧ひは錦上の花、あゝ純粹の淑女さま、此運此姿、見せたきものは亡き親といはれて、お蝶鏡の前に泣きけり。

第八回

百花に魁けて咲くや窓の梅、來鳴け鶯わが宿は、春風ぞ吹く品物の落成、四窓八たびの窓の心配、薪の増減烟の多少、火色に胸をもやし微響にも氣をいためて、壘や入たる流れやしけん、金色の不明繪具の變色、若を嘗めつくせし此處幾月、思ふこと思ふに叶ひて、新薬みがきに磨き出せし光澤、耀く光りは我が光り、花瓶の上部見切りの中、正面は龍に立つ浪の丸模様、周圍に飛ばす菊桐の、あしらはは古代唐草にして、見切りの境界雲形の、上下に描くや東大寺様、此處さや形七寶の地つぶしに、帯の菊の丸ありふれたれど、丹誠の筆いやくもせず、上部終つて梓とりの内の畫は、表面對の金銀閣寺、裏面向ひ合はす湊川稻村が崎、誠意誠心みちみちて、粧ひなす彩色凡筆ならず、梓の周圍は古薩摩風の秋の七草、金模様の蝶のちらしがさ、此地つぶしの雲ばかり形金梨地、先人未發の工夫をこらして、刻苦の跡いちじるしく、臺の描つぶし縁腰のわり模様、微ならず細ならずと請らばそしれ、眼を持つものは來ても見よ、一打棒にも美はこもる我れ箱三不器用の技倆、此品物に止めぬと誇りて、晚酌一杯酒氣さへ添へば心いよく面白く、篠原に風聴がてら、お蝶まねかれし日の禮も言はんと、立出づる門口に、兄様しばしと袖ひかへる妹、言はんとして言はんとして躊躇ふを、何ぞ用かと小戻りすれば、何でもなければ夜風お寒し、風引給はるなの心づけ嬉しく、それはと遅くはならぬつもり、な

れども酔ざめは油断がならず、羽織今一つ着て行かんと、立歸つて着重ぬる様の先、襟に手を添へて折りながら、兄様大層お髭が生へたり、新年といふに見苦しやと、横顔つくつく眺められて、何の夜ではあり知れる事か、明るき處で明日剃りて給はれ、先づは品物も出来上りて、小成に安んずるではなけれど、祝ひてもよき事なり、四五日の中、辰雄との誘ひ出して、三人連れに何處ぞへ行かん、其約束今宵して來る心、おそくはならねど金目の物、家にあるだけ不用心なり、門の戸さして待ち給へ、さりと胸に雲もなしあゝ月もよしと立上る兄、其手にすがつて門まで送れば、地上に落つる影二つ、見る／＼一つは遠くなるを、見送つて立つ影うらかなしく、夜風軒ばの板に淋し。

むかしは他處にみし表札、やがては弟の門くゆる頼三、頼む、どうれの玄關向き小うるさく、辰雄の居間は豫て知る、庭口の戸を押せば明きたり、霜にしめりし芝生の上、踏むに音なき袖がき隠れ、聞こゆる聲は高からねど、影は障子に二人三人、聞きたし何の相談會と、引き立つる耳に一言二言、怪しや夢か意外の事ども、某の子爵たまに遣ひて、何某長官に歎願させれば、此事必らず成立つべし、某の殿の證印は柳橋の握らせ次第、金穴は例の大盡、氣脈は豫て通じ置きたり、跡は野となれ、山師ともいへ詐偽とも言へ、愚者に持たせて不用の財、引上

げな事世の爲なり、思ふも腹筋は洋行がへりの才子との、何の活眼知れたものよ、魔睡劑は入江の妹、此間の宴會に眼尻の角度見て取りぬ、彼の頑物に説きつけがむづかしけれど、恩といふ獄屋入り、八重からげも同じこと、女は況て懐中そだちの世間見す情の深きだけ丸め易し、おろす元手の細工は粒々、頼三といふ奴おもひの外、遣ひ道不向なれど、飼つて置かば何にかなるべし、楠どの、泣き男、人間に不用もなきもの、博く愛する是れも仁かと不敵の詞、聲は辰雄歎おのれとばかり、奮然立上つて更に摩する腕の無念さ、内にはいつか話絶えて、玉笛の聲唳々と聞え出でぬ。

第九回

此人の一笑に無限の喜びを知り、此人の一滴に萬斛の憂ひを酌み、形より濃き影の如く、起居に心はしたかふ其人、玉をのべし容顏愁ひを含んで、しみ／＼この物語り、何の契りの君と我れ、宿世あやしく忘れ難く、國家の爲めに盡す心、半分は君に取られて、人に言はれぬ物をも思ふ身はかなしや、お心も知らず、天下に妻は又なしと定めて、何の子爵の娘、振むく處か、にべもなく斷りしが蟻の一穴、實を言はゞ我が所爲るかりし、其子爵殿今までの一臂にて、

支出の金に事も缺かず、事業運びかけし今日になりて、俄かに破約の申込み、此途たえて復事成らず、怨みを呑んで我れ此まゝに退かんか、遣す譏りも嘲りも君故と知れば惜しからねど、何と成るべき世の中にや、國家の末を思ひいたれば、殘懷山のごとく此胸やぶるゝばかり、此事誰れに語らるべき、隔てぬ中の君にさへ、言はれぬは斯る譯、外にとる術なきでもなければ、それいよゝ心苦しくと、言ひはてぬ詞猶もどかしく、此真情まだ見えずやと打うらめば、さりとは其真情、見えて悲しき事は君が上なり、成否はいづれお心一つ、今日賓客の一人彼れ有力の貴顯、我が爲金穴たらんと言ふ、心はと問へば、苦しきは此處、君の噂を如何に聞きしか、一意妹と思ひ込みて、達ての所望つらからずや、君を他人にゆるして我れ、國家の爲と斷念られず、よし我れ怨を離るゝとも、この事何として我が口より言はるべきと、憂しや戀人斷腸のけしき、可憐の少女魂を奪はれ膽を消されて、責を我が身の上を負へば、操を破つて操をたてんか、人知らぬ罪わが心の裡にあり、さりとて我れ故君が名まで、世に滅ぶるを他處に見んこと、思を仇なる畜類の所爲、あれも辛しこれも憂し、何とせんとばかりの胸、智慮分別の及ばぬ末は唯死の一つ、影あり形のある世なればぞ、障り多く妨げ多し、生れぬ昔の空無量、我れお蝶といふ身がなくなれば、何方へ義理なく憚りなく、此戀圓滿にあるべき筈、よし是れも天命

なり、病ひに死ぬも戀に死ぬも、命は一つよ二たびは行かぬ路、天地にも恥づる所あらず神佛もとがめ給はじ、兄さまもゆるし給へよ我れも悔む所なしと、決心するどく未練なく、あはれお蝶潔白無雙の身、濁りに染まじ亂れじの行ひ、寝る夜の夢のしはしも忘れず、富貴に眼をとぢ貧賤に心をみがきて、今歳十八年くもりなき美玉、打くだく大魔王は戀といふ胸の一物、形を辰雄に假り聲を篠原にかりて、或時は誘ふ春風花ひらく園、ある時は指さす秋雲月くらさ天、喜憂を包みし袂のさき、引きて伴ふ果ては何處ぞ、東西南北かげもなく形もなく、愛らしかりし双頬の鬢いづくに往きし、なつかしかりし遠山の眉いづくに往きし、星の眼當の口、復讐かす復開かず、黒漆の髮雪白の肌、あれも無しこれも無し、寒風ふきしきる夜半の月に、追へども見えず呼べども答へず、形見は留むる一封の文に、殘す手蹟のうるはしきも涙

第十回

どつかと坐す花瓶の前、あふれ出る熱涙はらひもあへず、にらみつむる眼光火と散つて、取りしむる腕、くだけよ此骨、寧ろ生れながらに指まがり筋つまりてあらば、斯道に志ざすこともなく、入立たぬ昔に何をか願はん、なまなか陶畫の粹と呼ばれし、先師の畫工場にいと稱へ

られて、我れは賣らねど自からは人も知る名、貧ゆゑうづもる、事口惜しの念、我れ潔白の心に沸きて、願ふまじき名譽ねがひしは何故、たのむまじき人頼みしは何故、喰ふまじき不義の食この口に食みしは何故、許すまじきお蝶、不義の人に許せしは何故、汝れ汝れ此腕此膝、心をまどはし目を眩まして、見えす覺らず今今夜、お蝶不幸の家出は誰が業、磨きし多年の筆故に、最愛の妹ころさするか、ねりし心の苦みは、汚濁を我身に浸みこませしか、冷笑ひし辰雄、嘲りし辰雄、聲は彼れよ罪は汝よ、交りを断つて惡聲を出ださぬ、我れ君子の道は知れねど、受けし恵みの泰山蒼海、無念骨髓に徹れど恩は恩なり、彼れ奸惡の秘事この耳にして、まこと聞き捨てにすべきならず、世の爲人の爲正義の爲、揮ふべき拳こゝにあり、秘藏の短劍ひらめかして、あの胸もとを貫くも容易、さりとは無念や此品物、此恩此恵み身をえはりて、向くべき刃なく揮ふべき拳なし、思へば恨みは我れにあり、腕にあり藝にあり此花瓶にあり、情し口惜し仇敵め大黒魔め、汝れを碎いて辰雄も刺さん、汝れなくば何の恩何の恵みと、拳をかためて突立上り、口れば見れば月明りに、浮きて見ゆる金無開寺、砂子一つ筋一本心をこめぬ處もなく、まして周圍の金なし地、嗚呼幾年の苦の名残、描きも描きたり我れながら、天晴斯道の妙の妙、この筆たえて繼ぐ人ありや、我れ道に入りて十七年、惜みに惜みし名を記して、

見よや海外の碧眼玉、來れ萬國の陶器畫工、日本帝國の一臣民、入江嶺三自まんの筆と、心に誇りし満足の品、これ何として碎かるべきこれ何として碎かるべき、兎にも角にも世に合はぬ身の、一生の思ひ出これに止めて、入らんか深山のそれも口惜し、お蝶ふたゝび還りもせば、辰雄に邪心の無くもあらば、此品保存も成なるべきを、雙手に抱いてためつすがめつ、眺め入る心徳として、我れ畫中に入りたるか、畫圖我が身に添ひたるか、お蝶もなし辰雄もなし、我慢もなし意地もなし、金光我が身に輝いて、四方に湧く喝采の聲、莞爾と笑めば耳ちかく、頼三愚物のつかひ道なしと、聞え出づるは篠原か、汝れと振仰ぐ袖ひかへて、お風めすなと便しき聲、嬉しやお蝶かへりしか、兄さま彼處へ諸共にと、指す方は金開寺銀開寺、咲くや秋草胡蝶飛んで、立わたる霧さりとては、我が金なし地にさも似たり、面白し面白し、蚊龍つひに池中の物ならず、湧き來る雲形のうちに立浪の丸模様、登り龍下り龍龍の丸、蝶の丸花の丸鳳凰の丸、をとり桐くるひ獅子二葉葵、源氏車槌車ばたん唐草菊がら草、吉野龍田の紅葉に花に、あれも美なりこれも美なり、お蝶も美なり辰雄も美なり、中に就て我が筆美なり、これを棄てて何處に行かん、天下萬人みな明きめくら、見すべき人なし見せて甲斐なし、我が友は汝よ、汝か友は我れよ、いぎ共に行かんと抱きあげて、投げ出だす一對庭石の上、憂然のひやき大笑

のひらき、夜半の鐘聲とほく引きて、残るものは片々の金光一輪の月。

闇 櫻

(上)

隔ては中垣の建仁寺にゆづりて汲かはす庭井の水の交はりの底きよく深き軒端に咲く梅一本に
兩家の春を見せて薫りを分ち合ふ中村園田と呼ぶ宿あり園田の主人は一昨年なくなりて相續は
良之助廿二の若者何某學校の通學生とかや中村のかたには娘只一人男子もありたれど早世して
の一粒ものとして寵愛はいと手のうちの玉かさしの花に吹かぬ風まづいとひて願ふはあし田鶴
の齡ながれとにや千代となづけし親心にぞ見ゆらんものよ梅壇の二葉三つ四つより行未さぞ
と世の人のほめものにせし姿の花は雨さをふ彌生の山はころび初めしつばみと眺めそはりて盛
りはいつとまつ葉こしの月いさよふといふも可愛らしき十六歳の高島田にかくるやさしきな
まこ綾りくれなゐは園生に植てもかくれなきもの中村のお嬢さんとあらぬ人にまでうはさゝる
る美人もあるさきものぞかしさても習慣こそ可笑しけれ、北風の空にかのぼりうならせて電
信の柱邪魔くさかりし昔は我も昔と思へと良之助お千代に向ふときはありし舞遊びの心あらた

まらず改まりし姿かたち氣にとめんとせねばとまりもせず良さん千代ちやんと他愛もなき談
 笑に果ては引き出す喧嘩の糸口もう來玉ふな何しに來んお前様こそこのいひしらけに見合さぬ顔
 もわづか二日目昨日は私が悪かりし此後はあのやうな我儘いひませぬ程におゆるし遊ばしてよ
 とあどなくも詫びられて流石にをかしく解けてはあらぬ春の水イヤ僕こそが結局なり妹と
 いふもの味しらねどあらば斯くまで愛らしきか笑顔ゆたかに袖ひかへて良さん昨夜は嬉しき夢
 を見たりお前様が學校を卒業なされて何といふお役か知らず高帽子立派に黒ぬりの馬車にのり
 て西洋館へ入り給ふ處をといふ夢は逆夢ぞ馬車にでも挽かれはせぬかと大笑ひすれば美しき
 眉ひそめて氣になる事おつしやるよ今日の日曜はもう何處へもお出で遊ばすなと今の世の教育
 うけた身に似合しからの詞も眞實大事に思へばなり此方に隔てなければ彼方に遠慮もなくくれ
 竹のよのうきと云ふ事二人が中には葉末におく露ほども知らず笑ふて暮らす春の日もまだ風寒
 き二月半ば梅見て來んと夕暮や摩利支天の縁日に連ぬる袖も温かげに。良さんお約束のもの
 忘れては否よ。あゝ大丈夫忘れやしない併しコート何だツけねえ。あれだものを出かけにもあ
 の位願つておいたのに。さうくおぼえて居る八百屋お七の機關が見たいと云つたんだツけ。
 あら厭盛ばかり。それちや丹波の國から生捕つた荒熊でございの方か。何うでもようござい

ますよ妾はもう歸りますから。あやまつた〜今のはみんな何うして中村の令嬢千代子君と
 も云はれる人がそんな御註文をなさらう筈がない良之助たしかに承はつて参つたものは。よ
 うございませ何も入りません。さう怒つてはこまる喧嘩しながら歩くと往來の人が笑ふぢやな
 いか。だつてあなたが彼様な事ばツかしておつしやるんだもの。それだからあやまつたと云ふぢ
 やないかサア饒舌て居るうちに小間物屋のまへは通りこして仕舞つた。あらまあ何うしませう
 ねえ未だ先にもありますか知ら。何うだかぞんじませんたつた今何も入らないと云つた人は何
 處に。もうそれは言ひツこなしと止めるも言ふも一筋道横町の方に植木は多しこちへと招けば
 走りよるぬり下駄の音カラコロリ琴ひく盲女は今の世の朝顔か露のひぬまのあはれ〜栗の水
 飴めしませとゆるく甘くいふ隣にあつ焼の鹽せんべいかたきをむねとしたるもをかし。千代ち
 やん鳥渡見玉へ右から二番目のを。はああの紅梅がい〜ことねえと餘念なく眺め入りし後より。
 中村さんと唐突に背中た〜かれてオヤと振り返れば束髪の一群何と見てかおむつましいこと〜
 無遠慮の一言たれが花の唇をもれし言葉か跡は同音の笑ひ聲夜風に殘して走り行くを千代ち
 やんあれは何だ學校の御朋友か随分亂暴な連中だなアとあきれて見送る良之助より低頭くお千
 代は報然めり。

(中)

昨日は何方に宿りつる心とてかはかなく動き初めては中々にえも止まらずあやしや迷ふぬば玉の闇色なき聲さへ身にしてみて思ひ出づるに身もふるはれぬ其人戀しくなると共に恥かしくつゝましく恐ろしくかく云は、笑はれんかく振舞は、厭はれんか假初の應答さへはかゝしくは言ひも得せずひねる疊の塵よりぞ山ともつもる思ひの數々逢ひたし見たしなどあらはに云ひし昨日の心は淺かりける我が心我と答ひればお憐とも云はず良様とも云はず言はねばこそくるしけれ涙しなくばと云ひけんから衣胸のあたりの燃ゆべく覺えて夜はすがらに眠られず思ひに勞れてとろくすれば夢にも見ゆる其人の面影優しき手に背を撫でつゝ何を思ひ給ふぞとさしのぞかれ君林ゆゑと口元まで現の折の心ならひに言ひも出でずしてうつふけば隠し給ふは隔てがまし大方は見て知りぬ誰れゆゑの戀ぞうらやましと憎や知らず顔のかこち言餘の人戀ふるはどならば思ひに身の瘦せもせし御覽せよとさし出す手を軽く押へてにこやかにさらば誰をと問はるゝに答へんとすれば、曉の鐘枕にひびきて覺ゆる外なき思ひ寐の夢鳥がねつらさはさぬくゝの空のみかは惜しかりし名残に心地常ならず今朝は何とせしぞ顔色わるしと尋ぬる母はそ

の事さらに知るべきならねど而報らむも心苦し盡は手すさびの針仕事にみだれその亂るゝ心緒ひとためて今は何事も思はし思ひてなるべきかあらぬか言ひ出して爪はじきされなん恥かしさには再び合す顔もあらじ妹と思せばこそ隔てもなく愛し給ふなれ終のよるべと定めんにいかなる人をとか望 給ふらんそは又道理なり君様が妻と呼ばれん人妻は天が下の美を盡して糸竹文藝備はりたるをこそならべて見たしと我すら思ふに御自身は猶なるべし及ぶまじきこと打出して年頃の中うとくもならば何とせんそれこそは悲しかるべきを思ふまじ思ふまじ他し意なく兄様と親まんによも憎みはし給はしよそながらも優しきお詞きくばかりがせめてもどといさぎよく断念めながら聞かず顔の涙頬につたひて思案のより糸あとに戻りぬさりとは其おやさしさが恨みぞかし一向につらからばさてもやまんを忘れぬは我身の罪か人の科か思へば憎きは君様なりお聲聞くもいや御姿見るもいや見れば聞けばまさる思ひによしなき胸をもてがすなる勿體なけれど何事まれお腹立ちて足踏ふつになさらずは我れも更に參るまじ思ふもつらけれど火水はせ中わろくならばなかくゝに心安かるべしよし今日よりはお目にもかゝらじ物もいはしお氣に障らばそれが本望ぞと膝につきつめし尺ゆるめると共に隣の聲を其の人と聞けば決心ゆらくとして今までは何を思ひつる身を違ひたし心の途になりぬさりながら心は心の

外に友もなくて良之助が目に映るもの何の色もあらず愛らしと思ふ外一點のにこりなければ我戀ふる人世にありとも知らず知らねば憂きを分ちもせず面白きこと面白げなる男心の淡泊なるにさしむかひては何事のいはるべき後の世つれなく我身うらめしく春はいづこそ花ともいはで垣根の若草おもひにもえぬ

(下)

千代ちやん今日は少し快い方かえと二枚折の屏風押し明けて枕もとへ坐る良之助に亂せし姿耻かしく起きかへらんとつく手もいたく瘦せたり。寝て居なくてはいけない何の病中に失禮も何もあつたものぢやないそれとも少し起きて見る氣なら僕に寄りかゝつて居るがいと抱き起せば居直つて。良さん學校が御試験中だと申すではございませんか。ア、左様。それに妾の處へばつかし來て居らつしやつてよろしいんですか。そんな事まで氣にするには及ばない病氣の爲にわるいから。だつて何うもすみませんもの。すむのすまないのとそんなこと氣にするより一日も早くよくなつて呉れるが。御親切に難有うございますですが今度は所詮癒るまいと思ひます。又馬鹿なことを云ふよそんな弱い氣だから病氣がいつまでも癒りやしない君が心細い

事を云つて見たまへお父さんや阿母さんがどんなに心配するか知れませんが孝行な君にも似合はない、でも快くなる筈がありませんものと果敢なげに云ひて打ちまもる臉に涙は溢れたり馬鹿な事を口には云へどむづかしかるべしとは十指のさす所あはれや一日ばかりの程に瘦せも瘦せたり片斷愛らしかりし頬の肉いたく落ちて白きおもてはいと透き通る程に散りかゝる幾筋の黒髮縁は元の縁ながら油けもなきいたくしよ我ならぬ人見るとても誰かは腸断えざらん限りなき心のみだれ忍艸小紋のなへたる衣きて薄くぬのしごき帯前に結びたる姿今幾日見らるべきものぞ年頃日頃片時はなる、間なく睡み合ひし中になど底の心知れざりけん小き胸に今日までの物思ひはそも幾干ぞ昨日の夕暮お福が涙ながら語るを聞けば熱つよき時はたえず我名を呼びたりとか病の原はお前様と云はるゝも道理なり知らざりし我恨めしくもらさぬ君も恨めしく今朝見舞ひしごき瘦せてゆるびし指輪ぬき取りてこれ記念とも見給はは嬉しどて心細げに打笑みたる其心今少し早く知らば斯くまでには衰へさせじをぞ我罪恐ろしく打まもれば。良さん今朝の指輪はめて下さいましたかと云ふ聲の細さよ答へは胸にせまりて口にはぼらず無言にさし出す左の手を引き寄せてじつとばかり眺めしが。私と思つて下さいと云ひもあへずほろ／＼とこぼす涙其まゝ枕に俯伏しぬ。千代ちやんひどく不快でもなつたのかい福や

薬を飲まして呉れない 何うした大變顔色がわるくなつて來たおばさん鳥渡と良之助が聲に驚かされて次の間に祈念をこらせし母も水初穂取りに流し元へ立ちしお福もあわたいしく枕元にあつまればお十代開ぢたる目を開き。良さんは。良さんはお前の枕元にそら右の方においでなされるよ。阿母さん良さんにお歸りを願つて下さい。何故ですか僕が居ては不都合ですかえ居てもわるいことはあるまい。福やお前から良さんにお歸りを願つておくれ。貴嬢は何をおつしやいます今まであれ程お待遊ばしたのに又そんなことをねん持かおわるいのならお薬をめしあがれ阿母さまですか阿母さまはうしろに、こゝに居るよお十代や阿母さんだよいゝかえ解つたかえお父さんもお呼申したよサアしつかりして薬を一口おあがりニ胸がくるしいア、さうだらう此まあ汗を福やいそいでお醫師様へお父さんをここに立つて居らつしやらないで何うかしてやつて下さい良さん鳥渡其の手拭を何だとニ良さんに失禮だがお歸り遊ばしていたゞきたいとあゝさう申すよ良さんおさゝの通ですからとあはれや母は身も狂するはかり娘は一語一語呼吸せまりて見るく顔色蒼み行くは露の玉の緒今宵はよもと思ふに良之助起つへき心はさらにもなけれど臨終に迄も心づかひさせんことのをしくて屏風の外に二足ばかり絲より細き聲に良さんと呼び止められて何ぞと振返れば、お詫は明日の風もなき軒端の櫻はるくくとこぼ

れて夕やみの空鐘の音かまし

た ま 禪

(一)

をかしかるへき世を空蟬のと捨て物にして今歳十九年、天のなせる麗質、をしや埋木の春またぬ身に、青柳いと子と名のみ聞ても姿しのばるゝ優しの人品、それも其苦昔をくれば系圖の巻のこと長けれど、徳川の流れ末づかた波まだ立たぬ江戸時代に、御用お側お取次と長銘うつて、席を八萬騎の上座に占めし青柳右京が三世の孫、流轉の世に生れ合はせては、姫と呼ばれしこともなければ、面影みゆる長襦袢の縫もやう。母が形見か地赤の色、褪て残るもあはれ痛まし、住む處は何方、むかし思へば忍が岡の名も悲しき上野のうしろ谷中のささに形ばかりの枝折門、春は立どまりて御覽せよ、片枝さし出す垣ごしの紅梅の色ゆかしくと伸びあがれど、見ゆるは萱ぶきの軒端ばかり、四邊はめぐらす花園に秋は鳴かぬ蟲のいろく、天然の籠中に收めて月に聞く夜の心きゝたし、扱もみの虫の父はと問へば、月毎の十二日に供ふる茶湯の主が其れ、母も同じく佛壇の上にごかや、孤獨の身は霜よけの無き花壇の菊が、添へ竹の後見ともい

ふべきは、大名の家老職背負てたちし用人の、何之進が形見の息松野雪三とて歳三十五六、親ゆづりの忠魂みがきそへて、二代の奉仕たゆみなく、一町餘りなる我が家より、雪にも雨にも朝夕二度の機嫌き、怠らぬ心殊勝なり、妻持たずやと勸むる人あれど、何の我がこと措き給へそれよりは嬢さまの上氣づかはし、廿歳といふも今の間なるを、盛りすぎては花も甲斐なし、適應の聲君おむかへ申したきものと、一意専心主おもふ外なにも無し、主人大事の心にくらべて世上の人の浮薄轉佻、才あるは多し能あるも少からず、容姿學藝すぐれたればとて、大事の御一生を托すに足る人見渡したる世上に有りや無しや知れたものならず、幸福の生涯を送り給ふ途、そも何とせば宜からんかと、案じにくればはて寝ずに明す夜半もあり、嫁入時の嬢もちし母親の心なんのものは、疵あらせじとての心配大方にはあらざりけり、雪三かくまで熱心の聲えらみも、糸子は目の前する雲とも思はず、良人持たんの念慮、何として夢さらしあらんともせず、樂みは春秋の園生の花、ならば蝴蝶になりて遊びたしと、取とめもなきこと言ひて暮しぬ、さるほどに今年も空しく春くれて衣ほすてふ白妙の色に咲く垣根の卯の花、こゝにも一つの玉川がと、遣水の流れ細き處に影をうつして、風なくても涼しき夏の夕暮、いと子湯あがりの逍遙に、打水のあと軽く庭下駄にふんで、裳とて片手は透し骨の塗柄の團扇に紋

を拂ひつ、流れに臨んで立たる姿に、空の月朧らひてか不圖かゝる行く雲の未四邊俄に暗くなる折しも、誰が思ひにや比す螢一つ風にたゞよひて只眼の前、いと子及ぶまじと知りても只はあられず、ツト團扇を高くあげればあなや螢は空遠く飛んで手元いかゞ緩びけん、團扇は卯の花垣越えて落ちぬ、こは何とせん困じ果て、垣根の隙よりさしのぞけば、今しも雲足され新に照らし出す月の光りに、目と目見合して立たる人、何時の間に此處へは来て、今まで隠れてやも居しものか、知らぬことゝて取亂せし姿見られしか、見られしに相違なしと、顔紙にあつくなりて、夢現うつおけば、細く清しき男の聲に、これは其方さまのにや返上せんお受取なされよと、垣ごしにさす出す我が團扇、取らんと見あぐれば恥かし、美少年、引かんとする團扇の先一寸押へて、思ひにもゆるは螢ばかりと思召すかと怪しの一言、暫時は糸子われか人か、有無の間に迷ひし心、本の心に還りし時は、卯の花垣に照る月高く澄んで、流れにうつる影我一人になりぬ、さるにても彼の人は誰ならん、隣家は植木屋と聞たるが、思ひの外の人品かなど、其方を眺めて佇立めば、風に傳はる朗詠の聲いよいよ床しさの敷を添へぬ、糸子世は果敢なきものと思ひ捨て、盛りの方に紅白粉よそほはず、金銀玉帯なんの爲の飾り、入らぬことぞと願みもせず、過ぎし心に恥かしや、我れ迷ひたりお姿今一度見まほしと神び上げれば、

モシと控へらるゝ袂の先、誰れぞオ、松野か何として此處へは、否何時の間にと詞有哉無哉支離滅裂

(二)

丸窓にうつる松のかげ、幾夜ながめて月も闇になるまゝにいと子の心その通り、打あけては問ひもならぬ、隣の人の素性聞たしと思ふほど、意地わるく誰れも告げぬのか、それとも知らぬのか、よもや植木屋の息子にてはあるまじく、さりとて誰れ住替りし噂も聞かねば外に人のある筈なし、不審さよの底の心は其人床しければなり、用もなき庭歩行にありし垣根の際、幾たびか顧みて思へば、さてもはした無きことなり、氏も知らず素性も知らず、心情も何も知れぬ人に戀ふとは、我れながら浅ましきことなり、定めなき世に定めなき人を頼む、婦人の身はかなしと思ひ絶えて、松野が忠節の心より、我大事と思ふあまりに様々の苦勞心痛、大方ならぬ志は知るものから、それすら空ふく風と聞きて、耳にだに止めんとせざりし身が、何ぞや跡もかたも無き戀に磯の鮑の只一人もの思ふとは、心の問はんもうら恥かし、人知らぬ心の惱みに、昨日一昨日は雪三が訪問さへうるさくて、詞多くも交はさざりしを、如何に聞て如何ばか

り案じやしけん、氣の毒のこととしてけるよ、いで今日の日も暮れんとするを、例の足音する
頃なり、日頃くもりし胸の鏡すいしき物語に晴らさばやとばかり、垣根の近邊たちはなれて、
見返りもせず二三歩す、めば遺水の流れおと清し、心こゝに定まつて思へば昨日の我れ、恍惚
として何ゆゑに物おもひつる身ぞ、廣き園生は我が爲めに四季の色をたゝかはし、雅やかなる
居間は我が爲めに起居の自由あり、風に鳴る軒ばの風鈴、露のしたゝる釣葱、いづれをかしか
らぬもなきを、何をくるしんでか、要なき胸は痛めけん、思しさよと一人笑みして、竹縁のは
しに足を休めぬ、晚風涼しく袂に通ひて、空に飛かふ蝙蝠のかげ二つ三つ、それすら漸く見え
ず成ゆく、片折戸を静かに音なふは聞なれし聲音なり、いと子厨のかたに聲をかけて、玉よ雪
三が参りたりと覺ゆるに、燈火とくと命令ながら、ツト立て門の方うち見やりしが、闇にもし
るき白き手を舉げて、稚兒が母よぶやうに差まねぎつ、座敷にも入らではるかに待てば、松野
は徐ろに歩みを進めて、早く竹縁のもとに一揖するを、糸子かるく受けて莞爾に、花庭の半を
分けつゝ團扇を取つて風を送れば、恐れ多しと突く手慰懃なり、此ほどは御不快と承りしが、
最早平日に復らせ給ひしか、お年輩には氣鬱の病ひの出るものと聞く、例の讀書は甚だわろし、
大事の御身等閑におぼしめすなと、知らねばこそあれ忠實なる詞にうら恥かしく、面すこし打

赤めて、否とよ病氣はもう癒りたり、心配かけしが氣の毒ぞと我れ知らず出る詫の言葉に、何
ごとの仰せぞ、主従の間に氣の毒などゝの御懸念ある筈なし、お前さまのおん身に御病氣その
外何事ありても、それはみな愚生が罪なり、御兩親さまのお位牌さては愚生が亡父母に對して
雪三何の申譯なければ、假令身にかへ命にかへても盡し参らする心なるを、よしなき御遠慮は
お措き下されしと恨み顔なり、これ程までに思ひくるゝ、其心知らぬにもあらぬを、この頃
の不愛想我が心の悶ゆるまゝに、詞交はずが懶くて、病氣などゝありもせぬ偽りは何ゆゑに言
ひけん、空おそろしさに身も打ふるへて、腹たらしならば雪三ゆるしてよ、隔つる心は微塵も
なければ、主の家來の昔は兎もあれ、世話にこそなれ恩も何もなき我身が、常日ごろ種々の苦
勞をかける上にこの間中よりの病氣、それ程のことでもなかりしを何故か氣が鬱きて、心にも
なき所置ありしかもしれず、それがつひ氣の毒にて言ひたるなれど、心に障らば二度とは言は
じ、汝に捨られて我れ何としてか世には立つべき、心稚ければ目にあまる事もあらん、腹立
しきことも多ならんが、外に寄る邊のなき身なるを、妹とも娘とも斷念めて、教へ立られなば
嬉しきぞと、松野が膝ゆり動かして涙くめば、雪三身を追りて頭を下げつゝ、分にあまりし仰
せお答への言葉もなし、お心細き御身なればこそ、愚生風情に御丁寧のお頼み、お前様御存じ

雪三の
お前様御存じ

はあるまじけれど、往昔の御身分おもし出されてお痛はし、我れ後見まゐらす程の器量なけれど、真心ばかりは誰れ人にまれ劣ることかは、御心やすく思召せよ世にも軼れし聳君迎へ参らせて花々しきおん身にも今なり給はん、鳥辭がましけれど雪三が生涯の望はお前さま御一身の御幸福ばかりと、言ひさして詞を切りつ糸子が面じつと瞻めぬ、糸子何心なく見返して、我は花々しき身にならん願ひもなく、まして智迎への嫁入りせんのと、世の人めかしき望み少しもなし、唯汝さへ見棄すば、御身さへ厭はせ給はずば、我が生涯の幸福ぞかしとて嫣然とばかり打笑めば、松野じりく膝を進めて、嬢さまはそれほどまでに雪三を力と思召してか、それとも一時のお戯れか、御本心仰せ聞けられたしと問詰むるを、糸子ホ、と笑ひて松野が膝に軽く手を置きつ、戯れかとは問ふだけでも淺し、親とも兄ともなく大切に思ふものをと、無心に言へば忝なしと一言後尾ふるへて消えぬ。

(三)

臺の紅梅町に其名も薫る明治の功臣、竹村子爵との尊稱は千軍萬馬の裡にめぐみし、つばみの花の開けるにや、それが次男に縁とて才識並び備はる美小年、今年の夏の避暑には伊香保に行

洗ひ髪の束髪に薔薇の花の飾りもなき湯上りの浴衣でたち、素顔うつくしき夏の富士の額つき眼に残りて、世は萩の葉に秋風ふけど螢を招きし塗柄の團扇、面影はなれぬ貴公子あり、駿河かんか磯部にせんか、知る人おほからは佗しかるべし、牛ながら引入れる中川のやどり手近くして心安き所なからずやと、打うめかれしをお出入の蒙駝師某なるもの承はりて、やつがれが谷中の茅屋せき入れし水の風流やかなるは無きものから、紅塵千丈の市中ならねば涼しきかげもすこしはあり、足を運び給は、忍ぶが岡の縁樹の朝つゆ、寝間着のまゝにも踏み給ふべし、螢名所の田畑も近かり、只天王寺の近き爲に、蚊はあまり少からねど、吹き拂ふに足る風十分なり、兎に角思ひ立たせ給へとて、紀の守が迷惑氣にも見え誘ふにぞ、それ宜からんとて夏のさし入りより、離座敷を假住に三月ばかりの日を消し、が、歸邸の今日の今も猶存る記憶のもの二つ、隣家に遅咲きの卯の花、都めづらしき垣根の雪の、涼しげなりしを思ひ出ると共に、月に見合はせし花、眉羞ぢて背けしえり足の美しさ、返す扇團に思ひを寄せし時憎からず打笑みし口元なんぞ、只眼の先に湧き來りて、我れ知らず思案に沈むことあり、さるにても何人の住居にや、人品の高尙かりしは、無下に賤しき種にはあるまじ、妻か娘かそれすらも聞き知らざりし口惜しよ、宿の主は隣のことなり、問は、素性も知るべきものを、空しくはな

と適しけん、さりとして今更間はんもうしろめたかるべしなんと、迷ひには智慧の鏡も曇りはててや、五里霧中に彷徨ひしが、さすがに定むる所ありけん、慈愛二となき母君に、一日しかんと打明けられぬ、さはいへど、妻ならば及ぶまじきことなり確めて後断念せんのみ、浮たる戀に心を盡くす、卒しよとも思さんなれど、父祖傳來の舊交ありとて、其人の心見ゆるものならず、家格に随ひ門地を尊び、擇に擇て取る虫喰栗も世には多かり、藻屑に埋もるゝ美玉又なからずや、あはれこの願ひ許容ありて、彼女が素性問ひ定め給はりたし、曲りし尺に直なる物計り難く、迷ひし眼、邪正は分け難し、鑑定は偏に御眼鏡に任さんのみと、恥たる色もなく述べらるゝに、母君一度は憫れもしつ驚きもせしものゝ、斯くまで熱心の極まりには、何事を惹出でられんも知るべからず、打明けられしだけ殊勝なり、萬は母が胸にあり任せたまへと子故の間に、ある夕暮の墓參の戻り、植木屋許くるまを寄せて、入りもせぬ鉢ものゝ買上げ、扱は園内の手入れを賞のなとして、逍遙の端に若し其人見ゆるやと、垣根の隣さしのぞけど、園生廣くして家遠く、萱ぶきの軒端半ば掩ふ大樹の松の滴る如き緑の色の目に立て見ゆるばかり、聲きくすすがも有らざりければ、離亭に澹茶すゝりながらそれとなき物語、この四隣はいづれも閑靜にて、手廣き園生羨ましきものなり、此隣りは誰様の御別荘ぞ、松ばかりにても見ゆる

るやうなりとは、笑めば、いや別荘にはあらず本宅にておはすなりと答ふ、これを話の端緒として、見惚れ給ふは松ばかりならず、美しくしき御主人公なりといふ、然ればよなと思ひながら、故らに知らず顔粧ひつゝ、主は御婦人なるにや、扱は何某殿の未亡人とか、さらずは嬖妾なんどいふ人か、別して與へられたる邸宅かと問へば、いや然らず昔をいはゞ三千石の末流なりといふ、さらば旗下の娘御にや、親御などもおはさぬか、獨住みとは痛はしきことなりと、早くも其の人ふびんになりぬ、此處の主も話好にや、咳勿軀らしくして長々と物語り出でぬ、祖父なりし人が將軍家の覺え淺からざりしこと、今一足にて諸侯の列にも加へ給ふべかりしを不幸短命にして病没せしとか、或は其頃の威勢は素晴しきものにて、今の華族何として足下へも寄らるゝものでなすと、口滑らして、遮しく唇噛むもをかし、それに較べて今の活計は、火の消えしも同じことなり、あれほどの地邸に公債も何ほどかは持ちたまふならんが、それも嬢さまが身じんまくだけ漸々なるべしと、我れ入立つて見しやうな話なり、老翁は何として其様に委しく知るぞと問へば、いややつがれは皆目知る筈なけれど、一昨年歿亡りし嬢さまの乳母が、常日頃遊びに來ての話なりといふ、お歳は十九なれどまだ十六七としか見えぬ、それから思へば松野どのは大層に老けられたりと我一人吞込顔、その松野殿とかは娘御の何ぞと問はれ

て、成程々々御存じは無き筈なりとて、更に松野の爲に願しばらく働かせぬ、されば暮やすき秋日の短時間に、糸子主従が動靜のあらまはしは、早くも竹村夫人が胸中に宿りける。

(四)

心は變化するものなり、雪三が往昔の心裏を覗は、糸子に對する觀念の變白なること、其名に呼ぶ雪はものかは、主人大事の一筋道、振むく方もなかりしもの、寄る邊なき御身憐れやどの情漸う長じては、我れ一人をば天が下の頼もし人にして、一にも松野二にも松野と、隔てなく遠慮なく甘へもしつすねもしつ、睡れよる心愛らしさよと思ひしが、そもく流れに塵一つ浮ぶ初めにて、此心追へども去らず、澄まさんと思ふほど掻きにござりて、真如の月の影は何處、朦々朧々の淵ふかく沈みて、目に遮るは唯いと子が花の顔のみなり、かゝりけれども猶一片誠忠の心は雲どもならず霞ども消えず、流石に顧みる其折々は、慚愧の汗背に流れて悔悟の念胸を刺しつ、こは魔神にや魁られけん、有るまじき心なり、我れに邪心なきものと思せばこそ、幼稚の君を托し給ひて、心やすく瞑目し給ひけれ、亡主に何の面目かあらん、位牌の手前もさることなり、いでや一對の聲君選み參らせて、今世の主君にも來世の主君にも、忠

節のほど願したし、然かはあれど氣遣はしきは言葉巧みに誠少きが今の世の常と聞く、誰人か心より我が敬する主君の半身となりて、生涯の保護せらるべきにや、おもへばいと覺束なきことなり、我れに主従の關係なくば、青柳いと子の手を取りて、一生を借にせんもの雪三の外に又とあるまじ、さりながらこは叶ふべきことならず、假にもかゝる心を持たんは恐ろし、いで今よりは虚心平氣の昔に返りて何事をも思ふまじと、覺悟いさましく胸すゞしくなるは、青柳家の門踏まぬ時なり、糸子が愛らしき笑顔に喜び迎へて、やさしき言葉かけらるゝ時には、道に背かば背け世の嗤笑にならばなれ、君故捨つる名しんぞ惜しからず、今日は思ふ心もらさん、明日は胸の中うち明けんかと、實直なる人はと戀は苦し、斯るおもひの幾筋を捻り合はされし身なるものから、糸子が心は春の柳、そむかず靡かずよなくとして、無邪氣の笑顔いづも愛らしく、雪三よ菊塙の秋草盛りなりとか聞くを、此程過ぐさず伴ひては給はらずやと掻口説きしに、何の違背のある筈なく、お前さま御都合にて何時にてもお供すべしと、松野は答へぬ、秋雨はれて後一日今日はと俄に思ひ立て、糸子例の飾りなき扮装に身支度はやく終りて、松野が來る間まち遠しく雪三がもと我れより誘ひぬ、と見れば玄關に見馴れぬ履一足あり、客來にやゆゝん折わるかりと歩を回せしが、さりとも此處まで來しものを此まゝ歸るも無益し、

と、庭よりまはりて椽に上ば、客問めきたる處に話し聲す、やをら次の間にかいひをまりて聞くともしに耳たつれば、客はそも誰れなるにや、青柳といふこゑいと子と呼ぶ聲折々に交りぬ、さても何事を談するにや、我れにも關係ありげなるを、襖に寄りて静かに聴けば、断れつ續きつ物語の興味明瞭ならねど、大方は知れ渡りぬ、聞く人ありとは知らぬもの、詞あまりは高からず、松野に向ひて坐したるは竹村子爵が家従の某、主命に依りて糸子縁談の申込なるべし、其時雪三決然とせし聲音にて、折角の御懸望ながら糸子さま御儀他家へ嫁したまふ御身ならねばお心承はるまでもなし、雪三斷然お断り申す御歸邸のうへ御前跡よろしく仰せ上げられたしと言放でば、左様仰せあらんとは存せしなり、然らば賀君としては迎へさせ給はずやといふ、否とや兎に角に御身分柄つり合はず、末のはど覺束なければと言ひかゝるを打けて、そは御懸念が深すぎずや、釣合ふとつり合ぬは御心の上のことなり、一應いと子さまの御心中お伺ひ下されたし、其お答へ承はらずば歸邸いたし難し平にお伺ひありたしと押返せば、それ程に仰せらるゝを包むも甲斐なし、實の事申上げん、糸子さまには最早定まる人おになりそれ故のお断りぞと莞爾と笑めは、家従は少し身を進ませて、始めて承りはたり何方への御縁組にや苦しからずば仰せきけられたしと雪三の面貳と見れば、糸子も間の襖の際にびつ

たりと身を寄せつあやしのことよと耳そばだつれば、松野例に似ぬ高調子に然らば聞かし參らせん御歸邸のうへ御主君、殊に縁君にお傳へ願ひたし、糸子が契約の良人とは、誰れにもあらず、松野雪三即ち斯くいふ愚生

(五)

戀は一方に強く一方に弱きものと聞くば偽り孰れすてられぬ花紅葉の色はなけれど松野の心根あはれなり。さりとして竹村の君が優しき姿一度は思ひ絶えもしたれ、淺からぬ御志の忝なさよ、斯く思ふは我れに定操の無ければにや、脆き情のやる方もなし、扱も松野が今日の詞おどろきしは我のみならず竹村のお使者もいかにばかりなりけん、立歸りて斯々なりしとも申さんに、何は措きて御さげすみ恥かし、睦まじかりしも道理、主従とは名のみなりしならんなど、彼の君に思はれ奉らん口惜しさよ、これが誰ゆえ雪三故なり、松野が邪心一つゆゑぞ、然はあれどもお使者歸路につき給ひし後、身を投げ出しての詞今も忘れ難し、御身は竹村をゆかしと思すか、縁とのとやら慕はしく思ひ給ふか、さらばいかにばかり雪三憎しと思すなるべし、さりながら往日の御詞は偽りなりしか、汝さへに見捨すば我が生涯の幸福ぞと、忝けなき仰な

承はりてよりのいと狂ふ心留がたく、口にするは今日始めてなれど、盡したる心はおのづから御覺ししるべし、委むくつけく器量世に劣りしとて厭はせ給は、我れも男のはしなり、きかれ参らせずとて徒やはある、よその眺めの妬ましきよりはと、花に吹く嵐のおそろしき心も我れ知らず起らんや、許させたまへとて戀なればこそ忠義に鍛へし、六尺の大男が身をふるはせて打泣し、委おもへは扱も罪ふかし、六歳のむがし、我れ兩親に後れし以來、伸びし背丈は誰の庇護かは、幼稚の折の心ならひに、慎みもなく馴れまつはりて、鐵石の心うごかせしは、構へて松野の咎ならず我心のいたらねばなり、今我れ松野を捨て、竹村の君まれ誰れにまれ、寄る邊 其處と定めなばあはれや雪三は身も狂すべし、我幸福を求むるとて可惜忠義の身世の嗤笑にさせらるゝことかは、さりとしてこれにも従ひがたきを、何として何とせば松野が心の迷ひも覺め、竹村の君へ我が潔白をも表されん、いづれにまれ憎き人一人あらば、斯くまで胸はなやましを、果敢な身やとうち仰げば空に澄む月影きよし、肱を寄せたる丸窓のもとに何の叫きぞ風に鳴る萩の友ずり、我が蔭言かあはれ耻かし、見渡す花園は夜の錦を月にはこりて、轉ぶ白洲の露うるはし、思へば誰れも消ゆる世なるを、我身一つなき物にせば、いづくに何の障りかあるべき、我れ浮世の厭はしきは今はじめたることならず、捨てんは願てよりの願ひ

なり、歎くべきことならずと愕然と笑みて静かに取出す料紙硯、墨すり流して筆先あらためつ、書きながす文誰やが手に落ちて明日は紀念と見し名残の名筆

五月雨

(一)

池に咲く萬蒲かさつばたの鏡に映る花二本ゆかりの色も薄むらさき濃むらさきならぬ白元結
 きつて放せし文金の高髷も好みは同じ丈長の櫻もやう淡泊として色を含む姿に高下なく心に隔
 てなく端にせめぐ同胞はづかしきまで思へば思はるゝ水と魚の君さまなくば我れ何とせんイヤ
 汝こそは大事なれと頼みにしつ頼まれつ松の梢の藤の花房かゝる主従の中またとありや梨本何
 某といふ富家の娘に優子と呼ぶるゝ容貌よし色白の細おもてにして眉は霞の遠山がた花といは
 ばと譬喩を引くもこちたけれど二月ばかりの薄紅梅あは雪といふか何か知らねど濃からぬほど
 の白粉に玉虫いろの口紅を品よしと喜ぶ人ありけり十九といへど深窓の育ちは室咲きも同じこ
 と世の風知らねど松風の響きは通ふ瓜翠のしらべに長き春日を短しと暮らす心は如何ばかり長
 閑けかるらん頃は落花の三月盡ちればぞ誘ふ朝あらしに庭は吹雪のしろ妙も流石に袖は寒から
 で蝶の羽うらのうら／＼とせし雨あがり濡襟先に飼猫のたま軽く抱きて首玉の紋り放し結び換

ふるものは侍女のお八重として歳は優子に一つ劣れど劣らず負けぬ愛敬の片断誰れゆる寄する目
 元のしほの莞爾として手を放しつ不圖見返りて眉を寄せしが又殊更にホ、と笑つて嬢さま一寸
 御覽遊ばせ此まお様子の可笑しいことよと面白げに誘はれて何ぞとばかり立出づる優子お八重
 は何故に其様なことが可笑しいぞ私には何ともなきをと惱ましげにて子猫のちやれるは見もや
 らで庭を眺めて茫然たり嬢さま今日もお不快う御座りますか否左様もなければ何うも此處がと
 押しして見する胸の中には何がありやおもふ思ひを知られじとか詞をかへて八重やお前に問ふこ
 とがある春につきての花鳥で較べて見て何が好きぞ扱も變つたお尋ねそれは心々でも御座いま
 せうが歸雁が憐れに存じられますさりとては異なことぞ都の春を見捨てゝ行く情なしがお前は
 好きか憐れといへば深山がくれの花の心が嘸かしと察しられる世にも知られず人にも知られず
 咲て散るが本意であらうか同じ嵐に誘はれても思ふ人の宿に咲きて思ふ人に思はれたら散ると
 も恨みはあるまいもの谷間の水の便りがなくば流れて知られる頼みもなしマアとの位悲しから
 うと入らぬ事ながら苦勞ぞかして流石に笑へばテモ嬢さまは花の心を能く御存じ私が歸雁を
 好きと云ふは我身ながら何故か知らねど花の山の曉月夜さては春雨の夜半の床に啼て過ぐる聲
 の別れがまみ／＼と身にしみて悲しいやうな淋しいやうな又來る秋の契りを思へば頼母しいや

うにもあり故郷へ歸るといふからして亡き親の事が思はれますと打しをるればそれは道理わたりしでさへも乳母の事は少しも忘れず今も居たなら甘へるものをと何ぞにつけて戀しければ子の身では如何ばかり心ほそくも悲しくもあらうなれど及ばずながら私は力になる心姉と思ふてよと頼むは可笑しけれど歳上なれば其約束ぞいつも云ふことながら私は眞實の同胞と思ひますと慰められて嬉しげに御縁あればこそ親どもばかりか私までめぐり廻つて又の御恩海とも山とも口には何うも申されねとお前さまのお優しさは身にしみて忘れませぬ勿昧なれどお主様といふ遠慮もなく新參の身のはども忘れて言ひたいまゝの我儘ばかり兩親の傍なればとて此上は御座いませぬさりながら口惜しさは性來の鈍さゆゑ到底も御相談の相手にはなされて下さる筈もなし別ものに遊ばすと知りながらお恨みも申されぬ身の不束がうらめしう存じますとホロリとこぼす膝の露を優子訝しげに打まもりて八重は何が氣に障つてか思ひもよらぬ怨み言つもりて見よかし何の隔て隠しだてをするものぞ母さまにさへ申さぬこともつひに話さぬ時はなきを今日に限つて其やうな事いはれる覺えは何もなければとまわ何と思ふてぞといふ顔じつと打仰きてそれくそれが矢張お隔て何故其やうにお隠し遊ばす兄弟と仰しやつたはお偽りか、偽りではなけれと隠すとは何を、デへ私から申しませう深山がくれの花のお心と言ひさして莞爾

とすれば、アノ笑ふては言はぬぞよ

(二)

思ひ入る路は一筋なれど夏引きの手引きの糸の亂れぐるしきは戀なるかや優子もとより才はじけならず柔和しけれど利發にて物の道理あきらかに辨へながら聞きは晴れの胸の雲にうつゝとして日を暮らすをお八重しかぞと見て取りぬ我れも思ひのなき身ならねば他人ごととなりとも悲しきを假初ならぬ三世の縁おなじ乳房の奇りし身なり山川遠く隔たりし故郷に在りし其の日さへ東の方に足な向けを受けし御恩は斯々云々母の世にては送りもあへぬに和女わすれてなるまいぞと寐もの語に言ひ聞かされ幼心のそもくより胸に刻みしお生の事ましてや續く不在合に寄る方もなき浮草の我れ孤の流浪の身の方頼むは外になし女子だてらに心太く都會の地へと志ざし其目的には譯もあれと思ひはいすかのほしも無く尋ぬる人を引かへて尋ねぬならねど身に恥づれば我れとは訪はれぬお主のもとへ又見出されて二度の恩あるが中にも取分けて嬢さまの御慈愛は山の中の嶺たかきか上も高く海の中の沖深きが上も深しお可愛や誰れ人を彼のやうに思しめして御苦勞なき身の御苦勞やら我身新參の勝手も知らずお手もと用のみ勤めれば

出入のお人多くも見知らず想像には此人かと思ゆるものなれど好みは人の心々何がお氣に染みしやら言はで思ふは山吹の下ゆく水のわき返りて胸ぐるしさも嘸なるべしお慎み深きはさることなれど御病氣にでも若ならば取かへしとなるべきならず主は誰人えぞ知らねど此戀なんとしても叶へ参らせたし嬢さまほどの御身ならと世界に苦もなく憂ひもなく御心安くあるべき筈をさりとは又苦の世の中やと我身に比べて可憐がり心の限り慰められ優子眞實たのもしく深くぞ染めし初花ごろも色には出でじとつゝしみは和女への隔心ならず有やうは打明けてと幾たびも口元までは出しものゝ恥かしさにツイ言ひそぐれぬ和女はまだ昨日今日とて見参らせし事も無きならんが婢女どもは蔭口にお名は呼ばずに光氏さまといふとかやお姿は察せよかしそれに引かれてはなけいと彼の人は父さま無二の御懇意とて恥かしき手前に薄茶一服参らせ初めが中々の物思ひにて秋紗さばきのしづ心なく成りぬるなり扱もお姿に似ぬ物がたき御氣象とや今の世の若者に珍らしとて父様のお褒め遊ばす毎に我ことならねど面赤みて其座にも得堪へねど暮はしさの數は倍りぬさりながら和女にすら言ふは初めて言はぬ心は描かぬ書もおなじ事御覽じ知る筈もあらねば若やの頼みも無きぞかし笑はるゝか知らねども思ひそめし最初より此願ひ叶はずば一生一人で過ぐす心憂きに送る月日のほどに思ひこがれて死ねばよし命が若しも無

情くて如何に美はしき夫人むかへ給ひぬとも愛らしき兒生れ給ふとも聞く身のつらさが思はるるぞとてほろゝと打泣けばお八重かなしく身を寄せてお前さまは何故そのやうに御心よわい事仰せられるぞ八重は素より愚鈍なり談してからが甲斐なしと思召してか馴れぬ御使ひも一心は一心彼方さまどのやうな御情をらすであらうとも貫かぬといふ事あるやうなし何ともしてお望み屹度叶へさせますものを御内端すぎてのお物思ひくよゝばかりあそばせばこそ昨日今日は御顔色もわるし御病ひでも遊ばしたら御兩親さまは更なる事なり申すも慮外ながら妹と思ふぞとての御慈愛に身は姉上を儲けし心お前さま大切なほどお案じ申さずには居りませぬを忌はしや何ごとぞ一生一人で世を送るの死んで思ひを脱れたしのと突きつめた御心に必らずおなり遊ばすなと宥める身さへ眼はうるみぬ、堪忍せよかし和女にまで苦をかけてあらぬ思ひに心を盡くすが我身ながら口惜しきなりさりとて彼の人の事断念めがたきは何ゆゑぞ言はん止まんの決心なりしが親切な詞きくにつけて日頃の慎みもなくなりぬと漸々せまりくる娘氣に涙に咽びて稍ありしが、八重さを打つけなと呆れもせんが一生の願ひぞよ此心傳へてわ給はるまじや嬉しきお返事聞きたしとは努々思はねど誰れ故みちかき命ぞとも知られて果てなば本望ぞかしと打奏るれば、又しても其様なこと御前さま此れゝとお傳へ申さば好きお返事は知れた事な

りもうくよくとば思しめすな、いや／＼それは八重が知らねば杉原さまは其やうな柔弱な
 放埒なお人で無ければ申出してからが心配なり不埒者いたづら者とお怒りにならば何とせん、
 それは餘りのお取越苦勞岩木の中にも思ひのなきかは無情き仰せのある筈なし扱も御戀人は杉
 原さまとやお名は何とぞ、三郎さまと申すなり此頃來給ひしは和女が丁度不在の時よ一足違ひ
 に御歸宅ゆる知らぬのは道理と云ひかけてお八重の顔さしのぞき此願ひ若し叶はゞ生涯の大恩
 ぞかし諄うは言はぬ心は是れよと合はす手に嬉しき色はあらはれたり、

(三)

雲雀のあがる麥生な／＼めに見渡しながら岡のすみれを摘あらそひし昔は何の苦か有りし野川の
 岸に菊の花手折るとして流れ一筋から渡りし給ふ時我はるかに歳下の身のこましくれにも君さ
 まの袂ぬれるとて袖褌かけて参らせしを如何に人にも笑はれけん思へば其頃が羨まし君さま東
 京へ歸り給ひし後さま／＼續く不仕合に身代は亂離荒廢あるが上に二親引つゞきての病死とい
 ひ憂きこと重なる神無月袖にもかゝる時雨空に心のしめる我れを捉へて郡長の悴づらが些少の
 恩典にかけての無理難題やり返して遣りたけれど女子の身は左様もならず柳にうけるを宜きこ

とにして金やらん妾になれ行々は妻にもせんと口惜しき事の限り聞くにつけても君さまのこと
 なつかしく或る夜にまぎれて國を出でつ漸う東京へは着きしもの、當處なければ御行方さらに
 知るよしなく様々の憂き難難も御目にかゝる折の褒められ種にと且は心に樂しみつゝ賤しき仕
 業も身は清し行ひさへ汚れずばと都乙女の錦の中へ木綿衣服に菅笠脚絆はずかしや女子の身不
 似合の菓物賣りも偏に生計の爲のみならず使りもがな尋ねたやの一心なりしが縁しあやしく引
 く方ありて不圖呼び入れられし黒塗塀お勝手もとに商ひせし時後にて聞けば御積古がへりとや
 嬢さまの召したる車勢ひよく御門内へ引入るゝとて出でんとする我と行違ひしが何に觸れけん
 我がさしたる櫛車の前にはたと落ちしを知らず曳きしかばなを堪るべき微塵になりて恨みを地
 に残しぬ嬢さま御覽じつけて氣の毒がり給ひ此をこねたるは我身に取らせよ代りにな新らしき
 のを取らすべしとの給ひしかと素より落せしは我が粗忽なり曳かれしも道理損ねしとて入みも
 あらず況てや代りをとの望みもなし是れは亡母が紀念のなれば他人に奉るべき物ならずとて拾
 ひ集めて懐にせしをいとゞしく御ふびんがり扱は親も無き人か憐れのことや先庭口より我を都
 尾まで來よ身の上も聞きたしとて連れ給ひぬ今こそ目馴れたる御座敷の結構お庭のたゝすまひ
 華族さまにやと疑ひしは一に嬢さまの御舉止にも依りしものか其お美しくしき嬢さま御親切にも

女子同志は互ひぞとて御優しき御詞我もしきりに嬉しくて尋ぬる人ありとこそ明さやりしが種々との物語に和女の母御は斯々の人ならずやと思ひ寄らぬ御間ひ定に然かぞ何として御存じと云へば忘れてなるべきか和女と我れとは姉妹ぞかし我れは梨本の優なるをとて手を取りての御喜び扱は母が乳を參らせたる君なりしか御目にかゝりし嬉しさに添へて落ぶれし身はづかしと打泣きしに榮枯は時なるものを歎くことかは萬に我れに委せよかし悪きやうには爲すまじければ今日より此處に身を落つけずや母様には我れ願はんとして放し給はず奥様も又くれんの仰せに其まゝの御奉公都會なれぬ身とて何ごと不束なるを彼は彼此は此と陰になりてのお指圖に古妻の婢女も侮らず昨日の我れ忘れしやうな樂な身になりたるは嬢さまの御情一つなり此御恩何として送るべき彼の君さまに環會は二人共々心を合せてお話し相手に成るべきを何につけても憚るゝは又彼の人の事なりしが思ひきや嬢さま昨日今日のお物思ひ命にかけてお慕ひなさるゝ主はと問へば杉原三郎とのや三輪の山本しるしは無けれと尋ぬる人ぞと知る悲しさ御存じ無ければこそ召使ひの我れふし拜みてのお頼み嬢さま可憐やと思はぬならねと彼の人何として取持たるべき受合ひては立ちしものゝ此文には何の文言どういふ風に書きてあるにや表書きの常盤木のきまみまゐるとは無情さへといふ事か岩間の清水と心細けには書き給へど扱も

扱も御手のうるはしさお姿は申すも更なり御心だてと云ひ御學問と云ひ缺け處なき御方さまに思はれて嫌とはよもや仰せられまじ我れ深山育ちの身としてくらべ物になる心はなけれど今日までの憂き苦勞は何ゆゑぞ逢はんと思ふそれ一つに萬の願ひをかけ置きしに今日の前には逢ふ日は來ても逢ふが悲しき事儀に成りぬ嬢さまの御恩は泰山の高きも物の數かはよしや蒼海に珠を搜れと仰せらるゝともそれに違背はすまじけれと我が戀人取持たんこと何う諦めてもなる事ならず御恩は御恩これは是なり寧ろお文取次いだる躰にして此儘になすべきかいかやゝそれにては道がたゝず實は斯々の中なりとて打明けなば嬢さま御得心の行くべきか我こそはそれで宜けれどあれほどまでに思召し入れたもの然らばと云ひてあきらめのつく筈なし我身の願ひが叶へばとて現在お心知りながらそれも辛しこれも憂しと迷ひに心も夕暮の空お八重つくくゝながむれば明日も晴日か西の方のみ紅の雲たな引きぬ

(四)

男も女も法師も童も容貌よきが好きぞとは誰れ色好みと言ふ葉なりけん杉原三郎と呼ばるゝ人面ざし清らかにけにくからず誰が目に見ても美男ぞと見ゆればこそは罪つくりなれ我故に二人

人まで同じ思ひに苦むともいさやしら櫛の若葉の露風に散る夕暮の散步がてら梨本の娘病氣にて別荘に出養生とや見舞てやらんとて柴の戸音づれしにお八重初めて對面したり逢はゞいはんの千言百言うさも辛さも胸に呑みて恩とも言はず義理とも言はず湧かへる涙も人事にしておとしや嬢さま此程よりのお煩ひのものは云はゞ何ゆゑならず温和しき御性質とて口へとは出し給はぬほど猶さらには御いとほしお心は中々我が言ふやうなものにはあらず此お文御覽せばお分りになるべけれどお前様つれなきお返事若し遊ばされあのみまゝに居給ふまじき御決心ぞと見る目は如何につらからぬことか久し振にて御目にかゝりし我身の願ひこれ一つなり叶へさせ給はゞ嬉しがるべきをとて取次々文の思ひ切りても涙はろく々膝に落ちぬ義理といふもの世になかりせば言ひたきこといと多し別れしよりの辛苦は如何に或時はあらぬ人に迫られて身の遣ればの無かりし時操はおもし命は鷲毛の雪の夜に刃手に取りしこともありけり或時はお行方たづね詫て恨みは長し大河の水に沈む覺悟も極めしかど引かれし後髪の手筋にはあらで一筋に逢ふといふ日を頼みにして今日までも過せし身なりと言ひたげれと嬢さまの戀も我が戀にも淺さ深さのあるべきにあらす我れまだ其事を口にせねば入譯御存じなきこそよけれ御恩がへしには望み叶へさせまして悦び給ふを見るが樂みぞと我れを捨てゝの周旋なるを仇しごとと思ふ

まじさるにても君様のお心氣づかはしと仰ぎ見れば端なくも男はじつと瞻め居たりハツと俯く體紅葉のかけ美はしき秋の山里に音がりして遊びし昔は蝶々齋の夢とたちて姿やさしき都風たれに劣らん色なるかは愁を含めど愛らしき雨の撫子しをれて床し三郎の心何と知らねど饒子の文を手にとりつ淺からぬお心辱けなして三郎喜びしと傳へ給へ外ならぬ人の取次殊更に嬉しければ此文は賜はりて歸宅すべしとて懷中に押し入れつゝ又こそと坐を立つに扱は嬢さまの心酌とり給ひてかと嬉しきにも心ばそく立上る男の顔をと窺ひてほろりとこぼす涙を隠し嬢さまにも無お喜び我身とても其通りなり御返事屹度ましますと云へば點頭ながら立出づる廻り椽椽端の橋袖に薫りていつしか月に中垣のほとり吹のぼる若竹の葉風さら／＼として初ほといぎす待つべき夜なりとやをら降立つ後姿見送るものはお八重のみならず優子も部屋障子の障子細目に明けて言はれぬ心々を三郎一人すゞしけに行々吟ずる詩さゝたし

(五)

便りまつ間の一日二日嬉しきやうな氣づかひな八重に遠慮は入らぬものゝ又言ひ出すかと思はるゝも恥かしくじつとこらゆる返事の安否もしやと思へばもしやになるなり八重は大丈夫と受

合へどそれは氣やすめの詞なるべしあの文とても御受取になりしやならずや其場で其まゝ御突
戻しになりたるを我れに力落させまじとて八重の縛ひて居るにはあらずやいやく八重として
其様の事ある筈なし人を疑ふは罪ふかき事なり一日二日待給へ好き御返事の参るは定ぞと言ひ
しに違ひは無かるべし若しさうならば何とせん八重は上もなき恩人なれば何事なりとも氣に入
ることとして悦ばせたり歳は下なれど分別ある人として言寡なれば願ひはあるや望みはなしや知
れ難きを何とせん扱も人妻となりての心得は娘の時とは異なるものとか御氣に入らばよけれど
若し飽かれなば悲しき事よ先づそれよりも覺束なきはあの文のお返事なり御覽にはなりたりと
も其まゝ押まろめ給ひしやら却つて御機嫌をそこねもして愛想づかしの種にもならば言はぬに
まざる辛さぞかし君さまこそ無情しとも思ふ心に二つは無し不孝か知らぬど父様母さま何と仰
せらるゝとも他處ほかの誰れ良人に持つべき八重は一生良人は持たずと云ふものから我が身と
は自から異なりて係はることなく心安がるべし羨ましやと羨まるゝ我をば知らて吐息をもらし
ぬお八重はつくづく有し日の事を思ふに男心の頼みがたさよ我れ周旋する身として事關ふは嫌
しけれど優子どのゝ心よく見えたり三郎喜びしと傳へ給へとは餘りといへば昔を忘れ給ひしや
詞なりともふは我身の結みにやお主様ゆゑには身を殺して忠義を盡くす人さへあるを我一人

にて憂きをしのび何處も事なく治まるべきなり何氣なき娘さまが八重や八重やと話相手に遊
ばすを御恨み申すは罪のほども恐ろし何ごとも残さず忘れてお主さまこそ二代の御恩なれ杉
原三郎といふお人もとよりのお知人にもあらず況てや契りし事も何もなし昨日今日逢ひしばか
り併かもお主さまの戀人に未練のつながる筈はなし御縁首尾よく整へて睦まじく暮らし給ふを
見るが切めての樂みなり我れは望みとて無き身なれば生涯この家に御奉公して御二方さま朝夕
の御世話さては孩兒さま生れ給ひての御抱き守り何にもあれ心を賣めて仕へんかそれは何とし
てもなる事ならず兎ても角ても憂き世なれば人訪はぬ深山の奥にかき籠りて松風に耳を澄まさ
ば宜かるべけれどそれすら彼の人の見棄てゝは入り難かるべしとてつくづくと打歎けど人に見す
べき涙ならねば作り笑顔の片頬さびしく物案じの主慰めながら我れ先づ亂るゝ尊の戀はくるし
きものなるにや成るとは見えて覺束なき人の便りをまつとは云はず杉原さまはお廿四とやお蔵
よりは老けて見え給ふなり和女は何と思ふぞとて黽氣なこと言ふて見る心や流石に通じけんお
八重一日にこやかに嬉さまお喜び遊ばす事あり當てゝ御覽じろと久し振の戯れ言さりとはい餘り
に廣すぎて取處が分らぬと微笑めばさらば端を少し聞し参らせんお前さま何より何よりお娘し
と思召す事あるべしそれなりとて容易くは言ひもせずそれぞとは知れど猶も知らぬ顔に八重が

常に似ぬことよ先づ言ふて聞かしても宜さうなと打怨ずれば其やうにいそぎなされずな
 と打笑ひながら彼の君より御返事参りしなりこれがお嬉しからぬ事かと呼かれて耳の根くわ
 つと熱くなり胸とてろかれて嘔む袖の下に密と置く薬はぐさ俄には手にも取らぬを八重
 察して俯めつゝ取まかなひて封を切らすに文にはあらて一枚の短冊なりけり兩女ひとしく見る
 雲形

茂りあふわか葉にくらき迷ひかな
 みるべきものを空の月かけ

意味の存する所いづこぞや花として聞きわか葉のかけいと迷ひは茂り合ふばかり晴るよし
 なき空の月の心々に判じて見れど何れ真意と得ぞわき難く喜ぶべきか歎くべきかお八重は八
 重優子は優子斯く云はれなば斯くせんのか心互に堅けれと思ひの外なる返しには何と定めて何
 とせん未練は流石ありそ海のおきて見つ又取りて見つながめに飽かねど吐息されて八重はマア
 何と思ふぞと人の詞を待ちて見るあな梨東なの三十一文字や

(五)

怪しや三郎の便りふつと聞えずなりぬ待つには一日も詫しきを不審しかりし返事の後今日や來
 給ふ明日こそはと空だのめなる日を重ねて十日半月さては廿日憂き身につらき卯月も過たり五
 月雨ごろのしめり勝に軒の葱は我がたぐひの引きては葺かねど池のあやめの根ながき思ひにか
 き暮らされて袖にも水かさの増さりやすらん此處は別莊の人けも少く氣に入りの八重を措ては
 別莊守りの夫婦のみなれど最愛の娘病氣の事なり本宅よりの使ひ絶間なければ事によそへて
 杉原のこと問はするに本宅にも此頃さらに参り給はずといふさるにても何と給ひしにや我心
 稚くてうちつけに文など参らせたるを如何に厭はしと思ししながら返しせざらんも情なしとてあ
 れよりはそれとなく御出のなきか此頃のお歌の心は如何に茂るわか葉の今こそは聞けれど時節
 を待たば空の月の逢みるべきぞとならば嬉しけれ若しやの願ひに左様見めるにや寧つらから
 ば一筋ならで頼みのあるだけ惑はるゝなり扱もお便りの聞えぬは何故我れ厭はせ給ひなば此處
 へこそ御入來なくとも本宅へまで御疏遠とは訝しゝそれほごまでに御嫌ひになるほどなら優し
 げな御詞なせ仰せおかれけん八重が思ふも恥かしきまであの時は嬉しかりしを此まゝに見
 返りもし給はずば今さら面も向けがたし悲しき事よと娘氣に頼みをかけて見つ又ときつ思案に
 もつるゝ燃糸の八重が歎きは亦異なり茂る若葉の妨げと仰せられしは我が事ならずや聞き迷ひ

と歎じ給へどそれ悟りたればこそのお取持なれ思ひ合ふ中のお二方に我が生涯の望みも頼みも
お譲り申して思ひ置くこと聊かなきを何はかりての御遠慮ぞや身を觀すればお恨みも未練も
何もあらずお二方さま首尾ごのひし曉には潔よく斯々して流石は節操を立つるごだけ君さ
まに知られなばそれを思出の我れなるに此身ある故に嬢さまの戀叶はずとせば何とせん身退く
は知らぬならねど義理ゆゑ斯くと御存じにならばお情ぶかき御心として人は兎もあれ我よくば
と仰せらるゝものでなしさらでもお弱きお性質なるにいかにか突詰めたお覺悟をも遊ばすまじき
ものならず御最愛のお一人子とて八重や何分たのむごごむづかしい大旦那さまへ我身風情に
仰せらるゝはお大事さのあまりなるべし彼につけ此につけ氣づかはしきは彼の人の事よりし
日の對面の時此處に居給ふごは思ひがけず郷里のことは我れ聞きたり辛苦さこそなるべけれ
奉公大事に勉め給へど仰せられしが耳に残りて忘れぬなりあれほどにお優しからずばこれほ
とまでにも歎かじと斷ち難き絆つらしとて人見ぬ暇には部屋のうち伏沈みぬいづれ劣らぬ雙
美人に慕はるゝ身嬉しかるべきを何を厭ふてが三郎かき絶えて影も見せず疑念は重なる五月雨
の雲薄らぐべき由もなく世をうみ梅子の落つる音もそゝろ淋しき日を幾日小暗き窓のあけく
れにをち返りなく山時鳥の唐紅にはふり出でぬと涙に袖の色かはるまで同じ歎きを別に知る

主従の思ひさても果敢なし優子はいとゞ世を知らぬ身のお八重が素振り得も察せず氣の毒や我
身大事にかけるとて瘦せ見ゆるほど心配させし和女の情は忘れぬなりさりながら如何ほど盡く
してくるゝとも成るまじき願ひごとは漸うに斷念めたりそれにつきて又別に父様母さまへの御
願ひあれど御一方なり和女なりに歎きをかくるがづらきごとしみみゝご物語りつお八重の膝
に身をなげ伏して隠しもやらぬ口説ごとにお八重われを忘れて抱き合ひ詞もなくよと泣きし
がお前さまに其やうなお覺悟させますほどなら此苦勞はいたしませぬ御入來の無きは訝しけれ
どつれなき御返事といふにもあらぬを早まつてのお考へはお前様のやうにもなし今しばしの御
辛防ぞ其うちには何ともして屹度お喜ばせ申すべし八重が一心を憐れとも思召して其やうな悲
しいことお聞かせ遊ばすなごて力を添へぬ優子嬉しく手に手を取りて前の世では何でありしや
ら姉妹にもなき親切この後とも頼むぞやこれよりは別しての事何ごとも汝の意見に従はん最う
今のやうな事言ふまじければ免してよと説らるゝも勿躰なく待てば甘露と申しますぞやと輕げ
に云へと義理は重し袖に晴れ間は見えぬものゝ限りあればにや今日珍らしく驚き雨のなご
りに軒ばの露に照る日あたらしく玉をみがきて庭の木かげも心地よげなるを垂籠てのみ居給ふ
は御體にも毒なるものとお八重さまゝに誘ひて遊りちかき野の景色田面の庵の詫たるも又

をかしかるべし御覽せずやとわりなくすゝめて柴の戸めすらしく伴ひ出でぬ人の心のうやむやは知らずや茂る木立すしく袖に吹く風むねに欲し、植わたす小田の早苗青々として處々に鳴き立つ蛙の聲さまゝなるあれも歌かや可笑しとては、笑む主に我も嬉しく彼處の萱ぶき此處の垣根お庭の中に欲しきやうなりあの花は何やらんと小走りして進み寄りつ一枝手折りて一輪は主一輪は我れかざして見るも機嫌取りなり互の心は得ぞしらす畔路つたひ行返りて遊ぶともなく暮らす日の鳥も寝に歸る夕の空に行く雲水の僧一人たゞく月下の門は何處ぞ羨ましの身の上やと見送れば見かへる笠のはづれ兩女ひとしくオ、と叫びぬ

別れ霜

第一回

莊子が蝶の夢といふ世に義理や誠に邪魔くさし覺め際まではと引しむる利慾の心の秤には黄金といふ字に重りつきて増す寶なき子寶のうへも忘るゝ小利大損いまに初めぬ覆車のそしりも我が梶棒には心もつがす握つて放さぬ熊鷹主義に理窟はいつも筋違なる内神田連雀町とかや、友囀りの喧しきならで客足しげき呉服店あり、賣れ口よければ仕入あたらしく新田と呼ぶ苗字そのまゝ暖簾にそめて帳場格子にやに下るあるじの運平不惑といふ四十男赤ら顔にして骨たくましきは薄醬油の鱒蝶に育ちて世のせち辛さなめ試みぬ附け渡りの旦那株は覺えざりけり、妻はいつ頃なくなりけん、形見に娘只一人親に似ぬを鬼子とよべと蔦が産んだるおたかどて今年二八のつぼみの花色ゆたかにして匂濃やかに天晴れ當代の小町衣通ひめと世間に出さぬも道理か荒き風に當りもせばあの柳腰なにとせんと仇口にさへ噂し連れて五十稻荷の縁日に後姿のみも拜し得たる若ものは榮譽幸福上やあらん卒業試験の優等證は何のものは國會議員の椅

子にならべて生涯の希望の一つに數へいる、學生もありけり、さればこそ一たび見たるは先づ驚かれ再び見たるは頭やましく駿河臺の杏雲堂に其頃腦病患者の多かりしこと一つに此娘が原因とは商人のする掛直なるべけれど兎に角其美は争はれず、姿形のうるはしきのみならず心さまのやささ、情の深さ絲竹の道に長けたる上に手は瀧本の流れを吸みてはしり書うるはしく四書五經の角々しきはわざとさけて伊勢源氏のなつかしきやまと文明幕文机のほごりを離さず、さればとて香爐峯の雪に簾をまくの才女めきたる行ひはいき、かも無く深窓の春深くもりて針仕事に女性の本分を盡す心懸け誠に殊勝なりき、家に居て老順なるは出で、必らず貞節なりとか、これが所天と仰がれぬべく定まりたるは天下の果報の一人じめ前生の功德いか許り積みたるにかと世にも人にも羨まるゝはさしなみの隣町に同商中の老舗と知られし松澤儀右衛門が一人息子に芳之助と呼はるゝ僮男、契りは深き祖先の縁に引かれて櫛の實の一人子同志、いひなづけの約成立しはお高がみどりの振分髪をお煙草盆にめひ初むる頃なりしとか、さりとは長かりし年月、ことしは芳之助もはや廿歳今一兩年経たる上は公に夫とよび妻と呼はるゝ身ぞと想へば嬉しさに胸をとりて友達の黽ごとも恥かしくわざと知らず顔つくりながらも潮す紅の我しらす掩ふ袖屏風にいと心のうちあらはれて今更泣きたる事もあり人みぬひまの手

習に松澤たかどかいて見て又塗隠すあどけなき利發に見えても未通女氣なり同じ心の芳之助も射る矢の如しと口にはいへど待つ歳月はわが爲に弦たゆみしやうに覺えて明かし暮らす程のまどろかしさよ、高殿に見る月の夕影を分つはいつぞとしのび花の下ふむ露のあした双ぶる翅の胡蝶うらやましく用事にかこつけて折々の訪おどづれに餘所ながら見る花の面わが物ながら許されぬ一重垣にしみるゝとは物言交すひまもなく兎角うらめしきは月日なり隙行く駒に形もあらば我れ手綱を取り鞭を揚げていそがさばやとまで思ひ泣りぬ、されども天は美人を生んで美人を恵まず多くは良配を得ざらしむどかいへり、彌生の花は風必ずさそひ十五夜の月雲かゝらぬはまことに稀なり、覺束なしや才子佳人かゝなへて待つ歎びの日のいつか來べき、あしなほのさはり多き世なればこそあれ親にゆるされ世にゆるされ彼も願ひ此も請ひよしや魔神のうかがへばとてぬば玉の髪一筋さしはさむべき間も見えぬを若此縁結ばれずとせばそは天災か將た地變か。

第二一回

隨を得て蜀を望むは夫れ人情の常なるかも、百に至れば千をど願ひ千にいたれば又萬をど諸願

休む時なければ心常に安からず、つらく思へば無一物ほど氣樂なるはあらざるべし、大抵が五十年と定まつた命の相場黄金を以て狂はせる譯には行かず、花降り樂きこえて紫雲の來迎する曉には代人料にて事調はずとは誰もかねて知れたる話、鶴千年龜萬年人間常住いづも月夜に米の飯ならんを願ひ假にも無常を觀するなかれとは大福長者と成るべき人の肝心肝要かなめ石の固く執つて動かぬ所なりとか、そも松澤新田らが祖先と聞えしは神風の伊勢の人にて夙に大江戸に志を立て、釋吳服の見るかげもなかりしが六間間口に黒ぬり土藏時のまに身代たち上りて男の子二人の内兄は無論家の相續弟には母方の絶えたる姓を興させて新田とは名告らすれど諸事は別家の格に准じて子々孫々の末迄も同心協力事を處し相隔離すべからずといふ遺旨かたく奉戴して代々交りをかさぬ來しが當代の新田のあるじは家につきての血統ならず一人娘に入失の身ぬりしかば相思ふの心も深かち且は利にのみ走る曲者なればかねては松澤が隆盛をたのみてあやにかけたる許嫁のえにし親なり子なり同男同士なり不足の品あちば持ち給へど彼方ばかり親切を盡さして引入れし利も少なからず世は塞翁がうまさ事して幾歳すぎし朝日のかげ昇るが如き今の榮は皆松澤が庇護なるものから咽元すぐれば忘るゝ熱さ斯く對等の地位に至れば目の上の瘤うるさくなりて獨りつくゞ案するやう徑十町を距てぬ處に同商業を

營がむ上に彼れば本家として世の用ひも重かるべく我とて信用薄きならねど彼方に七分の益ある時こゝには僅かに三分の利のみ我が家繁榮長久の策は彼れ松澤の無きにしかず且つは娘の容色世に勝れたれば是とも又一つの金庫芳之助とのえにし絶えなば通り町の魚地面持參の聲もなきにはあらじ一舉兩得とはこれなんめりと思ふ心は娘にも秘め同氣求むる番頭の勘藏にのみ割て明かせば横手を拍つて賛成し主従日夜額をあつめて其方法を講じ居たりき、時なる哉松澤はさる歳商法上の都合に依り新田より一時借り入れし二千許の金ことしは既に期限ながら一兩年引つゞきての不景氣に流石の老舗も手元豊ならず殊に織元その外にも仕拂ふべき金いと多ければ新田は新族の間柄なり且は是迄我が方より立かへし分も少からねばよもや事情打あけて延期を乞はゞゆるさじと言ひもすまじ他人に内兜を見すかさね機械仕掛のあやつり身上松澤も、う下り坂よと囃されんは口惜しく脊なる新田は後廻し腹の織元其他へ有金大方取あつめて仕拂ひたる噂こそ耳よりのことなれと平生ねらひすませし的彼方より延期をいひ出さぬ間に、切て放して急催促に言譯すべき程もなく忽ち表向きの訴訟沙汰とは成れりける素松澤は數代の家柄世の信用も厚ければ僅々千や二千の金何方にても調達は出來得べしと世人の思ふは反對にて玉子の四角まだ萬國博覽會にも陳列の沙汰をさかねど晦日に月の出、世の中十五夜の闇もなく

やは奥は臆のいかなる手段ありしか新田が畫作極めて妙にしていさゝかの融通もならず示談か請はやと奔走せしかどそれすらも調はずして新田は首尾よく勝を制し凱歌の聲いさましく引揚げしにそれとかはりて松澤が周章狼狽まこと寝耳に出水の騒動おどろくといふ暇もなく巧みに巧みし計略に争ふかひなく敗訴となり家蔵のみか數代續きし暖簾までも皆かれが手に歸したれば木より落たる山猿同様のむ木蔭の雨森新七といふ番當の白鼠去年生國へ歸りし後は十露盤玉と筆先に帳尻つくろふ溝鼠のみなりけん主家一大事の今日も申合せたるやうに富士見西行きめ込み見返るものさへあらざれば無念の涙を手荷物にして名のみ床しき妻戀坂下同朋町といふ處に親子三人雨露を凌ぐばかりの家を借りて辛く膝をば入れたりけり、海ならず山ならぬ人世の行路難今初めて思ひ當り淵瀬ことなる飛鳥川の明日よりは何とせん、もと富家に人となりて柔弱にのみ育ちし身は是れと覺えし藝もなく手に十露盤は取りならへど物に當りし事なければ時の用には立ちもせず坐して喰へば空しくなる山高帽子半靴と昨日かざりし身の廻りも一つ賣り二つ賣りはては晦月の勘定さへ胸につかふる程になりぬ。

第三回

一人並の男になりながら何の膂甲斐ない車夫風情にまで落魄すとも外に事の仕様のあらうものをと大言吐きし昔の心の恥かしさよ誰れが好んで牛馬の代りに油汗ながし塵埃の中馳せ廻るものぞ仕様模様の端きはてたればこそ恥も外聞もないませにからめて捨てた身つまり無念も殘念も饅頭笠のうちに包みて参りませうと聲低に勸める心いらぬとばかりもぎどりに過ぎ行く人それはまたしもなりうるさいはと叱りつけられて我知らずあとじさりする意氣地なさまだ霜こぼる夜嵐に辻待の提燈の火の消えかくる迄案じらるゝは二親のことなり馴れぬ貧苦に責めらるゝと懐舊の情のやる方なさと老躰の毒になりてや涙がちに同じやうな煩ひ方それも御尤もなり我さへ無念に腸の沸え納まらぬものを胸さける程にも思召すなるべし憎きは新田なり恨めしきは運命なりよしや血をすゝり肉をつくすとも壓るべき奴ならずと冷凍る拳握りつめて當處もなしに睨みもしつ思ひ返せばそれも愚痴なり恨みは人の上ならず我れに男らしき器量あらば是れ程までには窮しすまじア、と歎ずれば吐く息しらく見えて身を切る夜風に破れ扉風の内心配になりて絞つて歸るから車財布のものゝ少き程苦勞のたかの多くなりてまたぐ我家の

鬨の高さ、オ、お歸りかど起き返る母、お父さんは御寝なッてはすかさぞ御不自由で御座いましたらう何もお變りは御座いませんかと裏問ふ心は疵もつ足、オ、お前の留守に差配ごのが見えられてといひさしてしばたく、臉の露白岡鬼平といふ有名の無慈悲もの悪鬼よ羅刹よと蔭口するは盪團扇の縁はなれぬ店子供が得手勝手家賃奇麗に拂ひて盆暮の砂糖袋甘き汁さへ吸はし置かば下ぐる目尻と諸共に眉毛の名によぶ地蔵顔にも見ゆべけれど今の身の上には憑し剛愎も
の事情あくまで知りぬきながら知らず顔の烟草ふか／＼身に過りあればこそ疊に額ほり埋めての歎願も吹出だす烟の輪を消して、言譯きく耳はなし家賃をさめるか店を明けるか道は二つぞ何方にでもなされとぼんどはたく其煙管で打わつてやりたい面がまち目的なしに今日までと日を延べしは重々此方が悪けれど母上とらへて何言居つたかお耳に入れまいと思へばこそ様々の苦勞もするなれさらでもの御病氣にいと重さを添へたやうなものはて困つたと言ひはせて低頭く心思案にくれぬ、差配ごのが見えられてと母は詞を繰返して何か譯は知らねど今直ぐに此家を立て一寸の猶豫もならぬとそれは／＼書にもかゝれぬ談じやうお前にも料簡あることゝやう／＼に言延べて歸ります迄と頼んでは置いたれどマアどうしたら宜からうか思案して見てくだされと小聲ながらもおろ／＼涙お案じなされますな何うにかなります今夜は大部更けました

から明日早々出向きまして談合ひをつけませうナニ少しの行違ひでそれほどの事では御座いませんと我が親にまでいつはるとはさても後のよ恐ろし、寝ぬに明くる夜明け鳥もこうと鳴きて反哺の效となるものと生甲斐なや五尺の身に父母の恩荷ひ切れずましてや暖簾の色むかしに染めかへさんはさて置きて朝四暮三のやつ／＼しさにつく／＼浮世いやになりて我身捨てたき折々もあれど病勢れし兩親の寝顔さし覗くごとに我なくば何とし給はん勿辨なしと思ひ返せど沸くは涙か藥鍋の下炭火とろ／＼と消え勝の活計とて眞醫の手にもかゝられねば見す／＼重り行く心ぐるしさよ思へば天も地も神も佛も我爲には皆仇か今この場合を見すぐしにするとは何の事ぞ新田こそ運平こそ大悪人の骨頂なれ娘ばかりはよもやと思へどそれもこれも心の迷ひか姿こそ詞こそやさしけれ瓜の蔓に生らぬ茄子父親と同じ心になつて今の我身に愛想が盡きてわ人傳の文一通それすらもよこさぬとは外面如菩薩、内心はあれも如夜叉め。

第四回

他人はとまれお前さまばかりは高が心御存じと思ふたは空だのめか情ないお詞お前さまと縁きてれて生存へる私と思召すか恨みを申さば其心か恨みなり父様が悪計それお責め遊ばすに答

への詞もなければ其くやしきも悲しきもお前さまに劣ることかは人知らぬ夜の夜具の襟何故にぬるゝものぞ涙に色のもしあらば此袖ひとつにお疑ひは晴れやうもの一つ穴の獸とは餘りの仰せつもりても御覽せよ繋がれねど身は籠の鳥も同じこと風呂屋に行くも稽古ごとも一人あるきゆるされねば御目にかゝる折もなく文あげたけれど御住所誰れに問ひもならず心にばかり泣いて居りましたを薄情もの義理しらすと押くるめてのお詞お道理なれど御無理なり此身一つに科があらば打たれもせん突かれもせん膝ともといふ談合相手に遊ばしてよと涙ながら控へる袂を鋭く拂つてお高ごの詞ばかりは嬉しけれど眞實やら何やら心まで見る目は芳之助あやにく持たず父御の心も大方は知れてあり甲斐性なしの我れ嫌になりて縁の絶ちどが無さに計略三昧がかりし我等々畏のうちの獸ぞ手を打て笑はるゝ筈を何の涙お化粧がはげては氣の毒なり牛に乗換へるうまゝ話も内々は有ることならんを家藏持參の業平男に見せ給ふ顔我等づれに勿躰なしお退きなされよ見たくもなしとつれなしや後むき憎らしき事の限り並べられても口惜しきはそれならず解けぬ心にあらはれぬ胸うらめしく君様こそは何とも思召すまじけれど物ごゝろ知る其頃よりさまゝのこと苦勞にして身だしなみ物學び彼れか此れかお氣に入りたや飽かれまじと心のだけは君様故に使はれて片時安き思ひもせずお友達遊びも芝居行きもお嫌いと知れば大

方は断りいふて僻物と笑はれしは誰れの爲をさな遊びの昔は知らず睦しき中にも恥かしさが楯に成りて思ふこと思ふまゝにも得いはざりしを淺き心と思召すか假令どのやうな事あればとて仇し人に何のその笑顔見せてならうことかは山ほどのお恨みも受くる筋あれば詮方なし君様に愛想つきての計畧かとはお詞ながら餘りなり親につながらゝ子罪は同じと覺悟ながら其名ばかりはゆるし給へよしや父様にどのやうなお憎しみあればとて渝らぬ心の私こそ君様の妻なるものを何とげくしい他人あしらひ聞えぬお心やといひたきを押ゆる涙袖に置きてモシと止めれば振拂ふ羽織のすそエ、何さるゝ邪魔くさし我はお前さまの手遊ならずお伽になるは嬉しからず其方は大家の娘御暇もあるべしその日暮しの身は時間もをしく誰れぞ相手をお探しなされと振はらへば又すがり芳さまそれは御眞實かと見上ぐる面睨みかへして嘘いつはりはお前さまなどのなさること義理人情のある世ならよもやと思ふ生正直から伺ひ犬同様な人でなしに手をかまれて暖簾に見る耻は誰れゆゑぞ原を正せば根分けの菊親子の中に知らぬといふ道理はなしよし知らぬにせよ知るにせよそれは其方の御勝手なり仇敵の子を妻にもせられず嫁にもすまじ言ふこともなし聞くことも無し恨みつらみを並べ立てなば力車に牛の汗何の積み載せきれるのかは言はぬが花ぞお前さまは盛りの身春めき給ふは今の間なるべし薦かぶりながら見送らん

と詞町亭に氣込あらく齒の根きり／＼と喰ひしはりて釣り上ぐる眉根おそろしく散髪斜めに拂ひあげて白き面に紅の色さしも優しき常には似す止めれば振る袖袂まづ今しはしと詫びつ恨みつ取りつく手先うるさしと立蹴にはたと蹴倒されわつと泣く聲我れとわが耳に入りて起き返るは何處、平常の部屋に倚りかゝる文机の湖月抄こてふの巻の果敢なく覺めて又思ひそふ一睡の夢夕日かたぶく窓の簾風にあほれる音も淋し。

第五回

お珍らしやお高さま今日の御入來は如何いふ風の吹まはしか一昨日のお稽古にも其前もお顔つひにお見せなさらずお師匠さまも皆さま、犬抵でないお案じ日がな一日お噂して居りましたと嬉しげに出迎ふ稽古朋輩錦野はな子と呼ばれて醫學士の妹博愛仁慈の聞えたかき兄を見真似か温順しづくり何某學校通學生中に萬緑叢中一點の紅と稱へられて根あがりの高髻に被布扮粧廿歳を越しての肩縫あげ可愛らしき人品なりお高さま御覽なされ老人なき家の婿のなさ兄は兄とて男の事家内のことはとんと棄物私一人が拍つも舞ふもほんに埃だらけで御座いますと笑ひて誘ふ座蒲團の上おかまひ遊ばすなと沈み聲にお高うやむやの胸の關所たれに打明けん相手も

なし朋友の誰れ彼れ睦まじきもあれどそれは春秋の花紅葉對にして挿す簪の造物ならぬと當座の交際姿こそはやさしげなれ智恵宏大と聞くは此人すがりて見ばやとこれも稚氣さりながら姿に知れぬは人の心笑ひものにされなばそれも耻かし何とせんと思ふほど兄弟ある人羨ましくなりてお兄様はおやさしいとお前さま羨ましと口を洩るれば花子少し笑みを含んでこればかりは私の幸福さりとて喧嘩する時もあり無理な小言いはれまして腹立ち合ふこともあれど路も無し先もなし海鼠のやうなと笑はれます此頃は施療に暇がなうて芝居も寄席もとんと御無沙汰その内にお誘ひ申します兄はお前さまをといひかけて笑ひ消す詞何としらねどお施しとはお情深い事さぞかし可哀さうのも御座いませうと思ふことあれば察しも深し花子煙草は嫌ひと聞きしが、傍の煙管とりあげて一服あわたしく押やりつそれはもうさま／＼ツイ二日許前のこと極貧の裏屋の者が難産に苦みまして兄の手術に母子とも安全ではありましたれど赤子に着せる物がなにか聞きませば平常の心に承知がならず其の夜通して針仕事着るもの二つ遣はしましたと得意顔の物語り徳は陰なるこそよけれとか聞きしが怪しのことよと疑ふ胸に相談せばやの心は消えぬ花子さま／＼の患者の話に昨日往診し同朋町とやら若しやと聞けばつゆ違はぬ様子なりそれほどまでにはよもやと思へど正しくならば何とせん實否くはしく聞きたしと思へど咎

むる心に詞つまりて應答何やらうろくになりぬ高さま御ゆるりなされ今兄も戻ります先
それよりは目に懸けたきもの往日お話し申せし兄が秘蔵の書帖イエお前さまに御覽に入る
に賞められこそすれ何として小言聞くことではなしお待遊ばせよと待遇ぶり詞滑かの人とて
中々に歸しもせず枝に枝そふ物がたり花子いどい眞面目になりて斯う申してはをかしけれど
前さまは一人子私とても兄ばかり女の同胞もたませねば淋しさは同じこと何かにつけて心細
し御不足かは知らねど妹と思召してよと底にもある詞遣ひそれは私より願ふこといふ詞聞
きも畢らばそれならばお話ありお聞き下さりませかど怪しの根問ひ高さまお前さまのお胸一
つ伺へば譯のすむ事外でもなし實の姉さまにあり下さらぬかど決然いはれて御申儀私こそ實
の妹と思召してと言ふを遣りそれでは未だ御存じの無きならん父御さまと兄との中にお話し成
立つてお前さまさへ御承知ならば明日にも眞實の姉様お厭か〜お厭ならばお厭でよしと薄氣
味わろき優しげの聲嘘か實か餘りといへば餘りのこと、亂るゝ心を流石に留めて花子さま仰せ
まだ私には呑込ませぬお答へも何も退てのこと今日は先づお暇と立たんとするを強ても止め
ず然らばお歸りか好きお返事お待申しますと送り出す立關先左様ならばを跡になして乗り出す
車の掛履に走り退く一人の男あれは何方の藥取傳れの姿やと見返れば彼方よりも見返る顔おい

芳さま詞の未だ轉び出でぬ間に車は輕轆として轍のあと遠く地に印されぬ。

第六回

中硝子の障子ごしに中庭の松の姿をかしと見し絹布の四布蒲團すつばりと炬燵の内あたゝか
に、美人の酌の舌鼓うつゝなく、門を走る櫛ひろひわれは何處の小僧どん雪中の一つ景物も
しろし、とても積らば五尺六尺雨戸明けられぬ程に降らして常闇の長夜の宴、張りて見たしど
鈍れ舌に謔言の給ふちろ〜目にも六花の眺望に別は無けれど身にしむ寒さは降かゝりての後
ならで知れぬ事なり、うそ寒しと云ひしも二日三日朝來もよほす薄墨色の空摸様に頭痛もちの
天氣豫報相違なく西北の風ゆふ暮かけて鷺毛か柳絮かはやちら〜と降り出でぬ、入相の鐘の
聲陰に響きて晴にいそぐ友鳥今宵の宿りの詫しげなるに誰が空せみの夢の見初め、待合の奥二
階に爪弾きの三下り籠を洩るゝ笑ひ聲低く聞えて思はず停る行人の足元、狂ふ煩惱の犬の尻尾、
えまつたりと飛び退きて畜生めとはまこと踏みつけの詞なり、我が物なれば重からぬ傘の白ゆ
き往來も多くはあらぬ片側町の薄ぐらきに悄然とせし提燈の影かぜに瞬くも心細げなる一輛の
車あり、前代の安さ願はれて剝げたる塗り破れし母衣、夜目なればこそ未しもなれ晝はづかし

き古毛布に乘客の品も嘸と知られて多くは取れぬ瘦せ田作り米の代ほど有りや無しや九尺二間の煙の網あはれ手の中にかゝる此人腕力おぼつかなき細作りに車夫めかぬ人柄華奢といふて賞めもせられぬ力役社會に生ひ立つた身とは請取れず履歴は如何に聞きたしと問ふ人なければ我れと唇開きもならず、ア、と出る溜息を嘯しめる齒の根寒きにふるひて打仰ぐ面を見れば扱も美男子色こそは黒みたれ眉目やさしく口元柔和に歳は漸く二十か一か繼々の筒袖着物糸織ぞろへに改めて帯に巻く金鎖りきらびやかなの姿させて見たし流行の花形俳優何として及びもないこと大家の若旦那それ至當の役なるべし、さりとは是れ程の人品備へながら身に覺えた藝は無きか取上げて用ひる人は無きか憐れのことやとは目の前の感じなり心情さら／＼知れたものならず美しくしき花に刺もあり柔和の面に案外の所爲なきにもあらじ恐ろしと思へばそんなもの、最負目には雪中の梅春待つまの身過ぎ世過ぎ小節に關はらぬが大勇なり辻待ちの暇に原書繙いて居さうなものと色目鏡かけて見る世上の物映るは自己が目鏡がらなり、夜はまだ更けねど降りしきる雪に人足大方絶々になりて戸を下す商家こゝかしこ、遠く引く按摩の聲に近く交る犬の子の叫びそれすらも淋しきを路傍の柳にさつと吹く風になよ／＼と靡いて散るは紛雪、物思ひ顔の若者が襟のあたり冷いやりとしてハツと振拂へば半面を射る瓦斯燈の光蒼白し、行く人

はなし乗る人は猶更なからんを何を待つとか馬鹿らしさよと他目には見ゆるものからまだ立去りもせず前後に目を配るは人待つ心の絶えぬなるべし、凍る手先を提燈の火に暖めてホツと一息力なく四邊を見廻し又一息此處に車を下してより三度目に聞く時の鐘、今はと決心の臍固まりけんツト立上りしが又懷中に手をさし入れて一思案ア、困つたと我知らず歎息の詞唇をもれて其儘に身はもとの通り舌打の音續けて聞えぬ、雪はいよ／＼降り積るとも歌むべき氣色少しも見えず往來は到底なきことかと落膽の耳に嬉しや足音辱しと顧みれば角燈の光り雪に映じ巡回の查公怪しげに目を注いで行き過ぎられし後に又人音この度こそはと見れば情なし三軒許手前なる家に入りぬ、流石に氣根も竭果てけん茫然として立つくす折しも最少し參ると御座いませうと話し聲して黒き影目に映りぬ、天の與へ人こそ來つれ外すまじと勇み立て進め寄ればはて何とせん、過たるは及ばざる二人連とは生憎や、車は一人乗りなるを。

第七回

心苛られのさるゝものは散會過ぎて來ぬ迎ひの車と數へ入れたし、待たせて置きても宜かりしを供待の難踏遠慮して時間早めに吩咐て遣せしもの何としての相違ぞやよもや忘れて來ぬには

あらし家にてても其通り何時まで迎ひ出さずには置かれまじ、例の酒癖何處の店にか酔ひ倒れて寝入りても仕舞しものかそれなればいよく困りしことなり家にてても嘸お案じ此家へも亦氣の毒なり何とせんと思ふ程より積る雪いと心細く燭涙ながるゝ表二階に一人取残されし新田のお高、げにも浮世か音曲の師匠の許に然るべき會の催し断りいはれぬ筋なうねどつらきものは義理の柵是非と待たれて此日の午後より、飾る錦の裏はと問はゞ涙ばかりぞ薄化粧に深き苦勞の色を隠して友が無邪氣の物語りを笑ふて聞く胸ぐるしさ思ひに瘦し手首に取りすがりてお美ましやお高さまのお手の細さよお酔めし上りしか御傳授聞きたしと眞面目に問ふ人可笑しくはなくて其心根羨ましくなりぬ其の人々歸り果てゝより一時間許待つには長き時間ながら車の音門にも聞えず捨置かれなば未だしもなれどお茶参らせよお菓子あがれ夜はまだそれほど深くもなしお迎ひも今参らん御ゆるりなされと好遇さるゝ程猶更氣の毒さ堪く難くなりて何時まで待ちても果て見えませねば憚りながら車一つ願ひたしと婢女に周旋のはど頼み入ればそれは何の造作もなきことなれどつひ行き違ひにお迎ひの参るまじとも申されず今少しお待なされてはと溢々にいふは車もとめに行くがづらさになるべし、それも道理雪の夜道押してとは言ひかねて心ならねど又暫時二度目に入れし茶の香り薄らぐ頃になりても音もなければ今は來ぬものか

來るものか當てにもならず當てにして何時といふ際限もなし行き違ひになるともそれはよし兎に角車願ひたしと押かへして頼み入るゝに師匠實にもと氣の毒がりて然らはお止め有すまじとてもお歸りなさるゝに夜が更けてはよろしからず車大急ぎに申して來よと主の命令は詮方なくてや恨めしげながら承はりて梯子あわたくしく馳せ下りしが水口を出づる大黒傘の上に雪つもるといふ間もなきばかり速かに立歸りて出入の車宿名残なく出拂ひて挽子一人も居りませねばお氣の毒さまながら女房が口上其まゝの返り事に然らば何とせんお宅にお案じはあるまじきに明早朝の御歸館となされよなど親切に止めらるれど左様もならず、雪こそふれ夜はまだそれほどにも御座りませねばと歸り支度とゝのへるにそれならば誰ぞ供にお連なされお歩行御迷惑ながら此邊には車鳥渡むつかしからん大通り近くまでは御難澁なるべし家内にてすら火桶少しも放されぬに夜氣に當つてお風めすな失禮も何もなしこゝより直にお頭巾召せ誰れぞお肩掛お着せ申せと總掛りに支度手傳はれて憚りさまといひも敢へず更けぬ内にお急ぎなされなまにかお止め申さずば是れ程に積るまいものお氣の毒のこといたしたりお説はいづれと送り出す門口犬の子の聲恐ろしけれと送りの女中が骨たくまじきに心強くて軒下傳ひ三町ばかり御覽なされませあの提灯は屹度車今少しの御辛防と引く手な引かるゝ手も氷りつくやうなり嬉しやと

近づいて見ればさても破れ車モシと聲はかけしが後退さりする送りの女中ソツとお高の袖引き
 てもう少し参りませうあまりといへば跡は小聲なり折しも降しきる雪にお高洋傘を傾けて
 見返るともなぐ見返る途端目に映るは何物蓬頭亂面の青年車夫なりお高夜風の身にしみてかお
 るくんと震へて立止りつ、此雪にては先へ行きても有るか無きか知れませねば何にてもよし此
 の車お頼みなされてよと俄に足元重げになりぬあの此様な車にお乗しなるとかあの此様な車
 にと二度三度お高軽く點頭きて詞なし我れも雪中の随行難儀の折とて求むるまゝに言附くる那
 の車さりとては不似合なり錦の上着はつゝれの袴つぎ合したやうなと心をかしく挽出すを見送
 つて御機嫌よう車夫さんよくお氣をつけ申して。

第八回

馳せ出す車一散、さりながら降り積る雪車輪にねばりてか車上の動揺する割に合せて道のはか
 は行かす萬世橋に來し頃には鐵道馬車の喇叭の聲はやく絶えて京屋が時計の十時を報する響空
 に高し、萬世橋へ参りましたがお宅は何方と軾を控へて行む車夫、車上の人は聞ひく、鍋町ま
 だと只一言、車夫は聞きも取へず力を籠めて今一勢と挽き出しぬ、皚々たる雪夜の景に異りは

なければ大通りは流石に人足絶えず雪に照り合ふ瓦斯燈の光り皎々として、肌をさす寒氣の堪
 へがたければにや、車上の人は肩掛深く引あげて人目に見ゆるは頭巾の色と肩掛の派手模様の
 み、車は如法の破れ車なり母衣は雪を防ぐに足らねば、洋傘に辛く前面を掩ひて行くこと幾
 町、鍋町は裏の方で御座いますかと見返れば否鍋町ではなし、本銀町なりといふ、然らばと
 ばかり馳せ出す又一町、曲りませうかと問へば、眞直にと答へて此處にも車を止めんとはせず
 日本橋迄行きたしといふに何かは知らねご詞の通り、河岸につきて曲りてくれよ、とは何方右
 か左か、左へいや右の方へと又一横町、お氣の毒なれど此處を折れて眞直に行て欲し、と小路
 に入りぬ、何の事ぞ此路は突當り、外に曲らん路も見えねば、モシお宅はどの邊でと覺束なげ
 に問んとする時、何とせん道を間違へたり引返してと復跡戻り、大路に出れば小路に入らせ小
 路を縫ては大路に出で走幾走、轉幾轉、蹴立る雪に轍のあと長く引てめぐり出れば又以前の道
 なり、薄暗き町の片角に車夫は茫然と車を控へて、仰の通りに参りましたら又以前の道に出ま
 したが若しやお間違ひでは御座いますまいか此角を曲ると先程の糸屋の前眞直に行けば大通り
 へ出て仕舞ひますたしか裏通りと仰せで御座いましたか町名は何と申しますか夫次第大抵は分
 りませうと問掛けたり、車上の人は言葉少に兎に角曲つて見て下され、たしか此道と思ふやう

なりとて棍棒を向きかへさせぬ、御覽なされまし矢張りこゝは元の道これで宜しう御座いますかと訝しみて問ふ車夫の言葉にほんとは違ひたりもう一つ跡の横町がそれなりしかも知れずと曖昧の答へ方、さればといふて挽き返す一横町こゝにもあらず今少し先へといふ、提燈揺り消して商家に火を借りしも二度三度車夫亦道に委しからずやあらん未だ此職に馴れざるにやあらん同じ道行返りて困じ果てもしたらんに強くいひても辭しめせず示すが儘の道を取りぬ、夜は漸々に深くならんとす人影ちらほらと稀になるを雪はこゝ一段と勢をまして降り以降れと隠れぬものは鍋焼餛飩の細く哀なる聲戸を下す商家の荒く高き音さては、按摩の笛犬の聲小路一つ隔て、遠く聞ゆるが猶更に淋し、さても怪しや車上の人萬世橋にもあらず鍋町にもあらず本銀町も過ぎたり日本橋にも止まらず大路小路幾筋幾通りも何方に行かんとするにか洋行して歸朝の後に妻を忘るゝ人ありとか聞きしがこれは又いかに歸るべき家を忘れたるか歳もまだ若かるを笑止といはいはゞ笑止思へば扱も訝しき事なり、今度は京橋へと急がせぬ、裏道傳ひ二町三町町名は何と知れねど少し引き入りし二階建てに掛行燈の光り朧々として主はありやなしや入口に並べし下駄二三足料理番が欠伸催すべき見世が、りの割烹店あり、車上の人は目早く認めて、オ、此處なり此處へ一寸と俄の指圖に一聲勇ましく引入れる車門口に下ろす棍棒

と共にホット一息内には女共が口々に入らつしやいまし。

第九回

勢ひよく引入れしが客を下ろして扱おもへば恥かし、記憶に存る店がまへ今の我が身には往昔ながら世の人は未だ昨日といふ去年一昨年、同商中の組合會議或は何某の懇親會に登りなれし梯子なり、それと知れば俄に肩すぼめられて見る人なけれど、遠しく片蔭のある薄暗がりにも車も我も寄せて憩ひつ、静かに顧みれば是れも笹原走るたぐひ、誰が目に覺えて知るものぞ松澤の若大將と稱へられて席を上座に設けられし身が我れすらみすばらしき此服装よしや面に覺えが有ればとて他人の空背、それもあるならひなり況してや替りたる雪と墨おろかなこと雲と泥ほど懸隔のおびたしき如何に有爲轉變の世とはいへ是れほどの相違誰れが何として氣のつくべき心の鬼に見知り越しの人目厭はしく態と横町に道を避けて見られじとする氣あつかひも他人は何の感じもなく摺れ違つて見合はす眼の電光、ハツと思ふは我ればかり、態さつくるかまこと見忘れてか知らず顔に過ぎ行かれて、撫で下ろす胸にむらくと、じるはさても人情こそ薄きものなれ紙といはゞ吉野紙見えすいたやうな世の中なり、知り顔して欲しきにもあらず

詞かけられては身の置場もなければ、それにも何か色のあるもの、物はいは振切らん袖がまへ
 嘲るやうな尻目遣ひ口惜しと見るも心の僻みか召使ひの者出入のもの指折れば少からぬ人数
 ながら誰れ一人として我れ相談の相手にと名告出づるものもなし、富貴には寄る親類顔幾代先
 きの誰様に何の縁故ありとかなしとか猫の子の貰ひ主までが實家あしらひのえせ追従、櫓で掃
 く庭石の周旋を手はじめに引き入れる工夫算段はじいて言ねば知れぬもの、割りにも合はぬ品
 いくら冠せて上穂に自己が内懐中ぬく／＼とせし絹布ぞろひは誰れ故に着し物とも思はずお庇
 護に建ちましたと空拜みせし新築の二階造り其の詞は三年先の阿房鳥か、今の零落を高見に見
 下して全躰意氣地が無さずと言ひしかと酷と思ふは心がらなり、他人が聞けば適當の評と
 いはれやせん別家も同じき新田にまで計らるゝ程の油断のありしは家の運の傾く時かさるにて
 も憎きは新田の娘なり、うつくしき顔に似合ぬは心小學校通ひに紫袂紗對にせし頃年上の生
 徒に喧嘩まけて無念の拳を我れ握る時同じやうに涙を目に持ちて、口惜しげに相手を睨みしこ
 ともありしがそれは無心の昔なり我れ性来の虚弱とて假初の風邪にも十日廿日新田の訪問解れ
 ば彼處にも亦一人の病人心配に食事も進まず積古ごとに行きもせぬとか、お前さまお一人のお
 煩ひはお兩人のお悩みと婢女共に笑はれて嬉しと聞きしが今更おもへば故らに言はせしか知れ

たものならず此頃見しは錦野の玄關先うつくしく粧ふた身に比べて見て我れより詞は掛けられ
 ねと無言に行過ぎるとは不持ならずや身を零落たれ許嫁の縁されしならずまこと其心なら美
 くしく立派に切れてやりたし切れるといへば貧乏世帯のカンテラの油、宵宵の用ひだけありし
 か如何に、さらでも御不自由のね兩親が燈火なくば囁れ困り早く歸りて様子知りたきもの、今
 の客人の氣の長さまだ車代くれんともせず何時まで待たする心にやさりとてまさかに促りもさ
 れまじ何としたものぞとさし覗く奥の方廊下を歩む足音にも面赫と熱くなりて我知らず又蔭
 に入る、思へば待たるゝやうな待たれぬやうな萬一車代を渡す人知りし顔の女中ならば何とせ
 ん詞かけられなば何といはん恥の上塗りは要なきことなり車代といふも知れたもの受けずとも
 よし此まゝに歸らんか否は欲しければこそ雪の夜を二時三時恥も外聞も親には換へられたも
 のならず、はて誰れでも出て来よ此姿に何として見覺はがあるものかと自問自答折しも樓婢の
 かなさき聲に、池の端から来た車夫さんはね前さんですか。

第十回

それは何ぞのお間違ひなるべし私に客様に懸親はなし池の端より供せしに相違は無けれど車代賜はるより外に御用ありとは覺えず其譯仰せられて車代の頂戴願ひ下されたしと一歩も動かんとせぬ芳之助を誘ふ樓婢は笑みを含み、れ間違ひやら何やら私等の知る事ならねと只お客さまの仰せには今の車夫に用事がある足を洗はせて此室へ呼びたしと仰せられたに相違はなし兎に角お上りなされよと洗足の湯まで汲んでくる、はよも申儀にはあらざるべし偽りならずとせば真以て奇怪、何人が何用ありて逢ひたしといふにや親戚朋友の間柄にてさへ面背ける我に對して一面の識なく一語の交りなき然かも婦人が所用とは何事逢たしとは何故人違ひと思へば譯もなければ彼處といひ此處といひ乗り廻りし方角の不審しさそれすら事の不思議なるに頼みたきことあり足を洗ひて上りくれよとは扱て意外わからぬといへば是れ程わからの話はない何とせば宜からんかと佇立たるま、躊躇へば樓婢はもせかしげに急がしめて、れ客さまも嗚お待ちかねお逢ひならば、譯はどの道知れる筈なり先づれ出なされよと手をとらへて引立つるに然らば參るべしお手れ放しなされ大方は人違ひと思へどれ目にかゝりし上ならではな疑ひ晴れ難からん御案内頼み申すと明瞭に答へながら心の裡は依然濛々漠々、靜かに足を淨め了りていさとばかりに誘はれぬ、流石なり商賣がら傑として家内を照らす電燈の光りを簞籠の針

の目いちじろく見えて時は今極寒の夜ともいはず脊に汗の流るゝぞ苦しきお客さまはお二階なりといふ伴はる、梯子の一段又一段浮世の憂きといふ事知らで昇り降りせしこともありし其時の酌取り女我が前離れず喋々して款待したるが彼の女もし居らば彌々面目なき限りなり其頃の朋友今も遊びに來んは定の物何ぞのはしに我がこと引き出して斯々云々とも物語りなば何處まで知らるゝ恥ならん思へば何故に登樓たるか今更に詮なき事してけりと思ふほど胸さわがれて足ふるひぬ、案内はかねて知る梯子を登り果て、右手の小座敷、お客さまは此處にと示したるま、樓婢は急ぎ下り行きたり障子の外に暫時たゆたひしが果つべきことならずと身を低くして靜かに明くる坐敷の内これは如何に頭巾に見えざりし面肩掛につゝみし身今ぞ明らかに現はれぬ、寢寐にも離れず起居にも忘れぬ我が後來の半身二世の妻新田が娘のお高なり、芳之助はそれと見るより何思ひけん前後無差別、踵を回してツト馳出づればお高走り寄つて無言に引止むる帯の端振拂へば取すがり突き放せば纏ひつき芳さまお腹だちは御尤もなれども暫時、お長うとは申しませぬ申しあげたきこと一通りと詞されゝに涙漲りて引止むる腕ほそけれど懸命の心は蜘蛛の圍の千筋百筋力なき力拂ひかねて五尺の身なよ／＼となれど態と荒々しく突き退けてお人違ひならん其様な仰せ承はる私にはあらず池の端よりお供せし車夫の耳には何の



ことやら理由すこしも分りませぬ車代賜はる外御用はなき筈御申儀はお措き下されと言ひ辨つてすつくと立てば、あんまりなり芳さま其お心ならそれでよし私にも覺悟ありと涙を拂つてきつとなるお高、オ、おもしろし覺悟とは何の覺悟許嫁の約束解いて欲し、とのお望みかそれは此方よりも願ふ事なり何の迂りくどい申上ぐるこの候の一通りも二通りも入ることならず後とはいはず目の前にて切れて遣るべし切れて遣らん他人になるは造作もなしと嘲笑ふ胸の内には沸くは何物、お高涙の顔恨めしげに、お情なしまだ其様なこと自由にならば此胸の中斷ら割つて御覽に入れたし。

第十一回

又逢ふ場所某の辻某の處に待給へ必らずよと契りて別れし其夜のこと誰れ知るべきならねば心安けれと心安からぬは松澤が今の境涯あらまは察しても居たのも、それ程までとは思ひも寄らざりしが其御難儀も誰れがせし業ならず勿躰なれど我が親うらみなり聞かれぬまでも諫めて見んか否父はともあれ勘藏といふものある以上なまなかの事言出して疑ひの種になるまじとも言ひ難しお爲にならぬばかりかは彼の人との逢瀬のはしあやなく絶もせば何かせん然るべ

き途のなからずやと惑ふは心つゝひ色目に何ごととも顯はれねと出嫌ひと聞えしお高昨日は池の端の師匠のもとへ今日は駿河臺の錦野へと駒下駄直さする日の多かるを不審といは、不審もたつべきながら子故にくらきは親の眼鏡運平が邪智ふかき心にも娘は何時も無邪氣の子供伸びしは脊丈ばかりと思ふか若しやの掛念少しもなくへテ中の好かりしは昔のことなり今の芳之助に何として愛想の盡ぬものがあらうか娘はまして孝心ふかし親の命令ること背く筈なし心配無用と勘藏が注意をさへ取りあげもせず錦野が懇望恰もよし彼れは有徳の醫師なりといふ故郷某の地には少からぬ地所をさへ持てりと聞くに娘の爲にも我が爲にも行末わろき縁組ならずとよりよりの相談を洩れきく身の腹だ、しき縦令身分は昔の通りならずとも現在ゆるせし良人ある身に忌はしき嫁入沙汰きくも厭なり表にかざる仁者顔は畢竟何事かの手段かも知れたことならす優しげな妹御も當てにならぬよし折々見たこともあり毒蛇のやうな人や信用なさるお心には何ごと申すとも甲斐はあるまじさりとて此儘に日を送らば悲しきことの來んは目の前なり聞かせて心配さするも憂ければ頼むは彼の人の力のみ男の智慧には良き考へもなからずやと思ひたてば心は矢竹、はやるほど猶落附てお友達の誰さま御病氣とさく格別に中の好き人ではあり是非お見舞申したく存じますと許容を請へば平常の氣だてに有るべき願ひとて疑ひもなく運

平點頭きて然らば疾く行きて疾くかへれ病人の處に長居はせぬもの供には鍋なりと連れて行きなされと氣をつくれればイエそれには及びませぬ裏通りを行けばつい其處なり鍋も家のことが忙しう御座いますツイ行てツイ歸るに供などは大層すぎます支度も何も入りませぬ、此儘すぐにとそこ／＼身仕度して庭口出でんとする途端嬢さま今日もお出かけか何處へぞと勘藏かざろ／＼目恐ろしけれと臆してなるまじと熊とつくる笑顔愛らしく今日もとは勘藏酷いぞや今日はと言はねばてにをはが違ふ所ぞとほゝ笑みて何氣もなしに家を出でぬ約束の辻往つ返りつ侍てどもまてども今日はいかにしけん影も見えず誰れに聞かんもうしろめたし何とせん必ず訪ひ給ふな我家知られんは恥かしとて町所つけ給はねど曩に錦野にてそれとなく聞きしはうろ覚えながら覚えあり縦しお怒りにふれゝばそれまで、空しく物をおもふよりは寧ろお目にかゝりしうへにて兎も角もせんと心に答へて妻戀下とばかり當所なしにこゝの裏屋かしこの裏屋さりとては雪糺むやうな尋ねの思ふ心かするべにや松澤といふか何か知らねど老人の病人二人ありて年若き車夫の家ならば此裏の突當りから一軒目溝板の外れし所がそれなりとまで教へられぬ時は夕暮の薄くらきに迷ふ心もかき暮されて何と言入れん戸のすき間よりさし覗く家内のいたましきよ頭巾肩掛に身はつゝめと目をもるものは紅の涙の

第十二回

さらでも老ては僻むものとか況んや貧にやつれ苦にやつれ人恨めしく世の中つらく明けては歎き暮れては怒り心晴間なければさまでには無き病氣ながれ何時癒るべき景色もなくあはれ枯木に似たる儀右衛門夫婦待ちわびしきは春ならで芳之助の歸宅の遅さよ好き客ありて遠くまで行きたるにやそれにしても最う歸りさうなもの日没まへに一度づゝ様子見に戻るが常なるを何として今日はと頸を延ばす心は同じ表のお高も路次口顔みず家内を覗きつ芳さまはどうでもお留守らしく御相談すること山ほどあるをお目に懸らでは戻らるゝことかはさるにても此病人のうへに此お生計右も左もお身一つに降りかゝる芳さまが御心配は嘸なるべし尋常ならば御両親の見取り看護もすべき身が餘所に見聞く苦しさよと沸き返る涙胸に吞みて差のぞかんとする二枚戸を内より明けて面を出すは見違へねども昔は残らぬ芳之助の母が姿なり待つ人ならで待たぬ人の思ひも寄らず佇むかげに驚かされて物をいはず見つむる目元も疎くなりてや不審げに誰何さまぞと問はるゝもつらしお高頭巾を手早く取りてお忘れ遊ばしたかと取すがりて啼く音に知るゝ焼野の雉子我子ならねと繋がる縁とて母は女の心も弱くオ、お高か否お高どのか何として

此様な處へ何う尋ねて知れましたと云へば、涙の聲き、附けてや膝行出づる儀右衛門はくばみし眼にキツと睨みてコレ何を云つて居るぞ夕方は別して風が寒し其うへに風でも引かば芳之助に對しても濟むまいぞやといふ詞の尾に附いてお高おそる／＼顔をあげ御病氣といふことを人傳に聞きましてお怒りにふれるとは知るも御様子伺ひたさに出にくい所を縛つて漸うの思ひて参りましたお父様にもお執成をとしほ／＼として言出づるを取次ぐ母が詞も待たず儀右衛門冷笑つて聞かんとせざるは口賢くさま／＼の事がいへたものかな父親に薫陶れては其儀の事ながらも其手に乗りはせぬぞよ餘計な口に風引かさなり早く歸宅さるゝが宜さうなもの誠と思ひて聞くものは此家の内に一人もなし老婆さまも眉毛よまれるなど憎々しく言ひ放つて見返りもせずそれは御尤の御立腹ながら是れまでのこと露ばかりも私知りての事はなしお憎しみはさることなれど申譯の一通りお聞き遊ばして昔の通りに思召してよと認入る詞聞きも取へず河といふぞ父親の罪は我れは知らぬ今まで通り嫁身になりたしとか聞て呆れるなり考へても見よ人非人の運平の娘を妻に持つ芳之助と思ふかよしや芳之助が持つといふとも我れある以上は嫁にすること毛頭ならぬ汚らはし、運平の名思ひ出して胸が沸くなり況てやそれが娘を嫁になんと思ひも奇らぬことなり詞かはすも思はしきに疾々歸らずやお歸りなされエ、何を

うぢ／＼老婆さま其處を閉めなさいと詞づかひも荒々しく怒りの面色すさまじさを母は見かねてそれはあまりに短氣なりあの子の詞も一通りは聞てお遣りなされぬかと執成すをハタと睨んで汝までが同じやうに何の囁語最早何事聞く耳もなし汝が追ひ出さずは我れ自身にと止むる妻を突のけつ、病勞れても老の一徹上りがまちに泣顔れしお高が細腕むづと取りつ力を極めて押出す門口れ慈悲に一言れ聞き入れをを詫びるも泣くも何の用捨あらくれし詞に怒りを籠めて嫁でなし身でなし阿伽の他人の來る家でなし何といふともう逢はぬぞ、ハタとたてて切る雨戸の闕くちしは溝か立端もなくわつと泣く空に闇を縫ひ行く鳥の雨三聲。

第十三回

覺悟の身に今更の涙見苦し、と勵ますは詞ばかり我れまづ拂ふ臉の露の消えんとする命か扱もはかなし此處松澤新田が先祖累代の墓所晝猶暗き樹木の茂みを吹拂ふ夜風いと悲惨の聲をそへて鼻の斗び一段と物すごしお高決心の眼光たじろがすれ心怯れかさりとては御未練なり高が心は先はとも申す通り決めし覺悟の道は一つ二人の身を犠牲にしてとお前さまのれ心伺ふ先に生きて還る念はなし父御さまの今日の仰せ人非人の運平が娘を嫁になぞ、は思ひも奇らぬ

ことなり芳之助は兎もあれ我れ許さずと御腹の敷やそれいさ、かも御無理ならねどお前さまと縁きれて此世何の樂しからずつらき錦野がこともあり所詮は此命一つぞと覺悟の道も河じやうに行逢つてお前さまのお心伺へば其通りとか今更御違背のある筈なし私は嬉しう存じますをと美事に言ひ放つて嚙む襦袢の袖、未練などがあることかは我れ男の一疋ながら虚弱の身の方及ばず只にもあらで病ひに臥す兩親にさへ孝養、抱持の不十分さ甲斐なき身恨めしくなりて捨てたしと思ひしは昨日今日ならず我々二人斯くと聞かば流石運平が邪慳の角も折れる心になるは定なり我が親とても其の通り一徹の心知らざりば兩家の幸福この上やある我々二人世にありては如何に千辛萬苦するとも運平の後悔の念も出まじく況してや手を下げての詫ごと何としてするべきならずよしや膝を屈ればとて我親決して肯はなすまじく乞食非人と落魄るも新田如きに此口腐れても助けを求むることはせずとそれ平生の詞なるもの盡未來この不和の中解ける筈なし數代續きし兩家のよしみ一朝にして絶やさんこと先祖の遺旨にも違ふことなり世の人は愚とも笑はん痴とも見んさりながら先祖に對し家に對す孝は二人が命なり捨て、榮ある身ぞと思へば何處に残る未練もなしいさ身支度をと最期の用意はれ短き契りなるかな井筒にかけし丈くらへ振わけ髪のかみならねば斯くとも如何しら紙にね様こさへて遊びし頃これ

は君さまこれ我今日は芝居へ行くのなり否花見の方が我れは宜しと戯れ交はせしそれ一つも願ひの叶ひしことはなくて待にまちし長日月のめぐり来て見れば果敢なしや世は桑田の海ともならねど變るは現在親の心、ましてや他人の底ふかき計略の淵知るべきならねば 陥れられて後の一悔恨空しく呑む涙の晴れ間は無くして降りかゝる憂苦と繋がる、情緒に思慮分別も鳥羽玉の聞くらき中にも星明りに目と目見合せて莞爾とばかり名残の笑顔うら淋しくいさと促せばいざと答へて流石にたゆたはるゝ幾分時思ひ定めてツト立よりつ用意の短刀とり直せば後の藪にやら物音人もや來つると耳を澄ますに吹き渡る風定かに聞えぬ扱は追手にもあらざりけりれ高支度は調ひしか取亂さんは亡き後までの恥なるべし心静かにと誠める身も詞ふるひぬ慘まし、可惜青年の身花といはゞ苔の枝に今や吹き起らん夜半の狂風、れ高が胸先くつろげんとする世時はやし間一髪、まち給へとばかり後の藤垣まるび出で、利腕しつかと取る男誰れぞ放して死なしてと脆弱き身にも一心に振切らんとするをいつかな放さず、いや放しませぬ放されませぬれ前さま殺しては旦那さまへ濟みませぬといふは正しく勘藏か、とれ高の詞の畢らぬ内間にさらめく白刃の電光アツと一聲一刹那はかなく枯れぬ連理の片枝は。

第十四回

こばれ松葉の土になるまで二人ともにと契りしものを我ばかり何として後るべきと足すりして
 歎きしが命果敢なく止められて再び見んとも思はざりし六疊敷の我が部屋をその儘の座敷半椽
 の障子の開閉にも乳母が見張りの目は離れず況してや勘藏が注意周到翼あらば知らぬこと飛ぶ
 鳥ならぬ身に何方ぬけ出でん隙もなしあはれ及物一つ手に入れたや處は異れど同じ道に後れば
 せじの娘の目色見てとる運平が氣遣はしさ錦野との縁談も今が今と運びし中に此こと知られな
 は皆書餅なるべし包まるゝだけはと秘しかくして宥めてみつ賺してみつ意見に手をかへ品をか
 ふれと袖の涙晴れんともせず兎もすれば我も俱にと決死の素振に油断ならず何はしかれ命あり
 ての物だねなり娘の心落附かすに若くはなしと押しては婚儀をすゝめもなさず去るものは日々
 に疎しの俚諺もあり日をだに経れば芳之助を追慕の念も薄らぐは必定なるべし心ながく時を待
 つて春の氷に朝日かげれのづから解けわたる折ならでは何事の甲斐ありとも覺えず誰れも！
 異見は言ふな心の浮く話に氣をなぐさめて面白き世をねもしろしと思はするのが肝要ぞと我先
 立ちて機嫌を取りつ慰めつ一方は心を浮かせんと力め一方は見張りを嚴にして細ひも一筋小刀

一挺れ高が眼に觸れさせるな夜は別して氣をつけよと氣配り眼配り大方ならねば召使ひの者も
 心を得て風の音をも只には聞かず鼠の荒れにも耳をばだてつ疑心は暗鬼を生ずる奥の間に其人
 現在するを見ながら嬢さまは何處へぞれ姿が見ぬやうなりと人騒がせするもあり乳母は夜の
 目ろくく合さずね高が傍に寢床を並べて浮世雜談に諷諫の意をこめつ可笑しく面白く物がた
 りながら沈みがちなる主の心根いぢらしくも氣遣はしく離れぬ守りにこれも一つの關所なり如
 何にしてか越はらるべき如何にしてか通るべきね高髪とりあげず化粧もせず粧ひし昔の紅白粉
 は誰れが爲の色ならず君にたくれて鏡の影に合す面つれなしとて伽羅の油の香りも留めず亂れ
 次第の花の姿やつれる身を我と頼母しく、ならば此儘に死にたしと願へど命は心のまゝならず
 病むともなく煩ふともなくつくつくと眺めてつくつくと泣く涙と空とを意中の友として送らね
 ど迎へねど来るものは月改まるは歳ちりて返らぬ君を思へば何ぞ櫻の春しり顔に今歳も咲ける
 面にくさよ又しても聞く堀切りの菖蒲だより車をつらねて見に行きしはそもいつの世の夢にな
 りて精靈棚の眞こもの上にも表だちては祀られずさりとては世の中うらめしゝ照る月の秋の
 夜草葉に脆き白玉の露と答へて消ぬかぬる身を何と御覽じて何とれ恨みなさるべきにや過ぎし
 雪の夜の邂逅に二つなき貞心婦しきぞとてホロリとし給ひし涙の顔今も眼の前に存るやうなり

第 十 五 回

さりながら思ふ心は幽冥の境にまでは通すまじきや無情く悲しく引止められて命を未練に惜みてとも思召さん苦しきよと思ひやりては伏し沈み思ひ出してはむせ返り笑みとは何ぞ夢にも忘れて知るものは人世の憂きといふ憂きの數々來るものは無意無心の春日秋花落花流水ちりて流れて寄せ返る波の年又年今日は心の解けやする明日は思ひの離れやするあれは榮花の身にしたり娘にも綺羅かざらせて我れも安心の樂隱居願はくは家運長久なれ子孫繁昌なれ兎角は身の上凶事あらせじとの親心に引かへし願ひも逆さまながら今日身をすてんか明日こそはと窺ふ心に怠りなけれと人目の關守何として隙あるべき此處に七年身はまだ籠中の鳥。

お父様にも勘藏にも乳母には別しての事いろく苦勞をかけまして今更おもへば恥かしいやらお氣の毒やら幼心のあと先見ずに程のない無分別さながら盡きの命かや事も無く助かりしを嬉しいと思ひもせでよしなき義理だてに心ぐるしく芳さまのお跡追ふてと思ひしは幾たびかさりとては命二つあるかのやうに輕々しい思案なりしと後悔して見れば今までの事口惜しくこれからの身が大切にになりました阿房らしい死んだ人への操だて何に成ることでもなきを何

時まで獨身で居る心か數へる歳の心細さはほどならばなせ昔お詞をむいて厭ひしか我れと我が身知れませぬ母さまなしのお手一つに御苦勞たんと懸けまして上の上にも又幾年お心休めぬ不料簡不孝のお説は向後さつぱり芳さまのこと思ひ切つて何方への縁組なれ仰せに違背はいたしませぬ勘藏も乳母も長の間心づかひ嘸かすと氣の毒な私の心は今もいふ通り晴れてみれば迷ひは雲霧これまでの氣は少しもなし必らず必らず心配して下さるなよ、流石に心の弱ればにや後悔の涙を目にたへてお高斯くとは言ひ出しぬ歲月心を配りし甲斐に漸くの此詞まづ安心とは思ふものゝ運平なほも油断をなさず起居につけて目をそぐはお高は詞に違ひもなく愁の眉いつしかとけて昨日にかはるまめくしき父のもの我がもの云へば更に手代小僧の衣類の世話話縫ひほどきにまで氣を用ひて浮々とせし様子に扱は眞に悔悟して其心にもなりぬるかと落附くは運平のみならず内外のものも同じこと少し枕を安んじけりさるにても訝しきは松澤夫婦が上にくそ芳之助在世の時だに引窓の烟たえくなりしを今はたいかに其日を送るや可惜若木の花におかれて死ぬへき病は癒えたるものゝ僅か手内職の五錢六錢露命をつなぐ術はあらじを怪しのことよと尋ぬるに澆季の世とは聞くものゝ猶陰徳者なきならで此薄命を憐みてや恵むともなき恵みに浴して鹽噌の苦勞は知らずといふなるそは又何處の誰れなるにや扱も怪むべく尊む

べき此慈善家の姓氏といはず心情といはず義理の柵さこそ知るは唯りお高の乳母あるのみ
 忍びく貫の物のそれからそれと人手を換へて誰れと知らさぬ用心は昔氣質のこくを立て
 通さする遠慮心痛おいたはしや右に左に御苦勞ばかり世が世ならば御嫁さまなり舅御なり御孝
 行に御遠慮は入らぬ筈を或時泣きしにお高同じく涙になりて私の心知るものは和女ばかり
 芳さまのことは思ひ切りても御兩親の行末が心配なり明日が日我が身縁に付きなば兎に角自由
 は叶ふまじ其時たのむは和女ぞかし父さまのお心よく取りて松澤さまとの中昔の通りにして欲
 しは是れ一つがお頼みぞとて兩手を合せて伏し拜みぬ失せし芳之助を悼まぬならねど主の身の
 上猶さらに氣づかはしく蔭になり日向になり意見の數々貫きてや今日此頃の袖のけしき涙も
 心も晴れゆきて縁にもつくべし嫁にも行かんと言出でし詞に心うれしく七年越しの苦も消えて
 夢安らかに寝る夜幾夜ある明方の風あらく枕ひいやりとして眼覺れば椽側の雨戸一枚はづれて
 並べし床はもぬけの殻なりアナヤとばかり蹴かへして起つ枕元の行燈有明のかげふつと消えて
 乳母が涙の聲あわたしく嬢さまが嬢さまが。
 渝らぬ契りの誰れなれや千年の松風颯々として血汐は残らぬ草葉の緑と枯れわたる霜の色かな
 しく照らし出だす月一片何の恨みや吊ふらん此處鴛鴦の塚の上に。

雪の日

見渡すかぎり地は銀沙を敷きて、舞ふや蝴蝶の羽袖軽く、枯木も春の六歌の眺めを、世にある
 人は歌にも詠み詩にも作り、月花に並べて稱ふらん羨ましさよ、あはれ忘れがたき昔を思へ
 ば、降りに降る雪くちをしく悲しく、悔の八千度其甲斐のなけれど、勿體なや父祖累代墳墓の
 地を捨て、養育の恩ふかき伯母君にも背き、我名の珠に恥かしき今日、親は瑕なかれとこそ
 名け給ひけめ、瓦に劣る世を経よとは思しも置かじを、そもや谷川の水おちて流れて、清から
 ぬ身に成り終りし、其あやまちは幼氣の、迷ひに我れか、媒は過ぎし雪の日ぞかし。
 我故郷は某の山里、草ぶかき小村なり、我が薄井の家は土地に聞えし名家にて、身は其一粒も
 のなりしも、不幸は父母はやく亡せて、他家に嫁ぎし伯母の是れも良人を失ひたるが、立歸り
 て我をば生したて給ひにき、さりなから三歳といふより手しほに懸け給へば、我れを見ること
 實の子の如く、蝶花の愛親といふともこれには過ぎまじく、七歳よりぞ手習ひ學問の師を選み
 て、絲竹の藝は御身づから心を盡し給ひき。扱もたつ年に關守なく、腰揚とれて細眉つくり、

幅ひろの帯嬉しと締めしも、今にして思へば其頃の愚さ、都乙女の利發には比ぶべくもあらず、委ばかりは年齢ほどに延びたれど、男女の差別なきばかり、幼くて、何ごとの憂きもなく思慮もなく明かし暮らす十五の冬、我れさへ知らぬ心の色を何處の誰れか認めけん、吹く風傳へて伯母君の耳にも入りしは、これや生れて初めての、仇名ぐさ戀すてふ噂なりけり。

世は誤の世なるかも、無き名取川波かけ衣、ぬれにし袖の相手といふは、桂木一郎とて我が通學せし學校の師なり、東京の人なりとて容貌うるはしく、心やさしければ生徒なつきて、桂木先生と誰れも褒めしが、下宿は十町ばかり我家の北に、法正寺と呼ぶ寺の離室を假すみなりけり、幼きより教へを受ければ、習慣うせがたく我を愛し給ふこと人に越えて、折ふしは我が家をも訪ひ又下宿にも伴ひて、おもしろき物がたりの中にさましく教訓を含めつ、さながら妹の如くもてなし給へば、同胞なき身の我れも嬉しく、學校にての肩身も廣かりしが、今はた思へば實に人目には怪しかりけん、よしや二人が心は行水の色なくとも、若ふや島田鬚これも小兒ならぬに、師は三十に三つあまり、七歳にしてと書物の上には學びたるを、忘れ忘られて睡みけん愚かさ。

見る目は人の咎にして、有るまじき事と思ひながらも、立ちし浮名の消ゆる時なくば、可惜白

玉の瑕になりて、其身一生の不幸のみか、あれ見よ伯母育てにて投げやりなれば、薄井の娘が不品行さ、兩親あればあのやうにも成らじものと、言ひたきは人の口ぞかし、思ふも涙は其方が母、臨終の枕に我れを拜みて、姉様お願は珠が事をと。徹かに言ひし一言あれば千萬無量の思ひを籠めて、まこと闇路に迷ひぬべき事なるを、引受けし我れ其甲斐もなく、世の嗤笑に爲しも了らば。第一は亡き妹に對し我が薄井の家名に對し、伯母が身は抑も何とすべきと、御聲ひく、四壁を憚りて、口數すくなき伯母君が思し合はすることありてか、しみたくと論し給ひき、我れ初めは一向夢のやうに迷ひて何事とも思ひ分かざりしが、漸々伯母君の詞するどく。

よく聞けよお珠、桂木様は其方を愛で給ふならん、其方も亦慕はしかるべし、されども此處に規定ありて、我が薄井の家には昔より他郷の人と縁を組まず、況てや如何に學問は長じ給ふとも、桂木様は何者の子何者の種とも知らぬを、門閥家なる我が薄井の聲とも言ひがたく嫁にも遣りがたし、よし戀にても然かぞかし、無き名なりせば猶更のこと、今よりは構へて往來もし給ふな、積古もいらぬ事なり、其方大切なればこそお師匠様と追従もしたれ、益も無き他人を珍重にはあらず、年來美事に育て上げて、人にも褒められ我れも誇りしものを、口惜しき濡れ衣させられしは彼の人ゆゑなり、今までは今までとして、以來は斷然と行ひを俊め、其方が名

も雪ぎ我心をも安めくれよ、兎角に其方が仇は彼の人なれば、家を思ひ伯母を思は、桂木とも思すな一郎とも思すな、彼の門よぎるとも寄り給ふな。と疊みかけて仰する時我が腸は斷ゆるばかりになりて、何の涙を臉に堪へがたく、袖につゝみて音に泣きしや幾時。口惜しかりしなり其内心の、いかに世の人とり沙汰うるさく一村擧りて我れを捨つるとも、育て給ひし伯母君の眼に我が清濁は見ゆらんものを、汚れたりと思す恨めしの御詞、師の君とても昨日今日の交りならねば、正しき品行は御覽じ知る筈を、誰が讒言に動かされてか打捨て給ふ情なさよ、成らば此胸かささばさても身の潔白の顯はしたやと歎きしが、其心の底何者の潜みけん。駒の狂ひに手綱の術も知らざりしなり。

小簾のすきかけ隔てといへば、一重ばかりもやましさを、此處十町の間に入目の開きびしくなれば、頃は木がらしの風につけても、散りかふ紅葉のさま羨ましく、行くは何處までと遠く眺むれば、見ゆる森かけ我を招くかも、彼の村外れは師の君のと、住居のさま面かけに浮かんで、夕暮ひやく法正寺の鐘の音かなしく、さしも心は空に通へと流石に誠しめ重ければ、足は其方に向きも得せず、せめては師の君訪ひ來ませと待てど、立つ名は此處にのみならで、憚りあればにや音信もなく、杜絶えし中に千秋を重ねて、萬代いはふ新玉の、歳たちかへつて七日の日

來りき、伯母君は隣村の親族がり年始の禮にと赴き給ひしが、朝より曇り勝の空いや暗くなるまゝに、吹く風絶たれど寒さ骨にしみて、引入るばかり物心はそく不圖ながむる空に白き物ちらく、扱こそ雪に成りぬるなれ、伯母様さぞ寒からんと炬燵のもとに思ひやれば、いと降る雪用捨なく綿をなげて、時の間に隠れけり庭も籬も、我が眩かけ窓はそく開けば一目に見ゆる裏の耕地の、田もかくれぬ畑もかくれぬ、日毎に眺むる彼の森も空と一つの色になりぬ

あゝ師の君はと是れは抑もまよひなりけり。神ひの神といふ者もしあらば、正しく我身さそはれしなり、此時の心何を思ひけん、善しとも知らず悪しとも知らず、唯なつかしの念に迫られて身は前後無差別に、のがれ出でしなり薄井の家を。

これや名残と思はねば馴れし軒ばを見も返らず、心急ぎて庭口を出でしに、嬢様この雪降に何處へとて、れ傘をも持たずにかと驚かせしは、作男の平助とて老實に愚かなる男なりし、伯母様のね迎ひにと語はれば、いや今宵は泊りなるべし、是非ね迎ひにとならば老僕が參らん、先待給へと止めらるゝ憎さ、實は此雪に宜くこそと賞められたく、是非に我身行きたければ、其方は知らぬ顔にて居よかしと言ふに、取しめなく高笑ひして、れ子達は扱埒も無きもの、さ

らば傘を持ち給へとて、其身の持ちしを我れに渡しつ、轉ばぬやうに行き給へと言ひけり、由縁あれば武藏野の原戀しき習ひ、此一言さへ思ひ出らるゝを、無情りしも我が爲、嚴しかりしも我が爲、末善かれとて盡くし給ひしを、思ふも勿躰なきは伯母君の事なり。斯く迄に師は戀しかりしかど、ゆめさら此人を夫と呼びて、俱に他郷の地を踏まんとは、かけても思ひ寄りざりしを、行方なしや迷ひ、窓の吳竹ふる雪に心下打れて我れも人も、罪は誠の罪になりぬ、我が故郷を離れしも我が伯母君を捨てたりしも、此雪の日の夢ぞかし。今さらに我が夫を恨まんも果敢なし、都は花の見る目うるはしきに、深山木の我れ立並ぶ方なく、草木の冬と一人しりて、袖の涙に昔を問へば、何ごととも誤て誤なりき、故郷の風の便りを聞けば、伯母君は我が上を歎き歎きて、其歳秋かなしき數に入り給ひしか、悔こそ物の終りなれ、今は浮世に何事も絶えぬ、つれなき人に操を守りて知られぬ節を保たんのみ、思へばまこと式部が歌の、ふれば憂さのみ増さる世を、知らじな雪の今歳も又、我が破れ垣をつくるひて、見よとや誇る我れは昔の戀しきものを。

琴の音

(上)

空に月日のかはる光りなく、春さく花の、どけさは浮世萬人ななじかるべきを、梢のあらし此處にばかり騒ぐか、あはれ罪なき身ひとつを枝葉ちりくの不運に、むごや十四年が春秋を雨にうたれ風にふかれ、わづかに残る玉の緒の我れとくやしき境界にたゞよふ子あり。母は此子が四つの歳みづから、家を出で、我れ一人苦をのがれんとにもあらねば、傾きゆく家運のかへし難きを知る實家の親々が、斯く甲斐性なき男に一生をまかせて、涙のうちに送らせん事いとほし、乳房の別れのつらしとても、子は唯一人なるぞかしと、分別らしき異見を女子ごゝろの浅ましき耳にさゝやかれて、良人には心の残るべきやうもあらざりしかど、我が子の可愛きに引かれては此子の親なる人かゝる中に棄て、我が立去らん後はど、流石に血をばく思ひもありしが、親々の異見は漸く義理のやうにから立ちて、弱き心の押切らんに難く、霜ばしら今たふれぬべきを知りつゝ、家も此子も、此子の親をも捨て、出でぬ。

父は一人ゆきたることもあり、此子を抱きて行きたることもあり、これを突きつけて戻りたることもあり、我れは此まゝ朽はてぬとも、せめては此子を世に出したさに、いかにもして今一たび戻りくれよ、長くにはあらず今五年がほど、これに物ごゝろのつきぬべきまでと、頼みつすかしつ歎きけるが、さりとも子故に聞なるは母親の常ぞ、やがては戀しさに堪へがたく、我れと詫して歸りぬべきものと覺束なきを頼みて、十五日は如何に、二十日は如何に、今日こそは明日こそはと待つ日空しく過ぎて、はては尋ね行きたりとて、面を合はする事もなく、乳母にや出でけん、人の妻にや成りけん、百年の契りは誠に空しくなりぬ。

斯くて半年を経たりし後は、父もむかしの父にあらずなりぬ、見かぎりて出でにし妻を、あはれ賢しと世の人はめものにして、打すてられし親子の身に憐れをかくる人は少かりき、それも道理、胸にたゝまるもやゝの雲の、しばし晴るゝはこれぞとばかり、飲むほどに酔ふほどに、人の本性はいよゝ暗くなりて、つゆのりゆく我意の何處にか容れらるべき、其年の師走には親子が身二つを包むものも無く、ましてや雨露をしのがんと軒もなくなりぬ、されども父のありけるはどは、頼む大樹のかけに仰ぎて、よしや木ちんの宿に蒲團はうすくとも、温かき情の身にしみし事もありしを、それすら十歳と指をるはどもなく、一とせ何やらの祝ひに或る富豪の

かゝみを扱いていざと並べし振舞の酒を、うまし天の美祿、これを榮りに我れも極樂へと心をや定めけん、飢ゑたる腹にしたゝかものして、歸るや御濠の松の下かげ、世にのさましき終りを爲しける後は、來よかし此處へ、我れ拾ひあげて人にせんと招くもなければ、我れから願ひて人に成らん望みもなく、はじめは浮世に父母ある人羨ましく、我れも一人は母ありけり、今は何處に如何なる事をしてと、そゝろに戀しきこともありしが、父が終りの悲しきを見るにも、我が渡邊の家の末を思ふにも、母が所業は惡魔に似たりとさへ恨まれける。

父は無きか、母は如何にと問はるゝ毎に、袖のぬれしは昔なりけり、浮世に情なく人の心に誠なきものと思ひ定めてよりは、生中あはれをかくる人も、我れを嘲るやうに覺えて面憎し、いでや、つらからば一筋につらかれ、とてもかくても憂身の果はとねちけゆく心に、神も佛も敵とおもへば、恨みは誰れに訴へん、漸々尋常ならぬ道に尋常ならぬ思ひを馳せけり。

おどろに亂れし髪のみまより、人を射るやうなる眼のきらゝと光るほかは、垢に塗れし面かげの、何處にはいかならん好き處ありとも、凡人の目に好しと見ゆべきかは、恐ろしく氣味悪く油断ならぬ小僧と指さるゝはては、警察にさへ睨まれて、此處の祭禮かしこの縁日、人山築くが中に忌はしき疑を受けつ、口をしや剪兒よ盗人と萬人にわめかれし事もありき。

人の眼はくもりたるものにて、耳は千里の外までも聞くか、誤り傳へたる事は復びきえず、渡邊の金吾は眞の盜賊に成りぬ、やがては明治の何と肩がきのつくべきほど、おそろしがらるゝ身却りて恐ろしく、此處を離れて知らぬ土地に走らんと思ひたる事もあり、恨みに堪へかねては死なばやと思ひたる事もあり、幾度水のおもてに臨みて、これを限りと眺めたる事もありしが、易きに似て難きものは死なりけり。
捨てはてし身にも猶衣食のわづらひあれば、晝は其處となくさまよひて何となく使はれ、夜は一處不住の宿りに、かくても夢は結びつゝ日一日とたゞよひて、過せしゆくほどに、脊たけと共にのびゆくは、ねぢけたる必なるべし。

(下)

御行の松に吹く風音さびて、根岸田圃に晚稻かりはす頃、あのあたりに森江しづと呼ぶ女あるじの家を、うさんらしき乞食小僧の目につく、怪しげなる素振あるよし、婢女ども氣味わるがりて呷き合ひしが、門の扉の明くれに用心するまでもなく、垣に枝垂れし柿の實ひとつ、事もなくして一月あまりも過ぎぬるに、何時となく忘れて憎も出てすなりしが、主の女が敏き

耳には、少しあやしと聞かるゝ事あり。秋雨しとくと降りて物あはれなる夜、ともし火のもとに獨り手馴れの琴を友として、あはれに淋しき調べを弄びつゝ、上野の森に聞えいづる鐘の、さりとて更けぬるかなと、さしおきて聞けば、軒ばを傳ふ雨しだりのほかに、梢をゆする秋風の外に、物のけはひの聞ゆるやうなること度重なりぬ。
軒ばに高き一もと松、誰れに操の獨栖ぞと問はれ、斯道にと答へんつま琴の優しき音色に一身を投げ入れて、思ひをひそめしは幾とせか取る年は十九、姿は風にもたへぬ柳の糸の、細々と弱げなれども、爪箱とりて居すまひを改むる時は、塵のうきよの亂れも何ぞ、松風かよふ絃の上には、山姫きたりて手やそふらん、夢も現も此うちにとほゝ笑みて、雨にも風にも、はたゞめく雷電にも、悠然として餘念なし。
頃は神無月はつ霜この頃ぞ降りて、紅葉の上の照る月の、誰が砥にかけて磨きいだしけん、老女が化粧のたとへは凄し、天下一面くもりなき影の、照らすらん大厦も高樓も、破屋の板間の犬の臥床も、さては埋もれ水人に捨てられて、蘆のかれ葉に霜のみ冴ゆる古宅の池も、寛のおとなひ心細き山した庵も、田のもの案山子も小溝の流れも、須磨も明石も松島も、ひとつ光りのうちに包みて、清きは清きにしたがひ、濁れるは濁れるまに、八面玲瓏一點無私のおも

かげに添ひて、澄のぼる琴のね何處までゆくらん、うつくしく面白く、清く尊く、さながら天上の樂にも似たりけり。

お静が琴の音は此月此日うき世に一人人生みぬ、春秋十四年雨つゆに打たれて、ねちけゆく心は巖のやうにかたく、射る矢も此處にたしがたき身の、果は臭骸を野山に曝して、父が末路のあはれや學ぶらん、さらずば悪名を路傍につたへて、腰に鎖のあさましき世や送らん、さても心の奥にひそまりし優しさは、三更月下の琴聲に和して、こぼれ初めぬる涙、露の玉か、玉ならば趙氏が城のいくつにも代へがたし、戀か情か、其人の姿をも知らざりき、わづかに洩れ出づる柴垣ごしの聲に、嬉しといふ事も覺えぬ、恥かしさも知りぬ、かねては悪魔と恨みたる母の懐かしさ、へ身にしみて、金吾は今更此世のすて難きを知りぬ、月はいよく冴ゆる夜の垣の菊の香袂に満ちて、吹くや夜あらし心の雲を拂へば、又かきたつる琴のねの、あはれ百年の友とやなるらん、百年の悶へをや遺すらん、金吾はこれより百花爛熳の世にいでぬ。

花ごもり

其一

本郷の何處とやら、丸山か片町か、柳さくら垣根つゞきの物しづかなる處に、廣からねども清げに住なしたる宿あり、當主は瀬川與之助とて、こそ秋山の手のさる法學校を卒業して、今は其處の出版部とやら編輯局とやらは、月給なほどなるらん、静かに青雲の曉をまつらしき身の上、五十を過ぎし母のお近と、お新と呼ぶ従妹の與之助には六歳をとりて十八ばかりにや、をさなきに兩親なくなりて哀れの身一つを此處にやしなはる、此三人ぐらしなりけり、筒井づゝの昔もふるけれど、振わけ髪のをさなだちより馳れて、具に同胞なき身の睦まじさ一しほなるに、お新はまして女子の身の浮世に交はる友も少なければ、與之助を兄のやうに思ひて、心やすく嬉しき後だてと頼み、よし風ふかば吹け波たゞばたて與之助おはしますほどはと憑りかゝれる心の憐れに可愛く、此罪なく美しき人をおきて、いさゝかも他處に移る心のあらんは我れながらよからの業と、蜜之助が胸に思ふことあり、八つの年より手鹽にかけたれば、

我が親族にはあらねとお近とても憎くはあらで、同じくは願ひのまゝに取むすびて、二人が嬉しき笑顔を見、二人が嬉しき素振を眺め、我れも嬉しき一人になりて、すべての願ひ、望み、年來むねに描きし影を夢なりけりと思ひきり、幾はともなき老らくの末を、斯くて此まゝやさしき婆々様に成りて送らばや、さらばお新が喜びは如何ばかりぞ、與之助とても我れをつらしとは思ふまじけれど、あはれ今一方の人の涙の床に起臥して、悲しき闇にさまよふべきを思へば、いづれ恨みの懸かるべきは我れなり、天より降り來りし如き幸福の眼のまへに沸き出でたるを取らで、はかなき一筋の情に引かるれば、恨みは我れに残りて、得がたき幸福は天の何處にか行き去るべし、與之助の女々しく未練なるは年弱のならひ、見る目の花に迷ひて行末の慮りなければなるを、これと一つになりて我れさへに心よわくば、幸き浮世になりのばる瀬なくして、をかしからぬ一生を塵の中にうごめかんのみ、親子夫婦むつまじきを人間 上乘の樂みと言ふは、外に求むることなく我れに足りたる人の言の葉ぞかし、心に彼の岸をと願ひて中流に棹す舟の、寄る邊なくして波にたゞよふ苦しさは如何ばかりぞ、我れかしこしと定めて人を頼まぬ心たかさは、ふと聞きたるにこそ尊くもあれ、遂に何ごとを爲すべれ場處も無くして、玉か瓦か人見わけねば、うらみを骨に残して其の下に泣いたぐひもあり、今の心にいさゝ

か屑からずとも、小を捨て、大につくは恥とすべきにも非ず、此ごろ名高き誰れ彼れの奥方の縁にすがりて、今の位置をば得たりと聞ゆるも多きに、これを陋劣しきこと、誹るは誹る者の心淺きにて、男一疋なにほどの疵かはつかん、草がくれ拳をにぎる意氣地なさよりも、ふむべき爲のかけはしに便りて、をしく、たけく、榮ある 働を浮世の舞臺にあらはすこそ面白けれ、お新がことは瑣細なり、與之助が立身の機は一度うしなびて又の日の測り歎きに、我れはいさゝかも優しく脆く尋常一どほりの婦女氣を出だすべからず、年來馴れたる中のたがひに思ふ事も同じく、瑕なき玉のいづれ不足もなき二人を、鬼ともなりて引分る心は、何として嬉しかるべきぞ、我れになしても思ひしる、お新が乙女心に何ごとの念ひもなくて、はるかに嬉しき夢を見つゝ、與之助をば更なり、我が内心に何者の住めりとも知らで、母が懐中に乳房をさぐるが如き風情の、たちまちにして驚き覺めたらん時は、恨みに詞の窮まりて、泣くに涙も出でざるべし、さても浮世は罪の世の中よな、酌むにあまれるあはれの我が心一つよりこそ、愁ひの眉を笑みにかへて和風こゝに通ふの景色をも見らるべけれど、我が瀬川の家を爲に、與之助が行末の爲に、時の運の我が親子を迎ふるを見て、知りつゝ我れは仇になりて、可愛き人を涙の淵に擠すぞかし、されどもお新はお新の運ありて、與之助に連れ添ふ一生の嬉しき願ひ

はこゝに絶ゆるとも、さるべき縁にしたがひて、さるべき幸福のめぐりも来りぬべきに、我れはお新がことを思ふべきにあらす、可愛しとても、いぢらしとても、振かへりて抱きあぐるは只暫時の心やりにて、遂に右左り分つ袂の宿世なりけるを、我が一日の情は與之助に一日の未練をまさせて、今一方の人に物思ひの數を添へつゝ、其兩親が闇に迷へる悲しみを増さするより外に、功は露ほどもあることならねば、よし鬼ともなり蛇ともなり、つれなく憎き伯母になりて、與之助が心の彼方に向ふべきやう扱ふは我が役なり、嬉しき迎ひは我足もとまで来りけるものをと、お近は瑞雲の我家の棟に棚引ける如き念ひに驅られて、八字の髻に威嚴なそはる與之助が、黒ぬり馬車に榮華をほこる面かげまで、ありくと胸のうちに描かれぬ。

其 二

世の人よりは柔かに穏かすぎたる良人を持ちて、萬事にもどかしく齒がゆかりし年月も、流石女子の我が一存を、ふみひ難くて、空しく胸のうちに藏めたりし思ひは、中々に消えんともせず、ともすれば燃え出で、押へ難き炎に身をも焼くめり、お近が願ひは不二の嶺の上もなく立

のぼれるに、身は麓の裡に交れる如く、我れ同列の人々より見れば、やさしく温順に勉強家の聞えさへある子を持ちたるが上に、姪とはいへどこれも子にひとしきお新が、朝夕をいたはり仕へて、行々は樂隠居さまの羨ましき身の上ながら、思ひあがれる心には、此樂みの如何ばかり少く、とるに足らぬ事に覺えて、我腹より出でたるやうにもなく、與之助が世間一通りの働きをなしつゝ、世に抜けてでたる考へのあらぬさへ恨めしく、望みは高くせよ、願ひは高くせよ、落ちて流れて行水の泡となるとも、天命なれば是非もなし、垣の瓢のぶら／＼として卵の毛の先きの疵もつかで五十年の生涯を送りたりとて、何事のをかしさかあるべき、一人に知らるべき事は百人に、百人に知らるべき事は萬人の目の前に顯はして、不出來も失敗も功名も手柄も、對手を多數に取りて晴れの場處にて爲すぞよき、衆人の讀むべき書物をよみ、衆人のいふべき事をいひ、衆人の行ひたるあとを踏んで、糸もて操らるゝ木偶のやうに、我が心といふものなく、意氣地なくつまらなく過失もなく誹りもなきは男の身として本意にてはあるまじ、事に臨みては母ありとも思ふべからず、家ありとも思ふべからず、執るべき途の大きなるに寄りて進み給へと、これは平常の詞なりけり。

花にうくの露と戀は何ぞ、をかしやと言ひ消すべきお近が、與之助故に命とこがるゝ人の、あ

はれ王緒のたえくになど、取次ぎが言葉のかなしげなるを受けて、此頃の明け暮れ思ひを碎くに理由あり、花ちらす吹雪の風に此處に憂からねど、嬉しき使ひは此戀にのりて來にけり、父は有名な某省次官どの、家は内福の聞え高き、田原何某が愛女と傳へたるにこそ。移りゆく人の心に倣はぬ花の、今を春べと時しり顔には、笑みそめし垣根の梅の一枝二枝を折りて、お新はひつましき手ならひの師のもとへ清書の直しを乞はんとて、伯母にも與之助にも挨拶しとやかに出て行きし後、輪にふく煙草のむすばれたる思ひにお近は茶の間の火鉢をはなれて、三疊の小座敷に何の書物なるらん文机の上にくりひろけしまゝ、梅が香薫る窓の外をながめて讀むとも見えて與之助が傍に、灰がちの火のうす寒き火鉢をかき起しつゝ、自ら持ち來し座蒲團に悠然と座をかまへて、物ひたき景色は、例のそれなるべしと、聞かぬほごより五月蠅しの素振あらはるれば、與之助、汝はまだ子供のやうと少し笑ひて身を進ませ、思案はまだまとまらぬかの、言ふは汝が胸一つにして、詞に否と應との二つのみなるを、何れにとも定めて、母が胸をも安めては呉れぬか、親とても差圖はなすまじき縁のことなれば無理にも、とではなし、否ならば否にて、誰れに遠慮の入るでもなければ、決然といふて宜さうなもの、母は何れに好惡の念もなく、お新は稚きより手元には置きたれど、末の松山何とちかひの有る

でもなければ、これを取分けて可愛しにもあらず、まして田原の娘は逢ひしこともなく見し覺えも無きに、これに加擔人して是非にも嫁にと願ふ道理はなし、唯可愛く大事に行末までを案じて、明け暮れ胸を痛め思ひになやむは汝が其身一つぞや、父様はやく亡り給ひしより、知れるが如く親族とても惡臭に寄る青蠅のやうに、追ふがうるさきほどの人々なれば力になる者とてもなく、あはれ思ひは雲井にまで登れど、甲斐なき女の手に學士の號をも取らせかねて、猶すくなからぬ借財さへ身にまつはれる苦しき、かくて汝の行末をおもへば、嬉しき夢は見る夜すくなくして、眠りがたき宵々の老ては殊につらきものぞよ、されば田原がことの果敢なき筋より出で、媒の女も我が身には嬉しからねど、運は目に見えぬ處にありて、天の機は我々が心に測り難きに、年來ねがひたる念慮の叶ふべき兆かと、母の拙き胸に感じたればこそ言ふなれ、無理とは思すな、もとより汝がためをおもひてなれば厭といはれそれまで、人々の心々一つならねば、浮かべる雲の危きにのぼらんより、八重葎にさし入る月を眩まくらに眺め、我れ一人たのしくはそれにて事の足りぬべしとならば、母もこれより其心になりて、高きと願ひし今までを夢とあきらめ、二間三間の借家を天地と定めて、洗ひすゝぎに、襦袢つゝくり、老の眼かすむ六七十を、孫の傳して暮らさんも宜し、いかにや與之助、汝が胸はど静かなれど

も底に物ある母が詞の、ぢり／＼と疳にもさはれば、をかしき仰せ、とんと私には香こめま
 せぬ、お手一つにて育ちたる厚恩のなみならぬをすれば、及ばぬ心に鞭ちてもと、これは朝夕
 の願ひ、さりながら、内縁にすがりて舅の袖の下にかくれ、これを立身のかげはしになどは懸
 けても思ひ寄りませぬこと、未熟なれども我がことは我れでなすべく、此綱なければ世に立た
 れぬかのやうな、心配は御無用に御座りますと決然こたふれば、母は其顔をじつと眺めて、さ
 ればよなと歎息の聲をもらしぬ。

其三

それは眞實か、さても若き料簡よな、さればこそ母が行末を案じて、亡き後までを氣遣ふはそ
 れゆゑ、うき世を机の上の夢に見て、重き物は六寸の筆より外もたず、書物によまれて我心な
 き人はそれも道理か、其心にて押しゆかば、事成就の曉は幾跌きの後なるべき、東照宮様御
 遺訓に重荷を負ひて遠路を行くが如しとありけれど、恐らくは半道も三分一も得行かぬほどに
 投げ出して閉口せねばなるまじ、我れは我れによりて事を爲すとは、さても立派の言の葉なが
 ら聞けよ與之助、汝ほどの博識は廣き東京に掃くほどにて、塵塚の隅にもごろ／＼とあるべ

し、いづれも立身出世の望みを持たぬはなく、各自ことは異りて、出世の向きも種々なるべけ
 れど、名を揚げ家をおこしてなど、これを誰しも基礎なり、汝の思ふ如く一筋縄に此望みの
 叶ふものと思せば、世はえら者の巢に成りて、開夜のはち合せ危かるべきを、十分が九分は屑に
 して、心寛くも手段の上手なる人が其一分の利は占むるぞかし、小と大との差別を知りたらば
 田原が賢となるを恥とは言ふまじき筈、其袖の下にかくれて、これに操らるゝと思へば口をし
 くもあれ、我が爲の道具につかひて、これを足代にとすれば何の恥かしきことか、却つて心を
 かしかるべし、誹ははまれの裏なれば、群雀の囀りかしましたとも、垣のものと諸聲は天まで
 届かず、雲をけり風におのる、大鵬の嬉しきは此姿ならずや、近くたとへを我女同志にても見よ、
 彼の田原殿が奥方は京の祇園の舞妓とかや、氏ははるかに劣りし人とか、尋常一様の娘にて過
 ぎなば、前垂れ袴の縁をはなれず、井戸端に米やかしぐらん、勝手元に菜切庖丁や握るらん、
 さるを卑賤しき營業より昇りて、あの髭どのを小き手の中に丸め奥方とさへ成り澄ませば、そ
 しりは物のかげに隠れて名は公の席にも高く、田原夫人と並べ書けるが、公侯伯子の誰夫人
 にも劣ることか、慈善會、音樂會、名は聞きながら見ることの難き人さへあるに、幹事とかや
 何とかや、それは未だ小さし、事ある時はほけなき、御前にも出づるとぞ、これを我等が上、

比ぶれば、空に流るゝ銀河と、つちに埋るゝ溝川との違ひあり、小き貞婦、女は遂に彰はるゝ事なくして、うき世の巾利は此たぐひの人なるぞや、なき人の上に批點もいかなれど、汝が心根に似たりける父様の、我れが我れがと思召しは奇麗なりしが、人をも世をも一包みにする量なければ小き節にながれて、我れと我が身を愚になしつゝ、それはまだしも、先にも我が身が言ふ如く、遇はぬ浮世に何事の望みも捨て、若に雨きくたのしみを、芽が軒ばに味ひたらば、別に長閑けき月日ありて、それは又其筋に面白かるべけれど、かなしきは生にえの人の事ぞかし、すき間も風霜夜さむけく、薄き衣に妻子の可愛さしみと身にしみれば、一日半夜やすらげき思ひはなく、身はけがれざる積りにて汚き人の下に使はれ、僅かに月給に日雇にひとしき働きをして、長からぬ生涯を月もなく花もなく畢り給ひしは汝とても知れるが如し、されば汝が心根の清く尊く美しくして立派には聞えたれど、仕種は父様の二の舞にて、笑止や小さき結構人にて終りやせん、と言は、堪へぬ心に腹もたつべし、母は汝が爲をおもへば、怒る、はらたつ、何の憚りはせぬぞや、よしや汝が望みの判事試験に、首尾よく及第して奏任のはしに列りたりとも、田舎まはりに幾年を渡り、猶その上に種々の規則にしばらるれば、花の都に名を揚げて世間の耳目を集むるほどの事は、保證の印のしかとおして、無しと言ふとも

誤りはあるまじ、一生を秤にかけ尺にはかり、これほど、限りある圖の中に、身は目に見えぬ細につなされ、人の言葉を守り人の指圖を働き、功は後の世に残る事もなく、死しては知己に吊はれ子孫に祭らるゝそれ丈を差別にして、さのみ犬猫と變りもなく、夢と暮らし烟と消え、それにて汝は満足なか、夢ならば彌勒の世までを夢につゝんで、嘘も誠も偽りも、美しきも醜きも一番みに呑みつくして、此世の中に高く飛ぶ心は無きか、いかにぞや與之助、返半のなきは不承知か、口をしや我が思ふ半をも解し得ず、汝はまだいさゝかの情に引かるゝと見えたり、其愚かしき性根とは知らで思ひを碎きしは我があやまりよ、今は何ごとく口入れなすまじければ萬汝の勝手たるべし、否、お新故のめ、しさならずとは言譯、これに引かるゝ心ならずば、いつか一度は持つべき妻の、口約束ばかり何の大事かは、田原に不足は言ふまじき筈と責められて與之助、我れを白痴にしたりける母が詞と疳癩のむらくと加へて、厭で御座ります、田原もいやお新もいや、諸事萬事氣に入りませぬと、有りし昔の悪あがきに、強情はりける時の面かけを其まゝ、折角のお近が談義は揉みくちやにしてのけられたり。

第四

これは瀬川さま、ようこそと玄關に高き婢女が聲を、耳とく聞きて、膝にねぶれる小猫をおろし、よみさしの繪入新聞その茶だんすの上のせて、お珍らしや何風に吹かれ給ひてぞ、谷中の道はお忘れなされしかと存じましたに、と障子の内より美しくしき聲をもらせば、西北か、但し南か、天氣豫報にも見えざりし曇りの何處やらに出来て、肝癩にもやもやの雲が湧きたれば、お辰様が扇の風にでも拂ひてはしく、お宿もとまで罷り出たる次第と例に似ぬ與之助がをかしき詞に、お辰座をたちて迎へながら、大分御機げんで御座んすの、梅見のお歸途か、橋本あたりのお名残と見えまする、さりとはお土産もなしに御不心中やと笑へば、それ處の勢ひかと、與之助が笑ひて、さし出す友仙のふさんの素人めかぬを引寄せ火ばちの向ひ合せに座をしめれば、ほんにお顔色もよからず、御不快か、但しは例のね、様が我ま、からの肝癩に、母様した、か困らせ給ひて、お足の向くま、此方角へお越しなされしか、どの道うれしからぬお顔色と、圖ぼしをさ、れて其通りとも言ひかねけり。

むかし覺ゆる姥櫻の色はなけれと陰ゆかしき美人の末の四十女、切髪姿に被布の好みも何處やら洒落て、良人なき後の世渡りは昔覺えの三味も流石とはばかりて、月琴の師と聞くぞをかしき、お辰は長羅字に一服すひて與之助に手渡しつゝ瀬川さま私の言ふは當りましたる、よい加

減になされませや、さもなくしてさへ母様の御苦勞は山ほどなるに、よい年しての大供様が、盡くひ反らして甘ゆるは可愛けれど、すねるおられる、何で御坐ります、お腹が立たば寝かして置きなされと片頬に笑みてたしなれば、異見は眞平、やうく逃げのびて、此處で二の矢は御免蒙りたし、理屈は捨て、陽氣に面白く、我が常は知り抜き給ふお辰様が匙加減に、嬉しくをかしと思ふ話を聞かせ給へといへば、それは造作もなき事、春さく堤の花よりも美しく、秋てる中洲の月よりも清く歌舞の菩薩が手を盡くす物の音も及ばねば、お前様がお好きの畫や歌や何の、見れば嬉しく、聞けば床しく、ぢれも疳も皆をさまりて、思ひ出してさへ、魂のふらつくやうな事が御坐んす、とは又何ぞと問へば、身邊の新聞をつきつけて、それ此處に、と指さすは新の字、これは解らぬこと禪僧が問答でもあるまじと笑へば、お辰眞面目に、眞言の秘密で御坐んすぞえ、其字を一目御覽じるよりお胸に現はれる影は可愛らしき島田醬にじやばらの結び下げ、兄様此字は何と讀みますると御本を前に長まりしお姿が見えませ、何と無類にお嬉しかりと、言了りておほしと笑へば、馬鹿など一言苦しげに笑ふ。

戯言は戯言、お新様といふ雅馴染の可愛らしき方があれば他處にお心の散らぬは無理ならねど、全肺あのお嬢をどうなさる思召しぞや、初春の三日の歌がるたに、其美しきお顔を見せま

したは私の科なれど、賊の罪は何處やらのお人と田原がことに話の移れば、それを今日は抜きにして貰ひたし、氣色のすぐれず頭の痛きに、ぶらりと家を出でたれど、さして面白き處もなければ、常に憂きことを知らず顔の、此宿には定めし胸のすくやうな事もとて來りけるものを、いぢめられは何の甲斐もなしと迷惑がれば、どうでも嬰兒様は猿蟹の断でなくばお氣に入るまじ、胸のすくやうなとても氣の利たもので一口といふ宿がらでなければ、ね、様相應これでお我慢なされませと、甘味にそへて差出す茶の浮かすは手のものど知るや知らずや。

其五

我れながら解しがたき心のいづ方に向ひてすゝむらむ、あとにも先にも今日までに逢ひみしは初春の三日、年始まはりの屠蘇の酔ひ、目もとにあらはれて心は夢どころげこみし谷中のやどに、うつくし人の寄り合ひて今宵は歌留多の催し、お迎ひの使ひをもあげたかりしに、ようこそその御入來と喜ばれて、若きものならひ與之助いやならぬ心地のして、つひ其まゝにお仲間入りの源平合戦、組わけの三たびが三たび連れになりしはお辰が門下に随一のお家がら、例の田原どのが愛子にお廣さまとて、父さま似の色は白からねど、娘ごかりは山茶も出ばなの色ふ

かく、派手ずきの母様が好みとありて、模様も花やぎたる薄藤の中振袖、もれてぞにはふ八つ口の緋ぢりりん、人目をうばふ織ものに、帯は縞珍か夏雄の彫りのばちんの金具は灘に鯉、はつきりとせし氣象はどりなり活潑とおもしろく、勝ちての喜び、まけての腹たち、我儘なほど僧からぬお人なりける、されば與之助とても其おもかげの空にうかべば、母が前に断りたるほど實いやといふにはあらねど、男の身として少しうれしからぬ筋もあり、かつはお新がうらみの心にかゝれば、いづれにせよ胸のうちには屹とせし定まりもなく、何が何やら五里の霧中にさまよふやうにて、月も花もはるかの彼方におぼめきながら、ならべ得がたき處に悶はちりて人しれぬ苦勞この間にあり、されば眞向よりの母が異見に疳癩の火の手つりて、よしさらば立派に我戀を通して見すべし、馬鹿なことをぞ誓ひたちしは一時、今朝の勢ひにては谷中に足のむくべくもあらず、もとより此處は由縁のかけ、むらさきの一もと根ざしはほかならぬに、行かばかならず彼のことを言ひ出すべし、さては五月蠅しとて行かねばそれにては事のすむべきを、むしやくしやとせし思ひの晴るゝ處なければ、暫時にても此苦のわすらるゝやう、その一條は面倒なれどお辰が話のをかきき聞きたくなきにもあらず、よし例の話の出でたらば、あたまから亂離荒廢にこなして、言葉のたくみをどれほどに弁ぶるども、知らぬ知らぬ

と亂暴に狼藉に蹴退けたらば、いかなお辰も閉口して二の句は出まじ、と心がまへをせしやらせぬやら、我れもわからぬ料簡にて谷中の扉をたゝきぬ。

行末は八重の沙路に大船うかべて、空や波なる青海原とても、源は山路の苔のつゆ、さてもわけなしのお弱年さまどにらむ目もどに何見えざらん、問はねどしるき與之助が心の宙宇に迷ふ有様までそれと呑みこめば、思ひしには異りてお辰さのみ田原がことも隔らず、案じたるよりは産むの安きもてなしに、恐れてよりつかざりし日ごろの馬鹿らしさ我れと笑はれて、母が前におこりたる疳癪の雲もやうく散ずれば、おのづから詞に花も咲きて聲だかに笑ふやうにもなれば、時分をはかりてお辰、のう瀬川さま、人は何時どのやうな事で苦勞するやら知れませぬもの、うき世を切り髪の今日この頃、我身にかゝる浮雲さへ大方は拂ひつくして、心の月のたかく澄むやうにと願ひながら、さて左様もならぬもの、見きくにつけて人の哀れぞ知らぬ顔して過ぐされねば、酔狂らしき心配に身さへやせて、一人やきもきど氣はもめども、肝心の御本尊さまがいたちの道きりでは困るでは御坐んせぬかと恨まれて與之助、それはお氣の毒さまで軽くすまず言葉も出かねて、左様いふ次第ではなしなどい言譯をなしける、お辰いよく眞面目に、弟子は子もあなじなれば我身も可愛きあのお嬢の爲、早く母のあかせましたけれ

ど、それは一筋、お前さまのお情實も酌まぬでは御坐んせぬ、まゝごとの昔より別れて今ではお前さまお一人をたよりの、お新さま可愛しとあるは御尤、言譯あそばすほどがをかしく、左様ありてこそ嬉しきお心を喜んで居りまする、なれども田原さまが事とてあのまゝでは置かれもすまじく、我れさへよくば他人は勝手と其やうな無茶は平常の御氣質とてお言ひになる譯が無ければ、どうでも二道にまよひて御苦勞なさるので御坐りましょ、おのづから母様には仰せにくきことも私には御遠慮のいらぬ筈なれば、何ごともお打あけなされて御相談下さりませやと、をさな子に飯粒くゝめるやうな申分を、さすが亂暴に狼藉に言ひやぶらるゝものでなければ、與之助少し勝手のかはりて、しばらく黙然となりぬ。

次第に我が本陣へきりこまれて、いづれにか返答せねばならぬやうになれば、いつまで嘔のまねも出来ねば思ひきりて與之助、我れはお辰さまがいつもの給ふね、様なれば、其やうな義理はりのむづかしきことは知らず、粹とやら通とやら驚なかせし末の人こそ奥ふかきおもひやりは有るもの、何となりとも察してよきやうに計らひ給へ、我れは小豆まくらが相應なればと、美事とぼけた積りでやれば、ほんに左様で御坐んしたもの、海山三千年の我れに比べて力まけのせし可笑しさ、知らざるを知らずとせよも生意氣らしけれど、ね、様の小癪だては入らぬ事

其六

なれば、以來は何事も我身にまがせてお小言は仰せられますなやと言へば、萬事よろしくお差圖をと、與之助はどこまでも戯言のつもりなりしが。

その次の日お辰田原どのに車を飛ばせて何事を言上しけん、奥方の眉ひらけて見えさせられしが、歸るとそのまゝ、呼出しに人の魂をふらつかせし昔より、書きなれたる長文の滯るところなく、我れながらをかしさを水いれの水にそいで、する墨のあとこまやかに、筋は立派に萬歳を祝して、きのふは與之助さまお入り嬉しく、然るべく取はからへと仰せのありけるま、唯今例のに参りて、奥方まで委細申上げぬるに、お喜びのほどはさる方に推し給へ、猶この後のさまへにつきて、お打合せいたしましたき事の多ければ、みづから参上て、とはおもへど、少しさゝはる事のありて今日明日自由のきかねば、おはこびの願ひましたきよしをお近のもとまで申送りける、此文を受とりたるお近が喜びより、あきれはてし與之助が、あまりの事に戯れとも思はれず、さりとて青筋たてゝ怒りもせば、いよく笑はれて茶にされて、我が言條は何處にか立たすべき、母はもとより同意も同意、望みに望む所なれば、我がもしも厭な

と、言はい、お辰と同盟してどのやうの難儀を言出すやも測られず、彼方よりも此方よりもくどくどと面倒を持ちこまれて、長く苦境に身を置かんより、今後のことは今後の處し方もあるりのをと、詮方なしの断念めにお辰がいふ嬰兒さまの本色か、うま〜深淵に引入れられしを悔みながら、手玉に取られて手も足も出ぬやうになりぬ。

お近はもと〜お辰とは意氣の合ふといふ中にもあらず、亡き良人が親友の寡婦さまといふばかり、平常は與之助の好きて通ふをさへ苦々しく言ひけるも、此度のはからひの如何に説きてか我手にさへ乗らざりしを鎮めて、うれしき順序のはこびける喜ばしさに、お新のことをさへ打あけて談合するやうになりける、狭き家のうちの出来ごとを、かくしたりとも途には知れずに居まじく、知りたりとて故障のあるではなけれど、氣まづき思ひをさせるだけが厭なれば、おもてだちたる事の整はざるさきに、何とか好き手段もあらば、お新が爲の後來もわるからぬやう、人の妻にといひては未だ與之助が事情をしるまじき彼の娘が、應とはかならず言ふまじければ、行儀見習ひもをかしけれど、何とか名をつけて華族がたの大奥にでも一時の御奉公に出だすか、ともかくも一二年のほど家をはなしたらば、双方に忘れ草のつまるゝ種にもなりて、其後に聲をとるなり嫁にやるなり、無關係の人にならば事の易かるべしと、此やうの話をなし

ける、その中に與之助、此場合にたりて我身の方はゆるぎの取れぬ事なるを知りつゝ、あかす
 惜しき心の十分に残れば、取とめて我がものに念は今さら出すべきにもあらねど、何心なく
 罪なき人を、寄り集りて術計のうちに陥れる如きを憐れめど、我が隊をはさみたらば其處
 を怪しくとられて、いよくお新を邪魔ものにさるゝ種ならんも知れねば、何事にまれ証の始
 まりて、いざといふ時に臨まば、お新をつゝきて常人より厭を言はする外に途はなし、お新の
 厭とかぶりを振りなば、誰れも無理には言ひ難きに、我れも共に詞をそへて理屈をつくり、
 えはしの時日を延ばすほどには、天に風雨の變あるとおなじく、はからぬ處よりはからぬ事も
 出で来るものなれば、今までの事の目茶になりて、田原が事の彼方より破れて來らぬとも言ひ
 難しなどゝ、人は厭ふ破綻といふ事を空に願ひて、我心にもあらずはしまりたる縁なれば、萬
 づ串戲のやうに誠しからず、今日の我身の成りゆきの夢のやうなるに、いつぞは覺めて氣樂に
 愉快の舊にかへり、お辰、田原などゝいふ文字の腦裏をはなれて、大川に足を洗ひたるほど、
 さつぱりと爲したきものよと思ふに、牛僧やお新があれいらしやうなる無邪氣の様子に
 て、我れをいさゝかも見よげにとの親切より、衣類の洗ひそぎ扱は縫はりの暇なく、夢にも
 母子が心をさとりたらば斯くはなすまじき朝夕のやさしさ、其身の爲には鬼にも似たりける伯

其 七

母を、知らぬ心の介抱なほざりならず、今日は谷中に行きて足の疲れぬといへば、少しあさす
 り致しましよと取つく憐れさ、常は何とも思はざりしことが目に映りて、何ともいへぬ厭ら
 しき氣もちの爲しける。

といめんと願ふは與之助が心一つにて、出ださんどつとむるは多數なるに、八方にまはしたる
 手の届きて、よろしき奉公口ふたつ見當りぬ、一つはお辰の手より出で、霞が關にさる名高
 き舊諸侯の與づとめ、むかしと違ひて御質素との表面なれど、衣類もち物の支度なみ／＼の嫁
 入りよりは仰山なれば、御奉公人とても小商人小官吏などの娘小供はなく、よしある嬢さま方
 の上つ方を見習ひにあがり遊ばすなれば、お行儀はもとより、志しがあらば諸藝に通じる事も
 なりて、三五年の後にはやさしき身代に及ぶまじき拜領ものもありて、よろづ富貴に結構なる
 お邸のこと、一つは瀬川が舊知己に折々は出入りも爲したりし黒澤何がしと呼ぶお畫師との、
 浮世に大名名流の聞えも無けれど、斯道にあつき志しは却て其大家などゝいはるゝを厭へば、
 おのづから隱逸といふ風もある隱居さまにて、家をゆづりし息子の律義なるにかへり見る煩は

しきもなければ、先祖が生國ときく甲斐の差手に、薩千鳥君が千代をば八千代となく景色さぐりがてら、厭氣の出づるまであのあたりの山家にまばし引こもらんといふ、妻は此地に育ちたる人なれば、話しがたきもなき山猿の中に還入りて、さぞ淋しからん月日を思へば、いつそ家にとまりてお歸りを待つ方がよしと思へど、年ごろ睦まじき中は月花のいづくにも手を携へぬ時なく、寸の間もはなれざりしものを、今さら一人は遣りともなきに、我まなれども此處より一人手廻りの婢をつれたく、お新さんを其き口あらばどの頼みなりしが、あのやうに可愛くしかも柔順しき娘を、我子同様に伴ひもしたらば、書ごころもなき我山ずみの憂さも慰むべく、萬事に嬉しき連れなるべけれど、真人にしたがふ我れさへさのみ進みては行きともなき山の中へ、花の都を捨て、若き人の行かんとはいはれまじく、又よき御奉公を望まるとに貧乏書師がお預かり申したしとは口巾たくてお願ひも申されねばと、壁訴訟のやうに妻なる人の來て歸りたる、此二つが此頃の題になりけり。

その身一生の利害を説きて、はじめ奉公を勤めたる時、いぶかしく怪しき事におもひて、俄かに承知はなすよじと思ひたるに、お新さのみは驚きもせで、思ひ設けたる如く出で、行くべきよしを合點しける、與之助かけに廻りて心を引き見れば、それは伯母さま兄さまのお傍にい

つまでも暮らさるゝものならばそれに上こす喜びはなけれど、左様あらねど世のならひと聞けば、これも詮なきこと、うき世といふものゝ力はいかほどのものやら目には見えねど、かなしきも嬉しきも我が手葉にあはねことゝあきらめぬる身は、つらき時はつらき時の來りぬと思ひ、嬉しき時は嬉しき時とあもふ、其ほかには何とも爲れぬでは御座りませぬか、と思ひきりのよきに與之助といゆもならず、さらば同じき奉公といへども、立派にうつくしき奥づとめの、いさゝか氣骨は折れるにせよ遊ぶにひとしき多人數の中にまじりて、絹布づくめに勤めらるゝ華族の奉公ならば、その身の爲の行末もよく、世間の聞えも宜かるべきに、お新はいかにぞと問へば、お言附ならば是非がなけれど私に擇ばして給はらば華族さまは厭といふ、さては黒澤の方がよしとか、我意に氣樂なるには相違なけれど、行々の事につきて何ほど頼もしき宿でもなく、それも東京にでも居ることならば氣やすさに任せて、もとより奉公などいふでは無く奥様に細工ものでも習ふ料簡にて行くも宜けれど、今が今田舎にこもりて、はて白雲の雲水も同様なる彼の人々につきて何處まで行かざるべき、されば先方よりも遠慮して欲しとは明白に言はぬほどなるを、何故に又妙な處をも望むものかなといへば、黒澤さまはお書師では御座りませぬか、兄さまもお書はお好きなるに、私は書が學びたう御座ります、書をならひて如何

するつもりぞと再開へば、戀しき時にお姿をかきても慰められまする事故といはれて、與之助あとは聞くことの出来ず、一人胸のうちに泣きける。

かくと事の定まりぬる後は猶豫もなく支度のととのひて、一日なりとも長くといめんとおもふは與之助ばかり、表面よりは黒澤が立出の近づきぬと告ぐるに、田原が方は何といふ目だちたる事もなければ、裏面の交通やう／＼はじまりて、お近が胸にはひや／＼とする事のなきにもあられば、これは一日もはやくたゝせたき思ひ、かゝる時は是非無差別の日のかけにお近が念慮の勝をしめて、いよ／＼明日のあけの一番に、上野發の汽車にてといふ段になりぬ、お新は何ごとを思ふらん、言はぬおもひは人しるによしなけれど、一語にても意味の有りける詞の與之助には利き刃にてえぐるゝやうに胸のくるしく、寝られぬ夜半の殘燈のかけ薄れゆくまゝに、やがては鳥もなぐらん、かねも驚かすべし、いざと敷居をまたぐ時、汽車の笛の音ひく時、やう／＼烟りにかげ消えゆくとき、いかならんと思ひやる與之助より、さし手が磯に千鳥を友として、かなしき戀のおもかけを描くらん、ふびんやお新が心の裡。

軒 ぬ る 月

我が良人は今宵も歸りのおそくおはしますよ、我が子は早く睡りしに歸らせ給は、興なくや思さん、大路の霜に月氷りて踏む足いかに冷たからん、炬燵の火もいとよし、酒もあたゝめんばかりなるを、時は今何時にか、あれ、空に聞ゆるは上野の鐘ならん、二つ三つ四つ、八時か、否、九時になりけり、さても遅くおはします事かな、いつも九時のかねは膳の上にて聞き給ふを、それよ今宵よりは一時づゝの仕事を延ばして此子が爲の收入を多くせんと仰せられしなりき、火氣の満たる室にて頸やいたからん、振あぐる鍵に手首や痛からん。

女は破れ窓の障子を開きて外面を見わたせば、向ひの軒ばに月のぼりて、此處にさし入る影はいと白く、霜や添ひ來し身内もふるへて、寒氣は肌針さすやうなるを、しばし何事も打わすれたる如く眺め入りて、ほと長くつく息月かげに煙をゑがきぬ。

櫻町の殿は最早寢處に入り給ひし頃か、さらすば燈火のもとに書物をや披き給ふ、然らずば机の上に紙を展べて靜かに筆をや動かし給ふ、書かせ給ふは何ならん、何事かの御打合せを御朋

友の許へか、さらすば御母上に御機嫌うかひの御状か、さらすば御胸にうかふ妄想のすて處、詩か歌か、さらすば、さらすば、我が方に賜はらんとて甲斐なき御王章に勿體なき筆をや染め給ふ。

幾度幾度の御文を拜見だにせぬ我れいかばかり憎しと思召すらん、拜さば此胸寸断になりて常の決心の消えうせん覺束なさ、ゆるし給へ我れはいかばかり憎きものに思召されて物知らぬ女子とさげすみ給ふは厭はじ、我れは斯る果敢なき運を持ちて此世に生れたるなれば、殿が憎しみに逢ふべきほどの果敢なき運を持ちて此世に生れたるなれば、ゆるし給へ不貞の女子に計はせさせ給ふな、殿。

卑賤にぞだちたる我身なれば初めより此上を見も知らず、世間は裏屋に限れるものと定め、我家のほかに天地のなしと思は、はかなき思ひに胸も燃えしを、暫時がほども交りし社會は夢に天上に遊べると同じく、今さらに思ひやるも程とほし、身は櫻町家に一年幾度の出替り、小間使といへば人らしけれど御寵愛には犬猫も御膝をけがすものぞかし。

言は、我が良人をはづかしむるやうなれど、そもく御暇を賜はりて家に歸りし時、聲と定まりしは職工にて工場がよひする人と聞きし時、勿體なき比較なれど我れは殿の御地位を思ひ合

せて、天女が羽衣を失ひたる心地もしたりき。よしや此縁を厭はたりとも野末の草花は書院の花瓶にさゝれんものか、恩愛ふかき親に苦を増させて我れは同じき地上に彷徨はん身の取あやまちても天上は叶ひがたし、若し叶ひたりとも开は邪道にて正當の人の目よりはいかに汚らはしく淺ましき身とおとされぬべき、我れはさても、殿をば浮世に譏らせ參らせん事くも惜し、御覽せよ奥方の御目には我れを憎しみ殿をば嘲りの色の浮かび給ひしを。

女子は太息に胸の雲ッ消して、月もる窓を引たつれば、音に目さめて泣出づる穉兒を、あはれ可愛しいかなる夢を見つる乳まゐらせんと懐あくれば笑みてさぐるも憎からず、勿體なや此の子といふ可愛きもあり、此子が爲我が爲不自由あらせじ憂き事のなかれ、少しは餘裕もあれかしとて朝は人より早く起き、夜は此通り更けての霜に寒さを堪へて、袖よ今の苦勞はらくとも暫時の辛防ぞしのべかし、やがて伍長の肩書も持たば鍛工場の取締りとも言はれなば、家は今少し廣く小女の走り使ひを置きて、其かよわき身に水は汲まざじ、我れを膳甲斐なしと思ふな、腕には職あり身の健かなるに、いつまで斯くてはあらぬものをと口癖に仰せらるゝは、何處やら我が心の顔に出で、卑しむ色の見えけるにや、恐ろしや此大恩の良人に然る心を

持ちて苟にも其色の顯はれもせば。
 父の一昨年うせたる時も、母の去年うせたる時も、心からの介抱に夜も帯を解き給はず、咳き入るとしては脊を撫で、寝がへるとしては抱起しつ、三月にあまる看病を人手にかけじと思召しの嬉しさ、そのみにも我れは生涯大事にかけねばなるまじき人に不足らしき素振のありしか、我れは知らねど然もあらば何とせん、果敢なき樓閣を空中に描く時、うるさしや我名の呼聲、袖、何せよ彼せよの言附に消されて、思ひこゝに絶ゆれば恨をあたりに寄せもやしたる、勿躰なき罪は我が心よりなれと櫻町の殿といふ面かけなくば胸の鏡に映ものもあらじ、罪は我身か、殿か、殿だになくば我か心は静なるべきか、否、かゝる事は思ふまじ 呪咀の詞となりて忌むべきものを。
 母が心の何方に走れりとも知らず、乳に飽きれば乳房に顔を寄たるまゝ、思ふ事なく寐入し兒の、類は薄絹の紅さしたるやうにて、何事を語らんとや折々曲ぐる口元の愛らしさ、肥えたる腮の二重なるなど、斯る人さへある身にて我れは二心を持ちて済むべきや、ゆめさら二心は持たぬまでも我が良人を不足に思ひて済むべきや、はかなし、はかなし、櫻町の名を忘れぬ限り我れは二心の不貞の女子なり。

兒を静かに寢床に移して女子はやをら立上りぬ。眼ざし定まりて口元かたく結びたるまゝ、疊の破れに足も取られず、心ざすは何物ぞ葛籠の底に藏めたりける一二枚の衣を打返して淺黄縞緞の帯揚のうちより、五通六通、數ふれば十二通の文を出して元の座へ戻れば、燈のかけ少し暗きを捻出す手もとに見ゆるは殿の名、よし隠名なりとも此眼に感じは變るまじ、今日迄封じを解かざりしは我れながら心強しと誇りたる淺はかさよ、胸のなやみに射る矢のおそろしく、思へば卑怯の振舞なりし、身の行ひは清くもあれ心の腐りの乘難くば同じ不貞の身なりけるを、卒さらば心試しに拜し参らせん、殿も我心を見給へ、我が良人も御覽せよ。神もあはしまさば我家の櫓に止まりて御覽せよ、佛もあらば我が此手元に近よりても御覽せよ、我が心は清めるか濁れるか。
 封じ目ときて取出せば一尋あまりに筆のあやもなく、有難き事の數々、辱なき事の山々、思ふ、戀ふ、忘れがたし、血の涙、胸の炎、此等の文字を縦横に散らして、文字はやがて耳の側に恐ろしき聲もて叩くぞかし、一通は手もとふるへて巻收めぬ、二通も同じく三通四通五六通より少し顔の色かかりて見えしが、八、九、十通十二通、開きては讀みよみては開く、文字は目に入らぬか入りても得よまぬか。

長なる髪をうしろに結びて、古たる衣になへたる帯、塞れたりとも美貌とは誰が目にも許すべし、あはれ果敢なき座敷の中に運命を持てりとも、汚き垢は蒙らじと思へる身の、猶何處にか悪魔のひそみて、あやなき物をも思はするよ、いざ雪ふらば降れ風ふかば吹け、我が方寸の海に波騒ぎて沖の釣舟もひも亂れんか、風ぎたる空に囁く春日のどかになりなん胸か、櫻町が殿の面影も今は飽くまで胸に浮べん、我が良人が所爲のをさなきも強て隠さじ、百八煩惱自から消えばこそ、殊更に何かは消さん、血も沸かば沸け炎も燃えばもえよとて、微笑を含みて讀みもてゆく、心は大流にあたりて濁世の垢を流さんとせし、某の上人がためしにも同じく、戀人が涙の文字は幾筋の流の進りにも似て、氣や失はん心弱き女子ならば。

傍には可愛き兒の寝姿みゆ、膝の上には無情の君よ我れを打捨て給ふかと、殿の御聲ありく聞えて、外面には良人や戻らん更けたる月に霜さむし、たどれば我が良人今此處に戻らせ給ふとも、我れは恥かしさに面あかみて此膝なる文を取かくすべきか、恥づるは心の疚しければなり、何かは隠さん。

殿、今もし此處におはしまして、何の辱けなき御詞の數々、さては恨みに憎みのそひて御聲あらく、さては勿肺なき御命いまを限りとの給ふとも、我れは此眼の動かんものか、此胸の騒が

んものか、動くは逢見たき慾よりなり、騒ぐは下に懸しければなり。

女は暫時恍惚として其すけたる天井を見上げしが、孤燈の火かけ薄き光を遠く投げて、おぼろなる胸にてり返すやうなるもうら淋しく、四隣に物おと絶えたるに霜夜の犬の長吠すごとく、隙間も風おともなく身に迫りくる寒さもすさまじ、來し方行く末おもひ忘れて夢路をたどるやうなりしが、何ものぞ俄にその空虚なる胸にひいたると覺しく、女子はあたりを見廻して高く笑ひぬ、其身の影を顧みて高く笑ひぬ、殿、我良人、我子、これや何者とて高く笑ひぬ、目の前に散亂れたる文をあげて、やよ殿、今ぞ別れまゐらするなりとて、目元に宿れる露もなぐ、思ひ切りたる決心の色もなく、微笑の面の手もふるへで、一通二通八九通、残りなく寸断に爲し了りて、熾んにもえ立つ炭火の中へ打込みつ打込みつ、からは灰にあども止めず煙りは空に柵引き消ゆるを、うれしや我執着も遣らざりけるよと打跳むれば、月やもりくる軒ばに風のよと清し。

う つ せ み

(一)

家の間敷は三疊敷の玄關までを入れて五間、手狭なれども北南吹どほしの風入りよく、庭は廣々として植込の木立も茂ければ、夏の住居にうつてつけと見えて、塙處も小石川の植物園にちかく物勝なれば、少しの不便を疵にして他には申す旨のなき貸家ありけり、門の柱に札をはりしより大凡三月ごしにもなりけれど、いまだに住人のさだまらで、主なき門の柳のいと、空しくなびくも淋しかりき。家は何處までも奇麗にて見こみの好ければ、日のうちには二人三人の拜見をとて来るものも無きにはあらねど、敷金三月分、家賃は三十日限りの取たてにて七圓五十錢といふに、それは下町の相場とて折かへして来るはなかりき、さるほどに此ほどの朝まだき四十に近かるべき年輩の男、紡績織の浴衣も少し色のさめたるを着て、至極そとくさと落つき無きが差配のもとに來りて此家の見たしといふ、案内して其處此處と戸棚の敷などを見せてあるくに、其等のことば片耳にも入れて、唯四邊の静とさはやかなるを喜び、今日より直に

れ借り申しまする、敷金は唯今置いて参りまして、引越しは此夕暮、いかにも念速ては御座りますが直様掃除にかゝりたう御座りますとて、何の仔細なく約束はとのひぬ。れ職業はと問へば、いはい別段これといふ物も御座りませぬとて至極暖昧の答へなり、御人数はと聞かれて、其何だか四五人の事も御座りますし、七八人にもなりますし、始終たたくして婿は御座りませぬといふ、妙な事のことと思ひしが掃除のすみて日暮れがたに引移り來りしは、合乗りの幌かけ車に姿をつゝみて、開きたる門を真直に入りて玄關にしろしければ、主は男とも女とも人には見はじと思ひしげなれど、乗り居たるは三十許の氣の利きし女中風と、今一人は十八か、九には未だと思はるゝやうの病美人、顔にも手足にも血の氣といふもの少しもなく、透きとはるやうに蒼白きがいたましく見えて、折柄世話やきに來て居たりし差配が心に、此人を先刻のそゝくさ男が妻とも妹とも受とられぬと思ひぬ。

荷物といふは大八に唯一くるま來りしばかり、兩隣にね定め土産は配りけれども、家の内は引越らしき騒ぎもなく至極寂寥とせしものなり。人数は彼のそゝくさに女中と、他には御飯たきらしき肥大女ねよび、其夜に入りてより車を飛ばせて二人は來りし人あり、一人は六十に近かるべき人品よき剃髮の老人、一人は妻なるべし對するほどの年輩にてこれは實法に小

さき丸鬘をぞ結ひける、病みたる人は来るよりやがて奥深に床を敷かせて、括り枕に頭を落つかせけるが、夜もすがら枕近くにありて悄然とせし老人二人の面やう、何處やら寝顔に似た處のあるやうなるは、此娘の若しも父母にてはなきか、彼のそゝくさ男を始めとして女中ども一同目那樣御新造様と言へば、應々と返事して、男の名をば太吉太吉と呼びて使ひぬ。

あくる朝風すやしきほどに今一人車に乗りつけゝる人のありけり、袖の單衣に白ちりめんの帯を巻きて、鼻の下に薄ら髯のある三十位のでつふりと肥りて見だてよき人、小さき紙に川村太吉と書て貼りたるを讀みて此處だゝと車より下りける、姿を見つけて、ね、番町の旦那様とれ三とんが眞先に禰をはづせば、そゝくさは飛出していやれ早いれ出、よく早速れわかりになりましたな、昨日まで大塚にれ置き申したので御座りますが何分もう、その何だか頼りに嫌にれなりなされて何處へか行かう行かうと仰しやる、仕方が御座りませぬで漸とまあ此處をば見つけ出しまして御座ります、御覽下さりませ一寸斯うな庭も廣う御座りますし、四隣が遠うござりますので御氣分の爲にもよからうかと存じます、はい昨夜はよく眠になりましたが今朝はどは又少しその、一寸御様子が変わつたやうで、ま、いらしつて御覽下さりませと先に立て案内をすれば、心配らしく髪をひねりて、奥の座敷に通ひぬ。

(11)

氣分すぐれてよき時は、歳兒のやうに父母の膝に眠るか、白紙を切て姉様の衣製に餘念なく、物を問へばにこゝと打笑みて唯はいゝと意味もなき返事をする温順しさも、狂風一陣梢をうごかして来る氣の立つた折には、父様も母様も兄様も誰れも後生、顔を見せて下さるな、とて物陰にひそんで泣く、聲は腸を絞り出すやうにて私が悪う御座りました、堪忍して堪忍してと繰返し、さながら目の前の何やらに向つて詫るやうに言ふかと思へば、今行ます、今行ます、私もれ跡から参りますとて日のうちには看護の隙をうかひて駆け出すこと二度三度もあり、井戸には蓋を置き、され物としては缺一挺目にかゝらぬやうとの心配りも、危きは病ひのさする業かも、此纖弱き娘一人とり止むる事かなはで、勢ひに乗りて駆け出す時には

大の男二人がやりにてもむつかしき時のありける。
本宅は三番町の何處やらにて表札を見れば、彼の人の家かと台點のゆくほどの身分、今さら此處には言はずもがな、名前の恥かしければ病院へ入れる事もせで、醫者も心易さを招き家は僕の太吉といふが名を借りて心まかせの養生、一月と同じ處に住へば見る物残らず嫌になりて、

次第に病ひの暮ること見る目も恐ろしきほど凄まじき事あり。
 當主は養子にて此娘こそは家につきての一粒ものなれば父母が歎きおもひやるべし、病ひにふ
 したるは櫻さく春の頃よりと聞くに、それよりの晝夜臉を合する間もなき心配に疲れて、老た
 る人はよろしくたよくと二人ながら力なさうの風情、娘が病ひの俄かに起りて私はもう歸
 りませぬとて駈け出すを見る折にも、あれ／＼何うかして呉れ、太吉々々と呼立るほかには何
 の能なく情なき躰なり。

昨夜は夜もすがら静に眠りて、今朝は誰れより一はな懸けに目を覺し、顔を洗ひ髪を撫でつけ
 て着物もみづから氣に入りしを取出し、友仙の帯に緋ぢりめんの帯あげも人手を借りず手ば
 しこく締めたる姿、不圖見たる目には此様の痴人とも思ひ寄るまじき美しくさ、両親は見返り
 て今更に涙ぐみぬ、附そひの女が粥の膳を持来りて召上りますかと問へば、いや／＼と頭をふ
 りて意氣地もなく母の膝へ寄そひしが、今日は私の年季が明まするか、歸る事が出来るで御坐
 んしやうかとて問ひかけるに、年季が明るといつて何處へ歸る料簡、此處はお前さんの家では
 ないか、此ほかに行くところも無からうではないか、分らぬ事を言ふものではありませぬと叱
 られて、それでも母様私は何處へか行くので御座りましやう、あれ彼處に迎ひの車が来て居ま

する、とて指さすを見れば軒端のもちの木に大いなる蜘蛛の巢のかゝりて、朝日にかゝやきて
 金色の光ある物なりける。

母は情なき思ひの胸に迫り来て、あれあんな事を、貴君お聞遊ばしましたかと良人に向ひて忌
 はしげにいひける、娘は俄に萎れかへりし面に生々とせし色を見せて、あのそれ一昨年のお花
 見の時ねと言ひ出す、何えと受けて聞けば學校の庭は奇麗でしたねえとて面白さうに笑ふ、あ
 の時貴君が下すつた花をね、私は今も本の間へ入れてあります、奇麗な花でしたけれども、
 う萎れて仕舞ました、貴君にはあれから以來御目にかゝらぬでは御座んせぬか、何故逢ひに來
 て下さらないの、何故歸つて来て下さらぬの、もうお目にかゝる事は一生出来ぬので御座んす
 るか、それは私が悪う御座りました、私が悪いに相違ござんせぬけれど、それは兄様が、兄が、
 あゝ誰れにも濟みませぬ、私が悪う御座りました免して免してと胸を抱いて苦しさに身を悶
 ゆれば、雪子や何も餘計な事を考へては成りませぬよ、それがお前の病氣なのだから、學校も
 花もありはしない、兄様も此處にお出でなさつては居ないのに、何か見えるやうに思ふのが病
 氣なのだから氣を落つけて舊の雪子さんに成つてお呉れ、よ、よ、氣が附きましたかえと脊を
 撫でられて、母の膝の上ですゝり泣きの聲ひく／＼聞えぬ。

(111)

番町の旦那様お出と聞くより雪や兄様がお見舞に来て下されたと言へど、顔を横にして振向うともせぬ無禮を、常ならば怒りもすべき事なれど、あゝ、捨て、置いて下さい、氣に逆らつてもならぬからとて義母が手づから與へられし皮蒲團を貰ひて、枕もとを少し遠ざかり、吹く風を背にして柱の際に黙然として居る父に向ひ、静に一つ二つ詞を交へぬ。

番町の旦那といふは口數少き人と見えて、時たま思ひ出したやうにはたたくと團扇づかひするか、巻煙草の灰を拂つては又火をつけて手に持て居る位なもの、絶えず尻目に雪子の方を眺めて困つたものですなと言ふばかり、あ、此様な事と知りましたら早くに方法も有つたのでしやうが今に成つては驕馬も及ばずです、植村も可愛想な事でした、とて下を向いて歎息の聲を洩らすに、どうも何とも、私は悉皆世上の事に疎しな、母もあの通りの何であるので、三方四方埒も無い事になつて仕舞つたで、第一は此娘の氣が狭いからではあるが、否植村も氣が狭いからで、何うも此様な事になつて仕舞つたで、私等二人が實に其方に合せる顔も無いやうな仕儀でな、然し雪をも可愛想と思つて遣つて呉れ、此様な身に成つても其方への義理ばかり思つて情ない事

を言ひ出し居る多少教育も授けてあるに狂氣するといふは如何にも恥かしい事で、此方から行くど家の恥辱にもなる實に憎むべき奴ではあるが、情實を酌んでな、これほどまで操といふものを取止めて置いただけ憐んで遣つて呉れ、愚鈍ではあるが子供の時から是れといふ不出來しも無かつたと思ふど何か残念のやうにもあつて、眞の親馬鹿といふのであらうが平癒らぬほどならば死ぬまで諦めがつきかねるもので、餘り昨今忌はしい事を言はれると死期が近よつたかと取越し苦勞をやつてな、大塚の家には何か迎ひに来るものが有るなど、騒ぎをやるにつけて母が詰らぬ易者などにも見て貰つたか、愚な話ではあるが一月のうち生命が危いどか言つたさうな、聞いて見ると餘り快くもないに當人も頼りと嫌がる様子なり、ま、引移りをするが宜からうとて此處を捜させては來たが、いや何うも永持はあるまいと思はれる、殆んど毎日死ぬ死ぬと言て見る通り人間らしい色艶もなし、食事も丁度一週間はかり一粒も口へ入れる事が無いに、そればかりでも身軀の疲勞が甚しからうと思はれるので種々に異見も言ふが、何うも病ひの故であらうか兎角に誰れの言ふ事も用ひぬには困りはてる、醫者は例の女田が來るので斯う素人まかせでは我まゝばかり暮つて宜くあるまいと思はれる、私の病院へ入れる事は不承知かと毎々聞かれるのであるが、それも何うあらうかと母などは黙にいやがるの

で私も二の足を踏んで居る、無論病院へ行けば自宅と違つて窮屈ではあらうが、何分此頃飛出しが始まつて私などは勿論太吉と倉と二人ぐらゐの力では到底引とめられぬ働きをやるからの、萬一井戸へでも懸られてはと思つて、無論蓋はして有るが往來へ飛出されても難儀至極なり、夫等を思ふと入院をさせやうと思ふが何かふびんらしくて心一つには定めかねるて、其方に思ひ寄りもあらば言つて見て呉れとてくる／＼と刺たる頭を撫で、思案に能はぬ風情、はあ／＼と閉居る人も詞は無くして諸共に溜息なり。

娘は先刻の涙に身も揉みしかば、さらでもの疲れ甚しく、なよ／＼と母の膝へ寄添ひしまゝ眠れば、お倉お倉と呼んで附添ひの女子と共に郡内の蒲團の上へ抱き上げて臥さするにはや正體もなく夢に入るやうなり、兄といへるは靜に膝行寄りてさしのぞくに、黒く多き髪の毛を最惜しげもなく引つめて、銀杏返しのこはれたるやうに折返し折返し鬢形に曇みこみたるが、大方横に成りて狼藉の姿なれども、幽霊のやうに細く白き手を二つ重ねて枕のもとに投出し、浴衣の胸少しあらはに成りて締めたる緋ぢりめんの帯あげの解けて帯より落かゝるも艶かしからで惨ましのさまなり。

枕に近く一脚の机を据ゑたるは、折ふし硯々と呼び、書物よむとて有し學校のまねびをなせ

ば、心にまかせて紙のたづらせよとなり、兄といへるは何心なく積重ねたる反古紙を手に取りて見れば、怪しき書風に正躰得しれぬ文字を書ちらして、これが雪子の手跡かと情なきやうなる中に、鮮かに讀まれたるは村といふ字、郎といふ字、あ、植村録郎、植村録郎、よむに得堪へずして無言にさし置きぬ。

(四)

今日は用なしの身なればとて兄は終日此處にありけり、氷を取寄せて雪子の頭を冷す附添ひの女子に代りて、とれ少し私がやつて見やうと無骨らしく手を出すに、恐れ入ります、お召物が濡れますと言ふを、いゝさ先させて見てくれろとて、氷壺の口を開いて水を搾り出す手振りの無器用さ、雪や少しはお解りか、兄様が頭を冷して下さるのですよとて、母の親心附けれども何の事とも聞分ぬと覺しく、眼は見開きながら空を眺めて、あれ綺麗な蝶が蝶がと言ひかけしが、殺してはいけませんよ、兄様兄様と聲を限りに呼べば、こら何うした、蝶も何も居ない、兄は此處だから、殺しはせぬから安心して、な、宜いか、見えるか、兄だよ、正雄だよ、氣を取直して正氣になつて、お父さんやお母さんを安心させて呉れ、こら少し聞分けて呉れ、

よ、お前が此様な病氣になつてから、お父様もお母様も一晩もゆるりとお眠になつた事はない、お疲れなされてお瘦せなされて介抱して居て下さるのを孝行のお前に何故わからない、平常は道理がよく解る人ではないか、氣を静めて考へ直して呉れ、植村の事は今更取かへされぬ事であるから、跡でも懇に吊つて遣れば、お前が手づから香花でも手向ければ、彼れは快く瞑することが出来ると遺書にもあつたと言ふではないか、彼れは潔く此世を思ひ切つたので、お前の事も併せて思ひ切つたので決して末練は残して居なかつたに、お前が此様に本心を取亂して御兩親に歎をかけると言ふは解らぬではないか、彼れに對してお前の處置の無情であつたも彼れは決して怨んでは居なかつた、彼れは道理を知つて居る男であらう、な、左様であらう、校内一人のだとお前も常に褒めたではないか、其人であるから決してお前を恨んで死ぬ、其様な事はある筈がない、憤りは世間に對してなので、既にそれは人も知つて居る事なり遺書によつても明かではないか、考へ直して正氣になつて、其後の事はお前の心に任せるから思ふまゝの世を経るが宜い、御兩親のある事を忘れないで、御兩親がこれほどお歎きなされるかを考へて、氣を取直して呉れ、え、宜いか、お前が心で直さうと思へば今日の今も直れるではないか、醫者にも及ばぬ、藥にも及ばぬ、心一つ居處をたしかにしてな、直つて呉れ、よ、よ、よ、こら雪、

宜いか、解つたかと言へば、唯點頭いて、はいはいと言ふ。
 女子どもは何時しか枕元をはずして四邊には父と母と正雄のあるばかり、今いふ事は解るとも解らぬとも覺えぬとも兄様兄様と小き聲に呼べば、何か用かと氷囊を片寄せて傍近く寄るに、私を起して下され、何故か身躰が痛くてと言ふ、それは何時も氣の立つまゝに驅出して大の男に捉へられるを、振放すとして恐ろしき力を出せば定めて身も痛からう生疵も處々にあるを、それでも身躰の痛い知れるほどならばと果敢なき事をも兩親の頼もしがりぬ。
 おまへの抱かれて居るは誰何、知れるかえと母親の間へば、言下に兄様で御座りましやうと言ふ、左様わかればもう仔細は無し、今話して下された事覚えてかと言へば、知つて居ます、花は盛りにと又あらぬ事を言ひ出せば、一同顔を見合せて情なき思ひなり。
 良しはしありて雪子は息の下に極めて恥かしげの低き聲して、もう後生お願ひで御座ります、其事は言ふて下さりませ、其やうに仰せ下さりましたも私にはお返事の致しやうが御座りませぬと言ひ出づるに、何をと母が顔を出せば、あ、植村さん、植村さん、何處へお出遊ばすと岸破と起きて、不意に驚く正雄の膝を突きのけつ、縁の方へと驅け出すに、それとて一同はら／＼と勝手より太吉おくらなど飛來るほどにさのみも行かず縁先の柱のもとにびたりと坐し

て、勘忍して下され、私にわがわるう御座りました、始めから私が悪う御座りました、貴君に悪い事は無い、私が、私が、申さないが悪う御座りました、兄と言ふては居りまするけれど。せむび泣きの聲きこえ初めて断續の言葉その事とも聞わき難く、半か、げし軒ばの廉、風に音する夕ぐれ淋し。

(五)

雪子が縁かへす言の葉は昨日も今日も一昨日も、三月の以前も、其前もさらに異なる事をば言はざりき、唇に絶えねは植村といふ名、ゆるし給へと言ふ言葉、學校といひ、手紙といひ、我罪、おあとから行まする、戀しき君、さる詞をば次第なく並べて、身は此處に心はもぬけの殻になりたれば、人の言へるは聞分くるよしも無く、樂しげに笑ふは無心の昔を夢みてなるべく、胸を抱きて苦悶するは遣る方なかりし當時のさまの再び現にあらはるゝなるべし。おいたはしき事とは太吉も言ひぬ、お倉も言へり、心なきお三どの末まで嬢さまに罪ありとはいさゝかも言はざりき、黄八丈の袖の長き書生羽織めして、品のよき高髷にお根がけは櫻色を重ねたる白の丈長、平打の銀簪一つ淡泊と遊ばして學校がよひのお姿今も目に残りて、何時

舊のやうに御平癒遊ばすやらと心細し、植村さまも好いお方であつたものとお倉が言へば、何があの色の黒い無骨らしきお方、學問はえらからうとも何うで此方のお嬢さまが對にはならぬ、根つから私は褒めませぬとお三の力めば、それはお前が知らぬから其様な憎ていな事も言へるものゝ、三日交際したら植村様のあと追ふて三途の川まで行きたくならう、番町の若旦那を悪いと言ふではなけれど、彼方とは質が違ふて言ふに言はれぬ好い方であつた、私でさへ植村様が何だと聞いた時にはお可愛想な事と涙がこぼれたもの、お嬢さまの身になつては辛からうではないか、私やお前のやうなおつと來いならば事は無いけれど、不斷つゝしんでお出遊ばすだけ身にしみる事も深からう、あの親切な優しい方を斯う言ふては悪いけれど若旦那さへ無かつたらお嬢さまも御病氣になるほどの心配は遊ばすまいに、左様いへば植村様が無かつたら天下泰平に治まつたものを、あゝ浮世はつらいものだね、何事も明すけに言ふて退ける事が出来ぬからとて、お倉はつくづくまゝならぬを痛みぬ。つとめある身なれば正雄は日毎に訪ふ事もならで、三日おき、二日おきの夜な〜車を柳のもとに乗りすてぬ、雪子は喜んで迎へる時あり、泣いて辭す時あり、稚兒のやうになりて正雄の膝を枕にして寐る時あり、誰か給仕にても箸をば取らずと我儘をいへれど、正雄に叱られて同じ膳の上に粥の湯をすゝる事もあり、

癒つて呉れるか。癒りまする。今日癒つて呉れ。今日癒りまする。癒つて兄様のお持を仕立て
 上げまする。お召も癒ふて上げまする、それは辱し早く癒つて癒ふて呉れと言へば、左様し
 ましたらば植村様を呼んで下さるか、植村様に逢はして下さるか、むい逢はして遣る、呼んで
 も来る、はやく癒つて御両親に安心させて呉れ、宜いかと言へば、あゝ明日は癒りますると言
 りもなく言ひけり。

正しく言ひしを心願みに有るまじき事とは思へども明日は日暮も待たず車を飛ばせ来るに、容
 赦こそしく變りて何を言へどもいやしくとて人の顔を見ざるを厭ひ、父母をも兄をも女子ど
 もをも寄せつけず、知りませぬ、知りませぬ、私は何も知りませぬとて打泣くばかり、家の中
 をば廣き野原と見て行く方なき歎きに人の袖をもしばらせぬ。

俄かに暑氣つよくなりし八月の中旬より狂亂いたく募りて人をも物をも見分ちがたく、泣く聲
 は晝夜に絶えず、眠るといふ事ふつに無ければ陥入たる眼に形相すさまじく此世の人ども覺え
 ずなりぬ、看護の人も勞れぬ、雪子の身も弱りぬ、きのふも植村に逢ひしと言ひ、今日も植村
 に逢ひたりと言ふ、川一つ隔て、姿を見るばかり、霧の立ちほふて臘氣なれども明日は明日は
 と言ひて又そのほかに物いはず。

いつぞは正氣に復りて夢のさめたる如く、父様母様といふ折のありもやすくと覺束なくも一日
 二日と待たれぬ、空蟬はからを見つゝもなぐさめつ、あはれ門なる柳に秋風のおと聞こえずも
 かな。

そらろとと

雨の夜

庭の芭蕉のいと高やかに延びて、葉は垣根の上やがて五尺もこえつべし、今歳はいかなれば斯くいつまでも丈のひくきなど尙ひてしを夏の末つかた極めて暑かりしに唯一日ふつか、三日とも數へずして驚くばかりに成りぬ、秋かせ少しそよくとすれば端のかたより果敢なげに破れて、風情次第に淋しくなるほど雨の夜の音なひこれこそは哀れなれ、こまかき雨ははらりと音して、叢がくれ鳴くこほろぎのふしをも亂さず、風一しきり颯と降くるは彼の葉にばかり懸さかといたまし。雨は何時もあはれなる中に秋はまして身にしむこと多かり、更けゆくまゝに燈火のかげなごうら淋しく、寝られぬ夜なれば臥床に入らんも詮なしとて小切れ入れたる疊紙とり出だし、何とはなしに針をも取られぬ、未だ幼くて伯母なる人に絆物ならひつる頃、枉先、襪の形なごむづかしう言はれし、いと恥かしうて是れ習ひ得ざらんほどはと家に近き某の社に日参といふ事をなしける、思へばそれも昔なりけり、をしへし人は昔の下になりて習ひとりし

身は大方もの忘れしつ、斯くたまさかに取出づるにも指の先こわきやうにて、はかくしうは得も縫ひがたきを、彼の人あらば如何ばかり言ふ甲斐なく浸ましと思ふらん、など打返し其むかしの戀しうてそらろに袖もぬれそふ心地す、遠くより音して歩み來るやうなる雨、近き板戸に打つけの騒がしさ、いづれも淋しからぬかは。老たる親の瘦せたる肩もむとて、骨の手に當りたるもかゝる夜はいと心細さのやるかたなし。

月の夜

村雲すこし有るもよし、無きもよし、みがき立てたるやうの月のかげに尺八の音の聞えたる、上手ならばいとをかしかるべし、三味も同じこと、琴は西片町あたりの垣根ごしに聞えたるが、いと長き月に輝く人のかげも見まほしく、物がたりめきて床しかりし、親しき友に別れたる頃の月いとなくさめがたうも有るかな、千里のほかまでと思ひやるに添ひても行かれぬものなれば唯うらやましようて、これを假に鏡どなしたらば人のかげも映るべしやなど果敢なき事さへ思ひ出でらる。さゝやかなる庭の池水ゆらされて見ゆるかげ物いふやうにて、手すりめきたる處に寄りて久しう見入るれば、はじめは浮きたるやうなりしも次第に底ふかく、此池の深さいく

ばくとも測られぬ心地に成て、月は其その底のいと深くに住むらん物のやうに思はれぬ、久しうありて仰ぎ見るに空なる月と水のかげと孰れを賦のかたちとも思はれず、物ぐるほしけれど箱庭に作りたる石一つ水の面にそと取落せば、さし波すこし分れて是れにぞ月のかげ深ひぬ、斯くはかなき事して見せつれば甥なる子の小さきが眞似て、姉さまのする事我れもすとて硯の石いつのほどに持て出でつらん、我れも月さま砕くのなりとてはたと捨てつ、それは亡き兄の物なりしを身に傳へていと大事と思ひたりしに果敢なき事にて失ひつる罪得がましき事ともふ、此池かへさせてなど言へども未ださながらにてなん、明ぬれば月は空に還りて名残もといめぬを、硯はいかさまに成ぬらん、夜なく影や待とらんと憐なり。嬉しきは月の夜の客人、つねは疎々しくなとある人の心安げに訪ひ寄たる、男にても嬉しきを、まして女の友にさる人あらば如何ばかり嬉しからん、みづから出るに難からば文にてもおこせかし、歌よみがましきは憎きものなれどかゝる夜の一言には身にしみて思ふ友とも成ぬべし。大路ゆく辻占うりのこゑ、汽車の笛の遠くひびきたるも、何とほなしに魂あくがるゝ心地す。

雁 が ね

朝月夜のかげ空に残りて、見し夢のなごりもまだ現なきやうなるに雨戸あけさして打ながむれば、さと吹く風竹の葉の露を拂ひて、そゝろ寒けく身にしみ渡る折しも、落くるやうに雁がねの聞えたる、孤つなるは猶さら、列ねし姿もあはれなり、思ふ人を遠き縣などにやりて明くれ便りの待わたらるゝ頃これを聞たらば如何なる思ひやすらんと哀れなり。朝霧ゆふ霧のまぎれに聲のみ洩らして過ぎゆくもをかしく、更けたる枕に鐘の音きこえて、月すむ田面に落つらんかけ思ひやるも哀れ深しや。旅寢の床、佗人の住家、いづれに聞ても物おもひ添ふる種なるべし、一とせ下谷のほとりに假初の家居して、商人といふ名も恥かしき、唯いさゝかの物とり並べて朝夕のたつきとなし、頃、檐端の庇あれたれども月さすたよりとなるにはあらで、向ひの家二階のはづれを縄かにもれ出づる影したはしく、大路に立て心ほそく打あふぐに、秋風たかく吹きて空にはいさゝかの雲もなし、あはれかゝる夜よ、歌よむ友のたれかれ集ひて、静かに浮世の外の物がたりなど言ひ交はしつるはと、俄かに其わたり戀しう涙ぐまるゝに、友に別れし雁唯一つ、空に聲して何處にかゆく、さびしとは世のつね、命つれなくさへ思はれぬ。搗衣の音に交りて聞えたる如何ならん、三つ口など囁して小さき子の大路を走れるは、さも淋しき物のをかしう聞ゆるやと羨ましくなん。

虫の聲

垣根の朝顔やう／＼小さく咲きて、昨日今日葉がくれに一花みゆるも其はじめの事おもはれて
 憐れなるに、松虫すい虫いつしか鳴よわりて、朝日まちとりて籠馬の果敢なげに聲する、小溝
 の端、壁の中など有るか無きかの命のほど、老たる人、病める身などにて聞たらば、さこそ比
 べられて物かなしからん、まだ初霜は置くまじきを今年は虫の齢いと短かくて、はやくに聲の
 かれ／＼に成りしかな、くつろ虫はかしましき聲もかたもいと丈夫めかしきを、いつしか時
 の間におとろへ行くらん、人にもさる類ひはありけりとをかし、鈴虫はふり出で、なく聲のう
 つくしければ、物ねたみされて齡ひの短きなめりと點頭かる、松虫も同じことなれど、名と實
 と伴はねばあやしまるゝぞかし、常磐の松を名に呼べれば、千歳ならずとも枯野の末まではあ
 るべきを、萩の花ちりこぼるゝやがて聲せず成行く、さる盛りの短かきものなれば、暫時も似
 よと此名は負せけん、名づけ親ぞ知らまほしき。此虫一とせ籠に伺ひて露にも霜にも當てじと
 いたはりしが、その頃病ひに臥したりし兄の、夜なく鳴くこゑ耳につきて物佗しく厭はしく、
 あの聲なくば此夜やすく睡らるべしなど言へるも道理にて、いそぎ取おろして庭草の茂みに放

ちぬ、其夜なくやと試みたれどさらに聲の聞えねば、俄かに露の身に寒く鳴くべき勢ひの無く
 なりしかど憐れみ合ひし、其とし暮れて兄は空しき敷に入りつ、又の年の秋、今日ぞ此頃など
 思ひ出づる折しも、ある夜ふけて近き垣根のうちにさながらの聲きこえ出でぬ、よもあらじと
 は思へど唯其ものゝやうに懐かしく、戀しきにも珍らしきにも涙のみこぼれて、此虫がやうに、
 よし異物なりとも置かたち同じかるべき人の唯今こゝに立出で來らば如何ならん、我れは其袖
 をつと捉へて放つ事をなすまじく、母は嬉しさに物け言はれで涙のみふりこぼし給ふや、父は
 如何さまに爲し給ふらんなど怪しき事を思ひよる、かくて二夜ばかりは鳴きつ、其後は何處に
 ゆきけん、假にも聲の聞えずなりぬ、今も松虫の聲きけばやがて其折ちもひ出でられて物がな
 しきに、籠に伺ふ事は更にも思ひ寄らず、あつからの野邊に鳴弱りゆくなど、唯その人の別
 れのやうに思はるゝぞかし。

ほととぎす

ほととぎすの聲まだしらねば、いかにしてか聞かばやと想しがるに、人の訪ひ来て何かは聞えぬ事のあるべき、我が宿の大木にはどまりてさへ鳴くものを、夜ふけ枕にこゝろし給へ、近く聞く時は唯一こゑあやしき音に聞きなされるれど、遠くなりゆく聲のいと哀れなるぞと教へられま。時は舊き曆の五月にさへあれば、あの時たゞ今と心いさみて、それよりの夜なく目もあはず、いかで聞きもらさじと待たるに、はかなくて一夜は過ぎぬ、そのつぎの夜もつぎの夜もあづかなくて何時しか、曉月夜の頃にもなれば、なぞ斯くばかり物はおもはする、いとつれなくも有るかなと憎むく、猶まつに朝らで一夜を待あかしに、ある曉のいとねぶたうて、物もおぼえずしはし夢結ぶやうなりしが、耳もど近くその聲あやまたず聞えぬ、まだ聞かざりし音をさやかに知るは怪しけれど疑ひなき夫れと枕おしやりて、居直れば又一こゑさやかにぞなく、故人がよみつる歌の事などさま／＼胸に迫りて、ほど／＼涙もこぼれつべく、ゆかしさのいと堪へがたければ國の戸あして大空を打見あぐるに月には横雲少しかゝりて、見わたす岡の若葉のかけ暗う、過ぎゆきけんかげも見えぬなん、いと口惜しうもゆかしうも唯身にし

みて打ながめられき。明ぬれば歌よむ友のもとに消息して此ほこりいはやとしつるを、事まざれてさて暮しつ、夜に入れば又々鳴きわたるよ、こたびは宵より打しきりぬ、人の聞かせしやうに細やかなる聲はあらねど唯ものゝ哀れにて、げに戀する人の我れに聞かすなど言ひけんも道理ぞかし、おもふ事なき身もどすゝろに鼻かみわたされて、日記のうちには今宵のおもふこと種々しるして、やがて哀れしる人にとおもふ。かくて二日ばかり、三日の後なりけん、ゆくりなく訪ひ來し友あり、いと嬉しうて、今や此事かたり出でん、しばししてや驚かすべき、さこそは人の羨ましがるべきをど、嬉しきにも猶はかられつ、あらぬ事ども言ひかはすほどに、折しもかの杜鵑機端に近う鳴く聲のする、あれ聞き給へ、此宿はこゝの森にもあらぬを、此夜頃たえず聲の聞ゆるが上に、ひるさへ斯くと打出したれば、友は得どきがたきおもふちして、何をかのたまふ、とたゞに言ふ、かく／＼と語れば、そは承けがたき事と打かたぶき打かたぶきするほどに、又も一聲二聲うちしきれば、あれが聲を郭公とや、いかにして然はおぼしつるぞ、いとよき御聞きさまで友は口おほひもしあへず笑みくつがへる、いつも曉よりなきいで、夕ぐれまでは御標のものなるを、いかにして然は聞き給ひけん、物ぐるほしくもあはしますかなといよ／＼笑ふに、さにはあるまじ、いかで山がらすを然はこもふべき、あの

鳴音聞き給へ、よもあやまらじと訝しうなりて言へば、月夜に寝ほうけて鳴出づる時は常の聲
ども異りぬべし、今のなく音は何かは異ならん、あれ見給へ飛びゆく姿もさやかなるをど指さ
されて、あはれ此杜鵑いつも私音をなく物に成りぬ。覺めずは夢のをかしましむ。

この子

口に出して私が我子が可愛いといふ事を申したら、嗚皆様は大笑ひを遊ばししよう、それは
何方だからとて我子の憎いはありませぬもの、取たて、何も斯う自分ばかり美事な實を持つて
居るやうに誇り顔に申すことの可笑しいをお笑ひに成りましやう、だから私は口に出して其様
な仰山らしい事は言ひませぬけれど、心のうちではほんに可愛い、憎いのはありませ
ぬ、掌を合せて拜まぬばかり辱ないと思ふて居りまする。
私の此子は言はゞ私の爲の守り神で、此様な可愛い笑顔をして、無心な遊をして居ますけれ
ど、此無心の笑顔が私に教へて呉れました事の大層なは、残りなく口には言ひ盡くされませぬ、
學校で讀みました書物、教師から言ひ聞かして呉れました種々の事は、それはたしかに私の身
の爲にもなり、事ある毎に思ひ出してはあゝで有つた、斯うで有つたと一々顧みられまするけ
れど、此子の笑顔のやうに直接に、眼前、かけ出す足を止めたり、狂ふ心を静めたりはありませ
ぬ、此子が何の氣も無く小豆枕をして、兩手を肩のそばへ投出して寝入つて居る時の其顔とい
ふものは、大學者さまが頭の上から大聲で異見をして下さるとは違ふて、心から底から湧き出

すほどの涙がこぼれて、いかに強情我まん私でも、子供なんぞ些とも可愛くはありませんと威張つた事は言はれませんでした。

昨年の暮押つまつてから産聲をあげて、はじめて此赤い顔を見せて呉れました時、私はまだ其時分宇宙に迷ふやうな心持で居たものですから、今思ふと情ないのでありますけれど、あゝ何故丈夫で生れて呉れたらう、お前さへ亡つて呉れたなら私は肥立次第實家へ歸つて仕舞ふのは、こんな旦那様のお傍何かに一時も居やしないのに、何故まあ丈夫で生れて呉れたらう、厭だ、厭だ、何うしても此縁に繋がれて、これからの永世を光りも無い中に暮すのかしら、厭な事の、情ない身と此やうな事を思ふて、人はお目出たうと言ふて呉れても私は少しも嬉しいとは思はず、只々自分の身の次第に詰らなくなるをばかり悲しい事に思ひました。

それですが彼の時分の私の地位に他の人を置いて御覽じろ、それは何んな諦めのよい悟つたお方にしたところが、是非此世の中は詰らない面白くないもので、随分とも酷い、つれない、天道様は是非かなどいふ事が、私の生意氣の心からばかりでは有ますまい、必ず、乾度、何方のお口からも洩れずには居りますまい、私は自分に少しも悪い事は無い、間違つた事はして居ないと極めて居りましたから、すべての衝突を旦那さまのお心一つから起る事として仕舞つ

て、適二無二旦那さまを恨みました、又斯ういふ旦那さまを態と見たて、私の一生を苦しませて下さるかと思ふと實家の親、まあ親です、それは恩のある伯父様ですけれども其人の事も恨めしいと思ひますし、第一犯した罪も無い私、人の言ふなりに温順しう嫁入つて来た私を、自然と此様な運に拵へて置いて、盲者を谷へ拵すやうな事を遊ばす、神様といふのですか何ですか、其方が實に〜恨めしい、だから此世は厭なものとする極めました。

負けない氣といふはいふ事で、あれで無くはむづかしい事を遣りのける譯には行かぬ、ぐにや〜と柔かい根性はかりでは何時も人が海鼠のやうだと斯う仰しやる方もありますけれど、それも時と場合によつたもので、のべつに勝氣を振廻しても成りますまい、其うちにも女の勝氣、中へつゝんで諸事を心得て居たら宜いかも知れませぬけれど、私のやうな表むきの負けるきらひは見る人の目からは淺ましくもありませんよう、つまりぬ妻を持たものだといふ感は良人の方に却つて多くあつたので御座りませう、で御座いますけれど私に其時自分を省る考へは出ませぬゆゑ、良人のこゝろを察する事は出来ませぬ、厭な顔を遊ばせば、それが直ぐ氣に障りますし、小言の二つも言はれませうなら火のやうに成つて腹たしく、言葉返しはつひしか爲ませんかつたけれど、物を言はずを喰べず、随分婢女どもには八つ當りもし

て、一日床を敷いて臥つて居た事も一度や二度では御座りませぬ、私は泣虫で御座いますから、その強情の割合に肝甲斐ないほど掻卷の襟に喰ついて泣きました、唯々口惜し涙なので、勝氣のさせる理由も無い口惜し涙なのでした。

嫁入つたは三年の前、其當座は梅仲もよう御座いましたし雙方に苦情は無かつたので御座いますけれど、馴れるといふは好い事の悪い事で、お互ひ我々の牛地が出て参ります、諸慾が沸くほど、出て参ますから、それはく不足だらけで、それに私が生意氣ですものだからつゝ心安だてに旦那さまが外で遊ばす事にまで口を出して、何うも貴郎は私にかくし立を遊ばして、外の事といふと少しも聞かせては下さらぬ、それは隔て心だと言つて恨みますると、何そんな水臭い事はしない、何も彼も聞かせるではないかと仰しやつて相手にせず笑つていらつしやるのです、ありく隠してれ出遊ばすのは見ぬすいて居りますし、さあ私の心はたまりません、一つを疑ひ出すと十も二十も疑はしくなつて、朝夕旦那様あれ又あんな嘘と思ふやうになり、何だか其處が可笑しくてぐらかりまして、何うしても上手に思ひとく事が出来ませんでした、今もふて見ると成るほど隠しだても遊ばしましたらう、何と言つても女ですもの、口が早いに依つてれ務め向きの事などは話して聞かせ下さるわけには行きますまい、現に今でも隠し

ていらつしやる事は夥しくあります、それは承知で、たしかに左様と知つて居りますけれども今は少しも恨む事をいたしません、なるほど此話しを聞かして下さらぬが旦那様の價値で、あの位私が泣いても恨んでも取合つて下さらなかつたは旦那様のおえらいので、あの時代のやうな連葉な私に萬一お役所の事でも聞かして下さらうなら、どのやうの詰らぬ事を仕出來すか、それでなくては随分出入の者の手などを假りて、私の手もとまで怪しい遣ひ物などをよこして、斯ういふ事情で酷く難儀をして居ります、此裁判の判決次第で生死の分け目に成りますなど、言つて、原告だの被告だのといふ人が頼み込んで来たも多くあつたれど、それが私が一切引受けなかつたは、山口昇といふ裁判官の妻として、公明正大に断つたのでは無く、家内の採て居るに其やうの事を言ひ出す餘地もなく、言つて面白くない御挨拶を聞くよりか黙つて居た方がよつほど洒落て居るといふ位な考へて、幸ひに賄賂の汚れは受けなないで済んだけれど、隔ては次第に重なるばかり、雲霧がだんくんと深くなつて、お互ひ心の分らないものに成りました、今思へばこれは私から仕向けたので、私の仕様が悪かつたに相違無く旦那様のお心を何時とは無しにぐれさせましたは私に心が行き方が違つた故と今ではつくづく後悔の涙がこぼれます。

絶頂に仲の悪かつた時は、二人ともに背き背きて、外へいらつしやるに何處へと問ふた事も無ければ、行先をいひ置かれる事も無い、お留守に他處からお使ひが来れば、どんな大至極要用語でも封といふを切つた事は無く、妻とは言へ木偶がお留守居して居るやうに受取一通で追拂つて、それは冷淡に投げて置いたものなれば、旦那さまの御立腹は言はでもの事、はじめは小言を御しやつたり、意見を遊ばしたり、論したり、慰めたり遊ばしたのなれど、いかにも私の強情の根が深く、隠しだてを遊ばすといふを楯に取つて、ちつとやそつとの優しい言葉ぐらゐでは動きさうにもなく執拗ぬきしほごに、旦那さま呆れて手をば引き給ふ、まだ案内に言葉あらそひの有るうちはよきなれども、物言はず睨め合ふやうに成りては、屋根あり、天井あり、壁のあると言ふばかり、野宿の露の哀れにまさつて、それは冷たい情ない、こぼれる涙の氷らぬが不思議で御座ります。

思へば人は自分勝手なもので、よい時には何事の思ひ出しも有りませぬけれど、苦しいの、厭のと言ふ時に限つて、以前あつた事が、これから迎へる事についてか、大層よさうな、立派さうな、結構らしい、事ばかり思ひます、左様いふ事を思ふにつけて現在の有さまが厭で厭で、何うかして此中をのがれたい、此絆を断ちたい、此處さへ離れて行つたならば何んな美しく良

い處へ出られるかと、斯ういふ事を是非とも考へます、で御座いますから私も矢張その通り
の夢にうかれて、此様な不運で畢るべきが天縁では無い、此處へ嫁入りせぬ以前、まだ小室の
養女の實子で有つた時に、いろ／＼の人が世話をして呉れて、種々の口々を申込んで呉れた、
中には海軍の潮田といふ立派な方もあつたし、醫學士の細井といふ色白の人にも極まりかゝつ
たに、引違へて旦那様のやうな無口さまへ嫁入つて来たは何うかいふ一時の間違ひでもあらう、
此間違ひを此まゝに通して、甲斐のない一生を送るは眞實情ない事と考へられ、我身の心をた
め直さうとはしないで人ごとばかり恨めしく思はれました。

其やうな詰らぬ考へを持つて、詰らぬ仕向けを致しまする妻へ、何のやうな結構な人なればと
て親切に對はれましやうか、お役所から退けてお歸り遊ばすに、お出むかへこそ規則通り致し
まするけれど、さし向つては一言の打とけたお話しも申上げず、怒るならお怒りなされ、何も
御随意と木で鼻をくゝるやうな素振をして居ますに、旦那さま堪へかねて、ふいと立つて家を
ば御出あそばさるゝ、行先は何れも御神燈の下をくゝるか、待合の小座敷、それをば口惜しが
つて私は恨みぬきましたけれど眞の處を言へば、私の御嫌機の取りやうが悪くて、家のうちに
は不愉快で居たゝまれないからのお遊び、こんな事をして良人を放蕩に仕あげて仕舞ふたので

す、良人は美事家を外にするといふ道楽ものに成つて仕舞ひました。

旦那さまだと金満家の息子株が藝人たちに煽動られて、無我夢中に浮かれ立つとは事が違ふて心底おもしろく遊んだのではありますまい、いはゞ疳癪抑へ、憂さ晴らしといふやうな譯で、御酒をめし上つたからとて、快くお酔ひになるのではなく、いつも蒼ざめた顔を遊ばして、何時も額際に青い筋がは顯れて居りました。

物いふ聲がけんどんで荒らかで、假初の事にも婢女たちを叱り飛ばし、私の顔をば尻目にお睨み遊ばして小言は仰しやらぬなれども其お氣むづかしい事と言ふては、現時の旦那様が柔和の相としては少しも無く、恐ろしい凄じ、にくらしいお顔つき、其の方の側に私が憤怒の相で控へて居るのですから召使ひはたまりません、大方一月に二人づゝは婢女は替りまして、其都度紛失物が出来ますやら品物の破損などは夥しい事で、何うすれば此様なに不人情の者ばかり寄合ふのか、世間一體が此様に不人情なものか、それとも私一人を歎かせやうといふので、私の身に近い者となると、悉く不人情に成るのであらうか、右を向いても左を向いても頼もしい顔をして居るは一人も無い、あゝ厭な事だと捨てばちになりまして、逢ふほどの人、愛想をしやうでもなく、旦那様の御同僚などがお出になつた時分も御馳走はすべて旦那さまのお指圖無い

うちに手出しするもした事はなく、座敷へは婢女ばかり出して私は齒が痛いの頭痛のと言つて、お客の有無にかゝはらず勝手氣儘の身持をして呼ばれましたからとて返事をしやうでもない、あれをば他人は何と見ましたか、定めし山口は百年の不作だとも評して、妻たる者の風上へも置かれぬ女と言はれましてしやう。

あの頃旦那さまが離縁をやる一言仰しやつたが最後、私は屹度何事の思慮もなく暇を頂いて、自分の身の不都合は棚へ上げて、此様な不運な、情ない、口惜しい身と天が極めてお置きなさるなら、何うでも宜しい、何となり遊ばしませ、私は私の考へ通りな事して、悪ければ悪くなれ、萬一よければそれこそ儲け物といふやうな無茶苦茶の道理を附けて、今頃私は何に成つていましたか、思へば身ぶるひが出来ます、よく旦那様は思ひ切つた離縁沙汰を遊ばさずに、能う私を取止めて置いて下さつた、それはお疳癪の募つて生やさしい離縁などをお出しなさるよ、何時までも檻の中へ置いて苦しませてやらうといふお考へであつたか其處は解らぬなれども、今では私は何事の恨みも無い、旦那さまへ對して何事の恨みも無い、あのやうに苦しませて下さつた故今日の樂しみが樂しいので、私がいくらか物の解るやうに成つたもあゝいふ中を經た故であらう、それを思ふと私の爲に仇敵といふ人は一人も無くて、あの輕忽とこましく

れて世間へ私の身のあらを吹聴して歩いたといふ小間づかひの早も、口返答ばかりして役たずであつた御飯たきの勝も、みんな私の恩人といふて宜い、今このやうに好い女中ばかり集まつて、此方の奥様ぐらゐへつかひの宜い方は無いと嘘にも喜んだ口をきかれるは、彼の人達の不奉公を私の心の反射だと悟つたからの事、世間に當てもなく人を苦しめる悪黨もなければ、神様だとして徹頭徹尾悪い事の無い人に歎きを見せるといふ事は遊ばすまい、何故ならば、私のやうに身の廻りは悉く心得ちがひばかりで出来上つて、一つとして取柄の無い困り者でも、心として犯した罪が無いほどに、これ此様な可愛らしい美しく、此坊やをたしかに授けて下さつたのですもの。

此坊やの生れて来やうといふ時分、まだ私は雲霧につまされぬいて居たのです、生れてから後も容易には晴れさうにもしなかつたのです、だけれども可愛い、いとしい、といふ事は産聲をあげた時から何故となく身にしみて、いろ／＼負け惜しみも言ひまじやうけれど、そつくり誰れか持つて行くでも成つたら私は強情を捨て、取つて、此子は誰れにも指もさへせぬ、これは私の物と抱きしめたで御座りまじやう。

旦那さまの思ひも、私の思ひも同じであるといふ事は此子が抑も教へて呉れたので、私が此子

をば抱きしめて、坊は父様の物ぢや無い、お前は母様一人のだよ、母さまが何處へ行くにしろ坊は必らず置いては行かない、私の物だ私のだとて頬を吸ひますと何とも言はれぬ解けるやうな笑顔をして、莞爾々々としませす様子の可愛い事、とても／＼旦那様のやうな邪慳の方の子では無い、これは私一人の物だと斯う極めて居まするに、旦那さまが他處からでもお歸りになつて、不愉快さうな顔つきで此子の枕もとへお坐り遊ばして、覺束ない手つきに風車を立て、見せたり、振りつゝみなどを振つてお見せなされ、一家の内に我を慰めるは坊主一人だぞとあの色の黒いお顔をお摺り寄せ遊ばすと、泣くかしら恐ろしがるかしらと見て居ますに、いかに嬉し顔をして莞爾々々と私に見せた通りの笑みを見せるでは御座いませぬか、或時旦那さまは、髯をひねつてお前も此子が可愛いかと仰しやいました、當然で御座います、とてつんど致して居りますと、それではお前も可愛いなど例に似ぬ戯言を仰しやつて、高聲の大笑ひを遊ばした其お顔、此子が面ざしに争はれないほど似た處が御座いました、私は此子が可愛いのですもの、何うして旦那様を憎み通せまじやう、私が善くすれば旦那さまも善くして下さります、たとへには三歳兒に淺瀬と言ひますけれど、私の身の一生を致へたのはまだ物を言はない赤ん坊でした。

十三夜

(上)

例は威勢よき黒ぬり車の、それ門に音が止まつた娘ではないかと兩親に出迎はれつるものを、
 今宵は辻より飛のりの車さへ還して悄然と格子戸の外に立てば、家内には父親が相かはらずの
 高聲、いはし私も福人の一人、いづれも柔順しい子供を持つて育てるに手は懸らず人には後め
 られる、分外の慾さへ漏かねば此上に望みもなし、やれく有難い事と物がたられる、あの相
 手は定めし母様、あゝ何も御存じなしにあのやうに喜んでお出遊ばすものと、何の顔さげて離
 縁状もらふて下されと言はれたものか、叱られるは必定、太郎といふ子もある身にて置いて置
 け出して来るまでには種々思案もし盡しての後なれど、今更にお老人を驚かして是れまでの
 喜びを水の泡にさせます事つらや、寧ろ話さずに戻らうか、戻れば太郎の母と言はれて何時
 何時までも原田の奥徳、御兩親に奏任の聲がある身と自慢させ、私さへ身を節約れば時たまは
 る口に合ふ物も小遣ひも差わけられるに、思ふまゝを通して離縁とならば太郎には繼母の憂き

目を見せ、御兩親には今までの自慢の鼻俄かに低くさせまして、人の思はく、弟の行末、あゝ
 此身一つの心から出世の真も止めずばならず、戻らうか、戻らうか、あの鬼のやうな我良人の
 もとに戻らうか、あの鬼の、鬼の良人のもとへ、え、厭々と身をふるはす途端、よろくとし
 て思はず格子にがたりと音さすれば、誰れだと大きく父親の聲、道ゆく悪太郎の悪戯とまがへ
 てなるべし。
 外なるはおはくと笑ふて、お父様私で御座んすといかにも可愛き聲、や、誰れだ、誰れであつ
 たと障子を引明て、はうお開か、何だな其様な處に立つて居て、何うして又此おそくに出かけ
 て来た、車もなし、女中も連れずか、やれくま早く中へ遣入れ、さあ遣入れ、何うも不意に
 驚かされたやうでまごごするわな、格子は閉めずとも宜い私が閉める、兎も角も奥が、
 すつとお月様のさす方へ、さ、蒲團へ乗れ、蒲團へ、何うも疊が汚いので大屋に言つては置い
 たが職人の都合があると云ふてな、遠慮も何も入らない着物がたまらぬからそれを敷いて呉れ、
 やれく何うして此遅くに出て来たお宅では皆お變りもなしかと例に替らずもてはやされるれ
 ば、針の簾にのるやうにて奥さま扱ひ情なくじつと涙を吞込んで、はい誰れも時候の障りも御
 座りませぬ、私は申譯のない御無沙汰して居りましたが貴君もお母様も御機嫌よくいらつし

りますかと問へば、いやもう私は嘘一つせぬ位、お袋は時たま例の血の道といふ奴を始めの、それも蒲團かぶつて半日も居ればけろく、とする病だから仔細はなしさと元氣よく呵々と笑ふに、亥之さんが見えませぬが今晚は何方へか参りましたか、あの子も替らず勉強で御座んすかと問へば、母親はほたくとして茶を侷めながら、亥之は今しがた夜學に出て行きました、あれもお前お蔭さまで此間は昇給させて頂いたし、課長様か可愛がつて下さるので何の位心丈夫であらう、是れと言ふも矢張原田さんの縁が有るからだとして宅では毎日いひ暮して居ます、お前に如才は有るまいけれど此後とも原田さんの御機嫌の好いやうに、亥之はあの通り口の重い質だし何れお目に懸つてもあつけない御挨拶よりほか出来まいと思はれるから、何分ともお前が中に立つて私どもの心が通じるやう、亥之が行末をもお頼み申して置いてお呉れ、ほんに替り目で陽氣が悪いけれど太郎さんは何時もお悪戯をして居ますか、何故に今夜は連れてお出でやない、お祖父さんも戀しがつてお出なされたものをと言はれて、又今更にうう悲しく、連れて来やうと思ひましたけれどその子は宵までひでもう疾うに寝ましたから其ま、置いて参りました、本當に悪戯ばかりつりまして聞わけとは少しもなく、外へ出れば跡を追ひまするし、家内に居れば私の傍ばかり規ふて、ほんに手懸つて成ませぬ、何故彼様で御座り

ませうと言ひかけて思ひ出しの涙むねの中に漲るやうに、思ひ切つて置いては来たれど今頃は目を覺して母さん母さんと婢女どもを迷惑がらせ、お煎餅やおこしの贈しも肯かで、皆々手を引いて鬼に喰はすと感かして居やう、あゝ可愛さうな事をど聲たて、も泣きたきを、さしも両親の機嫌よげなるに言ひ出かねて、烟にまぎらす烟草二三服、空咳こんくとして涙を襟の袖にかくしぬ。

今宵は舊曆の十三夜、舊弊なれどお月見の眞似事に團子をこしらへてお月様にお供へ申せし、これはお前も好物なれば少々なりとも亥之助に持たせて上やうと思ふたれど、亥之助も何か極りを悪がつて其様な物は止しなされと言ふし、十五夜にあげなんだから片月見になつても悪し、喰べさせたいと思ひながら思ふばかりで上げる事が出来なんだに、今夜来て呉れるとは夢のやうな、ほんに心が届いたのであらう、自宅で甘い物はいくらか喰べやうけれど親のこしらへたは又別物、奥機嫌を取つて、今夜は昔のお關になつて、外見を構はず豆なり粟なり氣に入つたを喰べて見せてお呉れ、いつでも父様と囁すること、出世は出世に相違なく、人の見る目も立派なほど、お位のいゝ方々や御身分のある奥機嫌がたどの御交際もして、兎も角も原田の妻と名告て通るには氣骨の折れる事もあらう、女子どもの使ひやう出入りの者の行渡り、人の上

に立つものはそれ丈に苦勞が多く、里方が此様な身柄では猶更のこと人に侮られぬやうの心懸けもしなければ成るまじ、それを種々に思ふて見ると父さんだどて私だどて孫なり子なりの顔の見たいは當然なれど、餘りうるさく出入りをしてはと控へられて、ほんに御門の前を通る事はありとも木綿着物に毛織子の洋傘さした時には見す／＼二階の櫓を見ながら、あゝお前は何をして居る事かと思ひやるばかり行過ぎて仕舞まする、實家でも少し何と成つて居たならばお前の肩身も廣からうし、同じくでも少しは息のつけやうものを、何を云ふにも此通り、お月見の團子をあげやうにもお重箱からして恥かしいでは無からうか、ほんにお前の心遣ひが思はれると嬉しき中にも思ふまゝの通路が叶はねば、愚痴の一つかみ賤しき身分を情なげに言はれて、本當に私は親不孝だと思ひまする、それは成程柔かい衣服きて手車に乗りあるく時は立派らしくも見えませうけれど、父さんや母さんに斯うして上やうと思ふ事も出来ず、いは自分の皮一重、寧賃仕事してもお傍で暮した方がよつばど快よう御座いますと言ひ出すに、馬鹿、馬鹿、其様な事を假にも言ふてはならぬ、嫁に行つた身が實家の親の買をするなどと思ひも寄らぬ事、家に居る時は齋藤の娘、嫁入つては原田の奥方ではないか、勇さんの氣に入るやうにして家の内を修めてさへ行けば何の仔細は無い、骨が折れるからとてそれ丈の運のある身

ならば堪へられぬ事は無い筈、女などいふ者は何うも愚痴で、お袋などが詰らぬ事を言ひ出すから困り切る、いや何うも團子を喰べさせる事が出来ぬとて一日大立腹であつた、大分熱心で調理したもの見えるから十分に喰べて安心させて遣つて呉れ、餘程甘からうぞと父親の戯言を入れるに、再び言ひそびれて御馳走の栗枝豆ありがたく頂戴しぬ。
嫁入りてより七年の間、いまだに夜に入りて客に來しこともなく、土産もなしに一人歩きして來るなど悉皆ためしのなき事なるに、思ひなしか衣類も例はごきらびやかならず、稀に逢ひたる嬉しさにさのみは心も附かざりしが、聲よりの言傳とて何一言の口上もなく、無理に笑顔は作りながら底に萎れし處のあるは何か仔細のなくては叶はず、父親は机の上の置時計を眺めて、こりやもう程なく十時になるが關は泊つて行つて宜いのかの、歸るならばもう歸らねばなるまいぞと氣を引いて見る親の顔、娘は今更のやうに見上げて御父様私は御願があつて出たので御座ります、何うぞ御閒遊ばしてと屹となつて疊に手を突く時、はじめて一まづく幾層の憂きを洩らしそめぬ。
父は穩かならぬ色を動かして、改まつて何かの膝を進めければ、私は今宵限り原田へ歸らぬ決心で出て參つたので御座ります、勇が許して參つたのではなく、あの子を寝かして、太郎を寐

かすつけてもう、あの顔を見ぬ決心で出て参りました、まだ私の手より外誰れの守りでも承知せぬほどの彼の子を、欺して寝かして夢の中に、私は鬼に成つて出て参りました、御父様、御母様、察して下さりませ私は今日までつひに原田の身に就いて御耳に入れました事もなく、勇と私との中を人に言ふた事は御座りませぬけれど、千度も百度も考へ直して、二年も三年も泣き盡して今日といふ今日どうでも離縁を貰ふて頂かうと決心の臍をかためました、何うぞ御願ひで御座ります離縁の状を取つて下され、私はこれから内職なり何なりして亥之助が片腕にもなられるやう心がけますほごに、一生一人で置いて下さりませとわつと聲たてるを嚙しめる襦袢の袖、墨繪の竹も紫竹の色にや出づると憐れなり。

それは何ういふ仔細でと父も母も詰寄つて問かゝるに今までは黙つて居ましたれど私の家の夫婦さし向ひを半日見て下さつたら大抵がお解りに成ませう、物言ふは用事のある時慥貪に申附けられるばかり、朝起こして機嫌をきけば不圖脇を向いて庭の草花を態とらしき寝め詞、是れにも腹はたてども良人の遊ばす事なればと我慢して私は何も言葉あらそひした事も御座んせぬけれど、朝飯あがる時から小言は絶えず、召使の前にて散々と私が身の不器用不作法を御並べなされ、それはまだ辛防もしませうけれど、二言目には教育のない身、教育のない身と御蔑

みなさる、それは素より華族女学校の椅子にかゝつて育つた者ではないに相違なく、御同僚の奥様がたのやうにお花のお茶の、歌の書のと習ひ立てた事もなければ其お話しのお相手は出来ませぬけれど、出来ずば人知れず習はせて下さつても済むべき筈、何も表向き實家の悪いを吹聴なされて、召使ひの婢女どもに顔の見られるやうな事なさらずとも宜かりさうなもの、嫁入つて丁度半年ばかりの間は關や關やと下へも置かぬやうにして下さつたけれど、あの子が出来てからといふものは丸で御人が變りまして、思ひ出しても恐ろしい御座ります、私はくら關の谷へ突落されたやうに暖かい日の影といふを見た事が御座りませぬ、はじめの中は何か串麩に態とらしく邪慳に遊ばすのと思ふて居りましたけれど、全くは私にお厭きなされたので此様もしたら出てゆくか、彼様もしたら離縁をと言ひ出すかと苛めて苛めて苛め抜くので御座りませぬ、御父様も御母様も私の性分は御存じ、よしや良人が藝者狂ひなさらうとも、圍ひ者してお置きなさらうとも其様な事に格氣する私でもなく、婢女どもから其様な噂も聞えまするけれどあれほど働きのある御方なり、男の身のそれ位はありうちと他處行には衣類にも氣をつけて氣に逆らはぬやう心がけて居りまするに、唯もう私の爲る事とは一から十まで面白くなく思召し、箸の上げ下しに家の内の楽しくないは妻が仕方の悪いからだと仰しやる、それも何ういふ

事が悪い。此處が面白くないと言ひ聞かして下さるやうならば宜けれど、一筋に詰らぬくだらぬ、解らぬ奴、とても相談の相手にはならぬの、いはゞ太郎の乳母として置いて遣はすの、嘲つて仰しやるばかり、ほんに良人といふではなくあの御方は鬼で御座ります、御自分の口から出てゆけとは仰しやりませぬけれど私が此様な意氣地なしで太郎の可愛さに氣が引かれ、何うでもお詞に違背せず唯々と御小言を聞いて居りますれば。張も意氣地もない愚うたらぬ奴、それからして氣に入らぬと仰しやります、左様かと言つて小しなりとも私の言條を立て、負けぬ氣にお返事をしましたらそれを取つこに出でゆけと言はれる、必定。私は御母様出て來るのは何でも御座んせぬ、名のみ立派の原田勇に離縁されたからとてゆめさら残りをしていとは思ひませぬけれど、何にもいらぬ彼の太郎が、片親に成るかと思ひますると意地もなく我慢もなく、説て機嫌を取つて、何でも無い事に恐れ入つて、今日までも物言はず辛防して居りました、御父様、御母様、私は不運で御座りますとて口惜しさ悲しさ打出し、思ひも寄らぬ事を語れば両親は顔を見合せて、さては其様の憂き中かと呆れて暫時いふ言もなし。母親は子に甘きならひ、聞く毎々に身にしみて口惜しく、父様は何と思召すか知らぬが元來此方から貰ふて下されと願ふて遣つた子ではなし、身分が悪いの學校が何うしたのとよくも

勝手な事が言はれたもの、先方は忘れたかも知らぬが此方はたしかに日まで覺えて居る、阿闍が十七の御正月、まだ門松を取もせぬ七日の朝の事であつた、もとの猿樂町の彼の家の前でお隣の小娘と追羽根して、あの娘の突いた白い羽根が通り掛つた原田さんの車の中へ落たとつて、それをば阿闍が貰ひに行きしに、其時はじめて見たとか言つて人橋かけてやい／＼と貰ひたが、御身分がらにも釣合ひませぬし、此方はまだ根つからの子供で何も積古事も仕込んで置ませず、支度とても只今の有様で御座いますからとて幾度断つたか知ればせぬけれど、何も舅姑のやかましいが有るではなし、我が欲しくて我が貰ふに身分も何も言ふ事はない、積古は引取つてからでも十分させられるから其心配も要らぬ事、兎角くれさへすれば大事にして置かうからとそれは／＼火のつくやうに催促して、此方から強請た譯ではなけれど支度まで先方で調へて謂はゞお前は戀女房、私や父様が遠慮してさのみは出入りをせぬといふも勇さんの身分を恐れてははない、これが妾手かけに出したのではなし正當にも正當にも百まんだら頼みによこして貰つて行つた嫁の親、大威張に出遣入しても差つかへは無けれど、彼方が立派にやつて居るに、此方が此通りつまらぬ活計をして居れば、お前の縁にすがつて聲の助力を受けもするかと他人様の所思が口惜しく、瘦せ我慢では無けれど交際だけは御身分相應に盡して、平生は

逢ひたい娘の顔も見ずに居ます、それをば何の馬鹿々々しい親なし子でも拾つて行つたやうに大層らしい、物が出来ぬの出来ぬのとよく其様な口が利けたもの、黙つて居ては際限もなく暮つてそれは、癖に成つて仕舞ひます、第一は婢女どもの手前奥様の威光が殺せて、末にはお前の言ふ事を聞く者もなく、太郎を仕立てるにも母様を馬鹿にする氣になられたら何とします、言ふだけの事は乾度言ふて、それが悪いと小言をいふたら何の私にも家がありますと出て来るが宜からうではないか、ほんに馬鹿々々しいとつては夫れほどの事を今日が日まで黙つて居るといふ事がありますものか、あんまりお前が温順し過ぎるから我儘がつられたのである、聞いたばかりでも腹が立つ、もう、怯けて居るには及びません、身分が何であらうが父もある母もある、年はゆかねど亥之助といふ弟もあれば其様な火の中にじつとして居るには及ばぬこと、なぬ父様一遍勇さんに逢ふて十分油を取つたら宜う御座りましよと母は狂つて前後もかへり見ず。

父親は先刻より腕ぐみして目を閉ぢてありけるが、あゝお袋、無茶の事を言ふてはならぬ、我さへ初めて聞いて何うしたものかと思案にくれる、阿闍の事なれば並大抵で此様な事を言ひ出しさうにもなく、よく、つらさに出て来たと思えるが、して今夜は聲どのは不在か、何か改ま

つての事件でもあつてか、いよ、離縁するでも言はれて来たのかと落つて問ふに、其人は一昨日より家へどては歸られませぬ、五日六日と家を明けるは常の事、さのみ珍らしいとは思ひませぬけれど、出際に召物の揃へかたが悪いとて如何ほど詫びても聞入れがなく、其品をば脱いで揃きつけて、御自身洋服にめしかへて、あゝ、私位不仕合の人間はあゝまい、お前のやうな妻を持つたのはと言ひ捨てに出て御出で遊ばしました、何といふ事で御座りませう一年三百六十五日物いふ事も無く、たま、言はるれば此様な情ない詞をかけられて、それでも原田の妻と言はれたいか、太郎の母で候と顔おし拭つて居る心か、我身ながら我身の辛防がわかりませぬ、もう、もう私に眞人も子も御座んせぬ嫁入せぬ昔と思へばそれまで、あの頭はない太郎の寝顔を眺めながら置いて来るほどの心になりましたからは、もう何うでも勇の側に居る事は出来ませぬ、親はなくとも子は、言ひまするし、私のやうな不運の母の手で育つより繼母御なり御手かけなり氣に適ふた人に育て、貰ふたら、少しは父御も可愛がつて後々の子の爲にも成ませう、私はもう今宵かざり何うしても歸る事は致しませぬとて、断つても断つてぬ子の可愛さに、奇麗に言へども詞はふるへぬ。

父は歎息して、無理は無い、居辛くもあらう、困つた中に成つたものよと暫時阿闍の顔を眺

しが、大丸留に金輪の根を巻きて黒縮緬の羽織何の惜しげもなく、我が娘ながらもいつしか整ふ奥襟風、これをば結び髪に結びかへさせて綿銘仙の半纏に襷がけの水仕業とする事いかにして忍ばるべき、太郎といふ子もあるものなり、一旦の怒りに百年の運を取はつして、人には笑はれものとなり、身はいにしへの齋藤主計が娘に戻らば、泣くとも笑ふとも再び原田太郎が母とは呼ばるゝこと成るべきにもあらず、眞人に未練は残さずとも我が子の愛の断ちがたくは離れていよゝ物をも思ふべく、今の苦勞を戀しがる心も出づべし、斯く容よく生れたる身の不幸、不相应の縁につながれて幾らの苦勞をさする事と憐れさの増れども、いや阿闍斯う言ふと父が無慈悲で酌取つて呉れぬのと思ふか知らぬが決してお前を叱るではない、身分が釣合はねば思ふ事も自然違ふて、此方は眞から盡す氣でも取りやうに由つては面白くなく見える事もあらう、勇さんだからとてあの通り物の道理を心得た、利發の人ではあり随分學者でもある、無茶苦茶にいちめ立る譯ではあるまいが、得て世間に寝物物の敏腕家など言はれるは極めて恐ろしい我まゝ者、外では知らぬ顔に切つて廻せど勤め向きの不平などまで家内へ歸つて當りちらされる、的に成つては随分つらい事もあらう、なれどもあれほどの眞人を持つ身のつとめ、區役所がよひの腰辨當が釜の下を焚きつけて呉れるのとは俗が違ふ、随つてやかましくもあ

らうむづかしくもあらうそれを機嫌の好いやうにとゝのへて行くが妻の役、表面には見えねど世間の奥様といふ人達の何れも面白くをかしき中ばかりは有るまじ、身一つと思へば恨みも出る、何のこれが世の勤めなり、殊にはこれほど身がらの相違もある事なれば人一倍の苦もある道理、お袋などが口廣い事は言へど亥之が昨今の月給に有ついたも畢竟は原田さんの口入れではなからうか、七光どころか十光もしてよそながらの恩を着ぬとは言はれぬに辛からうとも一つは親の爲弟の爲、太郎といふ子もあるものを今日までの辛防がなるほどならば、これから後として出来ぬ事はあるまじ、離縁を取つて出たが宜いか、太郎は原田のもの、其方は齋藤の娘、一度縁が切れては二度と顔見にゆく事もなるまじ、同じく不運に泣くはどならば原田の妻で大泣きに泣け、なあ關さうでは無いか、合點がいつたら何事も胸に飲めて知らぬ顔に今夜は歸つて、今まで通りつゝしんで世を送つて呉れ、お前が口に出さんとても親も察する弟も察する、涙は各自に分けて泣かうぞと因果を含めてこれも目を拭ふに、阿闍はわつと泣いてそれでは離縁をといふたも我儘で御座りました、成程太郎に別れて顔も見られぬやうにならば此世に居たとて甲斐もないものを、唯目の前の苦をのがれたとて何うなるもので御座んせう、ほんに私さへ死んだ氣にならば三方四方波風たゝす、兎もあれ彼の子も兩親の手で育てられまするに、

つまらぬ事を思ひ寄まして、貴君にまで厭な事を聞かせ申しました、今宵限り関はなくなつて魂一つがあの子の身を守るのと思ひますれば良人のつらく當る位百年も辛防出來さうな事、よく御言葉も合點が行きました、もう此様な事は御聞かせ申しませぬほどに心配をして下さりますなとて拭ふあとから又涙、母親は聲たて、何といふ此娘は不仕合と又一しきり大泣きの雨、くもらぬ月も折から淋しくして、うしろの土手の自然生を弟の亥之が折て来て、瓶にさしたる薄の穂の招く手振りもあはれなる夜なり。

實家は上野の新坂下、駿河臺への路なれば茂れる森の木の下闇わびしけれど、今宵は月もさやかなり、廣小路へ出づれば晝も同様、雇ひつけの車宿とて無き家なれば路ゆく車を窓から呼んで、合點が行つたら兎も角も歸れ、主人の留守に斷りなしの外出、これを咎められるとも申譯の詞は有るまじ、少し時刻は遅れたれど車ならばつい一飛、話は重ねて聞きに行かう、先づ今夜は歸つて呉れとて手を取つて引出すやうなるも事あら立てしの親の慈悲、阿關はこれまで身と覺悟してお父様、お母様、今夜の事はこれ限り、歸りますからは私は原田の妻なり、良人を誂るは濟みませぬほどにもう何も言ひませぬ、關は立派な良人を持つたので弟の爲にも好い片腕、あゝ安心なと喜んで居て下されば私は何も思ふ事は御座んせぬ、決して決して不料

簡など出すやうな事はしませぬほどにそれも案じて下さりますな、私の身體は今夜をはじめに勇のものだと思ひまして、彼の人の思ふまゝに何となりして貰ひましょ、それではもう私は戻ります、亥之さんが歸つたらば宜しくいふて置いて下され、お父様もお母様も御機嫌よう、此次には笑ふて参りますとて是非なさうに立あがれば、母親は無けなしの巾着さげて出て駿河臺まで幾干でゆくと門なる車夫に聲をかくるを、あ、お母様それは私がやります、難有う御座んしたと温順しく挨拶して、格子戸くゞれば顔に袖、涙をかくして乗り移る憐れさ、家は父が咳拂ひの是れもうるめる聲なりし。

(下)

さやけき月に風のおと添ひて、虫の音たえんゝに物かなしき上野へ入りてよりまだ一町もやうくと思ふに、いかにしたるか車夫はびつたりと轆を止めて、誠に申かねましたが私はこれ御免を願ひます、代は入りませぬからお下りなすつてと突然にいはれて、思ひもかけぬ事なれば阿關は胸をどつさりとさせて、あれお前そんな事を言つては困るではないか、少し急ぎの事でもあり増しは上げやうほどに骨を折つてお呉れ、こんな淋しい處では代りの車も有るまいで

はないか、それはお前人困らせといふもの、ぐずらずに行つてお呉れと少しふるへて頼むやうに言へば、増しが行しいといふのではありませぬ、私からお願ひです何うぞお下りなすつて、もう引くのが厭になつたので御座りますと言ふに、それではお前加減でも悪いが、まあ何うしたといふ譯、此處まで挽いて来て厭になつたでは済むまいがねと聲に力を入れて車夫を叱れば、御免なさいまし、もう何うでも厭になつたのですからとて提燈を持しまゝ不圖脇へのがれて、お前は我まゝの車夫さんだね、それならば約定の處までとは言ひませぬ、代りのある處まで行つて呉れ、ばそれでよし、代はやるほどに何處か其邊まで、せめて廣小路までは行つてお呉れと優しい聲にすかさやうにいへば、成るほど若いお方ではあり此淋しい處へおろされては定めしお困りなさりませう、これは私が悪う御座りました、ではお乗せ申しませう、お供を致しませう、嗚お驚きなさりましたらうとて悪漢らしくもなく提燈を持かふるに、お關もはじめて胸をなで、心丈夫に車夫の顔を見れば二十五六の色黒く、小男の瘦せぎす、あ、月に背けたあの顔が誰れやらで有つた、誰れやらに似て居ると人の名を咽元まで轉がりながら、もしやお前さんとは我知らず聲をかけるに、えと驚いて振あふぐ男、あれお前さんはあのお方ではないか、私をよもやお忘れはなさるまいと車より降るやうに下りてつくぐと打まれば、貴嬢は齋藤

のお關さん、面目も無い此様な姿で、背後に目が無ければ何の氣もつかずに居ました、それでも音聲にも心づくべき筈なるに、私は餘程の鈍に成りましたと下を向いて身を恥れば、阿關は頭の前より爪先まで眺めていえ、私だと往來で逢ふた位ではよもや貴君と氣は附きますまい、唯た今の先までも知らぬ他人の車夫さんとのみ思ふて居ました、御存じないは當然、勿體ない事であつたれど知らぬ事なればゆるして下され、まあ何時から此様な業して、よく其孱弱い身に障りもさせぬか、伯母さんが田舎へ引取られてお出なされて、小川町のお店をお廢めなされたといふ噂は他處ながら聞いても居ましたれど、私も昔の身でなければ種々と障る事があつてね、お尋ね申すは更なること手紙あける事も成りませんかつた今は何處に家を持つて、お内儀さんも御健勝か、小兒のも出来てか、今も私は折ふし小川町の勤工場見に行まする度毎、舊のお店がそつくり其儘同じ烟草店の能登やといふに成つて居まするを、何時通つても覗かれ、あゝ高坂の鎌さんが子供であつたころ、學校の往復りに寄つては巻烟草のこぼれを貰ふて、生意氣らしう吸立てたものなれど、今は何處に何をして、氣の優しい方なれば此様なむづかしい世に何のやうな世渡りをしてお出なさらうか、それも心に懸りまして、實家へ行く度に御様子、もし知つても居るか聞いては見まするけれど、猿樂町を離れたのは今で五年の前、根

つからお便りを聞く縁がなく、何んなにおなつかしう御座んしたらうと我身のほどをも忘れて問ひかくれば、男は流れる汗を手拭にぬぐふて、お恥かしい身に落まして今は家といふものも御座りませぬ、寢處は淺草町の安宿、村田といふが二階に轉がつて、氣に向いた時は今夜のやうに遅くまで挽く事もありませんし、厭と思へば日がな一日ごろくとして烟のやうに暮して居まする、貴嬢は相變らずの美しくさ、奥様にお成りなされたと聞いた時からそれでも一度は拜む事が出来るか、一生の内に又お言葉を交はす事が出来るかと夢のやうに願ふて居ました、今日までは入用のない命と捨て物に取りあつかふて居ましたけれど命があればこそその御對面、あ、能く私を高坂の録之助と覺えて居て下さりました、辱なう御座りますと下を向くに、阿闍はさめんとして誰れも憂き世に一人と思ふて下さるな。

さてお内儀さんはと阿闍の間へば、御存じで御座りましよ筋向ふの杉田やが娘、色が白いと恰好が何うだとか言ふて世間の人は暗雲に褒めたてた女で御座ります、私が如何にも放蕩をつくして家へとは寄りつかぬやうに成つたを、貰ふべき頃に貰ふ物を貰はぬからだと親類の中、のわからずやが勘違ひして、あれならばと母親が眼鏡にかけ、是非もらへ、やれ貰へと無茶苦茶に勸めたる五月蠅さ、何うなりと成れ、成れ、勝手に成れとて彼れを家へ迎へたは丁度貴

嬢が御懐妊だと聞きました時分の事、一年目には私が處にもお目出たうを他人からは言はれて、犬張子や風車を並べたてるやうに成りましたれど、阿のそんな事で私が放蕩のやむ事か、人は顔の好い女房を持たせたら足が止まるか、子が生れたら氣が改まるかとも思ふて居たのであらうなれど、たとひ小町と西施と手を引いて来て、衣通姫が舞を舞つて見せて呉れても私の放蕩は直らぬ事に極めて置いたを、何で乳くさい子供の顔見て發心が出来ませう、遊んで遊んで遊び抜いて、呑んで呑んで呑み盡して、家も稼業もそつち除けに箸一本もたぬやうに成つたは一昨々年、お袋は田舎へ嫁入つた姉の處に引取つて貰ひまするし、女房は子をつけて實家へ戻したま、音信不通、女の子ではあり惜しいとも何とも思ひはしませぬけれど、其子も昨年の暮靈扶斯に罹つて死んださうに聞きました、女はませた者ではあり、死ぬ際には定めし父様とか何とか言ふたので御座りませう、今年居れば五つになるので御座りました、何のつまらぬ身の上、お話しにも成りませぬ。

男はうす淋しき顔に笑みを浮べて貴嬢といふ事も知りませぬので、飛んだ我まゝの不調法、お乗りなされ、お供をしまする、嘸不意でお驚きなさりましたらう、車を挽くと言ふも名ばかり、何が楽しみに轆轤をにぎつて、何が望みに牛馬の真似をする、錢が貰へたら嬉しいか、

が呑まれたら愉快なか、考へれば何も彼も悉皆厭で、お客様を乗せやうが空車の時だらうが厭となると用捨なく厭に成まする、呆れはてる我ま、男、愛想が盡きるでは有りませぬか、さ、お乗りなされ、お供をしますとすゝめられて、あれ知らぬ中は仕方もなし、知つて其車に乗れますものか、それでも此様な淋しい處を一人ゆくは心細いほどに、廣小路へ出るまで唯道づれに成つて下され、話しながら行きませうとて阿闍は小袷少し引あげて、ぬり下駄のおと是れも淋しげなり。

昔の友といふ中にもこれは忘れぬ由縁のある人、小川町の高坂とて小奇麗な烟草屋の一人息子、今は此様に色も黒く見られぬ男になつては居れども、世にある頃の唐棧ぞろひに小氣の利いた前たれがけ、お世辭も上手、愛敬もありて、年の行かぬやうにも無い、父親の居た時よりは却つて店が賑やかなと評判された利口らしい人の、さてもくの變り様、我身が嫁入りの噂聞え初た頃から、やけ遊びの底ぬけ騒ぎ、高坂の息子は丸で人間が變つたやうな、魔でもさしたか、崇りでもあるか、よもや只事では無いと其頃に聞きしが、今宵見れば如何にも淺ましい身の有様、木賃泊りに居なさんすやうに成らうとは思ひも寄らぬ、私は此人に思はれて、十二年より十七まで明暮れ顔を合せる毎に行々は彼の店の彼處へ坐つて、新聞見ながら商ひする

のと思ふても居たれど、はからぬ人に縁の定まりて、親々の云ふ事なれば何の異存を入れられやう、烟草屋の録さんには思へどそれはほんの子供心、先方からも口へ出して言ふた事はなし、此方は猶さら、これは取とまらぬ夢のやうな戀なるを、思ひ切つて仕舞へ、思ひ切つて仕舞へ、あきらめて仕舞はふと心を定めて、今の原田へ嫁入りの事には成つたれど、其際迄も涙がこぼれて忘れかねた人、私が思ふほどは此人も思ふて、それ故の身の破滅かも知れぬものを、我が此様な丸鬚などに、取すましたるやうな姿をいかばかり面憎く思はれるであらう、ゆめさ

ら左様した樂しらしい身ではなけれども阿闍は振返つて録之助を見やるに、何を思ふか茫然とせし顔つき、時たま逢ひし阿闍に向つてさのみは嬉しき様子も見えざりき。
廣小路に出づれば車もあり、阿闍は紙入れより紙幣いくらか取出して小菊の紙にしほらしく包みて、録さんこれは誠に失禮なれど鼻紙なりとも買つて下され、久し振でお目にかゝつて何か申たい事は澤山あるやうなれど口へ出ませぬは察して下され、では私はお別れに致します、随分からだを厭ふて煩らはぬやうに、伯母さんをも早く安心させておあげなさりますし、陰ながら私も祈ります、何うぞ以前の録さんにお成りなされて、お立派にお店をお開きに成ります處を見せて下され、左様ならばと挨拶すれば録之助は紙づつみを頂いて、お辭儀申す筈なれど貴嬢

のお手より下されたのなれば、難有く頂戴して思ひ出にしまする、お別れ申すが惜しいと言つても是れが夢ならば仕方のない事、さ、お出なされ、私も歸ります、更けては路が淋しう御坐りますぞとて空車引いてうしろ向く、其人は東へ、此人は南へ、大路の柳月のかげに靡いて力なさうの塗り下駄の音、村田の二階も原田の奥も憂きは、互ひの世におもふ事多し。

わかれ道

(上)

お京さん居ますかと窓の戸の外に来て、ことごとくと羽目を敲く音のするに、誰れだえ、もう寐て仕舞つたから明日来てお呉れと嘘を言へば、寐たつて宜いやね、起きて明けてお呉んなさい、傘屋の吉だよ、己れだよと少し高く言へば、いやな子だね此様な遅くに何を言ひに来たか、又お餅のおねだりか、と笑つて、今あけるよ少時辛防おしと言ひながら、仕立かけの縫物に針とめして立つは年頃二十餘りの意氣な女、多い髪の毛を忙しい折からと結び髪にして、少し長めな八丈の前だれ、お召の臺なしな半天を着て、急ぎ足に沓脱へ下りて格子戸に添ひし雨戸を明くれば、お氣の毒さと言ひながらすつと這入るは一寸法師と仇名のある町内の暴れ者、傘屋の吉とて持て餘しの小僧なり、年は十六なれども不圖見る處は一か二か、肩幅せばく顔小さく、目鼻だちはきりりと利口らしけれどいかにも脊の矮ければ人嘲りて仇名はつけゝる、御免なさい、と火鉢の傍へづかゝと行けば、お餅を焼くには火が足りないよ、臺所の火消壺か

ら消し炭を持つて来てお前が勝手に焼いてお喰べ、私は今夜中に此れ一枚を上げねばならぬ、角の質屋の旦那どのが御年始着だからと針を取れば、吉はふんと言つて彼の元頭には惜しい物だ、御初穂を己れでも着て遣らうかと言へば、馬鹿をお言ひでない人のお初穂を着ると出世が出来ないと言ふではないか、今つから伸びる事が出来なくては仕方が無い、其様な事を他處の家でもしては不可よと氣を附けるに、己れなんぞ御出世は願はないのだから他人の物だらうが何だらうが着かぶつて遣るだけが徳さ、お前さん何時か左様言つたね、運が向く時になると己れに糸織の着物をこしらへて呉れるつて、本當に調製へて呉れるかえと眞面目だつて言へば、それは調製へて上げられるやうならお目出度のだもの喜んで調製へるがね、私が姿を見てお呉れ、此様な容体で人さまの仕事をして居る境界ではなからうか、まあ夢のやうな約束さとして笑つて居れば、いゝやなそれは、出来ない時に調製へて呉れとは言はない、お前さんに運の向いた時の事さ、まあ其様な約束でもして喜ばして置いてお呉れ、此様な野郎が糸織ぞろへを被つた處がをかくも無いけれども淋しさうな笑顔をすれば、そんなら吉ちやんお前が出世の時は私にもしてお呉れか、其約束も極めて置きたいねと微笑んで言へば、其奴はいけない、己れは何うしても出世なんぞは爲ないのだから。何故々々。何故でもしない、誰れが来て無理

やりに手を取つて引上げて己れは此處に斯うして居るのがいゝのだ、傘屋の油引きが一番好いのだ、何うで盲目縞の筒袖に三尺を脊負つて産て来たのだらうから、澁を買ひに行く時かすりでも取つて吹矢の一本も當りを取るのが好い運さ、お前さんなぞは以前が立派な人だといふから今に上等の運が馬車に乗つて迎ひに来やすのさ、だけれどもお妾になるといふ謎では無いせ、悪く取つて怒つてお呉んなさるな、と火なぶりをしながら身の上を歎くに、左様馬車の代りに火の車でも来るであらう、随分胸の燃える事があるからねと、お京は尺を杖に振返りて吉三が顔を諦視りぬ。

例の如く臺所から炭を持出して、お前は喰ひなさらないかと聞けば、いゝえ、とお京の頭をふるに、では己ればかり御馳走さまにならうかな、本當に自家の吝嗇奴めやかましい小言ばかり言やがつて、人を使ふ法をもし知りやがらない、死んだお老婆さんはあんなのでは無かつたけれど、今度の奴等と来た一人として話せるのは無い、お京さんお前は自家の半次さんを好きか、随分厭味に出来あがつて、いゝ氣の骨頂の奴ではないか、己れは親方の息子だけれど彼奴ばかりは何うしても主人とは思はれない、番ごと喧嘩をして遣り込めてやるのだが随分おもしろいよと話しながら、鐵網の上へ餅をのせて、お熱々と指先を吹いてかゝりぬ。

己れは何うもお前さんの事が他人のやうに思はれぬは何ういふものであらう、お京さんお前は弟といふを持つた事は無いのかと問はれて、私は一人子で同胞なしだから弟にも妹にも持つた事は一度も無いと言ふ、左様なあ、それでは矢張何でも無いのだらう、何處からか斯うお前のやうな人が己れの眞身の姉さんだと言つて出て来たら何んなに嬉しいか、首つ玉へ嚙り着いて己れはそれぎり往生しても喜ぶのだが、本當に己れは木の股からでも出て来たのか、ついでに親類らしい者に逢つた事も無い、それだから幾度も幾度も考へては己れはもう一生誰れにも逢ふ事が出来ない位なら今のうち死んで仕舞つた方が氣樂だと考へるがね、それでも怒があるから可笑しい、ひよつくり變てこな夢なんかを見てね、平常優しい事の一言も言つて呉れる人が母親や父親や姉さんや兄さんのやうに思はれて、もう少し生きて居やうかしら、もう一年も生きて居たら誰れか本當の事を話して呉れるかと楽しんでね、面白くも無い油引きをやつて居るが己れ見たやうな變な物が世間にも有るだらうかねえ、お京さん母親も親父も空つきり當が無いのだよ、親なしで産れて来る子があらふか、己れは何うしても不思議でならない、と焼あがりし餅を両手でたぐさつゝいつとも言ふなる心細さを繰返せば、それでもお前笹づる錦の守り袋といふやうな證據は無いのかえ、何か手懸りは有りさうなものだねとお京の言ふを消し

て、何其様な氣の利いた物は有りさうにもしない生れると直さま橋の袂の貸赤子に出されたのだなど、朋輩の奴等が悪口をいふが、もしかすると左様かも知れない、それなら己れは乞食の子だ、母親も親父も乞食かも知れない、表を通る襦袢を下げた奴が矢張己れが親類まで毎朝きまつて貰ひに来る跛隻眼のあの婆あ何か己れの爲の何に當るか知ればはしない、話さないでもお前は大抵知つて居るだらうけれど今の傘屋に奉公する前は矢張己れは角兵衛の獅子を冠つて歩いたのだからと打しをれて、お京さん己れが本當に乞食の子ならお前は今までのやうに可愛がつては呉れないだらうか、振向いて見れば呉れまいねと言ふに、申慮をお言ひでないお前が何のやうな人の子で何んな身かそれは知らないが、何だからとつて厭がるも厭がらないも言ふ事は無い、お前は平常の氣に似合ぬ情ない事をお言ひだけれど、私が少しもお前の身なら非人でも乞食でも構ひはない、親が無からうが兄弟が何うだらうが身一つ出世をしたらば宜からう、何故其様な意氣地なしをお言ひだと勵ませば、己れは何うしても駄目だよ、何にも爲やうとも思はない、と下を向いて顔をば見せざりき。

(中)

今は亡せたる傘尾の先代に太つ腹の松つて一代に身上をあげたる、女相撲のやうな老漢様のりき、六年前の冬の事寺参りの歸りに角兵衛の子供を拾ふて来て、いゝよ親方からやかましく言つて来たら其時の事、可愛想に足が痛くて歩かれないと言ふと朋輩の意地悪が置去りに捨てて行つたと言ふ、其様な處へ歸るに當るものか些とも怕かない事は無いから私が家に居なさい、みんなも心配する事は無い何の此子位のもの二人や三人や臺所へ板を並べてお飯を喰べさせるに文句が入るものか、判證文を取つた奴でも驅落をするもあれば持逃げの吝な奴もある、料簡次第のものだわな、いは馬にも乗つて見ろさ、役に立つか立ないか、置いて見なけりや知れはせん、お前新網へ歸るが厭なら此家を死場と極めて骨を折らなきやならないよ、しつかり遣つてお呉れと言ひ含められて、吉や〜と夫れよりの丹精今油ひきに、大人三人前を一手に引うけて鼻唄交り遣つて退ける腕を見るもの、流石に眼鏡と亡き老婆をほめける。

思ある人は二年目に亡せて今の主も内儀様も息子の半次も氣に喰はぬ者のみなれど、此處を死場と定めたるれば厭として更に何方に行くべき、身は疳癩に筋骨つまつてか人よりは一寸法師一寸法師と誹らるゝも口惜しきに、吉や手前は親の日に腥さを喰たであらう、ざまを見ろ廻りの廻りの小佛と朋輩の鼻垂れに仕事の上に仇を返されて、鐵拳に撲倒す勇氣はあれども誠に父

母いかなる日に失せて何時を精進日とも心得なき身の、心細き事を思ふては干場の傘のかげに隠れて大地を枕に仰向き臥してはこぼるゝ涙を吞込みぬる悲しさ、四季押通し油びかりする目くら縞の筒袖を振つて火の玉のやうな子だと町内に恐がられる亂暴も慰むる人なき胸苦しきの餘り、假にも優しい言ふて呉れる人もあれば、しがみ附いて取つて離れがたなき思ひなり。仕事屋のお京は今年の春より此裏へと越して來し者なれど物事に氣才の利きて長屋中への交際もよく、大屋なれば傘屋の者へは殊更に愛想を見せ、小僧さん達着る物のほころびでも切れたなら私の家へ持つてお出、お家は御多人數お内儀さんの針持つていらつしやる暇はあるまじ、私は常住仕事疊紙と首つ引の身なればほんの一針造作は無い、一人住居の相手なしに毎日毎夜さびしくつて暮して居るなれば手すきの時には遊びにも來て下され、私は此様ながら〜した氣なれば吉ちやんのやうな暴れさんが大好き、疳癩がおこつた時には表の米屋が白犬を擲ると思ふて私の家の洗ひかへしを米澤出しの小槌に、礎うちでも遣りに來て下され、それならばお前さんも人に憎まれず私の方でも大助かり、ほんに兩爲で御座んすほどにと戲言まじり何時となく心安く、お京さんお京さんとして入浸るを職人など挑發ては帯屋の大將のあちらこちらの桂川の幕が出る時はお半の脊に長右衛門と唱はせて彼の帯の上へちよこなんと乗つて出るか、此

奴は好いお茶番だと笑はれるに、男なら真似て見ろ、仕事やの家へ行つて茶棚の奥の菓子鉢の中に、今日は何が何筒あるまで知つて居るのは恐らく己れの外には有るまい、質屋の元頭めお京さんに首つたげで、仕事を頼むの何が何うしたとか小うるさく這入込んで前だれの半襟の帯つ皮のと附届をして御機嫌を取つては居るけれど、つひしか喜んだ挨拶をした事が無い、ましてや夜でも夜中でも傘屋の吉が来たときへ言へば寝間着のまゝで格子戸を明けて、今日は一遊びに来なかつたね、何うかお爲か、案じて居たにと手を取つて引入られる者が他にあらうか、お氣の毒様なこつたが獨活の大木は役にたつない、山椒は小粒で珍重されると高い事をいふに、此野郎めと脊を酷く打たれて、有がたう御座いますと澄まして行く顔つき身長さへあれば人串戯として恕すまじけれど、一寸法師の生意氣と爪はじきして好い鬨りものり煙草休みの話しの種なりき。

(下)

十二月三十日の夜、吉は坂上の得意場へ詭への日限の遅れしを詫びに行きて、歸りは懐手の急ぎ足、草履下駄の先にかゝるものは面白づくに蹴かへして、ころ／＼と轉げるを右に右に追ひ

かけては大溝の中へ蹴落して一人から／＼の高笑ひ、聞く者なくて天上のお月さま宛も皓々と照し給ふを寒いといふ事知らぬ身なれば唯こゝちよく爽かにて、歸りは例の窓を敲いてと目算ながら横町を曲れば、いきなり後より追ひすがる人の、兩手に目を隠して忍び笑ひをするに、誰れだ誰れだと指を撫で、何だお京さんか、小指のまむしが物を言ふ、嚇かしても駄目だよと顔を振のけるに、憎らしい當てられて仕舞つたと笑ひ出す。お京はお高祖頭巾眉深に風通の羽織着て例に似合ぬ美き粧なるを、吉三は見あげ見おろして、お前何處へ行きなすつたの、今日明日は忙がしくしてお飯を喰べる間もあるまいと言ふたではないか、何處へお客様にあるいて居たのと不審を立てられて、取越しの御年始さと素知らぬ顔をすれば、嘘を言つてるせ三十日の年始を受ける家は無いやな、親類へでも行きなすつたかと問へば、とんでもない親類へ行くやうな身に成つたのさ、私は明日あの裏の移轉をするよ、あんまりだしぬけだから嘘お前おどろくだらうね、私も少し不意なのでまだ本當とも思はれない、兎も角喜んでお呉れ悪い事では無いからと言ふに、本當か、本當かと吉は呆れて、嘘では無いか串戯では無いか、其様な事を言つておごかして呉れなくても宜い、己れはお前が居なくなつたら少しも面白い事は無くなつて仕舞ふのだから其様な厭な戲言は廢しにしてお呉れ、え、詰らない事を言ふ人だと頭をふ

るに、嘘ではないよ何時かお前が言つた通り上等の運が馬車に乗つて迎ひに来たといふ騒ぎだから彼處の裏には居られない、吉ちやん其うちに糸織ぞろひを調製へて上るよと言へば厭だ、己れは其様な物は貰ひたくない。お前その好い運といふは詰らぬ處へ行かうといふのではないか、一昨日自家の半次さんが左様言つて居たに、仕事やお京さんは八百屋横町に按摩をして居る伯父さんが口入れて何處のお邸へ御奉公に出るのださうだ、何お小間使ひといふ年ではなし、奥さまのお側やお縫物師の譯はない、三つ輪に結つて總の下つた被布を着るお妾さまに相違はない、何うしてあの顔で仕事やが通せるものかと此様な事を言つて居た、己れは其様な事は無いと思ふから、間違ひだらうと言つて大喧嘩を遣つたのだが、お前もしや其處へ行くのでは無いか、其お邸へ行くのであらう、と問はれて、何も私だとして行きたい事は無いけれど行かなければならないのさ、吉ちやんお前にもう逢はれなくなるねえ、とて唯言ふことながら萎れて聞ゆれば、どんな出世に成るのか知らぬが其處へ行くのは廢したが、宜からう何もお前女口一つ針仕事で通せない事もなからう、あれほど利く手を持つて居ながら何故つまらない其様な事を始めたのか、あんまり情ないではないかと吉は我身の潔白に較べて、お慶しよ、お慶しよ、斷つてお仕舞なと言へば、困つたねとお京は立止まつて、それでも吉ちやん私は洗ひ張

に倦きが来て、もうお妾でも何でも宜い、何うで此様な詰らないづくめだから、いつその腐れ縮緬着物で世を過ごさうと思ふのさ。
 思ひ切つた事を我れ知らず言つてはと笑ひしが、兎も角も家へ行かうよ、吉ちやん少しお急ぎと言はれて、何だか己れは根柢から面白いとも思はれない、お前まあ先へお出よと後に附いて、地上に長き影法師を心細げに踏んで行く、いつしか傘屋の路次を入つてお京が例の窓下に立てば、此處をば毎夜音づれて呉れたのなれど、明日の晩はもうお前の聲も聞かれない、世の中つて厭なものだねと歎息するに、それはお前の心がらだとして不満らしう吉三の言ひぬ。
 お京は家に入るより洋燈に火を點して、火鉢を掻きおこし、吉ちやんやお焙りよと聲をかけるに己れは厭だと言つて柱際に立つて居るを、それでもお前寒からうではないか風を引くといけなないと氣を附ければ、引いても宜いやね、構はずに置いてお呉れと下を向いて居るに、お前は何かおしか、何だか可笑しな様子だね私の言ふ事が何か疝にでも障つたの、それなら其やうに言つて呉れたが宜い、黙つて其様な顔をして居られると氣に成つて仕方が無いと言へば、氣になんぞ懸けなくてもいよ、己れも傘屋の吉三だ女のお世話には成らないと言つて、凭かゝりし柱に脊を擦りながら、あゝ詰らない面白くない、己れは本當に何と言ふのだらう、いろいろ

ろの人が鳥度好い顔を見せて直様つまらない事に成つて仕舞ふのだ、傘屋の先のお老婆さん、善い人であつたし、紺屋のお絹さんといふ縮れつ毛の人も可愛がつて呉れたのだけれど、お老婆さんは中風で死ぬし、お絹さんはお嫁に行くを厭がつて裏の井戸へ飛込んで仕舞つた、お前は不人情で己れを捨て、行くし、もう何も彼もつまらない、何だ傘屋の油ひきなんぞ、百八前の仕事をしたからとつて褒美の一つも出やうでは無し、朝から晩まで一寸法師の言はれついで、それだからと言つて一生経つても此身長が延びやうかい、待てば甘露といふけれど己れなんぞは一日々々厭な事ばかり降つて來やがる、一昨日半次の奴と大喧嘩をやつて、お京さんばかりは人の妾に出るやうな、胸の腐つたのではないと威張つたに、五日とた、すに兜をぬがなければ成らないのであらう、そんな嘘つ吐きの、ごまかしの、慾の深いお前さんを姉さん同様に思つて居たが口惜しい、もうお京さんお前には逢はないよ、何うしてもお前には逢はないよ、長々御世話さま此處からお禮を申します、人をつけ、もう誰の事も當てにするものか、左様なら、と言つて立あがり沓ぬぎの草履下駄足に引かくるを、あれ吉ちやんそれはお前勘違ひだ、何も私が此處を離れるとお前を見捨てる事はしない、私はほんとに兄弟とばかり思ふのだ、其様な愛想づかしは酷からうと、後から羽がひじめに抱き止めて氣の早い子だねとお京の

論せばそんなら、お妾に行くを廢めにしなさるかと振かへられて、誰れも願ふて行く處では無いけれど、私は何うしても斯うと決心して居るのだからそれは折角だけれど肯かれないよと言ふに、吉は涙の眼に見つめて、お京さん後生だから此肩の手を放しておくんない。

(この篇はもさ國民之友に出したるものなり今回全集に加へんことを懇願したるに民友社は喜んでこれを承諾せられたり記して以て同社が好意を謝す 著者遺族)

うらむらさき

(上)

夕暮の店先に郵便脚夫が投込んで行きし女文字の書状一通、炬燵の間の洋燈のかけに讀んで、くるくると帯の間へ巻收むれば起居に心の配られて物案じなる事一通りならず、おのづと色に見えて、結構人の旦那どの、何うぞしたかとお問ひのかゝるに、いえ、格別の事でも御座りませうまいけれど、仲町の姉が何やら心配の事が有るほどに、此方から行けば宜いのなれど、やかましや、良人が暇といふては毛筋はとも明けて呉れぬ五月蠅さ、夜分なりと歸りは此方から送らせうはどにお良人に願ふて鳥渡來て呉れられまいか、待つて居る、と云ふ文面で御座ります、又まゝ娘と紛紜でも起りましたのか、氣の狭い人なれば何事も口には得言はで、たんと胸を痛くするが彼の人の性分、困りもので御座ります、とて態との高笑ひをして聞かせれば、さて扱氣の毒なと太い眉を寄せて、お前にすればたつた一人の同胞、善惡ともに分けて聞かねばならぬ役を笑ひ事にしては置かれまい、何事の相談か行つて様子を見たらば宜からう、女は

氣の狭いもの、待つと成つては一時も十年のやうに思はれるであらうを、お前の懈りを私の故に取られて恨まれても徳の行かぬ事、夜は格別の用も無し、早く行つて聽いて遣るがよからう、と可愛き妻が姉の事なれば、優しき許しの願はずして出るに、飛立つはと嬉しいを此方は態と色にも見せず、では行きませうかと不勝々々に箆筒へ手を懸れば、不實な事を言はずと早く行つて遣れ先方は何ればと待つて居るか知ればせぬぞ、と知らぬ事なれば佛性の旦那どの急ぎ立つるに、心の鬼やおのづと面ばてりして、胸には動悸の波たかゝり、糸織の小袖を重ねて、縮緬の羽織にお高祖頭巾、背の高き人なれば夜風を厭ふ角袖外套のうつり能く、では行つて來ますと店口に駒下駄直させながら、太吉、太吉と小僧の背を人さし指の先に突いて、お舟こぐ真似に精の出で店の品をばちよろまかされぬやうにしてお呉れ、私の歸りが遅いやうなら構はずと戸をば下して、行火へ焙るならいつまでも床の中へ入れて置いては成らないぞえ、さんは臺處の火のものを心づけて、旦那のお枕もとへは例の通りお湯わかしにお煙草盆、忘れぬやうにして御不自由させますな、成るだけ早くは歸らうけれど、と硝子戸に手をかくれば、旦那どの聲をかけて車を言いてやらぬか、何うで歩いては行かれまいにと甘えるき言葉、何の商人の女房が店から車に乗出すは榮耀の沙汰で御座ります、其處らの角から能

いほせに直切つて乗つて参りましよ、これでも勘定は知つて居ますに、と可愛らしい聲にて笑へば、世帯じみた事と旦那どのが恐悦顔、見ぬやうにして妻は表へ立出でしが大空を見上げてはつと息を吐く時、曇れるやうの面もちいと雲深く成りぬ。
何處の姉様からお手紙が来やうぞ、眞赤な嘘をと我家の見返られて、何事も御存じなしによいお顔をして暇を下さる勿躰なさ、あのやうな毒の無い、物疑ひといふては露ほどもお持ちなさらぬ心のうつくしい人を、能うも能うも舌三寸に欺しつけて心のまゝの不義放埒、これがまわりの女房の所業であらうか、何といふ悪者の、人でなしの、法も道理も無茶苦茶の犬畜生のやうな心であらう、此様ないたづらの畜生をば、御存じの無い事とて天にも地にも無いかのやうに可愛がつて下すつて、私が事と言へば御自分の身を無い物にして言葉を立てさせて下さる思召、有難い嬉しい恐ろしい、餘りの勿躰なさに涙がこぼれる、あのやうな良人を持つ身の何が不足で劍の刃渡りするやうな危険の計較をするのやら、可愛さうにあの人の好い仲町の姉さんまでを引合ひにして三方四方嘘で固めて、此足はまわ何處へ向く、思へば私が悪黨人でなし、いたづら者の不義者の、まわ何といふ心得違ひ、と辻に立つて歩みも得やらす、横町の角二つ曲りて今は我家の軒は見えぬを、振かへりては熱き涙のはらくとこぼれぬ。

良人の名は小松原東次郎、西洋小間物の店は名ばかりに、有あまる身代を藏の中に寐かして、さりとは當世の算用知らぬ人よし男に、戀女房の律が手ばしこさ奥も表も平手に揉んで、美くしい眠に良人が立つ腹をも柔げれば、可愛らしい口元から客様への世辭も出る、年もねつから行きなさらぬにね伶俐な内儀さまと見るほどの人褒め物の、此人此身が裏道の働き、人は知らじと自ら晦ませども、優しき良人が心ざし生憎はる心地して律は路傍に立すくみしまゝ、行くまいか行くまいか、寧思ひ切つて行くまいか、今日までの罪は今日までの罪、今から私が氣さへ改めれば、彼のれ人としてさのみ未練は仰しやるまじく、ね互ひに清いた交際をして人知らぬうちに汚れを雪いで仕舞つたなら、今から後のあの方の爲、私の爲、生中がれて附纏ふたとて、晴れて添はれる中ではなし、可愛い人に不義の名を着せて少しも是れが世間に知れたら何とせう、私は兎も角あの方はこれからの御出世前一生を暗黒にさせましてそれで私は満足に思はれやうか、ね、厭な事恐ろしい、何と思ふて私は逢ひに出て来たか、よしやれ文が千通来やうと行さへせねばね互ひ疵には成るまいもの、もう思ひ切つて歸りませう、歸りませう、歸りませう、歸りませう、ぬ、もう私は思ひ切つたと路引違へて駒下駄を返せば、生憎夜風の身に寒く、夢のやうなる考へ又もやふつと吹破られて、ぬ、私は其やうな心弱い事に

引かれてならうか、最初あの家に嫁入する時から、東次郎ごのを良人と定めて行つたのでは無いものを、形は行つても心は決して遣るまいと極めて置いたを、今更に成つて何の義理は、悪人でも、いたづらでも構ひは無い、た氣に入らずば捨てなされ、捨てられれば結句本望、あのやうな愚物様を良人と奉つて吉岡さんを袖にするやうな考へを、何故しばらくでも持たのであらう、私の命が有る限り、逢ひ通しましよ切れますまい、良人を持たうと奥様は出来なさうと此約束は破るまいと言ふて置いたを、誰れが何のやうに優しからうと、有難い事を言ふて呉れやうと、私の良人は吉岡さんの外には無いものを、もう何事も思ひますまい思ひますまいとて頭巾の上から耳を押へて急ぎ足に五六歩かけ出せば、胸の動悸のいつしか絶えて、心静かに氣の牙はて色なき唇には冷かなる笑みさへ浮びぬ。

たけくらべ

(一)

廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お齒ぐる溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明けくれないの車の往來にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は佛くさけれど、さりとて陽氣の町と住みたる人の申しき、三島神社の角をまがりてよりこれぞと見ゆる家もな、かたよく檐端の十軒長屋二十軒長屋、商ひはかつつ利かぬ處として半さしたる雨戸の外に、あやしき形に紙を切りなして、胡粉ぬりくり彩色のある田樂みるやう、裏にはりたる串のさまもをかし、一軒ならず二軒ならず、朝日に干して夕日に仕舞ふ手當ことなくしく、一家内これにかゝりてそれは何ぞと問ふに、知らずや霜月酉の日例の神社に慾深様のかつき給ふ是れぞ熊手の下ごしらへといふ、正月門松とりすつるよりかゝりて、一年うち通しの夫れは誠の商賣人、片手わざにも夏より手足を色どりて、新年着の支度もこれをば當てぞかし、南無や大鳥大明神、買ふ人にさへ大福をあたへ給へば製造もとの我等萬倍の利益をと人ごちに言ふめれど、

さりとは思ひのほかなるもの、此あたりに大長者の噂も聞かざりき、住む人の多くは廓者にて良人は小格子の何とやら、下足札そろへてがらんがらん音もいそがしや夕暮より羽織引かけて立出づれば、うしろに切火打かくる女房の顔もこれが見納めか十人ぎりの側杖無理情死のしそこね、恨みはかゝる身のはて危く、すはと言は命がけの勤めに遊山らしく見ゆるもをし、娘は大籠の下新造とやら、七軒の何屋が客廻しとやら、提燈さげてちよこちよこ走りの修業、卒業して何にかなる、とかくは檜舞臺と見立つるもをかしからずや、垢ぬけのせし三十あまりの年増、小ざつぱりとせし唐棧ぞろひに紺足袋はきて、雪駄ちやらく忙がしげに横抱きの小包は問はでもゑるし、茶屋が棧橋とんと沙汰して、廻り遠や此處からあげまする、誂へ物の仕事やさんと此あたりには言ふぞかし、一體の風俗よそと變りて、女子の後帯きちんとせし人少く、がらを好みて廣巾の巻帯、年増はまだよし、十五六の小頼なるが酸漿ふくんで此姿はと目をふさぐ人もあるべし、處がら是非もなや、昨日河岸店に何紫の源氏名耳に残れど、けふは地廻りの吉と手馴れぬ焼鳥の夜店を出して、身代たゞ骨になれば再び古樂への内儀姿、どこやら素人よりは見よげに覺えて、これに染まらぬ子供もなし、秋は九月仁和賀の頃の大路を見給へ、さりとは能くも學びし露八が物真似、榮喜が所作、孟子の母やおどろかん上達の速

かさ、うまいと褒められて今宵も一廻りと生意氣は七つ八つよりつりて、やがては肩に置手ぬぐひ、鼻歌のそゝり節、十五の少年がませかた恐ろし、學校の唱歌にもぎつちよんちよんと拍子を取りて、運動會に木やり音頭もなしかねまじき風情、さらでも教育はむづかしきに教師の苦心さこそと思はるゝ入谷ちかくに育英舎とて、私立なれども生徒の数は千人近く、狭き校舎に目白押の窮屈さも教師が人望いよくあらはれて、唯學校と一口にて此あたりには呑み込みのつく程なるがあり、通ふ子供の數々に或は火油煮人足、おとつさんは列番の番屋に居るよと習はずして知る其道のかしこさ、梯子のりのまねびにアノ忍びがへしを折りましたと訴へつべこべ、三百といふ代言の子もあるべし、お前の父さんは馬だねえと言はれて、名のりや辛子子心にも顔あからめるしほらしさ、出入りの娼家の秘藏息子寮住居に華族さまを氣取りて、ふさ附き帽子面もちゆたかに洋服かるくと花々しきを、坊ちやん坊ちやんとて此子の追従するもをかし、多くの中に龍華寺の信如とて、千筋となづる黒髪も今幾歳のさかりにか、やがては墨染にかへぬべき袖の色、發心は腹からか、坊は親ヅりの勉強ものあり、性來おとなしきを友達いふせく思ひて、さまざまの悪戯しかけ、猫の死骸を繩にくくりてお役目なれば引違をたのみますと投げつけし事もありしが、それは昔、今は校内一人とて苟にも侮りての戸業は

なかりき、歳は十五、並脊にていが栗の頭髮も思ひなしか俗とは變りて、藤本信如と訓にてすませど、何處やら釋といひたげの素振なり。

(二)

八月廿日は千束神社のまつりとして、山車屋臺に町々の見得をはりて土手をのぼりて廓内までも入込まんず勢ひ、若者が氣組み思ひやるべし、聞かぢりに子供とて油斷のなりがたき此あたり
のなれば、そろひの浴衣は言はでものこと、銘々に申合せて生意氣のありたけ、聞かば膽もつ
ぶれぬべし、横町組と自らゆるしたる亂暴の子供大將に頭の長とて歳も十六、仁和賀の鐵棒に
親父の代理をつとめしより氣位えらくなりて、帯は腰の先に、返事は鼻の先にていふものと定
め、にくらしき風俗、あれが頭の子でなくばと意人足が女房の蔭口に聞えぬ、心一ぱいに我が
まゝを通して身に合はぬ巾をも廣げしが、表町に田中屋の正太郎とて歳は我れに三つ劣れど、
家に金あり身に愛敬あれば人も憎まぬ當の敵あり、我れは私立の學校へ通ひしを、先方は公立
なりとて同じ唱歌も本家のやうな顔をしをる、去年も一昨年も先方には大人の末社がつきて、
まつりの趣向も我れよりは花を咲かせ、喧嘩に手出しのなりがたき仕組みもありき、今年又も

や負けにならば、誰れだと思ふ横町の長吉だぞと平常の力だては空るばかりとけなされて、辨
天ばりに水およぎの折も我が組になる人は多かるまし、力を言はゞ我が方がつよけれど、田中
屋が柔れぶりにごまかされて、一つは學問が出来をるを恐れ、我が横町組の太郎吉、三五郎な
ど、内々は彼方がたに成りたるも口惜し、まつりは明後日、いよく我が方が負け色と見え
らば、破れかぶれに暴れて暴れて、正太郎が面に疵一つ、我れも片眼片足なきものと思へば爲
やすし、加擔人は車屋の丑に元結よりの文、手遊屋の彌助などあらば引けは取るまし、おゝそ
れよりは彼の人の事彼の人の事、伊本のならば宜き智慧も貸してくれんと、十八日の暮れちか
く、物のへば眼口にうるさき蚊を拂ひて竹村しげき龍華寺の庭先から信如が部屋へのそりのそ
りと、信さん居るか顔を出しぬ。
己れの爲る事に亂暴だと人がいふ、亂暴かも知れないが口惜しい事は口惜しいや、なぬ聞いと
くれ信さん、去年も己れが處の末弟の奴と正太郎組の短小野郎と萬燈のたゝき合ひから始まつ
て、それといふと奴の仲間がばらばらと飛出しやあがつて、どうだらう小さな者の萬燈を打て
わしちまつて、胴揚にしやがつて、見やがれ横町のさまをと一人がいふと、間拔に脊のたかい
大人のやうな面をして居る團子屋の頼馬が、頭もあるものか尻尾だ尻尾だ、豚の尻尾だなんて

悪口を言つたとき、己らあ其時千束様へねり込んで居たもんだから、あとで聞いた時に直様仕
 かへしに行かうと言つたら、父さんに頭から小言を喰つて其時も泣き入、一昨年はそらね、お
 前も知つてる通り筆屋の店へ表町の若い衆が寄合て茶番か何かやつたらう、あの時己れが見に
 行つたら、横町は横町の趣向がありませうなんて、をつな事を言ひやがつて、正太ばかり客に
 したのも胸にあるわな、いくら金があるとつて質屋のくづれの高利貸か何たら様だ、あんな奴
 を生して置くより擲きころす方が世間のためだ、己らあ今度の祭りには如何しても亂暴に仕掛
 けて取かへしを附けやうと思ふよ、だから信さん友達に、それはお前が厭だといふのも知
 れてるけれども何卒己れの肩を持つて、横町組の恥をすゝのだから、ね、おい、本家本元の
 唱歌だなんて威張りを正太郎を取ちめて呉れないか、己れが私立の鞭ばけ生徒といはれ、ば
 お前の事も同然だから、後牛だ、どうぞ、助けると思つて大萬燈を振廻しておくれ、己れは心
 から底から口惜しくつて、今度負けたら長吉の立端は無いと無茶にくやしがつて大幅の肩をゆ
 すりぬ。だつて僕は弱いもの。弱くても宜いよ。萬燈は振廻せないよ。振廻さなくても宜いよ。
 僕が這入ると負けるが宜いかえ。負けても宜いのだ、それは仕方が無いと諦めるから、お前は
 何も爲ないで宜いから唯横町の組だといふ名で、威張つてさへ呉れると豪氣に人氣がつくから

ね、己れは此様な没分曉漢だのにお前は學が出来るからね、向ふの奴が漢語か何かで冷かして
 も言つたら、此方も漢語で仕返しておくれ、あ、好い心持ださつぱりしたお前が承知をしてく
 れ、ばもう千人力だ、信さん難有うと常に無い優しき言葉も出づるものなり。

一人は三尺帯に突かけ草履の仕事師の息子、一人はかわ色金巾の羽織に紫の兵子帯といふ坊
 様仕立、思ふ事はうらはらに、話しは常に喰ひ違ひがちなれど、長吉は我が門前に産聲を揚げ
 しものと大和尚夫婦が最負もあり、同じ學校へかよへば私立々々となされるも心わるきに、
 元來愛敬のなき長吉なれば心から味方につく者もなき憐れさ、先方は町内の若い衆をもまで
 尻押をして、ひがみでは無し長吉が負けを取ること罪は田中屋方に少からず、見かけて頼まれ
 し義理としても厭とは言ひかねて信如、それではお前の組になるさ、なるといつたら嘘は無い
 が、成るべく喧嘩は爲ぬ方が勝だよ、いよく先方が賣りに出たら仕方が無い、何いさと言へ
 ば田中の正太郎位小指の先さと、我が力の無いは忘れて、信如の机の抽斗から京都みやげに貰
 ひたる、小鍛冶の小刀を取出して見すれば、よく切れさうだねえと覗き込む長吉が顔、あぶな
 し此物を振廻してなることか。

(三)

解かば足にもとやくべき髪を、根あがり堅くつめて前髪大きく留おもたげの、緒熊といふ名は恐ろしけれど、これを此頃の流行とて良家の令嬢も遊ばさるゝぞかし、色白に鼻筋とほりて、口もとほ小さからねど締りたれば醜からず、一つ一つに取たてゝは美人の鑑に越けれど、物いふ聲の細く清しき、人を見る目の愛敬あふれて、身のこなしの活々したるは、快きものなり、柿色に蝶鳥を染めたる大形の浴衣きて、黒縹子と染分絞りの晝夜帯胸だかに、足にはぬり木履こゝらあたりにも多くは見かけぬ高きをはきて、朝湯の歸りに頸筋白々と手拭さげたる立姿を、今三年の後に見たしと廓がへりの若者は申しき、大黒屋の美登利とて生國は紀州、言葉のいさゝか訊れるも可愛く、第一は切れ離れよき氣象を喜ばぬ人なし、子供に似合ぬ銀貨入れの重きも道理、姉なる人が全盛の餘波、延いては道手新造が姉への世辭にも、美いちゃん人形をお買ひなされ、これはほんの手鞠代と、呉れるに恩を着せねば貰ふ身の有がたくも覺えず、まきはまくは、同級の女生徒二十人に揃ひのこむ鞠を興へしはおろかの事、調染の筆やに店さらしの手遊を買しめて悦ばせし事もあり、さりとて日々夜々の散財此歳この身分にて叶ふべきにあら

ず、末は何となる身ぞ、両親ありながら大口に見てあらし詞をかけたる事も無く、櫻の主が大切がる様子も怪しさに、聞けば舞女にもあらず親戚にてはもとより無く、姉なる人が身賣りの當時、鑑定に來りし櫻の主が誘ひにまかせ、此地に活計もとひとて親子三人が旅衣、たち出てしは此際、それより奥は何なるや、今は寮のあづかりをして母は遊女の仕立物、父は小格子の書記に成りぬ、此身は遊藝手藝學校にも通はせられて、其ほかは心のまゝ、半日は姉の部屋、半日は町に遊んで見聞くは三味に太鼓にあげ紫のなり形、はじめ藤色絞りの半纏を袷にかけ、着て歩きしに、田舎者あなかと町内の娘どもに笑はれしを口惜しがりて、三日三夜泣きつゞけし事もありしが、今は我れより人々を嘲りて、野暮な姿と打つけの悪まれ口を、言ひ返す者もなくなりぬ。二十日はお祭りなれば心一ぱい面白し事をしてと友達のせがむに、趣向は何なりと各自に工夫して大勢の好い事がいゝてはないか、幾金でもない、私が出すからとて例の通り勘定なしの引受けに、子供仲間の女王様又とあるまじき悪みは大人よりも利きが早く、茶番にしやう、何處のか店を借りて往來から見えるやうにしてと一人が言へば、馬鹿を言へ、それよりはお神輿をこしらへてお呉れな、蒲田屋の奥に飾つてあるやうな本當のを、重くても構ひはしない、やつちよいやつちよい譯なしだと振動巻をする男子の傍から、それでは私たちが詰

らない、皆が騒ぐを見るばかりでは美登利さんだと面白くはあるまい、何でも前の好い物に申しよと、女の一ひれは祭りを扱さに常盤屋をと、言ひたげの口振をかし、田中の正太は可愛らしい眼をぐるぐると動かして、幻燈にしないか、幻燈に、己れの處にも少しは有るし、足りないのを美登利さんに買つて貰つて、筆やの店でやらうてはないか、己れが映し入て横町の三五郎に口上を言はせやう、美登利さんそれにしないかと言へば、あゝそれは面白からう、三ちゃんの上ならば誰れも笑はずには居られまい、序にあの顔がうつると猶あもしろいと相談はとゝのひて、不足の品を正太が買物役、汗になりて飛び廻るもをかし、いよく明日となりては横町までも其沙汰聞えぬ。

(四)

打つや鼓のしらべ、三味の音色に事かぬ場處も、祭りは別物、酉の市を除けては一年一度の賑ひぞかし、三島さま小野照さま、お隣社づから負けまじの競ひ心をかしく、横町も表も揃ひは同じ真岡木綿に町名くつしを、去歲よりはよからぬ形とつぶやくもありし、くらなし染の麻だすき成る程太きを好みて、十四五より以下なるは、連麩、木兎、犬はり子、さまぐの玉

遊を数多きほど見得にして、七つ九つ十一着くるもあり、大鈴小鈴音中にならつかせて、驅け出す足袋はだしの勇ましく可笑し、群れを離れて田中の正太が赤筋入りの印半太、色白の頸筋に紺の腹がけ、さりとは見なれぬ扮粧とおもふに、しどいて締めし帯の水浅黄も 見よや縮緬の上染、襟の印のあたりも際立ちて、うしろ鉢巻に山車の花一枝、革緒の雪駄おとのみはすれど、馬鹿ばやしの仲間には入らざりき、夜宮は事なく過ぎて今日一日の日も夕ぐれ、筆やが店に寄合ひしは十二人、一人かけたる美登利が夕化粧の長さに、未だか未だかと正太は門へ出つ入りつして、呼んで来い三五郎、お前はまた大黒屋の寮へ行つた事があるまい、庭先から美登利さんと言へば聞える筈、早く、早くと言ふに、それならば己れが呼んで来る、萬燈は此處へあづけて行けば誰れも蠟燭ぬすむまい、正太さん番をたのむとあるに、吝嗇な奴め、其手間で早く行くと我が下下に叱られて、おつと来たさの次郎左衛門、今の間とかけ出して韋駄天とはこれをや、あれあの飛びやうが可笑しいとて見送りし女子どもの笑ふも無理ならず、横ぶとりして春ひく、頭の形は才槌とて頸みちかく、振ひけての面を見れば出頼の獅子鼻、反齒の三五郎といふ仇名おもふべし、色は論なく黒きに感心なは目つき何處までもおどけて兩の頬、笑くばの愛敬、目かくしの福笑ひに見るやうを眉のつき方も、さりとはをかしく罪の無き子なり、

貧なれや阿波ちよみの筒袖、己れは揃ひが間に合はなんだと知らぬ友には言ふぞかし、我れを頭に六人の子供を、養ふ親も轆棒にすぎる身なり、五十軒によき得意場は持ちたりとも、内證の車は商賣もの、外なれば詮なく、十三になれば片腕と一昨年より並木の活版所へも通ひしが、懶惰ものなれば十日の辛防つかず、一月と同じ職も無くて霜月より春へかけては突羽根の内職、夏は検査場の氷屋が手傳ひして、呼聲をかしく客を引くに上手なれば、人には重寶がられぬ、去年は仁和賀の臺曳きに出でしより、友達のやしがりて萬年町の呼名今に残れども、三五郎といへば滑稽者と承知して憎む者の無きも、徳なりし、田屋は我が命の綱、親子が蒙る御恩すくなからず、日歩とかや言ひて利金安からぬ借りなれど、これなくてはの金主様あだには思ふべしや、三久己れが町へ遊びに來いと呼ばれて厭とは言はれぬ義理あり、されども我れは横町に生れて横町に育ちたる身、住む地處は龍華寺のもの、家主は長吉が親なれば、表ひさ彼方に背く事かなはず、内々に此方の用をたして、にらまるゝ時の役廻りつらし。正太は筆やの店へ腰をかけて、待つ間のつれづれに忍ぶ懸路を小聲にうたへば、あれ油断がならぬと内儀さんに笑はれて、何がなしに耳の根あかく、まぢくなひの高聲に皆も來いと呼びつれて表へ驅け出す出合頭、正太は夕飯なせ喰べぬ、遊びに惹けて先刻にから呼ぶをも知らぬか、何方も又の

ちほと遊ばせて下され、これはお世話と筆やの妻にも挨拶して、祖母が自らの迎ひに正太いやが言はれず、其まゝ連れて歸らるゝあとは俄かに淋しく、人数はさのみ變らねど彼の子が見えねば大人までも寂しい、馬鹿さわざもせねば戯言も三ちやんのやうではなけれど、人好きのするは金持の息子さんに珍らしい愛敬、何と御覽じたか田中屋の後家さまがいやらしさを、あれで年は六十四、白粉をつけぬがめつけ物なれど丸髷の大きさ、猫なで聲して人の死ぬをも構はず、大方終焉は金と情死なざるやら、それでも此方どもの頭の上らぬは彼の物の御威光、さりとは欲しや、廊内の大きい樓にも大分の貸附があるらしう聞きましたと、大路に立ちて二三人の女房よその財産を數へぬ。

(五)

持つ身につらき夜半の置炬燵、それは戀ぞかし、吹風すゞしき夏の夕ぐれ、ひるの暑さを風呂に流して、身じまひの姿見、母親が手づからそゝけ髪つくろひて、我が子ながら美しくしきを立ちて見、居て見、頸筋が薄かつたと狗ぞいひける、單衣は水色友仙の涼しげに、白茶金らんの丸帯少し幅の狭いを結ばせて、庭石に下駄直すまで時は移りぬ。まだかまだかと塀の周圍を七

たび廻り、欠伸の數も盡きて、拂ふとすれば名物の蚊に首筋額際した、か盤され、三五郎弱り
さる時、美登利立出で、いざと言ふに、此方は言葉もなく袖を捉へて駆け出せば息がはずむ、
胸が痛い、そんなに急ぐならば此方は知らぬ、お前一人でお出と怒られて、別れ別れの到着、
筆やの店へ來し時は正太が夕飯の最中とおほえし。あ、面白くない、面白くない、彼の人が來
なければ幻燈をはじめの嫌、伯母さん此處の家に智慧の板は賣りませぬか、十六武藏でも
何でもよい、手が開で困ると美登利の淋しがれば、それよと即坐に鉄を借りて女子づれば切抜
きにかゝる、男は三五郎を中に仁和賀のさらひ、北廓全盛見わたせば、軒は提燈電氣燈、いつ
も賑ふ五丁町と、諸聲をかくしはやし立つるに、記憶のよければ去年一昨年とさかのぼりて、
手振手拍子ひとつも變る事なし、うかれ立たる十人あまりの騒ぎなれば何事と門に立ちて人垣
をつくりし中より、三五郎は居るか、一寸来てくれ大急ぎだと、文次といふ元結よりの呼ぶに、
何の用意もなくおのしよ、よし來たと身輕に敷居を飛こゆる時、此二股野郎覺悟をしる、横町
の面よこしめ唯は置かぬ、誰れだと思ふ長吉だ生ふさけた真似をして後悔するなと頬骨一撃、
あつと魂消て逃入る襟がみを、つかんで引出す横町の一むれ、それ三五郎をたゞ殺せ、正太
を引出してやつて仕舞へ、弱虫にげるな、團子屋の頼馬も唯は置かぬと潮のやうに湧かへる騒

ぎ、筆屋の軒の掛提燈は苦もなくなつた、さ落されて、釣らんふ危険し店先の喧嘩なりませぬと女
房が喚きも聞かばこそ、人數は大凡十四五人、ねじ鉢巻に大萬燈ふりたて、當るがまゝの亂
暴狼籍、土足に踏込む傍若無人、目さす敵の正太が見えねば、何處へ隠した、何處へ逃げた、
さあ言はぬか、言はぬか、言はさずに置くものかと三五郎を取こめて撃つやら蹴るやら、美登
利くやくしく止める人を掻きのけて、これお前がたは三ちやんに何の咎がある、正太さん、喧嘩
がしたくば正太さんとしたが宜い、逃げもせねば隠しもしない、正太さんは居ぬではないか、
此處は私が遊び處、お前がたに指でもさしはせぬ、え、憎らしい長吉め、三ちやんを何故ぶ
つ、あれ又引倒した、意趣があらば私をおぶち、相手には私がある、伯母さん止めずに下され
と身もだへして罵れば、何を女郎め頼むた、姉の跡つぎの乞食め、手前の相手にはこれが
相應だと多人數のうしろより長吉、泥草履つかんで設つければ、ねらひ違はず美登利が額際に
ひさき物した、か、血相かへて立あがるを、怪我でもしてはと抱留むる女房、さまを見る、此
方には龍華寺の藤本がついて居るぞ、仕返しには何時でも來い、蒲馬鹿野郎め、弱虫め、腰ぬ
けの意氣地なしめ、歸りには待伏せする、横町の間に氣をつけると三五郎を土間に投出せば、
折から靴音たれやらが交番への注進今ぞ知る、それと長吉聲をかくれば丑松文次その餘の十餘

人、方角をかへてばらくと逃足はやく、抜け裏の路次にかゝむもあるべし、口惜しい口惜しい口惜しい口惜しい、長吉め文次め丑松め、なせ己れを殺さぬ、殺さぬか、己れも三五郎だ唯死ぬものか、幽霊になつても取殺すぞ、覺えて居る長吉めと湯玉のやうな涙はらく、はては大聲にわつと泣き出す、身内や痛からん筒袖の處々引さかれて背中も腰も砂まぶれ、止めるにも止めかねて勢ひの凄まじさに唯おどろくと氣を呑まれし、筆やの女房走り寄りて抱き起し、背中をなで砂を拂ひ、堪忍おし、堪忍おし、何と思つても先方は大勢、此方は皆よわい者ばかり、大人でさへ手が出しかねたに叶はぬは知れて居る、それでも怪我のないは仕合、此上は途中の待ぶせが危険い、幸ひの巡査さまに家まで見て頂かば我々も安心、此通りの仔細で御座ります故と筋をあらく折からの巡査に語れば、職掌からいさ送らんと手を取らるゝに、いえいえ送つて下さらずとも歸ります、一人で歸りますと小さく成るに、こりや恐い事は無い、其方の家まで送る分の事、心配するなと微笑を含んで頭を撫でらるゝに彌々ちやみて、喧嘩をしたと言ふと父さんに叱られます、頭の家は大屋さんで御座りますからとて委れるを願して、さらば門口まで送つて遣る、叱らるゝやうの事は爲ぬわとて連れらるゝに四隣の人胸を撫で、遙に見送れば、何とかしけん横町の角にて巡査の手をば振放して一目散に逃げぬ。

(六)

めづらしい事、此炎天に雪が降りしはせぬか、美登利が學校を嫌がるはよくの不機嫌、朝飯がすゝますば後刻に館でも誂へやうか、風邪にしては熱も無ければ大方きのふの疲れと見える、太郎様への朝参りは母さんが代理してやれば御免蒙れとありしに、いえく姉さんの繁昌するやうにと私が願をかけたのなれば、参らねば氣が済まぬ、お賽銭下され行つて來ますと家を驅け出して、中田圃の稻荷に鰯口ならして手を合せ、頭ひは何ぞ行きも歸りも首うなだれて哇路づたひ歸り來る美登利が姿、それと見て遠くより聲をかけ、正木はかけ寄りて袂を押へ、美登利さん昨夜は御免よと突然にあやまれば、何もお前に詫られる事は無い。それでも己れが憎まされて、己れが喧嘩の相手だもの、お祖母さんが呼びにさへ來なければ歸りはしない、そんなに無暗に三五郎をも打たしはしなかつたものを、今朝三五郎の處へ見に行つたら、彼奴も泣いて口惜しがつた、己れは聞いてさへ口惜しい、お前の顔へ長吉め草履を投げたと言ふではないか、あの野郎亂暴にもほどがある、だけれど美登利さん堪忍してお呉れよ、己れは知りながら逃げて居たのではない、飯を掻込んで表へ出やうとするとお祖母さんが湯に行くといふ、留守

居をして居るうちの騒ぎだらう、本當に知らなかつたのだからねと、我罪のやうに平あやまりにあやまつて、痛みはせぬかと額際を見あげれば、美登利につこり笑ひて何怪我をするほどではない、それが正さん誰れが聞いても私が長吉に草履を投げられたと言つてはいけないよ、もし萬一お母さんが聞きでもすると私が叱られるから、親でさへ頭に手はあげぬものを、長吉づれが草履の泥を額にぬられては踏まれたも同じだからとて、背ける顔のいとをしく、ほんとに堪忍しておくれ、みんな己れが悪い、だからあやまる、構嫌を直して呉れないか、お前に怒られると己れが困るものと話しつれて、いつしか我家の裏近く来れば、寄らないか美登利さん、誰れも居はしない、お祖母さんも日がけを集めに出来たらうし、己ればかりで淋しくてならない、いつか話した綿繪を見せるからお寄りな、種々のがあるからと袖を捉へて離れぬに、美登利は無言にうなづいて、佯びた折戸の庭口より入れれば、廣からねども鉢ものをかしく並び、軒につり忍艸、これは正太が午の日の買物と見えぬ、理由しらぬ人は小首やかたぶけん町内一の財産家といふに、家内は祖母と此子二人、萬の鍵に下腹冷えて留守は見渡しの總長屋、流石に錠前くたくもあらざりき、正太は先へあがりて風入りのよき處を見たて、此處へ來ぬかと團扇の氣あつかひ、十三の子供にはませ過ぎてをかし。古くより持つたへし綿繪かずく

取出し、褒めらるゝを嬉しく美登利さん昔の羽子板を見せやう、これは己れの母さんがお邸に奉公して居る頃いたいたのだとさ、をかしいではないか此大きな事、人の顔も今のは違ふね、あゝ此母さんが生きて居ると宜いが、己れが三つの歳死んで、お父さんは在るけれど田舎の實家へ歸つて仕舞つたから今はお祖母さんばかりさ、お前は羨ましいねとそゝろに親の事を言ひ出せば、それ繪がぬれる、男が泣くものではないと美登利に言はれて、己れは氣が弱いのかしら、時々種々の事を思ひ出すよ、まだ今時分は宜いけれど、冬の月夜なにかに田町あたりを集めに廻ると土手まで来て幾度も泣いた事がある、何塞い位で泣きはしない、何故だか自分も知らぬが種々の事を考へるよ、あゝ一昨年己れも日がけの集めに廻るさ、お祖母さんは年寄りだから其うちにも夜は危険いし、目が悪いから印形を捺したり何かに不自由だからね、今まで幾人も男を使つたけれど、老人に子供だから馬鹿にして思ふやうには動いて呉れぬとお祖母さんが言つて居たつけ、己れがもう少し大人に成ると質屋を出さして、昔の通りでなくとも田中屋の看板をかけると思ひに居るよ、他處の人はお祖母さんを吝だと言ふけれど、己れの爲に儉約して呉れるのだから氣の毒でならない、集金に行くうちでも通新町や何かに随分可愛想なのが有るから、嗚お祖母さんを悪くいふだらう、それを考へると己れは涙がこぼれ

る、矢張り氣が弱いのだね、今朝も三公の家へ取りに行つたら、奴め身體が痛い癖に親父に知らずまいとして働いて居た、それを見たら己れは口が利けなかつた、男が泣くてえのは可笑しいではないか、だから横町の野蠻人に馬鹿にされるのだと言ひかけて我が弱いを耻かしさうな顔色、何心なく美登利と見合す目つき之の可愛さ。お前の祭の姿は大層よく似合つて羨ましかつた、私も男だとあんな風がして見たい、誰れよりも宜く見えたと言つて、何だ己れなんぞ、お前こそ美しくいや、廓内の大巻さんよりも奇麗だと皆がいふよ、お前が姉であつたら己れはどんなに肩身が廣からう、何處へゆくにも隨從て行つて大威張りに威張るがな、一人も兄弟が無いから仕方が無い、ねえ美登利さん今度一處に寫真を取らうか、己れは祭りの時で、お前は透綾のあら編で意氣な形をして、水道尻の加藤でうつつさう、龍華寺の奴が羨ましかるやうに、本當だせ彼奴は屹度怒るよ、眞青に成つて怒るよ、にえ肝だからね、赤くはならない、それとも笑ふかしら、笑はれても構はない、大きく取つて看板に出たら宜いな、お前は厭かえ、厭のやうな顔だものと恨めるもをかし、變な顔にうつるとお前に嫌はれるからとて美登利ふき出して、高笑ひの美音に御機嫌や直りし。

朝涼はいつしか過ぎて日かげの暑くなるに、正太さん又晩によ、私の寮へも遊びにお出でな、

備燈ながして、お魚追ひまじよ、池の橋が直つたれば恐い事は無いと言ひ捨てに立出づる美登利の姿正太うれしげに見送つて、美しくしと思ひぬ。

(七)

龍華寺の信如、大黒屋の美登利、二人ながら學校は育英舎なり、去りし四月の末つかた、櫻は散りて青葉のかけに藤の花見といふ頃、春季の大運動會とて水の谷の原にせし事ありしが、つな引、鞠なげ、縄とびの遊びに興をそへて長き日の暮るゝを忘れし、其折の事とや、信如いかにしたるか平生の沈着に似ず、池のほとりの松が根につまづきて赤土道に手をつきたれば、羽織の袂も泥に成りて見にくかりしを、居あはせたる美登利みかねて我が紅の絹はんけちを取出し、これにてお拭きなされと介抱をなしけるに、友達の中なる嫉妬や見つけて、藤本は坊主のくせに女と話をして、囁しさうに禮を言つたは可笑しいではないか、大方美登利さんは藤本の女房になるのであらう、お寺の女房なら大黒さまと言ふのだなど、取沙汰しける、信如元來かかる事を人の上に聞くも嫌ひにて、苦き顔して横を向く質なれば、我が事として我慢のなるべきや、それよりは美登利といふ名を聞くことに恐ろしく、又あの事を言ひ出すかと胸の中もや

くやして、何とも言はれぬ厭な氣持なり、さりながら事ごとくに怒りつける譯にもゆかねば、成るだけは知らぬ體をして、平氣をつくりて、むづかしき顔をして遣り過ぎる心なれど、さし向ひて物などを問はれたる時の當惑さ、大方は知りませぬの一言にて済ませど、苦しさ汗の身うち流れて心はそき思ひなり、美登利はさる事も心にとまらねば、初めは藤本さん藤本さんと親しく物いひかけ、學校退けての歸りがけに、我れは一足はやくて道端に珍らしき花などを見つければ、おくれし信如を待合して、これ此様うつくしい花が咲いてあるに、枝が高く私には折れぬ、信さんは背が高ければお手が届きましよ、後生折つて下されと一むれの中にては年長なるを見かけて頼めば、流石に信如袖ふり切りて行過ぎる事もならず、さりとして人の思はくいよ／＼つらければ、手近の枝を引寄せて好悪かまはず申譯ばかりに折りて、投つけるやうにすた／＼と行過ぎるを、さりとして愛敬の無き人と憫れし事もありながら度かさなりての末にはおのづから故意の意地悪のやうに思はれて、人には然もなきに我れにばかりつらき仕打をみせ、物を問へば碌な返事した事なく、傍へゆけば逃げる、はなしをすれば怒る、陰氣らしい氣のつまる、どうして宜いやら機嫌の取りやうも無い、あのやうなむづかしやは思ひのまゝに捻れて怒つて意地わるが爲たいならんに、友達と思はず、口を利くも入らぬ事と美登利少し疝にさは

りて、用も無ければ摺れ違ふても物いふた事なく、途中に逢ひたりとて挨拶など思ひもかけず、唯いつとなく二人の中に大川一つ横たはりて、舟も筏も此處には御法度、岸に添ふておもひおもひの道のあるきぬ。

祭りは昨日に過ぎて其あくる日より美登利の學校へ通ふ事ふつと跡たえしは、問ふまでも無く額の泥の洗ふても消えがたき耻辱を、身にしみて口惜しければぞかし、表町として横町として同じ教場におし並べば、朋輩に異りは無き筈を、をかき分け隔てに常日頃意地を持ち我れは女の、とても敵ひがたき弱味をば附目にして、まつりの夜の所爲はいかなる卑怯ぞや、長吉のわからずやは誰れも知る亂暴の上なしなれど、信如の尻おし無くばあれほどに思ひ切りて表町をば荒らし得じ、人前をば物識らしく温順につくりて、陰に廻りて機關の糸を引きしは藤本の仕業に極まりぬ、よし級は上にせよ、學は出来るにせよ、龍華寺さまの若旦那にせよ、大黒屋の美登利紙一枚のお世話にも預からぬものを、あのやうに乞食呼はりして貰ふ思は無し、龍華寺はどれほど立派な壇家ありと知らねど、我が姉さま三年の馴染に銀行の川様、兜町の米様もあり、議員の短小さま根曳して奥さまにと仰せられしを、心意氣氣に入らねば姉さま嫌ひてお受けはせざりしが、彼の方とても世には名高きお人と遣手衆の言はれし、嘘ならば聞いて見よ、大黒

やに大巻の居すは彼の樓は開とかや、さればお店の旦那とても父さん母さん我が身をも粗略には遊ばさず、常々大切がりて床の間にお据ゑなされし瀬手物の大黒様をば、我れいつぞや座敷の中にて羽根つくとして騒ぎし時、同じく並び花瓶を仆し、散々に破損をさせして、旦那次郎間に御酒めし上りながら、美登利お轉婆が過ぎると言はれしばかり小言は無かりき、他の人ならば一通りの怒りではあるまじと女衆達にあとくまで、羨まれしも畢竟は姉さまの威光ぞかし、我れ寮住居に人の留守居はしたりとも姉は大黒屋の大巻、長吉風情に敗けを取るべき身にもあらず、龍華寺の坊さまにいちめられんは心外と、これより學校へ通ふ事おもしろからず、我まの本性あなどられしが口惜しさに、石筆を折り墨をすて、書籍も十露盤も入らぬ物にして、中よき友と婿も無く遊びぬ。

(八)

走れ飛ばせの夕に引かへて、明けの別れに夢をのせ行く車の淋しさよ、帽子まぶかに人目を厭ふ方様もあり、手拭とつて頬かぶり、彼女が別れに名残の一打、いたく身にしみて思ひ出すほど嬉しく、うす氣味わるやにたぐの笑ひ顔、坂本へ出で、は用心し給へ千住がへりの青物車

はお足元あふなし、三島様の角までは氣違ひ街道御顔のしまり何れも緩みて、はかりながら御鼻の下ながくと見えさせたまへば、そんじよ其處らに夫れ大した御男子様とて、分厘の價値も無しと、辻に立ちて御慮外を申すもありけり、楊家の娘君龍をうけてと長恨歌を引出すまでもなく、娘の子は何處にも貴重がらるゝ頃なれど、此あたりの裏屋より赫奕姫の生るゝ事その例多し、築地の某屋に今は根を移して御前さま方の御相手、踊りに妙を得し雪といふ美形、唯今のお座敷にてお米のなります木はと至極あどけなき事は申すとも、もとは此町の巻帯黨にて花がるたの内職せしものなり、評判は其頃の高く去るもの日々に疎ければ、名物一つかけを消して二度目の花は紺屋の乙娘、今千束町に新つた屋の御神燈はのめかして、小吉と呼はるゝ公園の尤物も根生ひは同じ此處の土なりし、あけくれの噂にも御出世といふは女に限りて、男は塵塚さがす黒斑の尾の、ありて用なきとも見ゆべし、此界限に若い衆と呼はるゝ町並の息子、生意氣さかりの十七八より五人組七人組、腰に尺八の伊達はなけれど、何とやら殿めしき名の親分が手下につきて、揃ひの手ぬぐひ長提燈、賽ころ振る事おぼえぬうちは素見の格子先に思ひ切つての申戯も言ひがたしとや、眞面目につとむる我が家業は晝のうちばかり、一風呂浴びて日の暮れゆけば突かけ下駄に七五三の着物、何屋の店の新妓を見たら、金杉の糸屋が娘

に似てもう一倍鼻がひくいといふと、頭腦の中を此様な事にこしらへて、一軒ごとの格子に烟草の無理どり鼻紙の無心、打ちつ打たれつ是れを一世の譽と心得れば、堅氣の家の相續息子地廻りと改名して、大門際に喧嘩かひと出るもありけり、見よや女子の勢力と言はぬばかり、春秋しらぬ五丁町の賑ひ、送りの提燈いまだ流行らねど、茶屋が廻女の雪駄のおとに響き通へる歌舞音曲、うかれうかれて入込む人の何を目當と言問はば、赤えり緒熊に彌福の裾ながく、につと笑ふ口元目もと、何處が美いとも申しがたけれど華魁衆とて此處にての敬ひ、立はなれては知るによしなし、かゝる中にて朝夕を過せば、衣の白地の紅に染む事無理ならず、美登利の眼の中に男といふ者さつても怖からず恐ろしからず、女郎といふ者さのみ賤しき勤めとも思はねば、過ぎし故郷を出立の當時泣いて姉をば送りしこと夢のやうに思はれて、今日此頃の全盛に父母への孝養うらやましく、お職を通す姉が身の、憂いの辛いの数も知らねば、まぢ人戀ふる鼠なき格子の咒文、別れの背に手加減の秘密まで、唯おもしろく聞なされて、廊ごとばを町にいふまでさりと恥かしからず思へるも哀なり、年はやうく數への十四、人形抱いて頬すりする心は御華族のお姫様とて變りなけれど、修身の講義、家政學のいくたても學びしは學校にてばかり、誠あけくれ耳に入れしに好いた好かぬの客の風説、仕着せ積み夜具茶屋への行わたり、派

手は美事に、かなはぬは見すばらしく、人事我事分別をいふはまだ早し、幼心に目の前の花のみはしるく、持まへの負けし氣象は勝手に馳せ廻りて雲のやうな形をこしらへぬ、氣違ひ街道、寝ばれ道、朝がへりの殿がた一順すみて朝寝の町も門の箒目青海波ををるがき打水よきほどに濟みし表町の通りを見渡せば、来るは来るは、萬年町、山伏町、新谷町あたりを時にして、一能一術これも藝人の名はのがれぬ、よかゝ、師や輕業師、人形つかひ大神樂、住吉をどりに角兵衛獅子、おもひおもひの扮粒して、縮緬透綾の伊達もあれば、薩摩がすりの洗ひ着に黒羅子の幅狹帯、よき女もあり男もあり、五人七人十人一組の大たむろもあれば、一人淋しき瘦せ老爺の破れ三味線かゝへて行くもあり、六つ五つなる女の子に赤袴させて、あれは紀の國をどらするも見ゆ、お顧客は廊内に居つゞけ客のなぐさみ、女郎の憂さ晴らし、彼處に入る身の生涯やめられぬ得分ありと知られて、来るも来るも此邊の町に細かき貫ひを心に留めず、齋に海松のいかやはしき乞食さへ門には立たず行過ぎるぞかし、容貌よき女太夫の笠にかくれぬ床しの頬を見せながら、喉自慢、腕自慢あれ彼の聲を此町に聞かせぬが憎しと筆やの女房舌うちして言へば、店先に腰をかけて往來を眺めし湯がへりの美登利、はらりと下る前髪の毛を貴楊の鬢揃にちやつと掻きあげて、伯母さんあの太夫さん呼んで來ませうとて、はたゝ、驅け

よつて袂にすがり、投げ入れし一品を誰れにも笑つて告げざりしが好みの明烏さらりと唄はせて、又御最負をの嬌音これたやすくは買ひがたしあれが、子供の所業かと寄集りし人舌を巻いて太夫よりは美登利の顔を眺めぬ、伊達には通るほど、藝人を此處にせき止めて、三味の音、笛の音、太鼓の音、うたはせて舞はせて人の爲の事して見たいと折ふし正太に唄いて聞かせれば、驚いて呆れて己らは嫌だな。

(九)

如是我聞、佛説阿彌陀經、聲は松風に和して心のちりも吹拂はるべき御寺様の庫裏より生魚あぶる煙なびきて、卵塔場に嬰兒の襦袢はしたるなど、お宗旨によりて構ひなき事なれども、法師を木のはしと心得たる目よりは、そらろに腥く覺ゆるぞかし、龍華寺の大和尚身代と共に肥え太りたる腹より如何にも美事に、色つやの好きこと如何なる賞め言葉を参らせたらばよかるべき、櫻色にもあらず、緋桃の花でもなし、剃りたてたる頭より顔より首筋にいたるまで銅色の照りに一點のにこりも無く、白髪もまじる太き眉をあげて心まかせの大笑ひなざる、時は、本堂の如來さま驚きて臺座より轉び落ち給はんかと危ぶまるゝやうなり、御新造はいま

だ四十の上を幾らも越さで、色白に髪は毛薄く、丸鬚も小さく結びて見苦しからぬまでの人がら、參詣人へも愛想よく門前の花屋が口悪嬾も兎角の陰口を言はぬを見れば、着ふるしの浴衣、總菜のお残りなどおのづからの御恩も蒙るなるべし、もとは檀家の一人なりしが早くに良人を失ひて寄る邊なき身の暫時こゝにお針やとひ同様、口さへ濡らさせて下さらばとて洗ひ濯ぎよりはじめてお菜ごしらへは素よりの事、墓場の掃除に男衆の手を助くるまで働けば、和尚さま經濟より割出してお御ふびんかゝり、年は二十から遠ふて見ともなき事は女も心得ながら、行き處なき身なれば結句よき死場所と人目を恥ぢぬやうになりけり、苦々しき事なれども女の心だて悪からねば檀家の者もさのみは咎めず、總領の花といふを懷孕し頃、檀家の中にも世話好きの名ある坂本の油屋が隠居さま媒人といふも異な物なれど勧めたて、表向きものにしける、信如も此人の腹より生れて男女二人の同胞、一人は如法の變屈ものにて一日部屋の中にまぢくと陰氣らしき生れなれど、姉のお花は皮薄の二重腮可愛らしく出来たる子なれば、美人といふにはあらねども年頃といひ人の評判もよく、素人にして捨て、置くは惜しい物の中に加へぬ、さりとてお寺の娘に左り褌、お釋迦が三味ひく世は知らず人の聞え少しは憚られて、田町の通りに葉茶屋の店を奇麗にしつらへ、帳場格子の裡に此娘を据ゑて愛敬を賣らすれば、

秤りの目は兎に角勘定しらすの若い者など、何がなしに寄つて大方毎夜十二時を聞くまで店に客のかけ絶えたる事なし、いそがしきは、大和尚、貸金の取たて、店への見廻り、法用のあれこれ、月の幾日は説教日の定めもあり帳面くるやら経よむやら斯くては身體のつゞき難しと夕暮れの椽先に花むしろを敷かせ、片肌ぬぎに扇團づかひしながら大盃に泡盛をなみくと注がせて、さかなは好物の蒲焼を表町のむさし屋へあらい處をとの誂へ、承りてゆく使ひ番は信如の役なるに、其厭なること骨にしみて、路を歩くにも上を見し事なく、筋向ふの筆やに子供づれの聲を聞けば我が事を誹らるゝかと情なく、素知らぬ顔に鰻屋の門を過ぎては四邊に人目の隙をうかひひ、立戻つて駈け入る時の心地、我身限つて腥きものは食へまじと思ひぬ。

父親和尚は何處までもさばけたる人にて、少しは慈悲の名にたてども人の風説に耳をかたぶけるやうな小膽にては無く、手の暇あらば熊手の内職もして見やうといふ氣風なれば、霜月の酉には論なく門前の明地に簪の店を開き、御新造に手拭かぶらせて延喜の宜いのをと呼はせる趣向、はじめは恥かしき事に思ひけれど、軒ならび素人の手業にて莫大の儲けと聞くに、此雑沓の中といひ罪れも思ひ寄らぬ事なれば日暮れよりは目にも立つまじと思案して、晝間は花屋の

女房に手傳はせ、夜に入りては自身おり立て呼たつるに慾なれやいつしか恥かしさも失せて、思はず聲高に負けましよ負けましよと跡を追ふやうになりぬ人波にもまれて買人も眼の眩みし折なれば、現在後世ねがひに一昨日來りし門前も忘れて、簪三本七十五錢と懸直すれば、五本ついたを三錢ならばと直切つて行く、世はぬば玉の間の儲は此ほかにも有るべし、信如は斯かる事どもいかにも心ぐるしく、よし檀家の耳には入らずとも近邊の人々が思はく、子供仲間の噂にも龍華寺では簪の店を出して、信さんが母さんの狂氣面して賣つて居たなぞ、言はれもするやと恥かしく、其様な事は止にしたが宜う御座りませうと止めし事もありしが、大和尚大笑ひに笑ひすてゝ、黙つて居る、黙つて居る、貴様などが知らぬ事だわとて丸々相手にしては呉れず、朝念佛に夕勘定、そろばん手にしてにこゝと遊ばさるゝ顔つきは我親ながら淺ましくして、何故その頭をまるめ給ひしぞと恨めしくもなりぬ。

もとより一腹一對の中に育ちて他人交せずの穩かなる家の内なれば、さして此兒を陰氣ものにして仕立あげる種は無けれども、性來おとなしき上に我が言ふ事の用ひられねば兎角に物のおもしろからず、父が仕業も母の所作も姉の教育も、悉皆あやまりのやうに思はるれと言ふて聞かれぬものぞと諦めればうち悲しきやうに情なく、友朋輩は變屈者の意地わると目させとも自ら

沈み居る心の底の弱き事、我が蔭口を露ばかりもいふ者ありと聞けば、立出で、喧嘩口論の勇氣もなく、部屋にとち籠つて人に面の合はされぬ臆病至極の身なりけるを、學校にての肉牙ぶりとといひ身分がらの卑しからぬにつけても然る弱虫とは知る者なく、龍華寺の藤本は生養えの餅のやうに眞があつて氣になる奴と憎がるものも有りけらし。

(十)

祭りの夜は田町の姉のもとへ使ひを吩咐られて、更くるまで我家へ歸らざりければ、筆やの騒ぎは夢にも知らず、翌日になりて丑松文次その外の口よりこれくであつたと傳へらるゝに、今更ながら長吉の亂暴に驚けども濟みたる事なれば咎めだてするも詮なく、我が名を假りられしばかりつくく迷惑に思はれて、我が爲したる事ならねど人々への氣の毒を身一つに背負たるやうの思ひありき、長吉も少しは我が遣りそこねを恥かしう思ふかして、信如に逢はゞ小言や聞かんと其三四日は姿も見せず、や、餘熱のさめたる頃に信さんお前は腹を立つか知らないけれど時の拍子だから堪忍して置いて呉んな、誰れもお前正太が明巢とは知るまいではないか、何も女郎の一疋位相手にして三五郎を擲りたい事もなかつたけれど、萬疊を振込んで見り

やあ唯も歸れない、ほんの風景氣に詰らない事をしてのけた、そりやあ己れが何處までも悪いさ、お前の命令を聞かなかつたは悪からうけれど、今怒られては形なした、お前といふ後だてがあるので己らあ大船に乗つたやうだに、見すてられちまつては困るだらうぢやないか、嫌だつても此組の大將で居てくんねえ、左様とぢばかりは組まなからとて面目なさうに詫られて見ればそれでも私は厭だとも言ひがかく、仕方が無い遣る處までやるさ、弱い者いぢめは此方の恥になるから三五郎や美登利を相手にしても仕方が無い、正太に末社がついたら其時のこと、決して此方から手出しをしてはならないと留めて、さのみは長吉をも叱り飛ばさねど再び喧嘩のなきやうにと祈られぬ。

罪のない子は構町の三五郎なり、思ふさまに擲かれて蹴られて其二三日は立居も苦しく、夕ぐれ毎に父親が空車を五十軒の茶屋が軒まで運ぶにさへ、三公は何うかしたか、ひどく弱つて居るやうだなと見知りの臺屋に咎められしはとなりしが、父親はお辭宜の鐵とて目上の人に頭をあげた事なく廊内の旦那は言はずとも、大屋様地主様いづれの御無理も御尤と受ける質なれば、長吉と喧嘩してこれくの亂暴に逢ひましたと訴へればとて、それは何うも仕方が無い大屋さんの息子さんではないか、此方に理が有らうが先方が悪からうが喧嘩の相手に成るとい

ふ事は無い、詫びて来い詫びて来い途方も無い奴だと我子を叱りつけて、長吉がもとへあやまりに遣られる事必定なれば、三五郎は口憎しさを噛みつぶして七日十日と程をふれば、痛みの場所の癒ると共に其うらめしさも何時しか忘れて、頭の家赤ん坊が守りをして二銭が駄賃をうれしがり、ねん／＼よ、おころりよ、と背負ひあるくさま、年はと問へば生意氣さかりの十六にも成りながら其づう體を恥かしげにもなく、表町へものこ／＼と出かけるに、いつも美登利と正太が騷りものになつて、お前は性根を何處へ置いて来たとかからかはれながらも遊びの間は外れざりき。

春は櫻の賑ひよりかけて、なき玉菊が燈籠の頃、つゞいて秋の新仁和賀には十分間に車の飛ぶこと此通りのみにて七十五輛と敷へしも、二の替りさへいつしか過ぎて、赤蜻蛉田圃に亂るれば横堀に鞠なく頃も近づきぬ、朝夕の秋風身にしみ渡りて上清が店の蚊遣香懐爐灰に座をゆづり、石橋の田村やが粉挽く臼の音さびしく、角海老が時計の響きもそゆる哀れの音を傳へるやうになれば、四季絶間なき日暮りの火の光りもあれが人を焼く烟かとうら悲しく、茶屋が裏ゆく土手下の細道に落かゝるやう 三味の音を仰いで聞けば、仲之町藝者が冴えたる腕に、君が情の假寝の床にと何ならぬ一ふしあはれも深く、此時節より通ひ初むるは浮かれ浮かるゝ遊客

ならで、身にしみ／＼と實のあるお方のよし、遊女あがりのさる人が申しき、此ほどの事か、んりくだ／＼しや大音寺前にも珍らしき事は盲目按摩の二十ばかりなる娘、かなはぬ戀に不由なる身を恨みて水の谷の池に入水したるを新らしい事と傳へる位なもの、八百屋の吉五郎に大工の太吉がさつぱりと影を見せぬが何とかせしと問ふに此一件であげられましたと、顔の真中へ指をさして、何の仔細なく取立て、噂をする者もなし、大路を見渡せば罪なき子供の三五人手を引つれて開らいた開らいた何の花ひらいたと、無心の遊びも自然と静かにて、廓に通ふ車の音のみ何時に變らず勇ましく聞えぬ。

秋雨しと／＼と降るかと思へばさつと音して運び来るやうなる淋しき夜、通りすがりの客をば待たぬ店なれば、筆やの妻は宵のほどより表の戸をたて、中に集まりしは例の美登利に正太郎、その外には小さき子供の二三人寄りて細螺はじきの幼げな事して遊ぶほどに、美登利と耳を立て、あれ誰れか買物に来たのではないか溝板を踏む足音がするといへば、おや左様か、己いらは些とも聞かなかつたと正太もちう／＼たこかいの手を止めて、誰れか仲間が来たのではないかと嬉しがるに、門なる人は此店の前まで来りける足音の聞えしばかりそれよりはふつと絶えて、音も沙汰もなし。

正太は潜りを明けて、ばあと言ひながら顔を出すに、人は二三軒先の軒下をたどりて、ぼつくと行く後影、誰れだ誰れだ、おいお這人よと聲をかけて、美登利が足駄を突かけばきに、降る雨を厭はず駆け出さんとせしが、あ、彼奴だと一言、振かへつて、美登利さん呼んだつても來はしないよ、一件だものと、自分の頭を丸めて見せぬ。

信さんかえ、と受けて、嫌な坊主つたら無い、乾度筆か何か買ひに來たのだけれど、私たちが居るものだから立聞きをして歸つたのであらう、意地悪の、根性まがりの、ひねっこびれの、吃りの、齒かけの、嫌な奴め、這入つて來たら散々と窘めてやるものを、歸つたは惜しい事をした、せれ下駄をお貸し、一寸見てやる、とて正太に代つて顔を出せば軒の雨だれ前髪に落ちて、お、氣味が悪いと首を縮めながら、四五軒先の瓦斯燈の下を大黒傘肩にして少しうつむいて居るらしくとばくと歩む信如の後かげ、何時までも、何時までも、何時までも見送るに、美登利さん何うしたの、と正太は怪しがりて背中をつゝさぬ。

何うもしない、と氣の無い返事をして、上へあがつて細螺を數へながら、本當に嫌な小僧とつ

ては無い、表向きに威張つた喧嘩は出來もしないで、順温しさうな顔ばかりして、根性がぐずぐずして居るのだもの憎らしからうではないか、家の母さんが言ふて居たつけ、がらくして居る者は心が良いのだと、それがからぐずして居る信さん何かは心が悪いに相違ない、ねえ正太さん左様であらう、と口を極めて信如の事を悪く言へば、それでも龍華寺はまだ物が解つて居るよ、長吉と來たら彼れははやくと、生意氣に大人の口を真似れば、お廢しよ正太さん、子供の癖にませたやうでをかしい、お前はよつばと剽輕ものだね、とて美登利は正太の頬をつついて、其真面目がははと笑ひこけるに、己らだつても最少し輕てば大人になるのだ、蒲田屋の旦那のやうに角袖外套か何か着てね、お祖母さんが仕舞つて置く金時計を貰つて、そして指輪もこしらへて、巻煙草を吸つて、穿く物は何か宜からうな、己らは下駄より雪駄が好きだから、三枚裏にして細珍の鼻緒といふのを穿くよ、似合ふだらうかと言へば、美登利はくすくす笑ひながら、背の低い人が角袖外套に雪駄ばき、まあ何んなにか可笑しからう、目薬の瓶が歩くやうであらうと誹すに、馬鹿を言つて居らあ、それまでには己らだつて大きく成るさ、此様な小ばけでは居ないと威張るに、それではまだ何時の事だか知れはしない、天井の鼠があれ御覽、と指をさすに、筆やの女房を始めとして座にある者みな笑ひこるげぬ。

正太は一人眞面目に成りて、例の目の玉ぐるぐるとさせながら、美登利さんは戯言にして居るのだね、誰れだつて大人に成らぬ者は無いに、己らの言ふが何故をかしからう、奇麗な嫁さんを貰つて連れて歩くやうに成るのだがな、己らは何でも奇麗のが好きだから、煎餅やお福のやうな痘痕づらや、薪やお出願のやうな若し來やうなら、直さま追出して家へは入れて遣らないや、己らは痘痕と疥癬つかきは嫌いと力を入れるに、主人の女は吹出して、それでも正さん能く私が店へ来て下さるの、伯母さんの痘痕は見えぬかえと笑ふに、それでもお前は年寄りだもの、己らの言ふのは嫁さんの事さ、年寄りは何うでも宜いのであるに、それは大失敗だねと筆やの女房おもしろづくに御機嫌を取りぬ。

町内て顔の好いのは花屋のお六さんに、水菓子やの喜いさん、それよりも、それよりもずんと好いはお前の鄰に坐つてお出なさるのなれど、正太さんはまあ誰にしやうと極めてあるえ、お六さんの眼つきか、喜いさんの清元か、まあ何れをえ、と問はれて、正太顔を赤くして、何だお六づらや、喜い公、何處が好いものと釣りらんぶの下を少し居退きて、壁際の方へと尻込みをすれば、それでは美登利さんが好いのであらう、さう極めて御座んすの、と圓星をさゝれて、そんな事を知るものか、何ぞ其様な事、とくるり後を向いて壁の腰ばかり指でたゝきながら、廻れ〜水車を小音に唱ひ出す、美登利は衆人の細螺を集めて、さあもう一度はじめからと、これは顔をも赤らめざりさ。

(十二)

信如が何時も田町へ通ふ時、通らでも事は濟めども言はゞ近道の土手々前に、假初の格子門、のぞけば鞍馬の石燈籠に萩の袖垣しほらしう見えて、椽先に卷きたる簾のさまもなつかしう、中がらすの障子のうちには今様の按察の後室が珠數をつまぐつて、冠つ切りの若紫も立出づるやと思はるゝ、その一構へが大黒屋の寮なり。

昨日も今日も時雨の空に、田町の姉より頼みの長胴着が出来たれば、寸時も早う重ねさせたき親心、御苦勞でも學校まへの一寸の間に持つて行つて呉れまいか、定めて花も待つて居やうはどに、と母親よりの吩咐を、何も厭とは言切られぬ温順しさに、唯はい〜と小包みを抱へて、鼠小倉の緒のすがりし朴木齒の下駄ひた〜と、信如は雨傘さしかさして出でぬ。

お齒ぐる溝の角より曲りて、いつも行くなる細道をたどれば、運わるう大黒やの前まで來し時、さつと吹く風大黒傘の上を攫みて、宙へ引あげるかと疑ふばかり烈しく吹けば、これは成らぬ

と力足を踏こたふる途端、さのみに思はざりし前鼻緒のずる／＼と抜けて、傘よりもこれこそ一の大事に成りぬ。

信如こまりて舌打はすれども、今更何と法のなければ、大黒屋の門に傘を寄せかけ、降る雨を庇に厭ふて鼻緒をつくるふに、常々仕馴れぬお坊さまの、これは如何な事、心ばかりは急れども、何としても巧くはすける事のならぬ口惜しさ、ちれて、ちれて、袂の中から記事文の下書きして置いた大半紙を掴み出し、ずん／＼と裂きて紙紬をよるに、意地わるの嵐まてもや落し来て、立かけし傘のころ／＼と轉がり出づるを、いま／＼しい奴めと腹立たしげにいひて、取留めんと手を伸ばすに、膝へ載せて置きし小包み意氣地もなく落ちて、風呂敷は泥に、我着る物の袂までを汚しぬ。

見るに氣の毒なるは雨の中の傘なし、途中に鼻緒を踏み切りたるばかりは無し、美登利は障子の中ながら硝子ごしに遠く眺めて、あれ誰れか鼻緒を切つた人がある、母さん切れを遣つても宜う御座んすかと尋ねて、針箱の抽斗から友仙縮緬の切れ端をつかみ出し、庭下駄はくも鈍かしきやうに、馳せ出で、椽先の洋傘さすより早く、庭石の上を傳ふて急ぎ足に來りぬ。

それと見るより美登利の顔は赤う成りて、どのやうの大事にでも遇ひしやうに、胸の動悸の早くうつを、人の見るかと背後の見られて、恐る／＼門の傍へ寄れば、信如もふつと振り返りて、これも無言に腋を流る、冷汗、跣足になりて逃げ出したき思ひなり。

平常の美登利ならば信如が難儀の體を指さして、あれ／＼あの意氣地なしと笑ふて笑ふて笑ひ抜いて、言ひたいまゝの悪まれ口、よくもお祭りの夜は正太さんに仇をするとして私たちが遊びの邪魔をさせ、罪も無い三ちやんを擲かせて、お前は高見で采配を振つてお出なされたの、さあ謝罪なさんすか、何とで御座んす、私の事を女郎々々と長吉づらに言はせるのもお前の指圖、女郎でも宜いではないか、塵一本お前さんが世話には成らぬ、私には父さんもあり母さんもあり、大黒屋の旦那も姉さんもある、お前のやうな腥のお世話には能うならぬほどに、餘計な女郎呼はり置いて貰ひましょ、言ふ事があらば陰のくす／＼ならで此處でお言ひなされ、お相手には何時でもなつて見せます、さあ何とで御座んす、と袂を捉へて捲くしかくる勢ひ、さこそは當り難うもあるべきを、物いはず格子のかけに小隠れて、さりとて立去るでもなしに唯うぢ／＼と胸とやるかすは常の美登利のさまにては無かりき。

此處は大黒屋のと思ふ時より信如は物の恐ろしく、左右を見ずして直あゆみに爲しなれども、生憎の雨、生憎の風、鼻緒をさへに踏切りて、詮なき門下に紙紮を燃る心地、憂き事さましく何うも堪へられぬ思ひのありしに、飛石の足音は背より冷水をかけられるが如く、願ねども其人と思ふに、わな／＼と慄へて顔の色も變るべく、後向きになりて猶も鼻緒に心を懸すと見せながら、半は夢中に此下駄いつまで懸りても穿けるやうには成らんもせざりき。

庭なる美登利はさしのぞいて、え、不器用なあんな手つきして何うなるものぞ、紙紮は婆々燃、棄しべなんぞ前壺に抱かせたとて長もちのする事ではない、それ／＼羽織の裾が地について泥になるは御存じ無いか、あれ傘が轉がる、あれを疊んで立てかけて置けば好いと一々鈍かしう齒がゆくは思へども、此處に裂れが御座んす、此裂でおすげなされと呼かくる事もせず、これも立盡して降雨袖に詫しきを、厭ひもあへず小隠れて覗ひしが、さりととも知らぬ母の親はるかに聲も懸けて、火のしの火が熾りましたぞえ、此美登利さんは何を遊んで居る、雨の降るに表へ出での悪戯は成りませぬ、又此間のやうに風引かうぞと呼立てられるに、はい今行きますと大きく言ひて、其聲信如に聞えしを耻かしく、胸はわく／＼と上氣して、何うでも明けられぬ門の際にさりととも見過しがたき儀をさま／＼の思案盡して、格子の間より手に持つ裂れを

物いはず投げ出せば、見ぬやうに見て知らず顔を信如のつくるにえ、例の通りの心根と遣る瀬なき思ひを眼に鍾めて、少し涙の恨み顔、何を憎んで其やうに無情をぶりは見せらるゝ、言ひたい事は此方にあるを、餘りな人とこみ上ぐるほど思ひに迫れど、母親の呼聲しば／＼なるを詫しく、詮方なさに一足二足え、何ぞいの未練くさい、思はく耻かしく身をかへして、かた／＼と飛石を傳ひゆくに、信如は今ぞ淋しう見かへれば紅入り友仙の雨にぬれて紅葉の形のうるはしきが我が足ちかく散ばひたる、そらるに床しき思ひはあれども、手に取あぐる事をもせず空しう眺めて憂き思ひあり。

我が不器用をあきらめて、羽織の紐の長さをばづし、結びつけにくる／＼と見とむなき間に合せをして、これならばと踏試みるに、歩さにくき事言ふばかりなく、此下駄で田町まで行く事かと今さら難儀は思へども詮方なくて立上る信如、小包みを横に二足ばかり此門をはなるゝにも、友仙の紅葉眼に残りて、捨て、過ぐるにしのび難く心残りして見返れば、信さん何うした鼻緒を切つたのか、其姿は何だ、見つともないなと不意に聲を懸くる者のあり。

驚いて見かへるに暴れ者の長吉、いま廊内よりの歸りと覺しく、浴衣を重ね、唐棧の着物に柿色の三尺を例の通り腰の先にして、黒八の襟のか、つた新らしい半天、印の傘をさしかざし高

足駄の爪皮も今朝よりとはしるき漆の色、きはくしう見えて誇らしげなり。
僕は鼻緒を切つて仕舞つて何う爲やうかと思つて居る、本當に弱つて居るのだ、と信如の意氣
地なる事を言へば、左様だらうお前に鼻緒の立ッこは無い、好いや己れの下駄を穿いて行さね
え、此鼻緒は大丈夫だよといふに、それでもお前が困るだらう。何己れは馴れたものだ、斯う
やつて斯うすると言ひながら急遽しう七分三分に尻端折て、其様な結ひつけなんぞより是れが
爽快だと下駄を脱ぐに、お前跣足になるのかそれでは氣の毒だと信如困り切るに、好いよ、己
れは馴れた事だ信さんなんぞは足の裏が柔かいから跣足で石ころ道は歩けない、さあ此れを穿
いてお出、と揃へて出す親切さ、人には疫病神のやうに厭はれながらも毛虫眉毛を動かして優
しき詞のもれ出づるぞをかしき。信さんの下駄は己れが提げて行かう、喜處へ抛り込んで置い
たら仔細はあるまい、さあ穿き替へてそれをお出しと世話をやき、鼻緒の切れしを片手に提げ
て、それなら信さん行つてお出、後刻に學校で逢はうせの約束、信如は田町の姉のもとへ、長
吉は我家の方へと行別れるに思ひの留まる紅入の友仙は可憐しき姿を空しく格子門の外にと止
めぬ。

(十四)

此年三の酉までありて中一日はつぶれしかど前後の上天氣に大鳥神社の賑ひすさまじく、此處
をかこつけに検査場の門より亂れ入る若人達の勢ひとは、天柱くだけ地維かくるかと思はる
る笑ひ聲のとよめき、仲之町の通りは俄に方角の變りしやうに思はれて、角町京町處々の
ね橋より、さつさ押せくと猪牙が、つた言葉に人波を分くる群もあり、河岸の小店の百嚙り
より、優にうづ高き大編の樓上まで、絃歌の聲のさまじくに沸き来るやうな面白さは大方の人
おもひ出で、忘れぬものに思すもあるべし、正太は此日日がけの集めを休ませ貰ひて、三五郎
が大頭の店を見舞ふやら、團子屋の脊高が愛想氣のない汁粉やを音づれて、何うだ儲けがある
かえと言へば、正さんお前好い處へ来た、己れが館この種なしに成つてもう今からは何を賣ら
う、直様煮かけては置いたれを半途お客は断れない、何うしやうな、と相談を懸けられて、智
慧無しの奴め大鍋の周邊にそれ位無駄がついて居るではないか、それへ湯を廻して砂糖さへ
甘くすれば十人前や二十人は浮いて来やう、何處でもみんな左様するのだお前の店ばかりでは
ない、何此騒ぎの中で良否を言ふ者があらうか、お賣りお賣りと言ひながら先に立つて砂糖の

壺を引寄すれば、隻眼の母親おどろいた顔をして、お前さんは本當に商人に出来て居なさる、恐ろしい智者だと賞めるに、何だ此様な事が智者なものか今横町の潮吹きで處で館が足りないッて斯う遣つたを見て来たので己れの發明では無い、と言ひ捨て、お前は知らないか美登利さんの居る處を、己れは今朝から探して居るけれど何處へ行つたか筆やへも来ないと言ふ、廊内だらうかなと問へば、む、美登利さんは今今の先己れの家の前を通つて揚屋町の刎橋から這入つて行つた、本當に正さん大變だぜ、今日はね、髪を斯ういふ風にこんな島田に結つてと、變てこな手つきして、奇麗だね彼の娘はと鼻を拭つ、言へば、大卷さんより猶美いや、だけれど彼の子も華魁に成るので、可哀さうだと下を向いて正太の答ふるに、好いちやあないか華魁になれば、己れは來年から際物屋に成つてお金をこしらへるがね、それを持つて買ひに行くのだと頓馬を現はすに、洒落くさい事を言つて居らぬ爾すればお前は乾度振られるよ、何故々、何故でも振られる譯があるのだもの、と顔を少し梁めて笑ひながら、それぢやあ己れも一廻りして來やうや、又後に來るよと捨臺辭して門に出て、十六七の頃までは蝶よ花よと育てられ、と怪しさふるへ聲に此頃此處の流行ぶしを言つて、今では勤めが身にしてみても口の内に繰返し、例の雪駄の音高く浮きたつ人の中に交りて小さき身體は忽ちに隠れつ。

揉まれて出でし廓の角、向ふより番頭新造のお妻と連れ立ちて話しながら來るを見れば、まがひもなき大黒屋の美登利なれども誠に頓馬の言ひつる如く、初々しき大島田結び綿のやうに紋りばなしふさふさにかけて、籠甲のさし込、總つきの花かんざしひらめかし、何時よりは極彩色のたゞ京人形を見るやうに思はれて、正太はあつとも言はず立止まりしまゝ例の如くは抱きつきもせて打諦視るに、彼方は正太さんかとして走り寄り、お妻どんお前買物が有らばもう此處でお別れにしましよ、私は此人と一處に歸ります、左様ならとて頭を下げるに、あれ美いちやんの現金な、もうお送りは入りませぬとかゑ、そんなら私は京町で買物しましよ、とちよこゝ走り長屋の細道へ駆け込むに、正太はじめて美登利の袖を引いて好く似合ふね、いつ結つたの今朝か昨日か何故はやく見せては呉れなかつた、と恨めしげに甘ゆれば、美登利打萎れて口重く、姉さんの部屋で今朝結つて貰つたの、私は服で仕様が無いと、さし俯きて往來を耻ぢぬ。

(十五)

憂く恥かしく、つゝましき事身にあれば人の寝めるは嘲りと聞なされて、島田の髻のなつかし

さに振かへり見る人たちを我れを蔑む眼つきと猜られて、正太さん私は自宅へ歸るよと言ふに、何故今日は遊ばないのだらう、お前何か小言を言はれたのか、大卷さんと喧嘩でもしたのことはないか、と子供らしい事を問はれて答へは何と顔の赤むばかり、連立ちて團子屋の前を過ぎるに頓馬は店より聲をかけてお中が宜しう御座いますと仰山の言葉を聞くより美登利は泣きたいやうな顔つきして、正太さん一處に來ては嫌だよと、置去りに一人足を早めぬ。お酉さまへ諸共と言ひしを道引違へて我が家の方へと美登利の急ぐに、お前一處には來て呉れないのか、何故其方へ歸つて仕舞ふ、あんまりだせと例の如く甘へてかゝるを振切るやうに物言はす行けば、何の故とも知らねども正太は呆れて追ひすがり袖を留めては怪しがるに、美登利顔のみ打赤めて、何でもないと、言ふ聲理由あり。寮の門をばくやり入るに正太かねても遊びに來馴れてさのみ遠慮の家にもあらねば、跡より續いて椽先からせつと上るを、母親見るより、お、正太さん宜く來て下さつた、今朝から美登利の機嫌が悪くてみんなあぐねて困つて居ます、遊んでやつて下されと言ふに、正太は大人らしくかしてまりて加減が悪いのですかと眞面目に問ふを、いゝな、と母親怪しき笑顔を少しして少し経ては癒りませう、いつでも極りの我ま、様、嘸お友達とも喧嘩させうな、ほんに遣切れぬ

嬢さまではあるとて見かへるに、美登利はいつか小座敷に蒲團掻巻持出で、帯と上着を脱ぎ捨てしばかり、うつ伏し臥して物をも言はず。正太は恐るゝ枕もとへ寄つて、美登利さん何うしたの病氣なのか心持が悪いのか全體何うしたの、とさのみは摺寄らず膝に手を置いて心ばかりを悩ますに、美登利は更に答へも無く押ゆる袖にしのび音の涙、まだ結びこめぬ前髪の手濡れて見ゆるを譯ありとは著けれど、子供心に正太は何と慰めの言葉も出でず唯ひたすらに困り入るばかり、全體何が何うしたのだらう、己れはお前に怒られる事はしもしないに、何が其様なに腹が立つの、と覗き込んで途方にくるれば、美登利は眼を拭ふて正太さん私は怒つて居るのではありません。それなら何うしてと問はれれば憂き事さまゝ是れは何うでも話しのほかの包ましさなれば、誰れに打明けいふ筋ならず、物言はずしてをのづと頬の赤うなり、さして何とは言はれねども次第々々に心細き思ひ、すべて昨日の美登利の身に覚えなかりし思ひをまうけて物の恥かしき言ふばかりなく、成る事ならば薄暗き部屋のうち誰れとて言葉をかけもせず我が顔ながむる者なしに一人氣まゝの朝夕を経たや、さらば此様の憂き事ありとも人目つゝましからずは斯く迄物は思ふまじ、何時までも何時までも人形と紙雛様とを相手にして飯事許りして居たらば嘸

かし嬉しき事ならんを、え、厭々、大人に成るは厭な事、何故此やうに年をば取る、もう七月十月、一年も以前へ還りたいにと老人とみた考へをして、正太の此處にあるをも思はれず、物いひかければ悉く蹴ちらして、歸つてお呉れ正太さん、後生だから歸つてお呉れ、お前が居ると私は死んで仕舞ふであらう、物を言はれると頭痛がする、口を利くと眼がまはる誰れもく私之處へ来ては厭なれば、お前も何卒歸つてと例に似合ぬ愛想づかし、正太は何故とも得ぞ解きがたく、煙のうちにあるやうにてお前は何うしても變てこだよ、其様な事を言ふ筈は無いに、をかしい人だねと、是れはいさゝか口惜しき思ひに、落つて言ひながら目には氣弱の涙のうかぶを、何とてそれに心を置くべき歸つてお呉れ、歸つてお呉れ、何時まで此處に居て呉れ、ばもうお友達でも何でも無い、厭な正太さんだと憎らしげに言はれ、それならば、歸るよ、お邪魔さまで御座いましたとて、風呂場に加減見る母親には挨拶もせず、ふいと立つて正太は庭先よりかけ出しぬ。

(十六)

眞一文字に騙けて人中を抜けつ潜りつ、筆屋の店へをどり込めば、三五郎は何時か店をば賣仕

舞ふて、腹掛のかくしへ若干金をちやらつかせ、弟妹引つれつ、好きな物をば何でも買への大兄様、大愉快の最中へ正太の飛込み來しなるに、やあ正さん今お前を探して居たのだ、己れは今日は大分の儲けがある、何か奢つて上げやうかと言へば、馬鹿をいへ手前に奢つて貰ふ己れでは無いわ、黙つて居ろ生意氣を吐くなと何時になく荒い事を言つて、それどころでは無いとて鬱ぐに、何だ何だ喧嘩かど喰べかけの餡ばんを懷中に捻ち込んで、相手は誰れだ、龍華寺か長吉か、何處で始まつた廓内か鳥居前か、お祭りの時とは違ふせ、不意でさへ無くば負けはしない、己れが承知だ先棒は振らあ、正さん膽つ玉をしつかりして懸りねえ、と競ひかゝるに、え、氣の早い奴め、喧嘩では無い、とて流石に言ひかねて口を噤めば、でもお前が大層らしく飛込んだらう己れは一途に喧嘩かと思つた、だけれど正さん今夜はじまらなければもう是れから喧嘩の起りッこは無いね、長吉の野郎片腕がなくなるものと言ふに、何故どうして片腕がなくなるのだ。お前知らずか己れもたつた今うちの父さんが龍華寺の御新造と話して居たを聞いたのだが、信さんはもう近々何處かの坊さん學校へ這入るのだとさ、衣を着て仕舞へば手が出ねえや、からつきり彼んな袖のべら／＼した、恐ろしい長い物を捲り上げるのだからね、左様なれば來年から横町も表も残らずお前の手下だよと煽すに、廢して呉れ二錢貰ふと長吉の

組に成るだらう、お前みたやうのが百人仲間につたとして些とも嬉しい事は無い、附きたい方へ何方へでも附きねえ、己れは人は頼まない眞の腕ツこで一度龍華寺と遣りたかつたに、他處へ行かれては仕方が無い、藤本は來年學校を卒業してから行くのだと聞いたが、何うして其様に早く成つたらう、仕様のない野郎だと舌打しながら、それは少しも心に留まらねども美登利が素振のくり返されて正太は例の歌も出ず、大路の往來の夥しきさへ心淋しければ賑やかなりとも思はれず、火ともし頃より筆やが店に轉がりて、今日の酉の市めちや／＼に此處も彼處も怪しき事なりき。

美登利は彼日を始めてにして生れかはりしやうの身の振舞、用ある折は廊の姉のもとにこそ通へ、かけても町に遊ぶ事をせず、友達さびしがりて誘ひにと行けば今に今にと空約束はてし無く、さしもに中よしなりけれど正太とさへに親します、いつも耻かしげにのみ赧めて筆やの店に手踊の活潑さは再び見るに難くなりける、人は怪しがりて病ひの故かと危ぶむもあれども母親一人は、笑みては、今にお侠の本性は現はれます、これは中休みと理由ありげに言はれて、知らぬ者には何の事とも思はれず、女らしう温順しう成つたと褒めるもあれば折角の面白い子

を種なしにしたと講るもあり、表町は俄に火の消えしやう淋しくなりて正太が美音も聞く事稀に、唯夜な／＼の弓張提燈あれは、日がけの集めとしるく土手を行く影をゝる寒げに、折ふし供する三五郎の聲のみ何時に變らず滑稽では聞えぬ。
龍華寺の信如が我が宗の修業の庭に立出づる風説をも美登利は絶えて聞かざりき、有りし意地をば其まゝに封じ込めて、此處しばらくの怪しの現象に我れを我れとも思はれず、唯何事も耻かしのみありけるに、或る霜の朝水仙の作り花を格子門の外より差入れ置きし者のありけり、誰れの仕事と知るよし無けれど、美登利は何とゆゑなく懐かしき思ひにて遠ひ棚の一輪ざしに入れて寂しく清き姿をめでけるが、聞くともなしに傳へ聞く其明けの日は信如が何がしの學林に袖の色かへぬべき當日なりとぞ。

一葉全集畢

明治三十一年一月六日印刷	明治三十二年五月廿五版發行
明治三十年六月九日發行	明治四十三年十月三十版發行
明治廿九年五月再版發行	明治四十四年三月廿一版發行
明治廿八年四月十五版發行	明治四十四年五月廿日廿二版發行

定價金四拾錢

一葉全集用

(小林製本所)



編輯者 大橋又太郎

發行者 大橋新太郎

印刷者 上村龍之助

印刷所 博信堂

東京市神田區三崎町三丁目一番地

發兌元 東京日本橋目博文館

行發類書說小館文博

泉鏡花外十四君作

換葉篇

全一册洋裝新形類美本紙數三百頁
 口給 發病一年後の紅葉山人の像
 正價金六拾錢 郵税金八錢

△藥草の取鏡花
 △宇宙の目的風葉
 △出獄秋聲
 △花見車白峰
 △異形雨泉
 △幻燈同
 △馬………苔花
 △靈藥………吟葉
 △青符………嶺葉
 △入祝………西男
 △世相………水葉
 △公用………夏葉
 △四季五十二句………麥人
 △四季十三句………春石
 △御信………宙外

故 尾崎紅葉君遺著
 巖谷小波君 石橋思案君共輯

紅葉全集

全六册洋裝新形類美本紙數三百頁
 表紙桂舟圖伯意匠
 紙數一册約八百五十頁

正價金八拾圓
 小包料金拾圓
 外全要部小包料

- 第一卷
 ○色懺悔○新桃花扇○南無阿彌陀佛○戀の蛻○夏
 ○瘦○新色懺悔○猿枕○七十二文命の安賣○風雅娘
 ○巴波川○拈華微笑○此ぬし○關東五郎○文なが
 ○し○わかれ蚊帳○二人ひく助○二人女房
- 第二卷
 ○伽羅枕○ひき玉子○夏小袖○おぼろ舟○紙さぬ
 ○た○戀の病
- 第三卷
 ○三人妻○男ごころ○袖時雨○俠黒兒○心の闇○
 ○ひらさき
- 第四卷
 ○隣の女○鷹料理○冷熱○青葡萄○不言不語○三
 ○箇條○浮木丸○八重櫛
- 第五卷
 ○多情多恨○千箱の玉章○安知歌貌林○寒牡丹
- 第六卷
 ○金色夜叉前編○金色夜叉中編○金色夜叉後編○
 ○續金色夜叉○續々金色夜叉○新續金色夜叉○煙霞
 ○療養○紅葉山人傳○紅葉著作年表

74
56

終